

豊中市所在

宮の前遺跡・蛭池東遺跡  
蛭池遺跡・蛭池西遺跡

1992・1993年度発掘調査報告書

—大阪モノレール蛭池東線・西線建設に伴う発掘調査—

1994.3.31

財団法人 大阪文化財センター

豊中市所在

宮の前遺跡・蛭池東遺跡  
蛭池遺跡・蛭池西遺跡

1992・1993年度発掘調査報告書

—大阪モノレール蛭池東線・西線建設に伴う発掘調査—

1994.3.31

財団法人 大阪文化財センター



掘立柱建物 1



掘立柱建物 3



掘立柱建物 1・3 出土遺物



掘立柱建物 3 と住居19の切り合い



住居19炭化材出土状況



住居13遺物出土状況



住居1壺



上・住居13壺破断面 下・住居13壺佛茶材



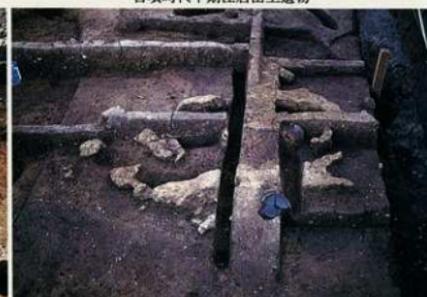
住居6壺



古墳時代中期住居出土遺物



住居16壺



住居28壺

## 序 文

宮の前、蛸池東、蛸池、蛸池西遺跡は、大阪府の北部、豊中市蛸池周辺に所在します。この地は、西国街道と、能勢街道が交差するふるくからの交通の要衝の地であり、現在もなお、その役割がかわらないことは、西国街道にかわる中国自動車道・大阪中央環状線、能勢街道にかわる阪神高速道路が交差する池田ジャンクションがあることからもあきらかであります。

大阪府の北部は、大阪市のベッドタウンとして整備され、市内へのアクセスである鉄道網も放射状に北へと伸長してきました。大阪府は、交通網の一層の整備をはかるべく、これらの鉄道網を環状方向に結合する交通手段として、モノレールを建設することとなりました。

本書は、平成4・5年度に実施した、モノレール建設にともなう上記の遺跡発掘調査の報告書であります。調査の結果、旧石器時代から近代におよぶ遺構・遺物が検出され、蛸池周辺の歴史を考えるにあたり、多くの資料を得ることができました。とくに、蛸池東遺跡では、古墳時代中期以前に位置づけられる大型の掘立柱建物が検出され、これは大阪市法円坂遺跡の大型建物、和歌山市鳴滝遺跡の大型建物に比肩する規模をもつもので、この地が古墳時代においても大阪湾北部の交通の要衝の地であったことがあきらかになりました。

最後に、調査にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府土木部モノレール建設事務所をはじめ、大阪府関係各位に多大なご指導とご協力をいただきました。記して感謝するとともに、今後とも当センターの事業に一層のご支援を賜れるようお願い申し上げます。

平成6年3月

財団法人 大阪文化財センター  
理事長 坪井清足



## 例 言

1. 本書は、大阪モノレール蛍池東・西線建設に伴う、大阪府豊中市蛍池北町に所在する宮の前遺跡、豊中市蛍池中町に所在する蛍池東遺跡・蛍池遺跡、豊中市蛍池南町に所在する蛍池西遺跡（試掘）の1992・1993年度（平成4・5年度）調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府土木部モノレール建設事務所より(財)大阪文化財センターが委託を受け、調査課長中西靖人の指導のもと、調査第1係主任技師片山彰一（写真）・調査課主任技師金光正裕・同技師三宮昌弘・合田幸美・佐伯博光（現地調査・遺物整理）を担当者として実施し、調査第2係主任技師平井貞子（写真）・調査第1係技師山口誠治（保存科学）・松山 聡（石器実測）の協力を得た。
3. 調査区分・期間は、下記のとおりである。

調 査 区 分	調 査 期 間
宮の前遺跡（その1）	1992年（平成4年）12月15日～1993年（平成5年）3月25日
宮の前遺跡（その2）	1993年（平成5年）6月17日～1994年（平成6年）1月25日
蛍池東遺跡（その1）	1992年（平成4年）5月21日～1992年（平成4年）12月25日
蛍池東遺跡（その2）	1993年（平成5年）8月26日～1994年（平成6年）1月31日
蛍池遺跡（その1）	1992年（平成4年）11月6日～1993年（平成5年）3月25日
蛍池遺跡（その2）	1993年（平成5年）11月5日～1993年（平成5年）12月25日
蛍池西遺跡（その1）	1993年（平成5年）1月12日～1993年（平成5年）3月25日

4. 調査の実施にあたっては、(財)大阪文化財センター職員のほか、大阪府教育委員会、豊中市教育委員会をはじめとする関係諸機関のご指導、ならびに下記の諸氏の援助をたまわった。記して、感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

〔調査指導〕藤澤一夫、芝野圭之介（大阪府教育委員会）、柳本照男・服部聡志・清水 篤・橋田正徳・清家 章（豊中市教育委員会）、植木 久・岡村勝行・積山 洋・田中清美・辻 美紀・中尾芳治・永島暉臣・南 秀雄（(財)大阪市文化財協会）、石野博信（徳島文理大学）、大淵淳志、小笠原好彦（滋賀大学）、清水京子、武末純一（福岡大学）、田中晋作（池田市歴史民俗資料館）、富田好久（大阪青山短期大学）、外山政子（高崎市教育委員会）、橋本博文（早稲田大学大学院）、星間孝志（(財)埼玉埋蔵文化財センター）、北條芳隆（徳島大学）、和田晴吾（立命館大学）、福永伸哉・杉井 健（大阪大学）

〔調査参加〕赤木 寛・市川菜緒・伊藤栄一・今井泰子・大川千賀・大山靖子・小野恭代・鹿島真由美・神谷リエ子・川村慎也・川村雪絵・河本華弥子・黒田利恵・駒井悦子・桜井由美子・渋谷真理子・園田礼子・高田泰子・田畑優子・富田邦子・中前誠子・新見幸子・樋口玲子・別府加代・細田真紀・本多真紀・増田志行・間處裕弥子・宮崎 認・森本陽二郎・安河内敬志・柳本考史・山根朋子・山本宏子

5. 調査の実施にあたっては、以下の建築、自然科学分野からの分析を実施し、各氏にご教示・玉稿をたまわったが、紙数の関係ですべてを報告することができなかった。記して、おわび申し上げます。  
大形掘立柱建物復原 奈良女子大学生活環境学部 上野邦一  
花粉・珪藻分析 (株)バリノ・サーヴェイ

胎土分析	㈱第四紀地質研究所	井上 巖
<sup>14</sup> C測定	京都産業大学	山田 治
脂肪酸分析	帯広畜産大学	中野益男
	㈱ズコーシャ総合科学研究所	中野寛子・菅原利佳・長田正宏
リン・カルシウム分析	㈱パリオ・サーヴェイ	

## 凡 例

- ・遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位(T.P.)を用い、平面的位置は、国土座標軸第Ⅳ座標系に基づいた。本文中における座標の記載は、すべてm単位である。
- ・方位の矢印の示す方向は座標北を示す。
- ・土色に関しては、小山正忠・竹原秀雄編1988『新版標準土色帖』第8版 監修農林水産省農林技術会議事務局・色票監修財団法人日本色彩研究所に準拠した。
- ・各遺跡の略称は次のとおりである。宮の前遺跡(MIY)、蜷池東遺跡(HIH)、蜷池遺跡(HI)、蜷池西遺跡(HIN)。
- ・蜷池東遺跡の住居・竈遺構図中、2色刷のものは、赤色が地山面検出遺構である。但し、図96の赤色は、床面出土炭化材・焼土である。
- ・蜷池東遺跡報文中の( )は、該当する出土遺物図中の番号である。
- ・遺物実測図の断面が白色のものは基本的に土師器、黒色のものは須恵器である。
- ・遺物写真の縮尺率は任意である。写真図版の遺物番号は実測図版と同一番号である。
- ・本書の執筆分担は目次に示し、編集は各遺跡の調査担当者がおこなった。

# 目 次

巻頭図版	巻頭図版 1	蛭池東遺跡 掘立柱建物 1 掘立柱建物 3 掘立柱建物 1・3 出土遺物 掘立柱建物 3 と住居19の切り合い	
	巻頭図版 2	蛭池東遺跡 住居19炭化材出土状況 住居 1 竈 住居 6 竈 住居13遺物出土状況 住居13竈縦断面 住居13竈構築材 古墳時代中期住居出土遺物 住居16竈 住居28竈	
序 例 凡	文 言 例		
I	調査に至る経緯	…………… (金光)	1
II	位置と環境	…………… (合田)	3
III	宮の前遺跡 (1・2)		
	1. 調査の方法	…………… (三宮・佐伯)	7
	2. 宮の前遺跡 (1) の調査の成果	…………… (佐伯)	8
	(1)遺構と遺物		
	(2)まとめ		
	3. 宮の前遺跡 (2) の調査の成果	…………… (三宮)	14
	(1)基本層序		
	(2)遺構と遺物		
	(3)まとめ		
IV	蛭池東遺跡 (1・2)		
	1. 調査の方法と調査の経緯	…………… (金光)	35
	2. 調査の成果		
	(1)基本層序	…………… (金光)	37
	(2)古墳時代の遺構と遺物		
	1 掘立柱建物	…………… (金光)	42
	2 竪穴住居	…………… (合田)	51

	(3)古墳時代以降の遺構と遺物	
	1 掘立柱建物	(金光) ..... 91
	2 土坑	(合田) ..... 101
	3 溝	(合田) ..... 105
3.	まとめ	
	(1)遺構について	(金光・合田) ..... 106
	(2)古墳時代中期の遺物について	(合田) ..... 110
4.	付論 掘立柱建物1・3の復原について	
		(奈良女子大学生活環境学部 上野邦一) ..... 113
V	螢池遺跡(1・2)	(合田) ..... 117
	1. 調査の方法	
	2. 調査の成果	
	(1)基本層序	
	(2)段丘上	
	(3)池の中	
	3. まとめ	
VI	螢池西遺跡(1)	(三宮) ..... 135
	1. 調査の方法	
	2. 調査の成果	
	(1)基本層序	
	(2)1～3面	
	(3)4面	
	(4)5～11面	
	(5)12面	
	(6)12層	
	3. まとめ	
VII	自然科学的調査の成果	
	1. 自然科学的調査の概要	(合田) ..... 153
	2. 螢池東遺跡住居26の植物珪酸体・花粉分析	(榊パリノ・サーヴェイ) ..... 156
	3. 螢池東・螢池遺跡出土土器胎土分析	(榊第四紀地質研究所 井上 巖) ..... 159
	4. 螢池東遺跡出土炭化木の <sup>14</sup> C測定	(京都産業大学理学部 山田 治) ..... 166
	5. 宮の前・螢池遺跡採集土壌の残存脂肪分析	
		(帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男)
		(榊ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子・菅原利佳・長田正宏) ..... 167
VIII	まとめ	(金光・三宮・合田・佐伯) ..... 181

## 挿 図 目 次

- 図1 調査対象地  
図2 大阪モノレール路線計画図  
図3 豊中市内の遺跡  
図4 遺跡の位置と立地  
宮の前遺跡 (図5～36)  
図5 トレンチの位置  
図6 2Bトレンチ西壁断面  
図7 2Bトレンチ平面  
図8 Cトレンチ北壁断面  
図9 Cトレンチ平面  
図10 1Dトレンチ西壁断面  
図11 1Dトレンチ平面  
図12 2Dトレンチ平面  
図13 1Fトレンチ平面  
図14 格子目印キ平瓦  
図15 2Fトレンチ南壁断面  
図16 2Fトレンチ平面  
図17 溝状遺構遺物出土状況  
図18 溝状遺構出土遺物  
図19 1E・2Eトレンチ断面  
図20 1G・2Gトレンチ断面  
図21 1G・2Gトレンチ2層出土遺物  
図22 1Eトレンチ1面平面  
図23 1E・2Eトレンチ3面平面  
図24 1G・2Gトレンチ3面平面  
図25 1Gトレンチ3面長方形土坑1遺物出土状況・断面  
図26 1Gトレンチ3面長方形土坑1出土遺物  
図27 2Gトレンチ3面土坑1平面・断面  
図28 2Gトレンチ3面土坑1出土遺物  
図29 1G・2Gトレンチ3面長方形土坑平面・断面  
図30 1Gトレンチ3面土坑1平面・断面  
図31 1Gトレンチ3面土坑1出土遺物  
図32 1Gトレンチ3面溝平面・断面  
図33 1G・2Gトレンチ3面礫群平面・断面  
図34 1Gトレンチ3面落ち込み1断面  
図35 1Gトレンチ3面落ち込み1出土遺物  
図36 1G・2Gトレンチ4面平面  
螢池東遺跡 (図37～160)  
図37 トレンチの位置  
図38 遺跡の範囲  
図39 遺構全体平面・断面  
図40 1A・2Aトレンチ平面  
図41 3Aトレンチ平面  
図42 谷出土遺物  
図43 6A・7Aトレンチ平面  
図44 掘立柱建物1平面・断面  
図45 掘立柱建物1 P28遺物出土状況平面・断面  
図46 掘立柱建物1の柱配置  
図47 掘立柱建物1出土遺物  
図48 掘立柱建物2平面・断面  
図49 掘立柱建物2 P2・P3断面 P3出土遺物  
図50 掘立柱建物3平面・断面  
図51 掘立柱建物3 P1礫出土状況平面・断面  
図52 掘立柱建物3 P19遺物出土状況平面・断面  
図53 掘立柱建物3出土遺物  
図54 掘立柱建物3の柱配置  
図55 掘立柱建物16平面・断面  
図56 掘立柱建物16出土遺物  
図57 4A・5Aトレンチ平面  
図58 住居1平面・断面  
図59 住居1竈平面・断面  
図60 住居1出土遺物  
図61 住居2平面・断面  
図62 住居2出土遺物(1)  
図63 住居2出土遺物(2)  
図64 住居2出土遺物(3)  
図65 住居2出土遺物(4)  
図66 住居3平面・断面  
図67 住居3出土遺物

- 図68 住居4平面・断面  
図69 住居5平面・断面  
図70 住居5出土遺物  
図71 住居6平面・断面  
図72 住居6竪平面・断面  
図73 住居7平面・断面  
図74 住居7出土遺物  
図75 住居8平面・断面  
図76 住居8竪平面・断面  
図77 住居8出土遺物  
図78 住居9平面・断面  
図79 住居9出土遺物  
図80 住居10平面・断面 出土遺物  
図81 住居11平面・断面 出土遺物  
図82 住居12平面・断面  
図83 住居12出土遺物  
図84 住居13平面・断面  
図85 住居13竪平面・断面  
図86 住居13出土遺物(1)  
図87 住居13出土遺物(2)  
図88 住居14・15平面・断面  
図89 住居14・15周辺出土遺物  
図90 住居16平面・断面  
図91 住居16竪平面・断面  
図92 住居16出土遺物  
図93 住居17平面・断面  
図94 住居17出土遺物  
図95 住居18平面・断面  
図96 住居19平面・断面  
図97 住居19・掘立柱建物3 P6断面  
図98 住居19出土遺物  
図99 住居20平面・断面  
図100 住居20出土遺物  
図101 住居21平面・断面  
図102 住居22・23平面・断面  
図103 住居23出土遺物  
図104 住居24平面・断面  
図105 住居24出土遺物  
図106 住居25平面・断面  
図107 住居26平面・断面  
図108 住居26竪平面・断面  
図109 住居26地山面 住居内利用の復原  
図110 住居26出土遺物  
図111 住居27平面・断面  
図112 住居27出土遺物  
図113 住居28平面・断面  
図114 住居28出土遺物  
図115 住居29・30平面・断面  
図116 住居30出土遺物  
図117 住居31平面・断面  
図118 住居32平面・断面  
図119 掘立柱建物4平面・断面  
図120 掘立柱建物5平面・断面  
図121 掘立柱建物6平面・断面  
図122 掘立柱建物7平面・断面  
図123 掘立柱建物7出土遺物  
図124 掘立柱建物8平面・断面  
図125 掘立柱建物9平面・断面  
図126 掘立柱建物10平面・断面  
図127 掘立柱建物11平面・断面  
図128 8Aトレンチ平面  
図129 掘立柱建物12平面・断面  
図130 掘立柱建物13平面・断面  
図131 掘立柱建物13出土遺物  
図132 掘立柱建物14平面・断面  
図133 掘立柱建物15・19平面・断面  
図134 掘立柱建物19出土遺物  
図135 掘立柱建物25平面・断面  
図136 9Aトレンチ平面  
図137 掘立柱建物17・24平面・断面  
図138 掘立柱建物17出土遺物  
図139 掘立柱建物18平面・断面  
図140 掘立柱建物20平面・断面  
図141 掘立柱建物21・22平面・断面  
図142 掘立柱建物23平面・断面  
図143 掘立柱建物・ピット出土遺物

図144 土坑1平面・断面  
図145 土坑1出土遺物  
図146 土坑2平面・断面  
図147 土坑2出土遺物  
図148 土坑3平面・断面  
図149 土坑3出土遺物  
図150 溝1平面・断面  
図151 溝2平面・断面  
図152 遺構の変遷  
図153 須恵器(TK216~TK208)・土師器一覽  
図154 掘立柱建物1平面  
図155 入母屋案1の桁行断面  
図156 入母屋案1の梁間断面  
図157 壁を立ち上げない桁行断面  
図158 壁を立ち上げない梁間断面  
図159 妻側から斜材を棟木までのばす案  
図160 寄棟屋根の場合の桁行断面  
**蛍池遺跡(図161~173)**  
図161 トレンチの位置  
図162 1~8Aトレンチ東壁断面  
図163 1面平面  
図164 2面平面  
図165 3面平面  
図166 3面建物1・2平面・断面  
図167 3面土坑・P53平面・断面  
図168 3面土坑出土遺物  
図169 3面土坑・P53出土遺物  
図170 3面P41平面・断面  
図171 3面P41出土遺物  
図172 6A・7A・8Aトレンチ平面・断面  
図173 遺構全体図  
**蛍池西遺跡(図174~192)**  
図174 トレンチの位置  
図175 1A・1B・1C・1Dトレンチ断面  
図176 1・2層出土遺物  
図177 1Aトレンチ4面平面  
図178 1Bトレンチ4面平面  
図179 1Bトレンチ4面溝1・2・3断面

図180 1Bトレンチ4面溝1出土遺物  
図181 1Cトレンチ4面平面  
図182 1Cトレンチ4面自然流路1断面  
図183 1Cトレンチ4面自然流路1最下粗砂層出土遺物  
図184 1Dトレンチ4面平面  
図185 4面遺構全体図  
図186 1Aトレンチ12面平面  
図187 1Bトレンチ12面平面  
図188 1Bトレンチ12面溝1断面  
図189 1Cトレンチ12面平面  
図190 1Dトレンチ12面平面  
図191 12面遺構全体図  
図192 1Aトレンチ12層出土遺物  
**自然科学的調査の成果(図193~210)**  
図193 蛍池東遺跡住居26植物珪酸体・花粉分析  
試料採取層位  
図194 各層の植物珪酸体組成  
図195 三角ダイヤグラム位置分類図  
図196 菱形ダイヤグラム位置分類図  
図197 Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム  
図198 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム  
図199 Qt-P1相関  
図200 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>相関  
図201 SiO<sub>2</sub>-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>相関  
図202 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO相関  
図203 宮の前遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成  
図204 蛍池遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成  
図205 宮の前遺跡試料中に残存する脂肪のステロール組成  
図206 蛍池遺跡試料中に残存する脂肪のステロール組成  
図207 宮の前遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造  
図208 蛍池遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造

- 図209 宮の前遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関  
 組成による種特異性相関  
 酸組成による種特異性相関  
 まとめ(図211)
- 図210 蜷池遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸  
 図211 調査全体図

## 表 目 次

### 蜷池東遺跡(表1)

表1 新旧遺構名対照

### 蜷池遺跡(表2)

表2 3面土坑一覧

### 自然科学的調査の成果(表3~10)

表3 植物珪酸体分析結果

表4 胎土性状表

表5 化学分析表

表6 <sup>14</sup>C年代測定表

表7 宮の前遺跡試料の残存脂肪抽出量

表8 蜷池遺跡試料の残存脂肪抽出量

表9 宮の前遺跡試料中の分布するコレステロールとシトステロールの割合

表10 蜷池遺跡試料中の分布するコレステロールとシトステロールの割合

### まとめ(表11~12)

表11 大阪府周辺の大形掘立柱建物一覧

表12 各遺跡の調査成果

## 図 版 目 次

図版1 宮の前遺跡(1) 遺構・遺物

図版2~5 宮の前遺跡(2) 遺構

図版6~7 宮の前遺跡(2) 遺物

図版8 蜷池東遺跡 航空写真

図版9~22 蜷池東遺跡 遺構

図版23~34 蜷池東遺跡 遺物

図版35~39 蜷池遺跡 遺構

図版40~42 蜷池遺跡 遺物

図版43~44 蜷池西遺跡 遺構

図版45~48 蜷池西遺跡 遺物

## I 調査に至る経緯

都市計画道路大阪モノレール整備事業は、都心部への過度集中を緩和し、都市圏の調和のとれた発展を期すため、多核的な都市構造の形成のための新しい輸送方式の試案として提出され、翌昭和47年「都市モノレールの整備の促進に関する法律」の制定後、昭和57年「大阪府総合計画」に、「放射状に広がっている鉄軌道網をつなぎ、多核的地域構造の形成をはかる中央環状道路沿いのモノレール構想の第Ⅰ期区間（大阪国際空港～阪急南茨木駅13.7km）の早期完成をはかる」ことが盛り込まれ、同年この区間において建設工事が着手され、既に千里中央～南茨木間（約7km）は平成2年6月に共用が開始されている。また、第Ⅱ期区間の南茨木～門真間（8.1km）についても、平成3年3月には事業認可を得て建設工事に着手している。

都市計画道路大阪モノレール整備事業



図1 調査対象地

第Ⅰ期区間のうち、柴原町～大阪国際空港間には宮の前遺跡・蛍池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡など周知の遺跡が存在しており、その取扱について大阪府土木部は、大阪府教育委員会と協議をおこない、平成元年度には大阪府教育委員会によって宮の前遺跡の発掘調査が実施された。さらに平成2～3年度には建設予定地内および用地取得に伴う代替地において、豊中市教育委員会による試掘調査が実施された。

宮の前遺跡  
蛍池東遺跡  
麻田藩陣屋跡  
蛍池遺跡  
蛍池西遺跡

試掘調査

この結果を受けて大阪府教育委員会は、平成3年度15ヵ所で試掘調査を実施し、うち13ヵ所で本格的調査の必要性有りとの結果がえられたことから、大阪府土木部は、再度平成4年4月7日付けで、「埋蔵文化財包蔵地の発掘調査」について大阪府教育委員会に調査を依頼した。

平成4年4月発掘調査依頼

これを受けて大阪府教育委員会は、同年4月20日付けで、「①発掘調査を実施すること。②発掘調査は、財大阪文化財センターに委託して実施すること。③調査終了後の取扱については大阪府教育委員会と再度協議すること。」を回答し、同日付けで財大阪文化財センターに対しても発掘調査の実施を通知した。

この回答を受けた大阪府土木部は、平成4年4月25日付けで、(財)大阪文化財センターに  
 蛍池東遺跡、麻田藩陣屋跡、和道遺跡等の発掘調査の依頼を提出し、5月1日付けで(財)大  
 阪文化財センターと委託契約を締結した。

調査は、蛍池東遺跡については平成4年5月から、宮の前遺跡については平成4年12月  
 から、蛍池遺跡については平成4年11月から順次着手した。このうち、蛍池遺跡南側の南  
 門前池部分及び蛍池南町にある支柱建設予定地部分の取扱については、周知の遺跡の範囲  
 外であることから、大阪府土木部、(財)大阪文化財センター、大阪府教育委員会と協議の結  
 果、まず、支柱部分において、(財)大阪文化財センターによって試掘調査を実施した後、そ  
 の調査結果にもとづいて側道部分の取扱については再度協議することとし、蛍池南町地区  
 については平成5年1月から試掘調査に着手した。

南門前池  
 蛍池南町  
 試掘調査

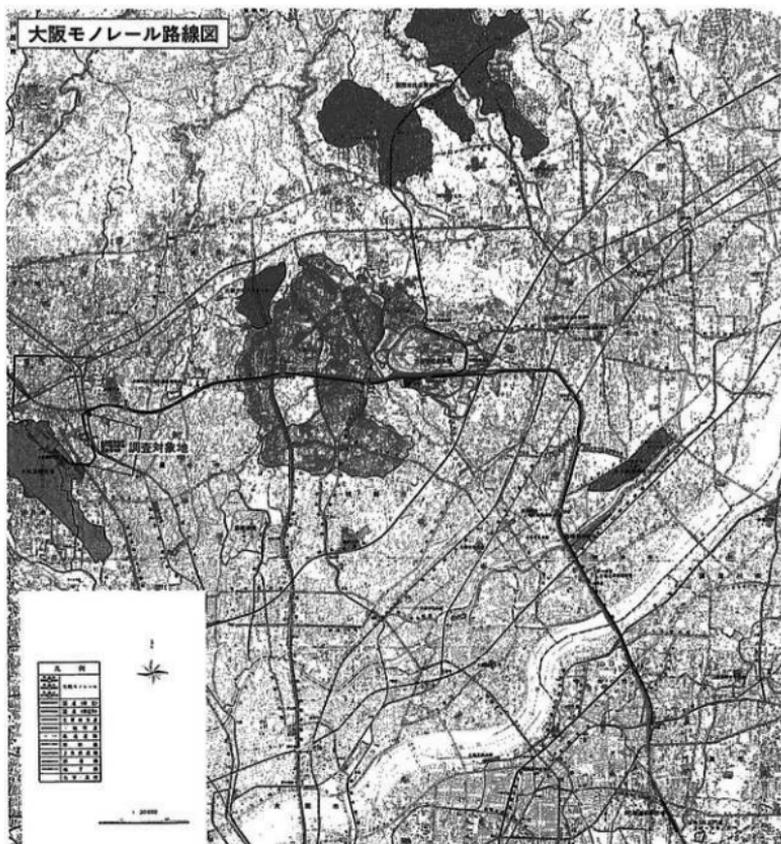


図2 大阪モノレール路線計画図

## II 位置と環境

調査地は、北摂山系から派生する千里丘陵の西端に位置する低位段丘上から猪名川にむかう沖積地にかけて立地する。すなわち、宮の前・蛭池東・蛭池遺跡は低位段丘上に、蛭池西遺跡は沖積地に立地する。調査地周辺の微地形を北からみてみたい。宮の前遺跡と蛭池東遺跡の間には、現在空港へのびる東西道路がはしっているが、これは、過去に溜池であった第十八中学から北東へのびる谷と合流する谷筋である。蛭池東遺跡は、その北側に谷筋がはしり、西は段丘崖に面する。蛭池遺跡の南側には、過去に溜池であった麻田公園から北へのびる谷筋と南門前池から北西へのびる谷筋がある。また、南門前池にはもうひとつ箕輪池へのびる北東方向の谷筋がある。

低位段丘  
沖積地

谷

千里丘陵とその周辺の地質については、市原 実氏を中心とするグループの大阪層群の研究において、本地域が大阪層群の模式地とされたため、詳しく研究されている（市原1991・1993）。千里丘陵地域の大坂層群は、島熊山周辺でみられる神戸層群をおおっており、その層厚は約340mである。この大阪層群を不整合におおって低位・中位・高位段丘堆積層が分布する。大阪層群は、主に湖沼または河成の粘土・シルト・砂・礫層からなり、このなかに12枚の海成粘土層（下位からMa1～Ma10）がはさまれ、これらの地層中または層境に火山灰層が介在する。大阪層群は、Ma2層の下限を境に下位の千里山累層と上位の茨木累層に分けられ、調査地周辺では上位の茨木累層がみられる。

大阪層群

神戸層群

茨木累層

地層の年代を概略的にのべると、北摂山系が約1億年前、千里丘陵の下にある神戸層群が約1千万年前、千里丘陵が300万年～数10万年前、中・高位段丘が数10万年～数万年前、低位段丘・沖積地が約1万年前から現在までである。豊中市内では、地質年代に関連するものとして、待兼山のマチカネワニ、南刀根山丘陵のトウヨウソウの牙があり、これらは約40万年前のものである。

マチカネワニ  
トウヨウソウ

豊中市内の旧石器は、蛭池北・蛭池西・箕輪・柴原・大塚古墳で出土しており、とくに蛭池周辺の低位段丘上から沖積地にかけて密度濃くみられる。

旧石器

豊中市内の縄文時代遺跡は、内田・野畑春日町・野畑遺跡など千里川流域の段丘上に立地するものと、原田西・穂積遺跡など沖積地に立地するものがある。内田遺跡では後期土坑が検出され、土器が多く出土している。野畑春日町遺跡では、中期土坑が検出され、墓の可能性が指摘されている。野畑遺跡では、中期末～後期前葉の集落跡が確認され、炉跡とみられる焼土・礫群、サヌカイトの集石、土坑が検出されている。穂積遺跡では、中期土器とともに土器片鏝や貝殻を多く含む砂層が見つかり、当時の海岸線を想定する資料を提供する。その他、遺物が出土した遺跡としては、野畑春日町遺跡（草創期の槍先）、新免遺跡（早期の石器）、野畑春日町・原田西遺跡（中期土器）、柴原・山ノ上・小曾根遺跡（晩期）があり、広範な縄文人の活動が想定される。

縄文時代

豊中市内の弥生時代遺跡として注目されるのは、大阪国際空港内にある勝部遺跡である。勝部遺跡では、方形周溝墓が検出され、石槍が突き刺さった人骨が残る木棺が出土した。勝部遺跡の東側に位置する原田神社では、境内から流水文銅鐃が出土しており、弥生時代

弥生時代



- |             |            |                |           |            |            |               |
|-------------|------------|----------------|-----------|------------|------------|---------------|
| 1. 太鼓塚古墳群   | 11. 板井谷遺跡群 | 21. 金寺山廃寺      | 31. 岡町南遺跡 | 41. 原田遺跡   | 51. 吾竹町遺跡  | 61. 藤原村園地     |
| 2. 野畑春日町古墳群 | 12. 安池北遺跡  | 22. 新免宮山古墳群    | 32. 桜塚古墳群 | 42. 曾根遺跡   | 52. 石蔵寺高寺  | 62. 小曾根遺跡     |
| 3. 野畑遺跡     | 13. 安池東遺跡  | 23. 金寺山廃寺塔刹柱礎石 | 33. 下原東遺跡 | 43. 曾根東遺跡  | 53. 寺内遺跡   | 63. 南馬目代今西氏屋敷 |
| 4. 野畑春日町遺跡  | 14. 安池西遺跡  | 24. 本町遺跡       | 34. 長興寺遺跡 | 44. 原田中町遺跡 | 54. 河合北遺跡  | 64. 北条遺跡      |
| 5. 少路遺跡     | 15. 安池遺跡   | 25. 新先遺跡       | 35. 梅塚古墳  | 45. 原田元町遺跡 | 55. 河合遺跡   | 65. 上津島川床遺跡   |
| 6. 待兼山古墳    | 16. 藤田藩陣屋跡 | 26. 冥輪遺跡       | 36. 塚輪敷布地 | 46. 塚輪宮跡   | 56. 河合南遺跡  | 66. 上津島南遺跡    |
| 7. 待兼山遺跡    | 17. 雨刀根山遺跡 | 27. 山ノ上遺跡      | 37. 原田西遺跡 | 47. 豊島北遺跡  | 57. 河合西遺跡  | 67. 上津島南遺跡    |
| 8. 内田遺跡     | 18. 岡神山古墳  | 28. 北井遺跡       | 38. 藤部遺跡  | 48. 曾根南遺跡  | 58. 新宮の前遺跡 | 68. 藤原ポンプ場遺跡  |
| 9. 板井谷石甕敷布地 | 19. 上野遺跡   | 29. 岡町北遺跡      | 39. 藤部東遺跡 | 49. 城山遺跡   | 59. 藤部西遺跡  | 69. 島田遺跡      |
| 10. 栗原遺跡    | 20. 船野田遺跡  | 30. 岡町遺跡       | 40. 原田城跡  | 50. 藤部遺跡   | 60. 藤原遺跡   | 70. 庄内遺跡      |
|             |            |                |           |            |            | 71. 島江遺跡      |

図3 豊中市内の遺跡（豊中市埋蔵文化財年報1995に加筆）

の集落と祭祀を考えるにあたり貴重な資料を提供している。その他、弥生時代の中心的な集落としては、蛭池北・新免・穂積・小曾根遺跡があり、これらの周辺をみると、箕輪遺跡では中期の焼土住居、山ノ上遺跡では竪穴住居から小形仿製鏡が出土している。

古墳時代前期には、千里川右岸の段丘縁辺に待兼山・御神山古墳、同左岸の段丘上に大石塚・小石塚古墳が築かれる。待兼山古墳からは、唐草文帯四神四獣鏡・石製腕飾類、御神山古墳からは三角縁神獣鏡・車輪石が出土する。中期には、千里川と天竺川に挟まれた低位段丘上に桜塚古墳群が形成される。40基以上の古墳があったとされるが、現在は、先述した前期の大石塚・小石塚古墳のほか、中期の大塚・御獅子塚・南天平塚古墳が残るのみである。

大塚古墳からは、方格規矩獣文鏡・甲冑（襟付短甲・衝角付甲など）・楯・石製柄付短剣・農具・玉類など、御獅子塚古墳からは、獣文鏡・玉類・甲冑（鋌留短甲・衝角付甲）・楯・刀剣類・農具・馬具などが出土する。後期には、野畑春日町・太鼓塚・新免宮山古墳群など群集墳が築かれ、大形の横穴式石室をもつ古墳は鉢

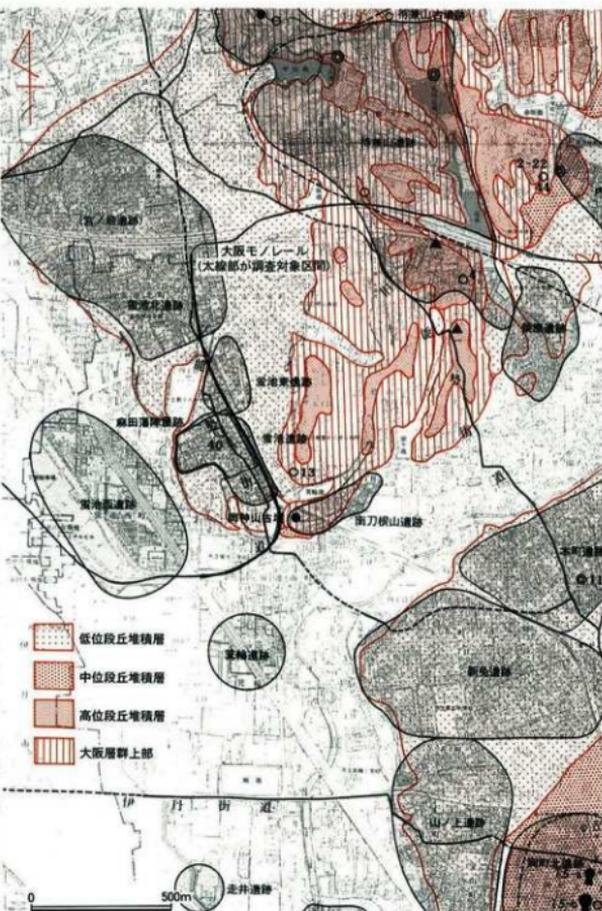


図4 遺跡の位置と立地（豊中市文化財分布図1992年に加筆）

古墳時代前期

古墳時代中期

古墳時代後期

塚・二子塚古墳(池田市)が築かれる。生産遺跡では、須恵器窯跡の板井谷窯跡群が千里川の中・上流域にひろがる。これに関連する集落には、焼け歪みのある須恵器が出土する新免・内田・熊野田遺跡がある。その他の古墳時代集落は、前～後期まで継続するものでは山ノ上・穂積・利倉西・島田・庄内遺跡、前期では利倉、前～中期では蛭池西・北条・小曾根・上津島、中～後期では蛭池北・上津島南、後期では本町遺跡がある。

日本書紀 ここで、文献資料に目を転じてみる。猪名川流域に関する記載としては、『日本書紀』仁徳天皇三十八年秋七月条に「猪名県」が初出する。夷(ひな)が猪名に転じたとされる。新撰姓氏録 『新撰姓氏録』には摂津国に「為奈部首」の本貫があり、ひとつは百済系の燭化氏族、ひとつは物部氏の族系であるという記載がある。『日本書紀』応神天皇三十一年八月条には猪名部の始祖は新羅王が貢上した造船技術の「能匠者」であるとする記載があり、また雄略天皇十二年十月壬午条には猪名部御田が天皇に命じられて楼閣を建てたという記載がある。いずれにしても猪名部は燭化氏族であり木工に優れているという点が注目される。

古代寺院 古代寺院としては、山田寺系の瓦が出土した金寺山廃寺があげられ、物部氏の氏寺の可能性が指摘されている。

奈良・平安時代 奈良・平安時代の集落も多数検出されている。奈良時代の掘立柱建物を検出した遺跡としては、柴原・蛭池北・金寺山廃寺・本町・新免・曾根・上津島南・島田遺跡があり、猪名川に面した低位段丘縁辺や沖積地に立地する。平安時代～中世の掘立柱建物を検出した遺跡としては、蛭池北・本町・山ノ上・原田西・小曾根・穂積・利倉・上津島・上津島南・島田遺跡があり、沖積地に立地する遺跡が増す。墓地に関するものでは、新免・岡町北遺跡で奈良時代土墳墓(?)、南刀根山遺跡で蔵骨器、上津島南遺跡で残存状態が良好な平安時代末の木棺墓が検出されている。

中・近世 中・近世にはいり、人や物資の動きが盛んになると、陸路では西国街道と能勢街道が交差し、水路では猪名川に面するという、近畿の北部をおさえる交通の要衝の地としての立地がいかされる。そのため戦国時代には原田城・刀根山城などがおかれた記録がのこる。また、江戸時代には、要衝の地にはしかるべき領主をおかず分断して統治する施策をとった徳川幕府により、分断された所領のひとつとして青木氏の麻田藩がこの地におかれた。

#### 参考文献

- 池田市役所 1967 『池田市史 史料編①原始・古代・中世』  
池田市役所 1971 『新版 池田市史 概説編』  
市原 実編 1993 『大阪群群』  
朝日新聞 1991 『アバンクボタ』MARCH  
豊中市市公室自治振興室 1989 『グラフとよなか』No.25  
豊中市史編さん課 考古部門 1989 「豊中市内主要遺跡一覧表」「豊中市内主要遺跡一覧表(付図)」「豊中市内主要遺跡分布図」  
豊中市教育委員会 1987 『摂津豊中大家古墳』  
豊中市教育委員会 1990 『御師子塚古墳』  
豊中市教育委員会 1993 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1992年度』  
豊中市教育委員会 1993 『豊中市埋蔵文化財年報 vol. 1』  
豊中市教育委員会 1993 『とよなか文化財ブックレットNo.2 通史編II 縄文の狩人』  
豊中市教育委員会 1994 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1993年度』  
豊中市教育委員会 1994 『豊中市埋蔵文化財年報 vol. 2』  
豊中市教育委員会 1994 『とよなか文化財ブックレットNo.3 通史編III たがやす人々』  
豊中市教育委員会 1995 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1994年度』  
豊中市教育委員会 1995 『豊中市埋蔵文化財年報』vol. 3  
豊中市教育委員会 1995 『とよなか文化財ブックレットNo.4 通史編IV 行きかう人々』  
六甲山麓遺跡調査会 1996 『豊中市服部遺跡-第5次調査-』

### III 宮の前遺跡(1・2)

#### 1. 調査の方法

宮の前遺跡は、豊中市蛍池北町から蛍池東町、池田市石橋にかけて広がる遺跡で、豊中市では蛍池北遺跡ともよばれている。

宮の前遺跡は、豊中市北部の、猪名川水系の箕面川と千里川にはさまれた独立丘陵である待兼山・刀根山丘陵西裾の低位段丘上に立地する。宮の前遺跡は、その低位段丘の東西幅が最も大きい段丘北半の大部分を占め、西側は沖積平野への段丘崖に接し、北西段丘崖直下には箕面川が南西へ流れる。低位段丘には現在溜め池として利用されているものなど、幾つかの開析谷の存在がみられ、遺跡地内にいくつかの埋積谷が存在している事が予想される。

今回の調査地は、宮の前遺跡範囲内の南半の東よりにあたる。北側は大きく低位段丘がひろがるが、西側は約350mで沖積平野への段丘崖にいたり、東側は約150mで遺跡範囲を抜け、小さな枝谷を介して約400mで高位段丘にいたる。南は、現在もその一部が溜池となっている開析谷が北北西から

南南東にはしり、調査地は全体的にゆるくこの谷にむかって北から南へと傾斜している。

今回の調査地は、阪急宝塚線の線路東側に沿った、住宅跡地である。調査は用地買収の進捗にしたがい着手し、平成4年度は宮の前遺跡(1)として2B・C・1D・2D・1F・2Fトレンチを、平成5年度は同(2)として1E・2E・1G・2Gトレンチの調査を実施した。なお、トレンチの設定は『(財)大阪文化財センター和歌山線遺跡調査マニュアル』に準拠し、東西にはしる生活道路に画された区画ごとに北からA～F地区を設定し、地区内で分かれるトレンチは北を優先に番号をふった。

調査の成果は、宮の前遺跡(1)→宮の前遺跡(2)の順に記述する。



図5 トレンチの位置

## 2. 宮の前遺跡（1）の調査の成果

### （1）遺構と遺物

#### 2 B トレンチ

**2 B トレンチ** 2B トレンチは、北から南へゆるやかにさがっていく斜面地形の上端部分に位置している。遺構検出は、盛土上面から約40cm下の灰褐色粘質土上面と下面でおこなった。

**検出遺構** 灰褐色粘質土上面で検出した主な遺構は、土坑、小穴、杭である。また、下面で検出した遺構には、土坑、小穴、小溝等がある。

灰褐色粘質土上面で検出された土坑1は、長軸方向に2m、短軸方向に1mの楕円形の掘形をもち、深さは80cmを測る。土坑内からは陶器のコーヒーマグと受け皿が出土した。これらの陶器は、新聞紙でくるまれ、藁縄で縛った状態で土坑内から出土している。新聞紙の大半は土中の水分で腐食しており、取り上げはできなかつたが、受け皿の底部にわず

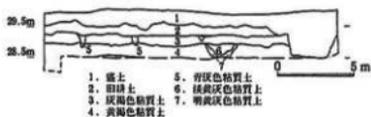


図6 2Bトレンチ西壁断面

かに付着していた新聞紙の記事から、第2次世界大戦時の新聞であることがわかった。出土状況とくるんであった新聞紙の時期から、戦時中になんらかの理由により埋められたものではない

かと考えられる。

また、礎石が1点出土する土坑がある。

その他の土坑、小穴からは遺物は出土していない。

#### C トレンチ

C トレンチは2B トレンチの南、約4mに位置する。旧耕土から遺構検出面まで、褐灰色土層、灰褐色土層の2層が堆積しており、両層の上面で

遺構検出をおこなったが遺構は検出されず、最終的に盛土から約60cm下の明黄褐色粘質土の上面まで下げた。調査区中央にコンクリート製の排水路が東西にはしている。

その南側には重機によって掘削され、瓦・スレート瓦などが

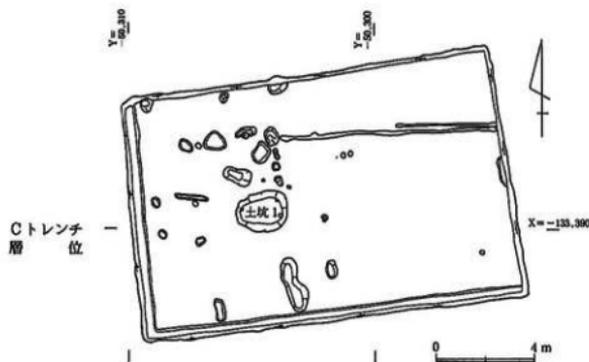


図7 2Bトレンチ平面

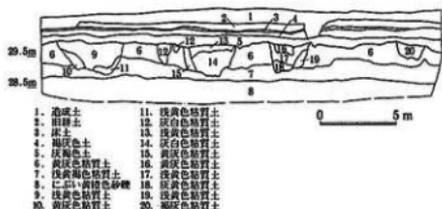


図8 Cトレンチ北壁断面

大量に投棄された土坑が2基あり、周辺での遺構の検出は困難であった。このため、遺構検出は排水路より北側が中心となった。

検出した主な遺構は、小穴、土坑などである。

土坑1・2は長方形の掘形をもち、中には円筒形の木枠が据えられていた。調査区は谷地形の斜面地にあたり、地下からの湧水は考えられない。また、据え付けも浅いため、井戸に類似するものとは考えにくい。おそらく、以前に建てていた民家に関係する施設であろう。

その他の土坑の大半は、平面形がほぼ隅丸方形で、底面が平らであり壁の立ち上がりが急な掘形をもつ。これらの土坑からは、遺物は出土していない。

### 1 Dトレンチ

層位は上から順に、盛土、

褐灰色シルト小礫混じり、褐

灰色シルト、褐灰色シルトに褐色シルト混じる、黄橙色粘質シルトに大礫混じるである。遺構検出は盛土上面から約70cm下の黄灰色粘質土の上面でおこなった。

遺構検出面は民家の基礎による視乱が著しく、また重機の掘削痕も多く残されており、遺構の検出は困難であった。

わずかに検出できたのは木杭と調査区南端の落ち込みである。

木杭は直径約5cmで、ほぼ東西にならんでいる。耕作にともなう細面杭のようなものであろうか。

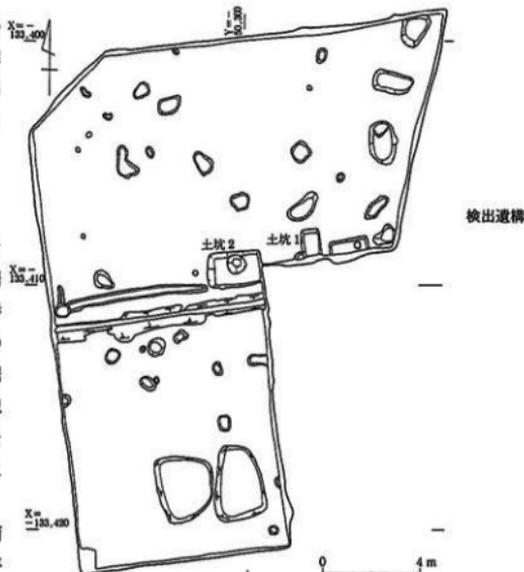


図9 Cトレンチ平面



図10 1Dトレンチ西壁断面

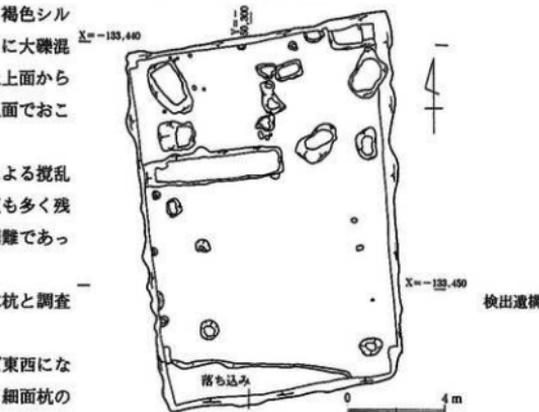


図11 1Dトレンチ平面

落ち込みからは、羽釜の口縁部が1点出土している。

その他、いずれも小片であるが土師皿、須恵器、陶磁器片が出土している。

## 2Dトレンチ 2Dトレンチ

層位

検出遺構

掘立柱建物

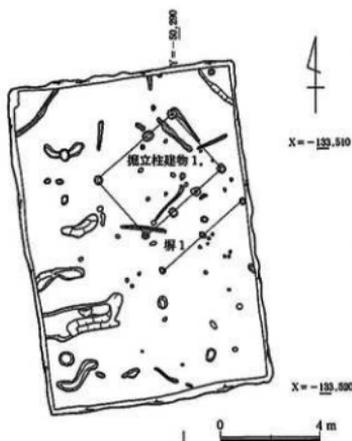


図12 2Dトレンチ平面

深さにばらつきがみられ、浅い柱穴はわずか3cmに満たなかった。また、桁行方向の柱間の間隔にも、ややばらつきがみられる。

塀1は、掘立柱建物1の南側約1.5m離れたところで2間分を検出した。柱間は2.2mを測り、等間隔である。

層位は、上から順に盛土、旧耕土、床土、にぶい灰色シルト、明赤褐色シルトの順である。

遺構検出は、盛土上面から約60cm下、旧耕土下の明赤褐色シルト上面でおこなった。

遺構検出面は、北から南へむかってやや傾斜している。

検出した主な遺構は掘立柱建物1棟とこれにともなうと考えられる塀1、その他小穴、土坑、溝である。

掘立柱建物1は(2)×3間で、梁間は約3.0m、桁行は約4.0mの規模をもつ。西の妻柱および北側柱は検出できなかった。柱穴の断ち割りをおこなった結果、

1Fトレンチ 層位

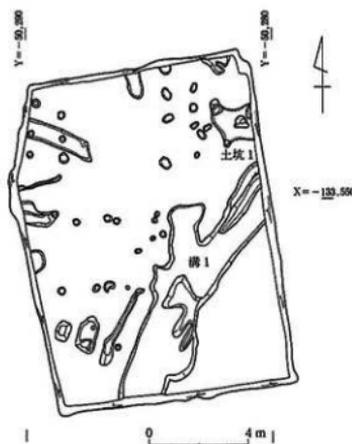


図13 1Fトレンチ平面

建物1と塀1は柱筋をそろえて、N-48°-E方向に建てられており、同時期に建てられたものと考えられる。また、いずれの柱穴も楕形の平面形は円形である。柱穴からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

また、北西隅に断面がV字をいし弧を描く溝を検出しているが、やはり出土遺物はなく性格は不明である。

その他、特筆すべき出土遺物はみられない。

## 1Fトレンチ

層位は上から順に盛土、旧耕土、床土、にぶい褐色粘質土、灰褐色シルト、明赤褐色シルトである。遺構検出は、盛土除去後面から約70cm下の明赤褐色

シルト上面でおこなった。

検出した主な遺構は、溝、土坑、小穴である。

溝1は、おおね北東から南西へ伸びる不定形の溝である。幅は約1.4m、深さは約15cmで、埋土は礫を含む粘質土である。この溝からは、格子目叩きの瓦片が出土しており、鎌倉時代のものと考えられる。



図14 格子目叩キ平瓦

土坑1からも同じく鎌倉時代のものと考えられる格子叩きの瓦片が出土している。

また、小穴を多く検出したが、建物になるようなまとまりはみられなかった。

本トレンチから出土した遺物は、他のトレンチより多いが、いずれも小片であり、特筆するような遺物はない。

## 2 F トレンチ

層位は、上から順に盛土、旧耕土、黄灰色シルト、灰黄色砂質シルト、褐色粘質シルトである。盛土は厚く約1mにおよぶ。盛土内からは、ゴム草履、タイヤなどが出土しており、近代になってからの盛土であろう。

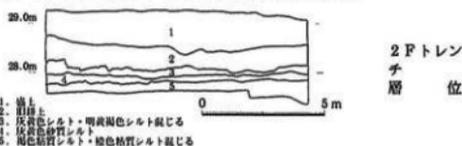


図15 2Fトレンチ南壁断面

遺構検出は主に、南へ向かってゆるやかに傾斜している黄灰色シルト上面でおこなった。

検出した主な遺構は弥生中期の土器が出土した溝状遺構や土坑、小穴である。

遺構検出面は、トレンチ北端から南へ3mのところまで1段低くなっており、この段は、おおよそ東西にはしている。この段の上の高い部分にのみ1F

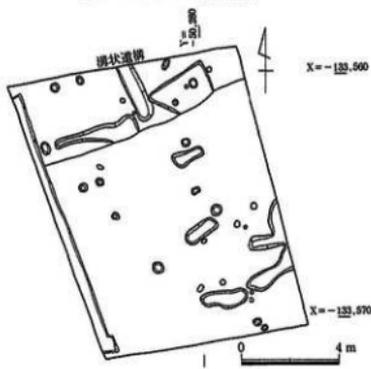


図16 2Fトレンチ平面

トレンチで遺構を検出した明赤褐色シルト層と対応すると考えられる層が存在していた。

この層の上面で溝状遺構を検出している。溝状遺構からは弥生時代中期の壺(1~3)、甕(4)、高杯(5)が出土した。

(1)は広口壺である。頸部に刻み目を付けた貼り付け突帯をもつ。口縁端部を上下に拡張しており、口縁端面には凹線をもつ。(2)も広口壺である。口縁端部は上下にやや拡張しており、口縁端面に凹線をもつ。(3)も広口壺である。頸部には5条の櫛描き直線文をもつ。口縁端部はやや上下に拡張している。(4)は甕である。「く」の字形の頸部をもつ。(5)は水平口縁をもつ高杯である。口縁外面には凹線をもつ。

溝状遺構  
弥生時代中期

その他の遺構からは、遺物は出土していない。

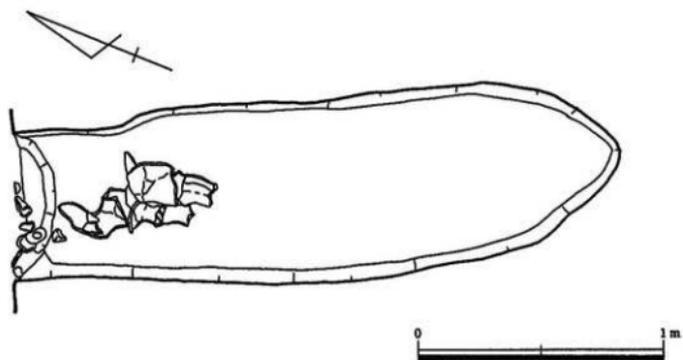


図17 溝状遺構遺物出土状況

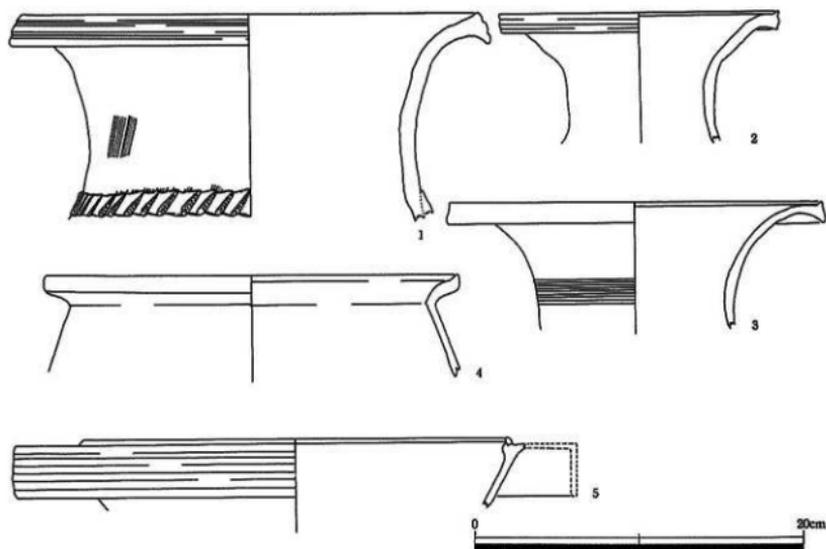


図18 溝状遺構出土遺物

## (2) まとめ

今回の調査では、いずれのトレンチでも、住宅造成時の盛土とその直下の旧耕土の下に、さらに古い耕土の残りと思われる層が1～2層あるのみで、それより下はいずれも共通する層と思われる、明赤褐色～黄灰色粘質土層がある。

遺構面として検出されるのは、その明赤褐色～黄灰色粘質土層上面のみであった。

明赤褐色  
～黄灰色粘  
質土

しかし、平坦さや検出された段差などから、その面もかなり削平を受けているものと思われる。実際、この地域は明治以前に不整形な区画をもった耕地が開発されており、その時点でいくらかの削平がおこなわれたと思われる。しかし、高度差をもった土地を造成する場合、一区画において、削平する部分と盛土する部分が併存する場合が多いのに対し、ここでは削平ばかりがみられ、削平によって生じた土がどこにいったのか疑問が残る。

また、この面で弥生時代中期の土器を出土した溝状遺構や掘立柱建物などがみられることと出土遺物から、弥生時代中期・古墳時代・古代・中世に人の活動があったことがうかがえる。豊中市教育委員会等による既往の調査においても、弥生時代中期から後期の方形周溝墓や集落、古墳時代・奈良時代の土壇墓や集落、平安時代の集落等が知られており、結果的にはそれらと異なるものではなく、既往の調査において明らかな集落や墓域の周辺の状況ととらえることができよう。

集落や墓域  
の周辺

今回の調査での主な遺構としては、土坑・溝・掘立柱建物・溝状遺構がみられるが、土坑・溝に関しては時期・性格共に不明である。

掘立柱建物

掘立柱建物は小さな小屋程度のもと思われるが、調査範囲の小ささもあり、他に関連する建物があるのが問題となろう。しかし、塀らしきピット列もあり、屋敷地として数棟の建物の複合体が存在していた可能性は考えておかななくてはならないだろう。またその時期の限定も今後の課題である。

弥生土器の出土した溝状遺構は、今回唯一時期の限定できる遺構である。しかし、遺構自体の性格は不明であり、土器の残存率の悪さ等の問題を残す。

溝状遺構  
弥生土器

明赤褐色～黄灰色粘質土層は、その下に礫を多く含む粘質土層の存在が知られ、層の状態からも段丘礫層の風化層ではなく、段丘平坦面上での二次的な堆積層と考えられる。従来、地山として調査の対象になりにくい層であるが、段丘上とはいえ、二次堆積層であるということ、遺構・遺物の存在する可能性があるということである。今後、その形成時期や、新たな遺構面の存在の可否が課題となろう。

二次堆積層

また今回の調査地周辺は、下位段丘平坦面の中でも比較的高い部分で、南に向かって緩く傾斜していたことが判明した。段丘上での古い微地形の復原の一資料となろう。そういった意味も含めて、南西方向にある開折谷との関係や、さらに傾斜のある部分で古い包含層が残っているかどうか等が留意される。

### 3. 宮の前遺跡（2）の調査の成果

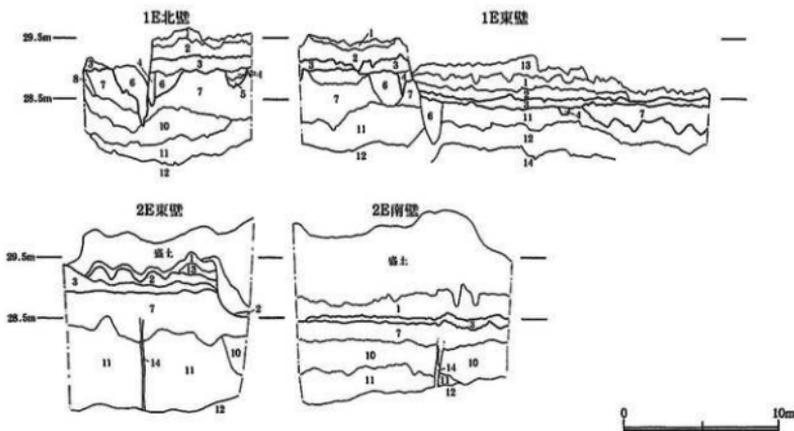
#### （1）基本層序

1層—2.5YR/6明黄褐色の砂質土で細砂主体、シルト・中砂～粗砂・炭化物等若干あり、わずかに酸化鉄分あり。この層も基本的には耕土である。須恵器、土師器の破片がみられ、瓦器片、染付の破片も含む。近世か。

2層—7.5YR3/2黒褐色の粘質土、シルト～粘土主体、細砂わずかにあり、粗砂～小礫若干あり、酸化マンガン粒非常に多し、弥生土器を若干含む。酸化マンガン粒が非常に多いため、遺構の切り込み等が破壊されているようで、3面検出の遺構のいくつかはこの面のものかも知れない。低い部分ではこの層の上に黒泥土がのる。弥生時代中期の土器片のみ含む（図21）。

遺構検出面 3層—10YR3/2～4/2黒褐色～灰黄褐色の粘質土、シルト～粘土主体、細砂あり、粗砂若干あり、酸化マンガン粒あり、酸化鉄若干あり。部分的に小礫～中礫を含む。ほとんどの遺構はこの上面の3面で検出される。かなり土壌化を受けた層である。弥生時代中期以前か。

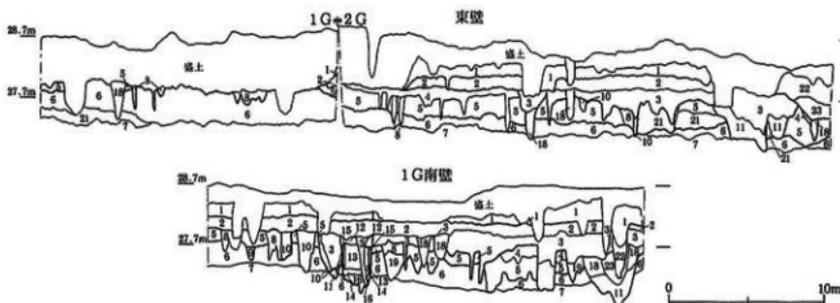
4層—7.5YR4/6～10YR6/4褐色の粘質土、シルト～細砂主体、粘土若干あり、中砂～粗砂



1. 5Y 3/1 オリーブ色砂質土 細砂～シルト主体、粗砂・小礫・炭化物若干あり、酸化鉄わずかにあり。（図21）
2. 5Y 5/2 灰オリーブ色砂質土 細砂～シルト主体、粗砂～小礫あり、炭化物若干あり、酸化鉄あり。（図21）
3. 2.5Y 6/4 にじみ色砂質土 シルト～細砂主体、粗砂あり、酸化鉄あり、特に上部に多し、酸化マンガン粒若干あり。（1層）
4. 10YR 4/4 褐色粘土 粘土～シルト主体、粗砂～小礫あり、炭化物わずかにあり、酸化鉄若干あり、酸化マンガン粒多し。（3層）
5. 炭化物層
6. 10YR 4/6 褐色粘質土 シルト～細砂主体、中砂含む、酸化鉄・酸化マンガン多し、膠まり懸し。
7. 7.5YR 5/6 明褐色粘質土 シルト～細砂主体、粘土降下、粗砂～中砂若干含む、酸化鉄多し、酸化マンガン粒あり。（4層）

8. 10YR 4/4 褐色粘質土 粘土～シルト主体、粗砂～中砂あり、酸化鉄あり、酸化マンガン粒あり。（4層）
9. 10YR 5/6 黄褐色粘質土 シルト～細砂主体、中砂～粗砂わずかにあり、酸化鉄多し。（4層）
10. 10YR 5/8 黄褐色粘質土 細砂～シルト主体、中砂含む、粗砂わずかにあり、酸化鉄多し、酸化マンガン粒あり。（5層）
11. 2.5Y 5/6 黄褐色砂質土 細砂主体、シルト含む、中砂若干あり、酸化鉄あり、酸化マンガン粒あり。（5層）
12. 5Y 5/4 オリーブ色砂質土 細砂主体、シルト含む、中砂若干あり、酸化鉄若干あり、酸化マンガン粒わずかにあり、小～中礫わずかにあり、やや還元状態。段丘階層上部風化層か？
13. 2に2.5Y 6/6 明黄褐色シルトのプロック含む。
14. 5Y 7/1 灰白色粘土 木の根の痕跡か？

図19 1E・2Eトレンチ断面



1. 2.50Y 5/1 オリーブ灰色砂質土 細砂主体、中砂～小礫若干あり酸化鉄わずかにあり、シルト若干あり。(田線土)
2. 2.5Y 6/6 明黄褐色砂質土 細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、酸化鉄多し。(1層)
3. 7.5YR 3/1 黒褐色粘質土 シルト～粘土主体、細砂わずかにあり、粗砂～小礫若干あり、酸化マンガン非常に多し。(3層上面も含み内側傾斜土)
4. 7.5YR 3/2 黒褐色粘質土 3とほぼ同質。(2層)
5. 10YR 5/6～4/2 黄褐色～灰黄褐色粘質土 シルト～粘土主体、細砂あり、粗砂若干あり、酸化マンガン粒あり、酸化鉄若干あり。(3層)
6. 7.5YR 4/6～10YR 4/6 褐色粘質土 シルト～細砂主体、粘土若干あり、酸化マンガン粒わずかにあり、中砂～粗砂わずかにあり、酸化鉄多し。(4層)
7. 10YR 5/6～2.5Y 6/4 黄褐色～にぶい黄色粘質土 シルト～細砂主体、粘土あり、酸化マンガン粒あり、植物根痕あり、酸化鉄あり、大～中礫多し。(3層)
8. 5・6の脱炭。
9. 10YR 2/3 黒褐色粘質土 粘土～シルト主体、粗砂若干あり、酸化マンガン粒多し。
10. 4と5のブロックと中～大礫。
11. 10YR 4/2 灰黄褐色砂質土 細砂主体、シルト含む、中礫あり。
12. 7.5YR 2/2 黒褐色粘質土 粘土～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、酸化マンガン粒多し。
13. 7.5YR 3/2 黒褐色粘質土 粘土～シルト主体、中砂～粗砂あり、酸化マンガン粒多し。
14. 7.5YR 3/1 黒褐色粘質土 粘土～シルト主体、細砂わずかにあり、酸化マンガン粒多し。根の痕跡?
15. 7.5YR 3/2 黒褐色粘質土 粘土～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、酸化マンガン粒多し。
16. 10YR 2/3 黒褐色粘質土 粘土～シルト主体、粗砂あり、小礫わずかにあり、8と7のブロックあり。
17. 8に於けるが、6の割合多し。
18. 4・5の脱炭。
19. 4内に5・6のブロック。
20. 10YR 5/4 にぶい黄褐色粘質土 粘土～シルト主体、細砂～中砂若干あり、酸化鉄あり。5・6の二次堆積か?
21. 2.5Y 6/4 にぶい黄色粘質土 細砂～シルト主体、中砂含む、酸化鉄あり。(4層)
22. 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂質土 細砂主体、粗砂～小礫あり、1含む。(脱炭土)
23. 10YR 4/2 灰黄褐色砂質土 中砂主体、粗砂～中礫含む。(脱炭土?田線土?)

図20 1G・2Gトレンチ断面

・酸化マンガン粒わずかにあり、酸化鉄多し。この上面で検出された遺構はもっと上の面からの切り込みか、自然流路や木の根の痕と思われる。土壌化を受けてはいるが、風化層ではなく、止水堆積である。部分的に中礫～小礫を多く含む。



図21 1G・2Gトレンチ2層出土遺物

5層～10YR5/6～2.5YR6/4黄褐色～にぶい黄色の粘質土でシルト～細砂主体、粘土あり、酸化マンガン粒あり、植物の根の痕跡多し、酸化鉄あり、大～中礫を多く含む。礫は丸礫が多く、部分によって礫の多寡があるので、段丘礫層起源の二次堆積層である可能性が高い。

これ以下は硬く締まった礫層で段丘礫層と思われる。角礫が多く、5層の礫より小さいものが多い。

1層上面を1面、2層上面を2面、以下同様に面の名称を付した。

基本層序は以上の通りだが、これは1G・2Gトレンチにのみ遺存している。それより北はかなり後世の浸食・削平を受けているようで、2～3層はほとんどみられない。しかし、1層が通ることや、4面相当面で見られる遺構の埋土等から、弥生～古墳時代には2～3層がかなり広範囲に存在していた可能性が高い。

## (2) 遺構と遺物

### 1E・2Eトレンチ

#### 1 面 (図22)

1E・2Eトレンチではその北側で北から南へ落ちる段落ちを検出した。ほぼ東西方向に走る段落ちで比高差は40~50cmである。現在の住宅の区画とはややずれているが、隣接する阪急電車の線路が通る以前の土地区画の方向と合うようである。

段上北側は、1Eトレンチでは攪乱と浅い不定形土坑のため良く分からなかったが、2Eトレンチ側で東西方向の畝群を検出した。幅60cm、高さ10cm強程で、間の畝溝の幅は30cm程である。



図22 1Eトレンチ1面平面

段の下の南側では鋤溝群と浅い方形土坑をいくつか検出した。鋤溝は南北方向が多いが東西方向も若干ある。切り合い関係は不明である。

段落ち北側の高さは28.9~29.0m、南側は28.5mほどである。

鋤溝から須恵器、土師器、陶器、染付の破片が少々出土しているが、現代のものと思われる磁器や瓦の破片も出土している。

#### 3面相当面 (図23)

1E・2Eトレンチでは2面として検出したが、実際はかなり削平を受けた4面である。

検出した遺構は不定形土坑とピットがいくつかである。規則性のあるものはない。埋土は2層と同じような黒褐色の粘質土が主で、浅いものは4層のブロック土を含む傾向が強い。これらは本来この部分にも2・3層が遺存してい

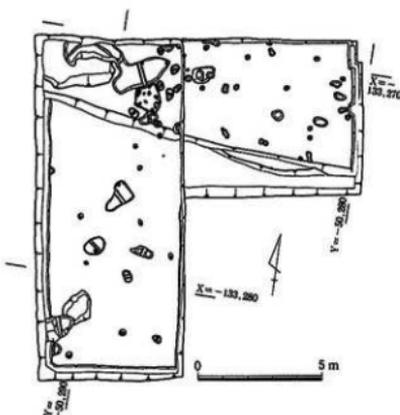


図23 1E・2Eトレンチ3面相当面

た事を示し、おそらくは2・3面から切り込んだ遺構であったのだろう。

他に3層の色の薄い部分に似た、灰黄褐色の粘質土を埋土とするものもあるが、それらが1Eトレンチの、1面の段差で大きく削平された部分に多い事からみて、これらが4面の遺構かもしくは3面切り込みの遺構の底の方の残存である可能性が強い。

全体的には、かなり削平されながらも、1G・2Gトレンチの3面と4面に共通する遺構が検出されたとみて良いだろう。

遺物は出土しなかった。

## 1G・2Gトレンチ

## 1面

1G・2Gトレンチでは攪乱により1層がほとんど遺存していなかったが、断面上1面は27.9～28.0mの平坦な面であったことがわかり、わずかに遺存していた面では東西方向の溝溝がみられた。

## 3面(図24)

1G・2Gトレンチでは、1G東北部分が高いため2・3層が遺存していなかったが、それ以外はほぼ全面に2層が遺存し、1G南西から2G北西にかけてと(1G落ち込み1・2G落ち込み1)、2G南端部分(2G落ち込み2)では特に低く、2層の上にさらに黒泥土が堆積していた。しかし、2層は土壌化が激しく、さらに酸化マンガン粒が非常に多いため、2面で遺構を検出することはできなかった。

結局、3面でそれらの遺構を検出し、さらに2・3面の遺構で3面で検出できなかった遺構がいくつか4面で検出されたようである。ここでは、2面のものか3面のものか判断できるものはそれを明記し、さらに4面検出のもので2・3面の遺構と思われるものも含めて、主な遺構について記述したい。

## 長方形土坑(図25・27・29)

土墳墓の可能性のある、平面形が長方形、もしくはその両端が丸くなった形をていする土坑が12基検出された。そのうち、1G長方形土坑1と2G土坑1は、土墳墓であることがほぼ確実なものである。

**1G長方形土坑1(図25)** ほぼ正確に南北に長軸を向けた隅丸長方形の土坑で、東長辺と南短辺に崩れたようなふくらみを見せる。長さ2.8m、幅は南側が1.05m程、北側が90cm程、深さは26～42cmを測る。底部はだいたい平らである。断面からみると、2層の上にいる、1G落ち込み1の黒泥土堆積後に、その東端の肩部に掘られたことがわかる。埋土上面ではわからなかったが、断面で木棺の痕跡らしきものを検出した。埋土はだいたい黒褐色の粘質土であるが、そのなかでもわずかに明るい色で、他には入る粗砂～小礫が入らず、しまりの悪い部分が、上に口を開けた「コ」の字状に検出された。その上は厚さ6cmの黒褐色粘質土で覆われており、棺内はその土とほぼ同質でやや茶色のきつい埋土がある。棺外の裏詰めと思われる埋土も似ているが、底板の下では4・5層のブロックと粗砂～小礫がやや多い。棺の痕跡と思われるものの大きさは、厚さは底も側も4cm程、南側では幅84cm、高さ26cm、北側では土坑の底から壁にへばり付くようにややゆがんでいるが幅は上で77cm、下で70cm、高さ18cmと、土坑と同じように南側がやや大きい。

土坑内からは須恵器の杯身4点、杯蓋4点がほぼ完形で出土している(1～7・9)。(1～8)は北の方に集中している。しかし(1)は北端中軸線上にあってかなり浮いている。棺上に置かれたものだろうか。出土状況では倒置である。(2～4)は少しずつ重なりながら土坑の底より3cm程浮いた状態である。棺内底部と考えれば納得がいく。(5～7)は上から(5)蓋・(6)身・(7)蓋の順で重なって出土した。(7)の下部もわずかに土坑底より浮くので棺内の遺物であろう。(2～7)はすべて、身が正置で蓋が倒置になっている。また(2～4)は(5・6)と同じように重ねられていたものが崩れたものようであり、重な

1面

3面

長方形土坑

1G長方形土坑1

遺物出土状況

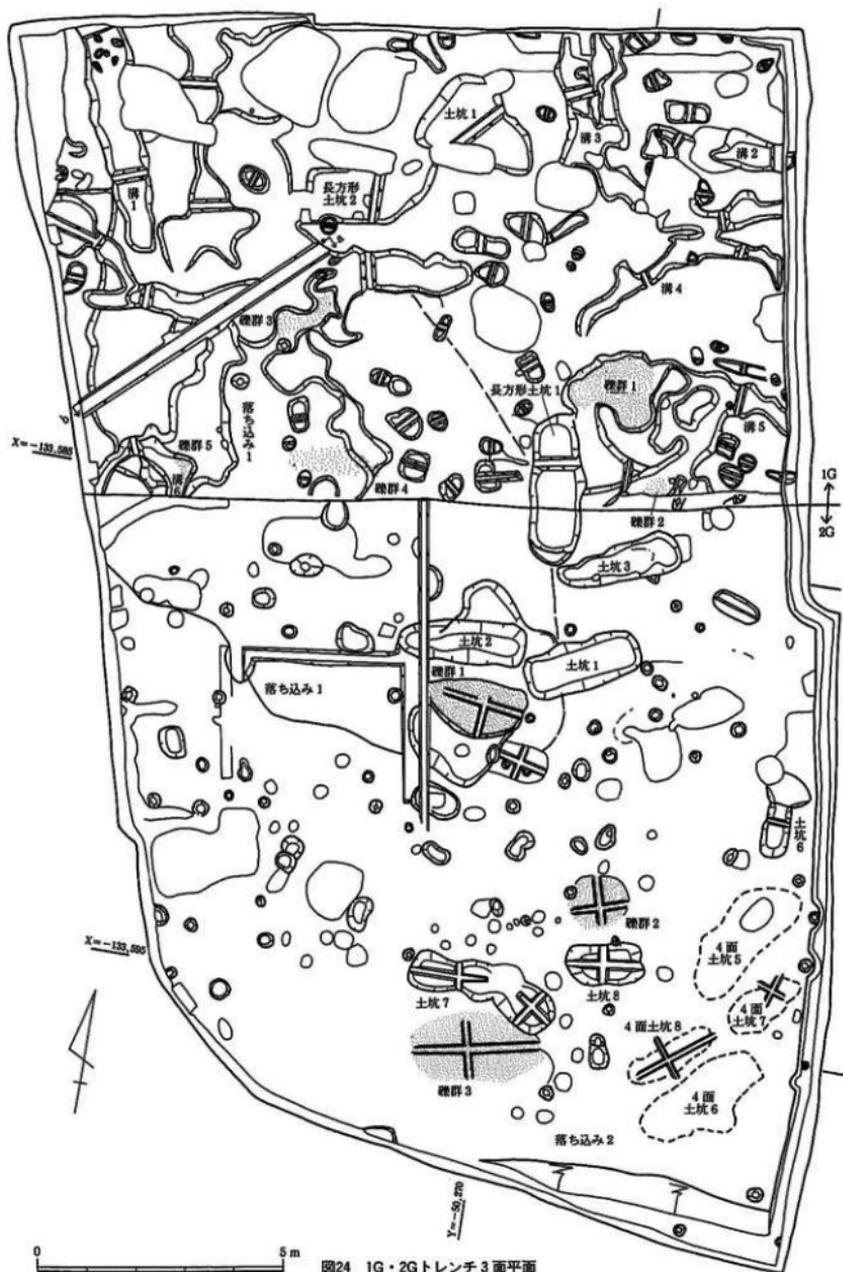


図24 1G・2Gトレンチ3面平面

りかたからおそらく、上から順に(2・3・4)と置かれていたと思われる。するとこの6点は棺内北側の、中軸線からわずかに西に寄った位置に、2組、各々3点ずつ重ねられて置かれたと思われる。(9)はそれらの杯群から一つ離れ、土坑のほぼ中央から西辺との中間あたりから倒置で出土した。位置的に棺内遺物であるようだ。他に須恵器甕片が1片(8)出土している。位置的には棺直上、南半中央である。また、この土坑周辺は基盤層にも上層にも礫が多いが、土坑内南側セクションにかかり、棺直上に位置していた礫と、(5)の上にかかり、棺直上らしきレベルを見せる礫の二つは人為的なもの可能性もある。土坑底部は基盤層内の礫が何個も露出しているが、棺台らしきもの等は確認できなかった。

須恵器杯は、いずれも灰白色から青灰色をていし、石英・長石・黒色粒を含む。杯身は外面底部からやや上までが回転ヘラケズリでそれ以外は回転ナデである。(1・6)は底部がほとんど平底で安定し、受け部の端部が上方につまみ上げられる。(2・3)は底部が不安定で、受け部は外方へつまみ出される。(2)は底部外面に一本のヘラ記号がみられる。

杯蓋は天井部外面が回転ヘラケズリの他は回転ナデである。(4)はナデとケズリの交錯する部分がある。(5)のヘラケズリの範囲は狭く、回転ヘラケリの部分のみである。(7)は天井部外面に2本の線が端で交差する松葉状のヘラ記号があるが、一本は一部線が消えている。

杯群は身4点、蓋4点と数は合うが、蓋が皆倒置で身のように置かれていること、身と蓋の置かれ方になら規則性がみとめられないことなどから、セット関係にあったとは思

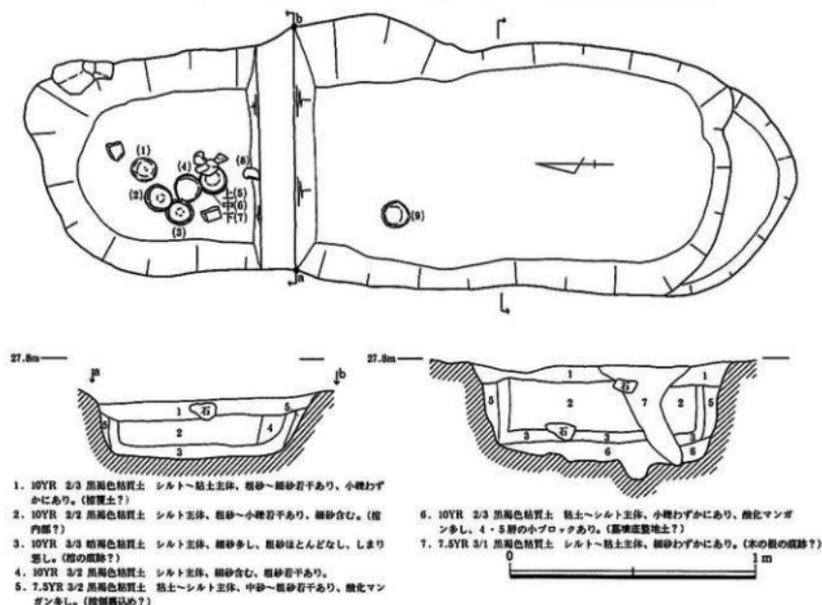


図25 1Gトレンチ3面長方形土坑1遺物出土状況・断面

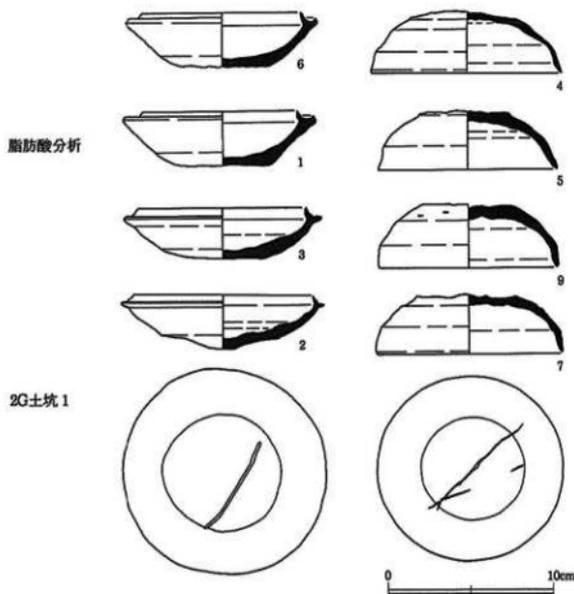


図26 1Gトレンチ3面長方形土坑1出土遺物

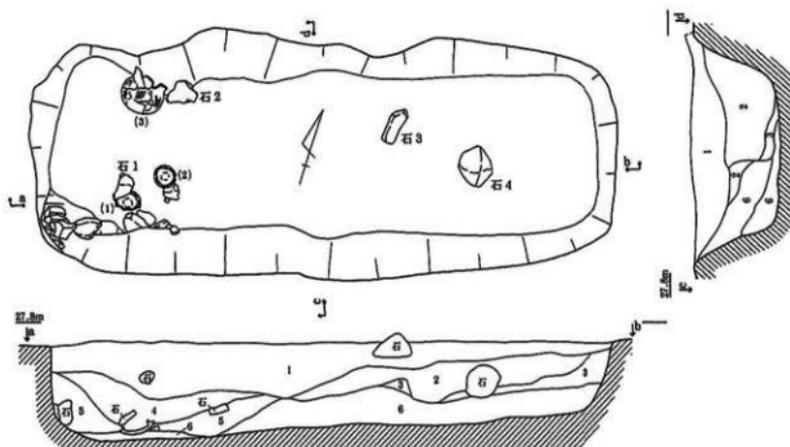
である。埋土は基本的に黒褐色系の粘質土である。中央の横断面でみると、北長辺に寄って四角い掘形のようなものがあり、そこへ南から斜めに4層のブロック混じりの土が流入しているような状況である。棺の痕跡かもしれないが、幅が40cm未満なので断言はできない。最上部に、中央がくぼんで厚さ10cm程に堆積している黒褐色粘質土は、2面の低地に堆積した黒泥土のようで、事実1G落ち込み1につづく、黒泥土の堆積範囲に土坑の西半分がかかっている。しかし、この黒泥土はかなり土壌化が激しく、その中で切り合いがみえないことが多いので、土坑の切り込み面はその上面である可能性が高い。つまりこの土坑は面的には1G長方形土坑1と同じ面にあると思われる。

遺物出土状況 出土遺物は須恵器杯身2点(1・2)、土師器壺1点(3)である。いずれも東北東短辺近くから出土している。杯身2点は南南東長辺近くでわずかに浮いた状態で正置されている。棺内底部であろうか。(1)は全体の1/4程を欠いている。また(2)は口縁部をわずかに欠く。(3)は北北西長辺ぞいで、口を北に向けた横倒しの状態で、土圧を受け、やや偏平になり、上部が若干破砕されている。最下部はやはりわずかに土坑底より浮いている。土坑の東北東短辺南隅に礫が多くみられるが、これはもともと基盤層に含まれていたものが露出しているものようだ。しかし、(1)の上ののっているもの(石1)と(3)の横にあるもの(石2)はなんらかの意味があるかもしれない。どちらも土器と同じようにわずかに浮いている。また土坑の西南西側は基盤層に大きな礫がほとんどないが、土坑内で2個、礫が出土している(石3・4)。(石3)は土坑底に密着しているが、(石4)は中軸線上ののって、

われぬものである。6世紀末～7世紀初頭の遺物といえる。

なお、土坑内南側セクションの埋土の脂肪酸分析の結果、高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、およびヒト胎盤、高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪等が検出された(P167参照)。

2G土坑1(図27) 平面形は、多少の凹凸はあるが、わりと整った隅丸長方形で、長さ2.38m、幅90cm、深さ34cmである。長軸の方向は東北東から西南西に向く。壁は垂直に近く立ち、底面は平ら



1. 5YR 2/1 黒褐色粘質土 粗砂〜中粒多く含む、5YR 1.7/1 黒色シルト含む。
2. 5YR 1.7/1 黒色 シルト〜粘土
3. 5YR 1.7/1 黒色シルト 4層小ブロック・黒褐色シルト含む。
4. 5YR 2/1 黒褐色粘質土 シルト主体、7.5YR/1 黒灰色シルト小ブロックあり、細砂含む。
5. 7.5YR 2/1 黒褐色粘質土 細砂含む、4層小ブロック・5YR1.7/1 黒色シルトブロックあり。
6. 7.5YR 2/1 黒褐色粘質土 シルト主体、細砂含む、4層のブロック多し。



図27 2Gトレンチ3面土坑1平面・断面

土坑底より20cm近く浮いており、もし土坑内に棺があったのなら、棺上に置かれたような状況にある。

(1)は、外面の底部周辺が回転ヘラケズリである以外は回転ナデ、受け部は上外方にの 出土遺物  
び、底部外面に「X」字状のヘラ記号がある。胎土には石英を多く含み、黒色粒もわずかに  
みられる。色調は灰から灰白色である。(2)は法量、色調、胎土は(1)とほぼ同じだが、

立ち上がり部の内  
傾がやや強く、底  
部側面に回転ヘラ  
ケズリが一条、底  
部外面はほぼ平底  
で回転ヘラキリの  
痕をそのまま残す。  
底部内面は回転ナ  
デ後に一条の直線  
的なナデが入って  
いる。(3)は頸部  
はあまりしまらず、  
口縁は外上方にまっ

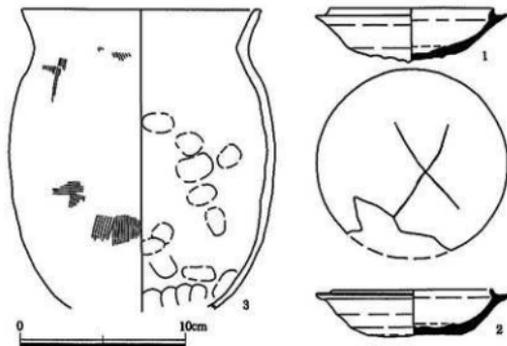


図28 2Gトレンチ3面土坑1出土遺物

すぐのび、端部はやや外へナデだすような形で丸い。胴部はあまり張らない長胴で丸底のようである。調整は体部外面は剝落が著しいが縦方向ハケメを主体としていたようである。しかし1単位横方向ハケメが残存している。口縁部は内外面とも剝落して不明、体部内面は剝落しながらも指頭圧痕は残存している。指頭圧痕は、全体に散在しているが、底部近くで密集していることがわかる。胎土には石英を多く、長石を若干含み、わずかにチャートもみられる。色調は浅黄橙から橙色である。

木棺が存在したかどうかは確認できなかったが、土坑の掘形と遺物の出土状況から考えればその存在の可能性は高いといえるだろう。時期は須恵器杯身から、1G長方形土坑1と全く同じ6世紀末から7世紀初頭と考えられる。これも両者が同じ面の切り込みであることを傍証するものであろう。

その他の長方形土坑

その他に土墳墓の可能性のある細長い土坑は10基ある(図29)。それらはやや上述の二つと状況が異なっている。まず、底部が丸く、中央あたりが一番深い、壁が斜めのものが多い、片方の短辺が隅丸方形に近くなるものもあるが、両短辺が隅丸方形になるものはなく、だいたい丸みをおびた端部になっている。幅も一定になるものはほとんどなく、中央あたりがふくらむか、どちらかの端部の幅が大きい。深さは削平の可能性もあるが、浅いものが多い。大別すると2mを超す大形とそれ以下の小形に分かれる。小形は削平された結果であるかも知れず20cm以下の浅いものが多い。

1G長方形土坑2 長さ約2.4m、幅1.1m、深さ16cmで大形だがかなり浅い。中軸線は東西を指向する。肩は攪乱でかなり破壊され、全体の平面形がわかりにくい、西端部が隅丸方形、東端部が幅を減じて丸くなっていた可能性が高い。底部は小さな凹凸がある。埋土は黒褐色粘質土で2面切り込みの可能性が高い。

出土遺物は弥生土器と思われる小片1点とサヌカイトのチップ1点のみである。

2G土坑2 長さ2.6m、幅80~86cm、深さ44cmの大形で中央が一番深い。側面の壁はわりと立つが、縦断面の形は舟形である。中軸線はほぼ東西、東端が隅丸方形で西端は丸い。埋土は上下2層に分かれ、上が黒褐色粘質土、下が黒色シルトである。切り込み面は2面である。

2G土坑3 長さ2.54mの大形で、東北東から西南西を指向する。幅は東北東側が80cm、西南西側が60cm、深さは38cm。端部は東北東側が隅丸方形、西南西側が丸い。北北東側と東北東端部の壁がかなり立つ以外はゆるい掘形である。埋土は黒褐色粘質土で、底部にブロック土混じりの土を残す。このブロック土はいったん掘った後、底部を丸く整えるために埋め戻したようにも見える。ちょうど横断面のセクション部分で小さなピットに切られている。2面の切り込みの可能性が高い。

2G土坑6 土坑5に切られ、全長は不明だが、1.1m以上、2m以下の小形である。ほぼ南北を指向して、幅は北側で48cm、南側で60cm、深さは11cm、南側端部は丸い。底部に礫が集中して見られる部分があるが、基盤層のものか意図的に入れられたものかわからない。埋土は黒褐色粘質土である。

2G土坑7 一部を攪乱に切られているが、だいたい1.8m強の長さと思われる。幅は中央あたりがくびれて52cmだが、最大は78cm、深さは36cmで小形の中では深い。ほぼ東西を指

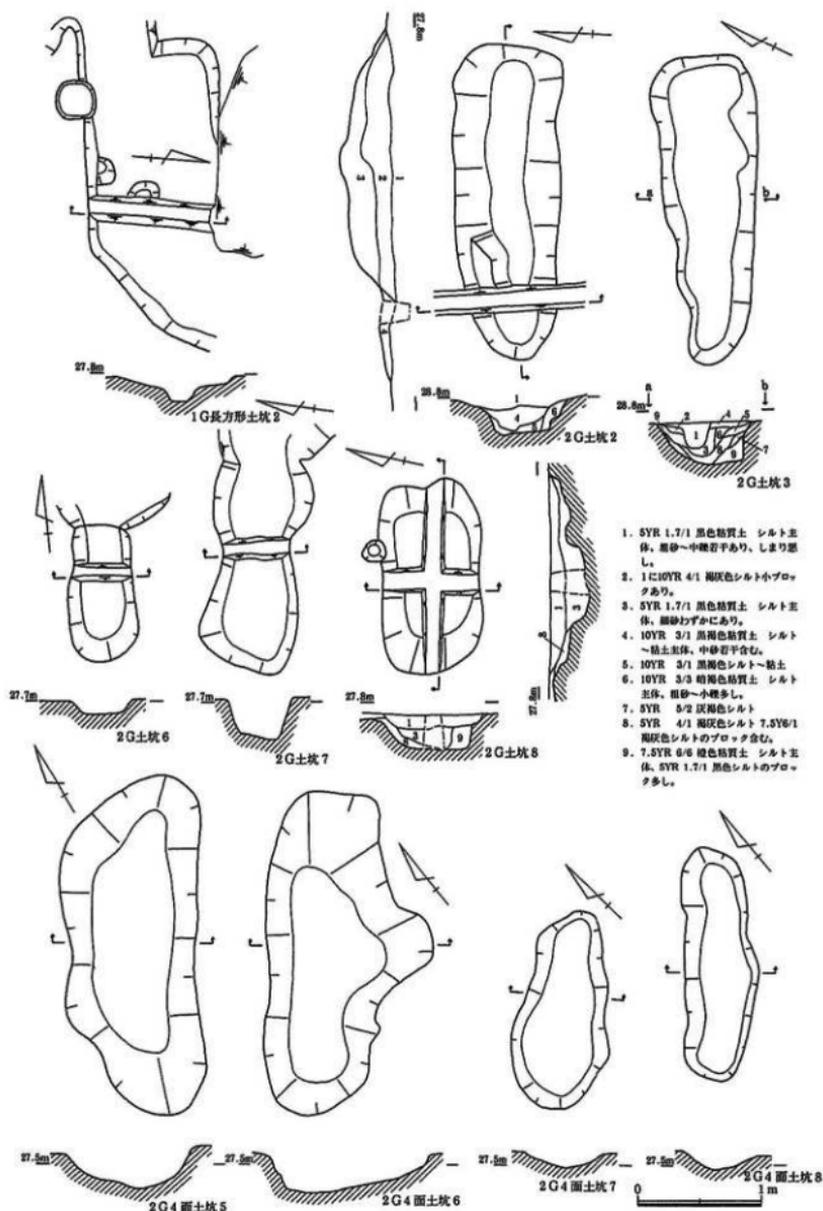


図29 1G・2Gトレンチ3面長方形土坑平面・断面

向し、西端は隅丸方形とも丸いともとれる状態である。壁はゆるく落ちるが底部はやや平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。

**2G土坑 8** 長さ約1.6m、幅約80cm、深さは中央付近が二段落ち状に深くなり32cmと小形の中では深い。両端とも隅丸方形をていし、東北東から西南西を指向する。埋土は良く似た黒褐色粘質土が上下2層に分かれる。

4面埋土の  
長方形土坑

以下の4基の土坑は2Gトレンチで3面検出時にはあまりはっきりみえず、次の4面まで下げた時点で検出し、調査したものである。しかし、3面ではっきりしなかったのは、トレンチ南端部分の2層上に黒泥土が堆積した落ち込み部分を下げきらなかったためと思われ、実際は2面切り込みの遺構である可能性が高い。

**2G4面土坑 5** 長さ2.78mで、北東から南西を指向し、幅は北東側が1.1m、南西側が84cm、深さは4面検出時点で40cmの大型である。両端は丸く、西北長辺がややふくらむ。

埋土は黒褐色粘質土、底面に散在する礫は基盤層内のものが露出したものようだ。

**2G4面土坑 6** 長さ2.66m、幅86~98cm、深さ40cmの大型で中軸線は北東から南西を向く。両端とも隅丸方形である。南東長辺に突出する部分があるが、これは崩れか、もしくは別の遺構がかんでいるのであろう。切り合いは確認できなかった。土坑底に礫の集中する部分があるが、そのあり方は先述の突出部と関係がありそうにみえる。しかし、特に人為的なものとは思わず、もともと基盤層内で礫が集中した部分があったようである。埋土は黒褐色粘質土である。

**2G4面土坑 7** 長さ1.62mで北東から南西を指向し、幅は北東側が54cm、南西側が80cm、深さ15cmの小形である。両端は丸く、長辺はやや凹凸がある。土坑底に見える礫は基盤層内のものが露出したものである。埋土は黒褐色粘質土である。

**2G4面土坑 8** 長さ1.92m、幅46~60cm、深さ19cmの小形で、北東から南西を指向するが、周辺の土坑5・6・7よりやや東西に傾く。両端はやや不明確だが隅丸方形をていする。

土坑内の礫は3面検出時に既に露出しており、埋土内のものである。土坑南東長辺ぞいに集中するが、意図的なものというより、埋土内にもともと含まれていたものであったような感がある。埋土は黒褐色粘質土である。

その他の土  
坑、ピット

その他の土坑、ピット

1G・2Gトレンチでは上述の長方形土坑以外にもかなりの数の土坑、ピットが検出されたが、柱穴のように規則性をもって並ぶものはなく、遺物を含むものもかなり少ない。また、不定形なものや浅いものもかなりあり、人為的なものか疑問を残すものもある。面的には2面の落ち込みに堆積した黒泥土の上から切り込むものと、2面から切り込むもの、3面から切り込むものがあることが確認されている。黒泥土の上から切り込むものはピットしかないが、埋土は黒褐色粘質土である。2面から切り込むものは数的に一番多いようで埋土は黒褐色粘質土である。3面から切り込むものは、2層で直接埋没しているものもみられ、埋土は黒褐色粘質土が主だが、わずかに暗灰黄色粘質土のものもある。これは2・3層の遺存の度合いが悪い、やや高い部分に多くみられ、4面のものである可能性もある。また土坑内、ピット内に礫のみられる場合があるが、これは基盤層となる4・5層が層内に礫を含み、なかでも礫の集中する部分が散在しているため、それが遺構底部で露出して

いるか、埋没時に流入したものがほとんどのもので、特に意図的に入れられたと思われるものは少ない。

ここでは、比較的遺物が多く出土した1G土坑1についてのみ詳しくふれる。

**1G土坑1 (図30)** 攪乱に若干破壊されているが、平面形が大体隅丸の長三角形をていする土坑で、長軸は北西から南東を指向し、短辺は北西に面する。長さ約2.5m、幅約1.9m、深さ34cmである。北隅と南東隅はいったんゆるやかに落ちてから、傾斜を増し、二段落ち状になっている。埋土は3層に分かれ、上層が小礫～粗砂を若干含んだ黒色粘質土であり、中層が黒褐色粘質土、土坑底に薄く堆積している下層は黒褐色粘質土で、中層と基盤層が混濁した層のようである。

遺物は全て北西半部分の上層からのみ出土している。土器片は80片以上出土していて、出土遺物弥生時代中期の土器が大きめの破片で散乱しており、高杯の破片が目立つ。検出当初は高杯脚部片が一つみられ、同じ型式の高杯杯部片が多かったので、ほぼ1個体の高杯片が散乱しているものと思われたが、結果としてはあまり接合せず、細かい形態の異なる破片があり、3～4個体の高杯の破片が残存率のあまり良くない状態で遺存しているようである。口縁片から甕は6個体程、壺は2個体程の存在が知られるが残存率は悪く、ほとんど1破片のみのものが多い、壺か甕の底部片は7個体程の存在を示している。他に、凹線文をほ

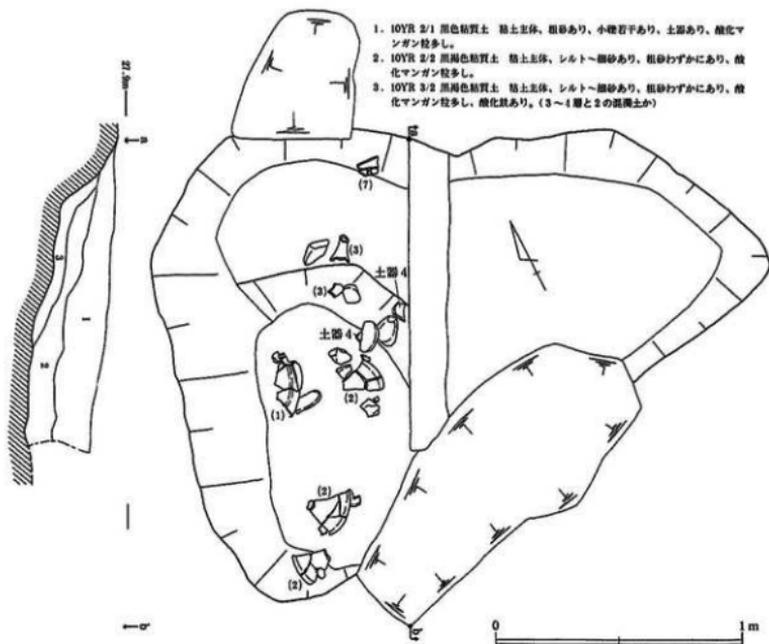


図30 1Gトレンチ3 面土坑1平面・断面

どこした長頸壺の同一個体破片と思われるものが3片、サヌカイトのチップ1点等がある。

(1)は弥生土器高杯杯部片である。まっすぐ上外方にのびる杯部に、水平に外方にのびてから長く垂下する口縁部がつき、その結合部内面に、まっすぐ上に向けた突帯がめぐる。調整は剝落が著しく、判然としなが、内面がヨコナデ、外面が縦のヘラナデかヘラミガキのようである。口縁の水平に張り出す部分の下面はナデがめぐり、垂下部はヨコナデで外側上端近くに凹線が一条めぐり、下端にはゆるいナデがめぐる。長石・石英をわずかに含む緻密な胎土で焼成も良である。浅黄橙から灰褐色をていする。畿内第IV様式のものとして位置づけられる。(2)は弥生土器高杯杯部片である。皿状の杯部で口縁端部に外傾した面を持つ。器表の磨滅が激しく、調整はさだかでないが、内面にわずかに残るのはミガキではなく、放射状のハケメである。脚部との結合部は粘土の継ぎ目をあらわにして剝離している。胎土に長石とチャートをわずかに含み、外面浅黄橙色、内面橙色をていす。畿内第IV様式でも後半に位置づけられる。(3)は弥生土器高杯脚部片である。上端はほぼ杯部との接合部にあたるようで、外面にはヨコナデが一条めぐる。裾部との境には10条の櫛描文が1帯めぐる。脚部内面には絞り痕がみられ、その下端に指頭圧痕が残る。胎土に石英を含み、焼成はやや不良、色調はにぶい褐色をていする。(4)は弥生土器高杯杯部または鉢の口縁部片である。口縁端部は厚くなり、外側の角が丸い面を持つ。外面口縁端部よりや

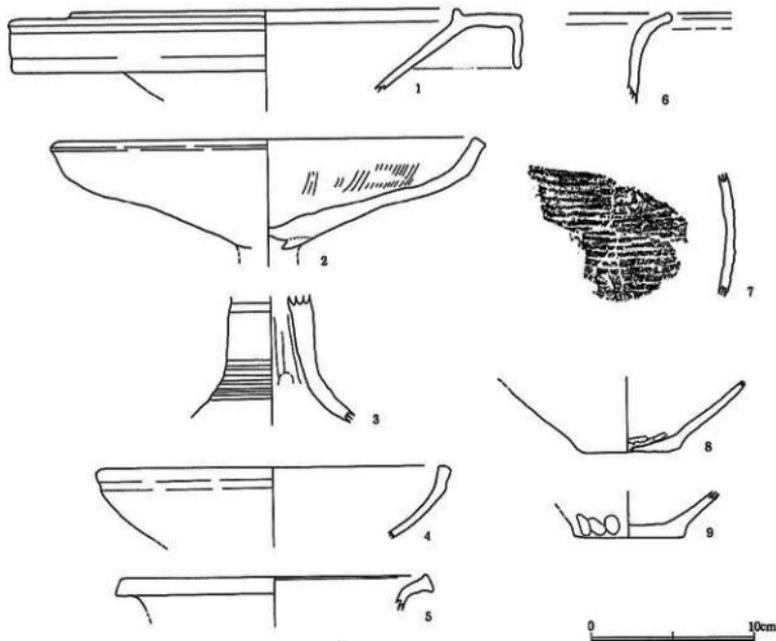


図31 1Gトレンチ3面土坑1出土遺物

や下に凹線が一条めぐる。その他の調整は明確ではないが、だいたいヨコナデで仕上げられているようである。胎土には石英・長石・赤色酸化粒をわずかに含み、灰白色をていする。弥生中期に位置づけられる。(5・6)は弥生土器広口壺口縁部片である。(5)は外反する口縁端部が広がり、幅のある外傾する面をもつものである。外面にわずかにヨコナデを残す。(6)は上にまっすくのびてから外反する口縁で、端部は丸くおさまり、その内外面にナデがはいる。どちらも石英・長石等をわずかに含み、灰白色をていする。時期はあまり限定できない。(7)は弥生土器の、おそらく甕の胴部片と思われる破片である。外面に横位の平行タタキがみられる。(8・9)は弥生土器壺底部片である。(8)は内面底部に、(9)は外面底部側面に指頭圧痕がみられる。胎土に砂粒は少なく、ともに灰白色をていする。

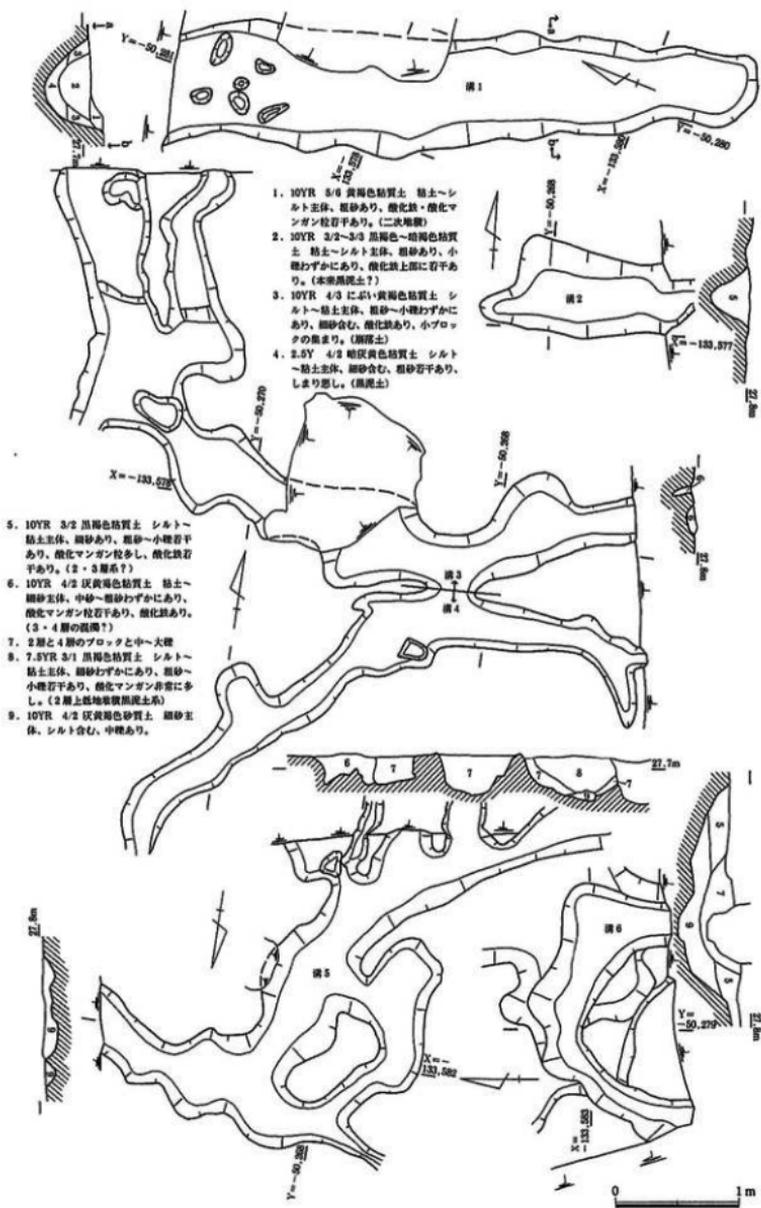
このような遺物のあり方は、もともと完形に近い土器が破片で投棄され、後に包含埋土が削平されたものか、もともと1個体分に満たない破片の状態で数個体分が投棄されたかのどちらかとおもわれるが、埋土中層上面が土坑縁辺はやや高く中心が低い状態であるのに合った出土状態で遺物が分布し、隣り合った破片に上下関係にあるような極端なレベルの違いがないことからみても、土坑が掘られ、ある程度自然に埋没した後、一時に土器が投棄され、その後最終的に埋没したものとみられ、削平で多くの破片が失われたとは思えない。おそらくは投棄された時点で、既に完形率の低い破片の状態であったと思われる。この土坑は掘削された後、ある期間を置いて自然に埋まり、最後に近い時点で土器の破片が投棄されたと考えられるので、土器以外の遺物の検出はできなかったものの、廃棄土坑である可能性が強いといえるだろう。しかし、出土した高杯の破片が大形のものであることは留意しておく必要があると思われる。

遺構の時期としては出土土器が弥生時代中期畿内第Ⅳ様式後半のもののみなので、その時期内の掘削、埋没と考えられる。

#### 溝(図32)

溝は1Gトレンチでのみ検出された。整理すると6条程度である。その他に浸食の痕跡等もあり、溝としたものの中にもそういったものもあるかもしれない。それら5条の溝もトレンチ内で全容の判明しているものは無く、その位置や形態からみても性格のわからないものばかりである。

溝1 1Gトレンチ北壁に近い部分から南南東へほぼ一直線にのびる溝である。検出された長さは4.8m、幅は80~100cm、深さはトレンチ北壁から南へしばらくは次第に深くなり、最深48cmまでになるが、落ち込み1の北端にかかったあたりで急に6~13cmと浅くなり途切れる。断面形は丸みを帯び、底部には細かな凹凸がある。埋土は横断面で見ると、最底部にしまりの悪い暗灰黄色粘質土があり、その上の両壁にそって崩落土か、もしくは人為的埋土かもしれない、にぶい黄褐色の粘質土が小さなブロック土を含んである。その中を掘り直したかのように幅56cm、深さ28cmの半円形に近い断面形に堆積しているのは暗褐色~黒褐色粘質土である。これらの状況からみれば人工の溝であるとしてもおかしくはないが、なぜ落ち込み1にかかる部分で急に浅くなり、途切れるのかが不思議なところである。落ち込み1からの排水路と考えると、完全には排水できない形であるし、これ



1. 10YR 5/6 黄褐色粘質土 粘土～シルト主体、細砂あり、酸化鉄・酸化マンガン粒若干あり。(二次堆積)
2. 10YR 2/2～3/3 黒褐色～暗褐色粘質土 粘土～シルト主体、細砂あり、小礫わずかにあり、酸化鉄上面に若干あり。(赤褐色泥土?)
3. 10YR 4/3 に近い黄褐色粘質土 シルト～粘土主体、細砂～小礫わずかにあり、細砂含む、酸化鉄あり、小ブロックの集まり。(腐植土)
4. 2.5Y 4/2 暗灰褐色粘質土 シルト～粘土主体、細砂含む、粗砂若干あり、しまり形。(黒泥土)

5. 10YR 3/2 黒褐色粘質土 シルト～粘土主体、細砂あり、粗砂～小礫若干あり、酸化マンガン粒多し、酸化鉄若干あり。(2・3層系?)
6. 10YR 4/2 灰黄褐色粘質土 粘土～細砂主体、中砂～粗砂わずかにあり、酸化マンガン粒若干あり、酸化鉄あり。(3・4層の腐植?)
7. 2層と4層のブロックと中～大礫
8. 7.5YR 3/1 黒褐色粘質土 シルト～粘土主体、細砂わずかにあり、粗砂～小礫若干あり、酸化マンガン非常に多し。(2層上地層復原泥土系)
9. 10YR 4/2 灰黄褐色粘質土 細砂主体、シルト含む、中礫あり。

図32 1Gトレンチ3面溝平面・断面

より北側は地勢の高い部分であるから、不合理だ。落ち込み1への導水路と考えると、ある程度の水位がないと溝に滞水するばかりである。しかし、落ち込み1となんらかの関連があると考えると良いだろう。

溝2 1Gトレンチ東壁北半中央から真西へ1.76mのびている。幅は約72cm、深さ39cm、西端は南辺にそった部分が少し突出している。断面形は「V」字に近い。埋土は黒褐色粘質土である。検出された範囲のみでは長方形土坑ともとれるが、「V」字に近い掘形が大きく違うと思われる。底部近くはやや暗灰褐色粘土が目立っており、壁にもぐり込むような埋土もあるので、木の根の痕かも知れない。

溝3 溝2のやや南側から西南西へのび、次第に北へ屈曲してトレンチ北壁の東半中央あたりに入る。北へ向いてから細い枝が東にわかれ、平行する。肩は不整形で、幅はだいたい40～50cmが平均であろう。深さはだいたい10cm程度だが、一番深い部分は17cm、底部は凹凸が激しい。埋土は黒褐色粘質土で、やや削平された木の根の痕跡の可能性はある。

溝4 溝3より南から東へのび、溝3に接してから向きを南西に変え、次第に浅くなりながら最後は攪乱に当たって消える。かなり不整形な溝だが、幅は平均30cm程度であろうか。深さは最深17cmである。埋土は暗灰黄色粘質土で、2・3層の無い部分があるので、4面の遺構の可能性はある。

溝5 トレンチ東壁南端近くから東北東へのび、だいたい南に屈曲しながら複雑に枝分かれする。トレンチ南壁に入る部分では4条程に枝分かれしているようだが、2Gトレンチに入ってから検出できなかった。幅は平均的には30cm程度、深さは大体5cm程度だが、一部分27cmの深さを測る。埋土は暗灰黄色砂質土で、トレンチ南壁付近で礫群2が中にある。かなり削平された木の根の痕跡の可能性はある。

溝6 1Gトレンチ南西隅で半円状にめぐる溝、トレンチ西端の落ち込み1の肩の上からその最深部へめぐる。高い部分では幅約24cm、深さ18cm、低い部分では幅約44cm、深さ16cmで、その中に礫群5が存在する。2Gトレンチ側では攪乱に切れ不明である。埋土は黒色粘質土である。落ち込み1内に形成された自然流路が何条か集まってこの溝に向かっている。

#### 礫群(図33)

#### 礫群

いくつかの礫群が検出されているが、大別すると3種類に分けられる。一つは3層や4層との関係ははっきりせず、皿状の落ち込み内に礫がかたまっているようにみえるものである。これは2G礫群3で推測されるように木の株が成長するに従い、礫を押し上げた結果ではないかと思われるものである。この場合は小さな礫が多く、密集していて、周囲の土の土壌化が激しいのが特徴である。次は木の根の痕跡の可能性もある溝等の一か所に、数個の礫がかたまっているものである。これは溝が木の根の痕跡なら、木の根が成長に従い引きずった礫が、その腐食に伴い、溝状の痕跡の中に取り残されたものと思われる。しかし、人工の溝の中に人為的に入れられた可能性も捨てきれない。最後のタイプは礫が基盤層より明らかに浮いており、密度も比較的低いものである。これが一番人為的なものの可能性が強いもので、礫混じりの層を掘削して、その腐土を1か所に投棄した後、土自体は土壌化によって周辺のものと同区別がつかなくなり、礫のみが検出された状況ではないか

と考えている。

第1のタイプ 1G礫群1・2G礫群1・2・3等は最初の木の株によってひきあげられたタイプではないかと思われる。その中で一番大きい、2G礫群3は4面で検出した土坑3の上部にあるが、その土坑(3面切り込みである)の断面をみると、下部は黒色シルト系の土と褐色粘質土系の土が複雑に切り合い、一部ブロック土もみえる。上部はブロック状に二次堆積した褐色粘質土系の土でその中に礫が集中する。おそらくは黒色シルト系の土が木の根の痕跡で、基盤層をブロック状に破碎したり、抱え込んで土壌化させながら根がのび、根の上

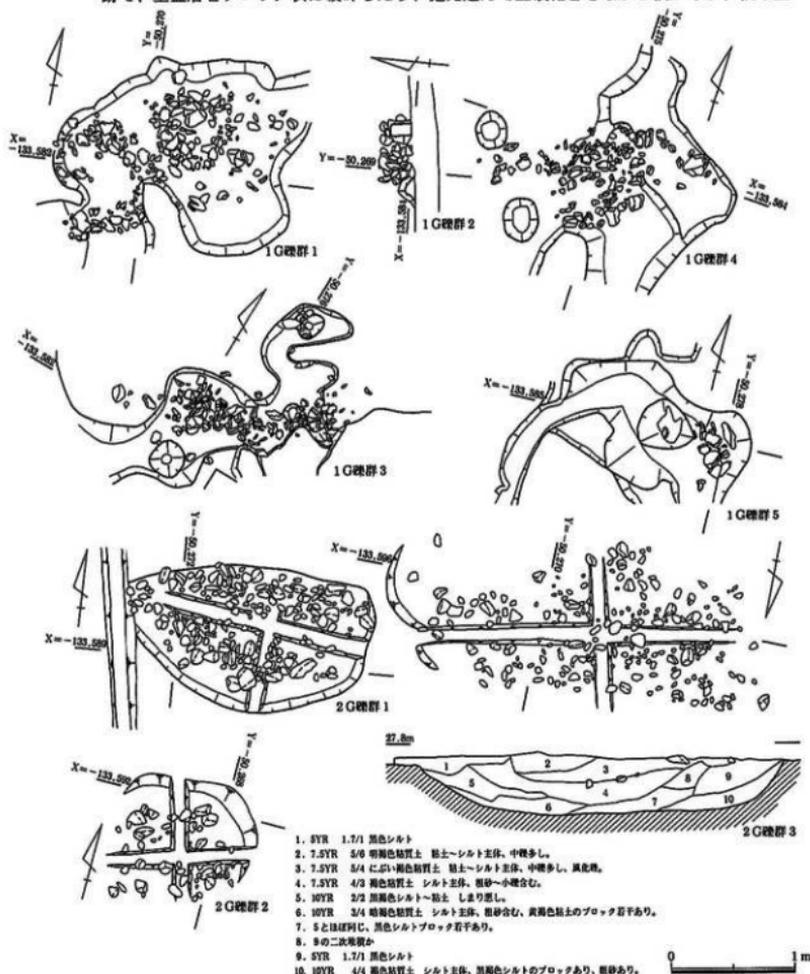


図33 1G・2Gトレンチ3面礫群平面・断面

部の土を破砕しながら持ち上げたのではないだろうか。そして木の根の腐った後に、黒色シルトが入りつつ、持ち上げられた土が落ち込んでくるが、その土は既に細かい粒子がかなり流失し、礫の割合が多くなっていて、それが上部のブロック状の褐色粘質土系の土に礫の多く入った層となるのではないか。事実、その層も大きくみれば2層にわかれ、上のほうが礫が多い。そのような木の株の痕跡はよく風倒木痕とか倒木痕と呼ばれる事があるが、風倒木痕もしくは倒木痕というのは、原因はなんであれ、木が根こそぎ倒れた痕跡の事であり、木の株の痕跡の一種に過ぎない。それ以外の立ち枯れや伐採による木の株の痕跡は、破砕状態の層や粘土～シルトの層が複雑に絡む不整形土坑状に検出されるものから、放射状に広がる木の根の痕跡が追えるものまであり、木の性質、土の状態、腐食・埋没の過程によって様々なパターンがある。ブロック土がみられることがあるので、人為的に埋められた土坑と誤認される場合があるが、正常な埋没順序に合わない層や粗砂や礫の入らない粘土～シルトの孤立したブロック状の層(丸いもの、もしくはその上部が凹んだ形で直上の土がブロック状に破砕して落ち込んでいる事が多い)が断面でみられれば、それが木の根の痕跡ではないか注意する必要がある、全体で木の株の痕跡である可能性が高い。

2番目のタイプのものには1G礫群2・5がある。どちらも人為的な溝か木の根の痕か第2のタイプ  
判別できない溝の中に入っている。どちらの溝も断面上確認される切り込み面は2面であり、その溝の中の狭い範囲で重なり合うようにしてある。人為的な溝ならば、溝をせき止めるために入れたものと思われるが、木の根の痕ならば、なぜその1カ所に集中しているのかが問題となろう。

1G礫群3・4は人為的に投棄された可能性の強い、3番目のタイプのものである。どちらも1G落ち込み1の肩部から、深い部分に向かって楕円形の範囲に礫が集中している。第3のタイプ  
礫群3はちょうど溝状の侵食の痕に入っており、自然に流入した可能性もあるが、礫の分布圏の長軸方向が、侵食痕の方向と異なっている。重なり合うものが多く、やや浮いたものもあるなど、垂直分布の高低差もかなりある。分布の幅が落ち込み1の肩部側がやや狭く、中心に近い方が広い傾向がみられることなどから、2面の時点で、湿地状になっていた落ち込み1に向かって、どこかで発生した礫混じりの掘削土を投棄したのではないかと考えられる。

#### 落ち込み

落ち込み

1G・2Gトレンチでは2ヵ所の落ち込みが検出された。ひとつは両トレンチにまたがって広がる1G落ち込み1で、これの2Gトレンチ側を2G落ち込み1としておこう。もう一つは2Gトレンチ南東端のもので、平面的な広がりにはあまりはっきりしないが、全体的に南西へ向かって緩く落ちている。これを2G落ち込み2とする。どちらも面的に言えば3面から形成され、2面でも存続している。そして2層より大体暗色の黒泥土系の粘質土が堆積し、その上面でやと平坦な面になるようである。

1G落ち込み1・2G落ち込み1(図24・34) 1Gトレンチ側の最上段の肩はその大部分が住宅解体時の攪乱によって破壊されているので正確な形状はつかみにくいが、西端の肩がかろうじて残っている。そこから黒泥土系の埋土の残存を追うと、長方形土坑2のあたりまで東進し、そこから南に下ってからまた東に折れ、長方形土坑1を通るような形になり、



1. 10YR 2/1 黒色粘質土 粘土～シルト主体、細砂含む、粗砂若干あり、小礫わずかにあり、土器あり、酸化マンガン多し。(2層上層落ち込み内堆積黒泥土)
2. 10YR 3/2 黒褐色粘質土 粘土～シルト主体、細砂含む、粗砂～小礫若干あり、酸化マンガン・酸化鉄あり、しまり厚し。(2層系)
3. 10YR 3/3 暗褐色粘質土 シルト主体、細砂～粗砂若干あり、酸化鉄・酸化マンガン粒あり。(3層)
4. 2.5Y 5/4 黄褐色粘質土 シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、小礫あり、酸化鉄あり、酸化マンガン粒あり、中～大礫わずかにあり。(4層)

図34 1Gトレンチ3面落ち込み1断面

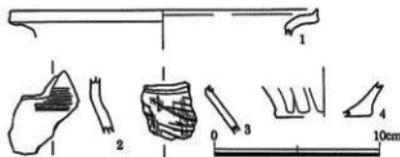


図35 1Gトレンチ3面落ち込み1出土遺物

トレンチの西南はぼ1/4を占める。2Gトレンチに入ると土坑3の西半がかかり、土坑1・2、礫群1を完全に範囲内に含めてから西に折れ、さらに西北に向けてトレンチ西北隅に入る。だいたいの形をみると西北から南東へ長軸をもつ、楕円に近い不整形のようだが、1Gトレンチ西端で西へ上がっていく部分が見られ、最深部が西端のトレンチ境なので、そこを中心に扇形に広がると理解した方が良いかもしれない。深さは最深部で60cmはあるが、平均的には20cm程のものである。底部でピット・浸食痕・溝等を検出したが、その切り込みは断面で確認できたものからみても埋土上、2面、3面と様々である。

土器片がかなり出土しているが、底面近くのものが多く、黒泥土系埋土より下の2層に相当する層から出土したものと思われる。土器片は100片以上あり、大きめの破片もあるが、ほとんど接合しない。破片の中に、凹線文などが見られ、甕や壺の存在がしれる。他の器種は判然としない。時期的には弥生時代中期でまとまるようである(図35)。

この落ち込みの性格はいま一つ明らかでない。単なる自然地形と考えても良いが、1G溝1・6等がからむこと、土墳墓らしき長方形土坑がその肩部に集中することなどの特徴がある。また、段丘上で開折谷に近い部分でなぜ、沼状の黒泥土の堆積があるのかも疑問の一つとしてあげられよう。

2G落ち込み2(図24) トレンチ東壁の断面図から見ると、最大深さ50cmほどの落ち込みがあったとみることできるが、平面的にはトレンチ東南隅付近ははっきりしない層が多く、全体として東南へ落ちていく傾向がみられるのみであり、明確な層は検出できなかった。それは肩にあたる部分に礫群3や4面検出土坑5・6・7・8等が密集していたためもあると思われる。埋土は大体、粗砂や酸化マンガン粒の多い黒褐色粘質土であるが、2層を切って堆積している。最深部のそれより下には褐色や灰黄褐色の粘質土があり、上には近世以降の攪乱もある。周辺地形との関係で見ると、下位段丘を開折し、再び埋没していった谷か、その枝谷の肩部と考えて大過ないように思える。しかし、上述の落ち込み1と同じく、土墳墓の可能性のある長方形土坑が、その肩部に集中するという特徴がある。

#### 4 面 4面(図36)

溝、土坑、ピット等が検出された。しかし、そのほとんどが木の根の痕跡や浸食の痕等と思われ、人為的な遺構の可能性のあるものは少ない。ほとんどの埋土は灰黄褐色粘質土である。2Gトレンチでは南東側で本来2～3面の遺構である土坑5～8や3面礫群3の

下の土坑(土坑3)等  
 が検出されたのは先述  
 したとおりである。溝  
 のなかには壁や底に小  
 穴状にもぐり込んでい  
 く部分のある、明らか  
 に木の根の痕跡と思わ  
 れるものもあり、ピット  
 や土坑にも埋土が斜  
 めにどこまでもぐり  
 込んでいるものが少数  
 ながらある。これらは  
 3面でも輪郭は明確で  
 なくても、ぼんやりと  
 みえていたものもあり、  
 3層がまだ酸化マンガ  
 ン粒の多い、土壌化の  
 激しい層である事を考  
 えると、3面のある時  
 期、ここで木が生えて  
 いたと考えられる。ま  
 た3面の1G磔群1、  
 2G磔群1～3等を木  
 の株の痕跡と考えると、

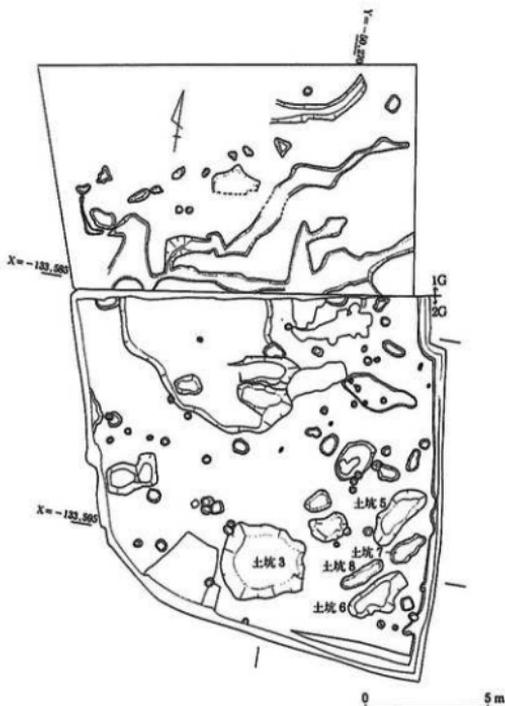


図36 1G・2Gトレンチ4面平面

さほど密生した森林とは考えられず、まばらに木の生える、明るい疎林のような状態と思  
 える。 疎 林

その疎林の成立と消滅は環境の変化や開発の開始と密接に関係していると考えて良いだ  
 ろう。なお、この面より下は基本的に無遺物である。

### 5面

大礫～中礫を多く含む粘質土の上面である。遺構はいっさいみとめられない。しかし、  
 5 面  
 平面的にみても、礫の密度の高い部分と低い部分があり、礫の多くが丸礫であることがわ  
 かる。これは5層下のさらに礫の多い層が角礫が多く、大きさも中礫～小礫主体で、間の  
 粘質土にも礫が風化したような砂を多く含み、段丘礫層上部の風化層とみてよい状況であ  
 るの比べると、5層自体が風化層ではなく、二次堆積の層であることを示すと思われる。  
 5層がやや離れた高位段丘から供給されたものか、低位段丘上のみでの浸食、堆積の結果  
 であるのかは不明だが、段丘の形成に関する一資料とはなろう。

### (3) まとめ

- ・周辺地形の観察から調査地のやや南に北東から南西へぬける埋没谷の存在が指摘され、

今回の調査地もだいたい北が高い地勢である。

近世～現代 ・高い部分は近世までに大きく削平され、耕地化している。その段差や耕地地区画は現状では大きく改変されているが、鉄道が出来、宅地化する以前までは存続していたようだ。

中世 ・中世の面や遺構はみとめられないが、わずかながら瓦器等の遺物がみられるので、中世にも何らかの人の活動があったと思われる。

古代 ・6世紀末～7世紀初頭には土墳墓群が形成され、の中には供獣土器と木棺をもつ、比較的丁寧な作りのものがある。また、土墳墓と確定はできないが、丸い底で遺物をもたないものがある。それらすべてを土墳墓とすると、さらに長さ2mを超す大形と、それ以下の小形に大別されて、全体で見ると3種類の土墳墓があるとみて良いだろう。また、土墳の幅が均一で無く、どちらかが広くなるものや、底の丸いものでも片方の端が、隅丸方形をているものがあり、おそらくそういった要素が被葬者の頭位を示すものと考えられる。さらにその長軸方向が、南北・東西・東北東～西南西・北東～西南の四つのグループにわけられるのは、単に自然地形に合わせたものとはいきれないと思われる。土墳墓の立地は、いずれも落ち込みの肩部である点が注目できる。高い部分のものが後世の削平により消滅しているのか、そういった遺地がなされているのかは今後の課題であろう。

これらの土墳墓は土墳墓群内での身分的格差、集団関係に関する一資料となろう。

また、同遺跡内では、古墳時代の集落・土墳墓・埴輪棺等や奈良時代の集落・土墳墓等が発見されているが、特に集落は古墳時代のものと奈良時代のものが重複する立地をもつものにもかかわらず時期的に断絶がみられた。今回の土墳墓の発見はその間をつなぐ資料といえ、当該時期の集落は不明にしても、遺跡として連続性があった可能性を示すものと思われる。

弥生時代 ・弥生時代中期においても何らかの人の活動があったとみて良いが、その性格はいま一つ明確ではない。しかし、同遺跡内では方形周溝墓を中心とし、土墳墓や壺棺をふくむ弥生時代中期の墓域とそれに伴うような住居も発見されているので、それらとの関連を考えることはできるであろう。

段丘上の開発 ・低位段丘上において弥生時代中期から古墳時代末にかけて湿地状の落ち込みが存在していたことは注目に値する。これが自然にできたものか、人為的な行為の結果形成されたものか、もしくは自然にできたものを利用したのかどうかは、今回の調査では判明できなかったが、段丘上の農耕地の開発と関わる問題を含むものと思われる。

・また、時期的にはおそらく、弥生時代中期ぐらいまでと思われるが、段丘上に疎林の広がりがあったことが考えられる。その消滅は段丘上の開発によるものだろうか。環境の変化に関する一つの資料とはなるう。

旧石器の可能性 ・今回、4面以下は人為的な遺構や遺物は皆無であったが、5層など、必ずしも段丘礫層が風化した、地山といえる層ではない、二次堆積した層の存在がわかったことは重要な意味をもつ。宮の前遺跡の立地する低位段丘の段丘崖下に広がる蜷池西遺跡では、段丘上より流れてきた可能性の強い旧石器が出土している。つまり、この5層のような層の存在は、旧石器時代の包含層や遺構面が、段丘上で浸食や削平を逃れて遺存している可能性があることを示唆するものとも思われる。

## IV 蛭池東遺跡（1・2）

### 1. 調査の方法と調査の経緯

豊中市北西部の伊丹低位段丘面上に立地する蛭池東遺跡は、東西169m、南北270mの範囲と考えられている。1988年の蛭池東遺跡調査会の調査では7世紀中頃～8世紀の掘立柱建物や、また、モノレール建設予定地内及び代替地の試掘調査では、古墳時代～中世と推定される柱穴や土坑が検出されているが、遺構の広がりや性格についてはほとんど知られていなかった。

調査対象地域は阪急宝塚線蛭池駅西側線路沿いの住宅街にある。未買収の用地が存在し、周辺住民の生活道路の確保、モノレール支柱工事工程の制約等によって、平成4～5年度は約3500㎡を調査したが、なお現在も小面積ながら未調査区が存在している。

トレンチの設定にあたっては、未買収用地も将来調査対象となることを考慮して、『大阪文化財センター和歌山線遺跡調査マニュアル』に準拠して、公共下水道や農業用水路など既存の公共施設で分断される区画を1単位とし、止むなく複数に分割調査した場合には、それぞれの地区を9A1・9A2トレンチのように呼称した。また、隣接する代替え地の調査は用地と調査進行上2調査区に分割して実施したため、それぞれにトレンチ名を付した。トレンチ名は、調査順位とは関係なく北から順に付けた。

地区割りは、第VI系国土座標軸にそって設定し、平板測量・航空測量・遺物の取り上げを行った。方位は全て座標北を示し、磁北は6°40′西に、真北は0°18′48′東に振っている。また、標高はT.P.（東京湾平均海面）を使用し、トラ



図37 トレンチの位置



図38 遺跡の範囲

ク・クレーンによる測量では、豊中市No.467の一等水準点を起点とし、同市三級基準点を  
使用した。

**遺構番号** 遺構番号は、各トレンチ毎に付与した。ただし、掘立柱建物については、その後の検討  
によって認識されたものが多く、新たに遺構番号を付けた。ただし、これを構成するピッ  
ト番号は調査時点のものを用い、文章中の記述では掘形の名称を使用した。

検討の結果これまでに公表した遺構番号とは異なる遺構もあり、本報告書の番号をもっ  
て、正式番号とする(表1)。

**調査の順序** 平成4年度は、最も急がれる代替地の4A・5Aトレンチから着手した。また、遺跡の範  
囲外にあたる9Aトレンチについては、まず、巾2.2m、長さ35mの試掘調査を実施し、そ  
の結果、堅穴住居らしきプランが確認されたため、平成4年9月から巾13m、長さ35mの  
範囲を調査対象地として追加調査を実施した。

平成5年度は、その後用地が取得できた2A・8A2・8A3トレンチの調査を8月から平  
成6年1月までの間実施した。

**大形掘立柱  
建物** 3A・6Aトレンチからは古墳時代の大形掘立柱建物が発出された。最初に発見された掘  
立柱建物1については、全工程上、即時一般公開が困難であり、その後調査を実施するト  
レンチにおいて同様の建物が検出されることが明らかになった為、真土でトレンチ全体を  
現地表面まで埋戻した。その後、3Aトレンチで同様の掘立柱建物が検出されたことか  
ら、7A・8Aトレンチでの調査成果とあわせて、平成4年11月7日に現地説明会を実施し、

**現地説明会** 地元小・中学校を始め約1000人の参加を得ることが出来た。

また、この掘立柱建物の一部がモノレール支柱にかかることから、最初の掘立柱建物発  
見以後、大阪府教育委員会、大阪モノレール建設事務所とその取扱について協議を開始し  
た。しかし、既に駅舎部分周辺には支柱建設が完了している箇所もあり、支柱場所の変更  
が不可能な事から、工事用作業ヤードを極力縮小して遺構への影響を極力さける方法しか  
無かった。

新遺構名	トレンチ	旧遺構名	新遺構名	トレンチ	旧遺構名	新遺構名	トレンチ	旧遺構名
掘立柱建物1	6A	掘立柱建物1	住居19	3A	住居1	掘立柱建物12	8A	P17.16.30.19.31.45.15.44.3.47
掘立柱建物2	3A	掘立柱建物2	住居20	9A1	住居1	掘立柱建物13	8A	P18.26.33.34.13.12.11
掘立柱建物3	3A2	掘立柱建物3	住居21	9A2	住居9・7	掘立柱建物14	8A	P1.3.4.9.8.7.6.48
掘立柱建物3	3A	掘立柱建物3	住居22	9A1	住居4	掘立柱建物15	8A	P31
住居1	3A	住居1	住居23	9A2	住居5	掘立柱建物15	8A3	P37.13.42
住居2	3A	住居2	住居24	9A2	住居1	掘立柱建物16	9A1	P14.13.12.46.15.19.47
住居3	3A	住居3	住居25	9A2	住居2	掘立柱建物17	9A1	P20.27.37.31.38.34.40
住居4	3A	住居4	住居26	9A1	住居6	掘立柱建物18	9A2	P34.33
住居5	3A	住居5	住居26	8A2	住居1	掘立柱建物19	8A3	P35.40.17.35.29.43.44
住居6	3A	住居6	住居27	8A2	住居2	掘立柱建物20	9A1	P4.2.36.54.55
住居7	6A	住居7	住居28	8A3	住居4	掘立柱建物20	9A2	P31.44.9.8.20.7.5.6
住居8	6A	住居8	住居29	8A3	住居3	掘立柱建物21	9A2	P4.3.2.1
住居9	8A3	住居1	住居30	8A3	住居2	掘立柱建物22	8A2	P23.21.12
住居9	8A	住居2	住居31	8A3	住居5	掘立柱建物23	9A1	P8.7.6
住居10	8A2	住居3	住居32	8A3	住居	掘立柱建物24	9A1	P21
住居11	8A	住居1	掘立柱建物4	3A	掘立柱建物2	掘立柱建物25	8A3	P11.9.7.4.6
住居12	7A	住居1	掘立柱建物5	3A	P36.55.52.48	土坑1	8A3	土坑1
住居13	7A	住居2	掘立柱建物6	4A	P26.15.16.17.28.29.61	土坑2	8A	土坑1
住居13	7A	住居2	掘立柱建物7	4A	P9.8.7.6.5.66.10.11.1	土坑3	9A1	土坑1
住居14・15	7A	住居4	掘立柱建物8	5A	掘立柱建物4	溝1	9A1	溝1
住居16	7A	住居3	掘立柱建物9	4A	P30.35.38.31.34.38.37	溝1	9A2	溝1
住居17	3A	住居2	掘立柱建物10	5A	P18	溝2	3A	溝1
住居18	3A	住居3	掘立柱建物11	4A	P3.2.1.22.23			

表1 新旧遺構名対照

## 2. 調査の成果

今回の調査は、遺跡の南西部にあたる約2分の1の面積が対象となり、調査の結果、古墳時代から奈良時代の掘立柱建物25棟、堅穴住居32棟をはじめ多くの遺構・遺物が検出されたことによって遺跡の内容・変遷・各時期毎の遺跡の広がりについても推察が可能となった。

### (1) 基本層序

当遺跡が立地する伊丹低位段丘上には大小幾筋もの開折谷が複雑に入り組んでおり、現地表面の起伏から、埋没した谷の位置を推定することもある程度可能である。近世「青木家文書」には谷を堰き止めて溜池をつくった記録がみられる。調査区西側に隣接する中学校も溜池を埋め立てて建てられたもので、今回調査区の北端で検出された西南西方向に開く開折谷もこれに続く小枝谷である。

検出された谷の最深部は標高23.7mで、これより南側は標高25.0～25.2mの等高線が巡る3Aトレンチ南端・6A・7Aトレンチを最高所とし、9Aトレンチ南端では24.7mと、徐々に南へ下がっている。谷部とはおよそ1.7～2.2mの比高差がある。

こうした地形環境のため、ここでは、少ない出土遺物を手掛かりとして、以下の様に基本層序を認定した。

- 1層—盛土・旧表土を一括して扱う。機械掘削の対象となった層である。平均層厚40～50cmである。 盛土
- 2層—旧耕土層を一括する。調査区全域に堆積が認められる。地点によって層相・層厚が異なり、細分された各層相互の層位関係が正確に把握されているとは言えない。谷部では、10～40cmの層厚がある。さらに、中礫・粗砂を主体とする層や、マンガン斑・管状の鉄分が沈着する粗砂・細砂を含む10YR4/4褐色シルトなど2ないし3層に分層される。谷部ではこの層の堆積によって、南側との比高差も少なくなってくる。遺物の出土は少なく、わずかに染付や瓦器の細片などが出土する。一方、南端の9Aトレンチにおいても層厚5cm～30cmの比較的厚い耕土層が堆積している。少なくとも10YR4/2灰黄褐色シルトと10YR6/2灰黄褐色シルトの2層に分層される。遺物は比較的多く、土師器、須恵器が大半を占めているが、この他に布目瓦・瓦質釜の脚部・陶磁器などの細片が出土する。 旧耕土層
- 3層—谷部に堆積しているマンガン斑が顕著で、粗砂・小礫を多く含む10YR5/6黄褐色シルトを一括して扱う。層厚は東側で薄く、20～50cmを測る。マンガン斑や礫・粗砂の混入度によって2層に細分されるが、地点によっては層相が類似し分層が困難な地点もあった。この層の堆積は3Aトレンチ北半部まで確認できた。遺物の出土は少なく、青磁細片、平安時代土師器小皿片が最も新しい時期のものである。 谷部堆積層
- 4層—地山面で検出された遺構の埋土にみられる、マンガン斑を含む10YR3/1黒褐色シルトや10YR7/6明黄褐色シルト、10YR6/2灰黄褐色シルトをあてる。これらの層は、本来包含層としてプライマリーに堆積していたものであるが、後世の耕作等によって失われたと思われる。8Aトレンチを中心とした狭い範囲には局所的に均質な10Y 遺構埋土



R4/4褐色シルトの堆積が見られたが、これに伴う遺物は確認されなかった。層厚10cmである。本層の出土物には、弥生時代中期壱から布目瓦1点を含む奈良時代のものがある。

5層—谷部最下層に堆積する10YR2/1黒色粘土層で、未分解の植物質の遺体も少し認めら  
谷部最下層  
黒色粘土

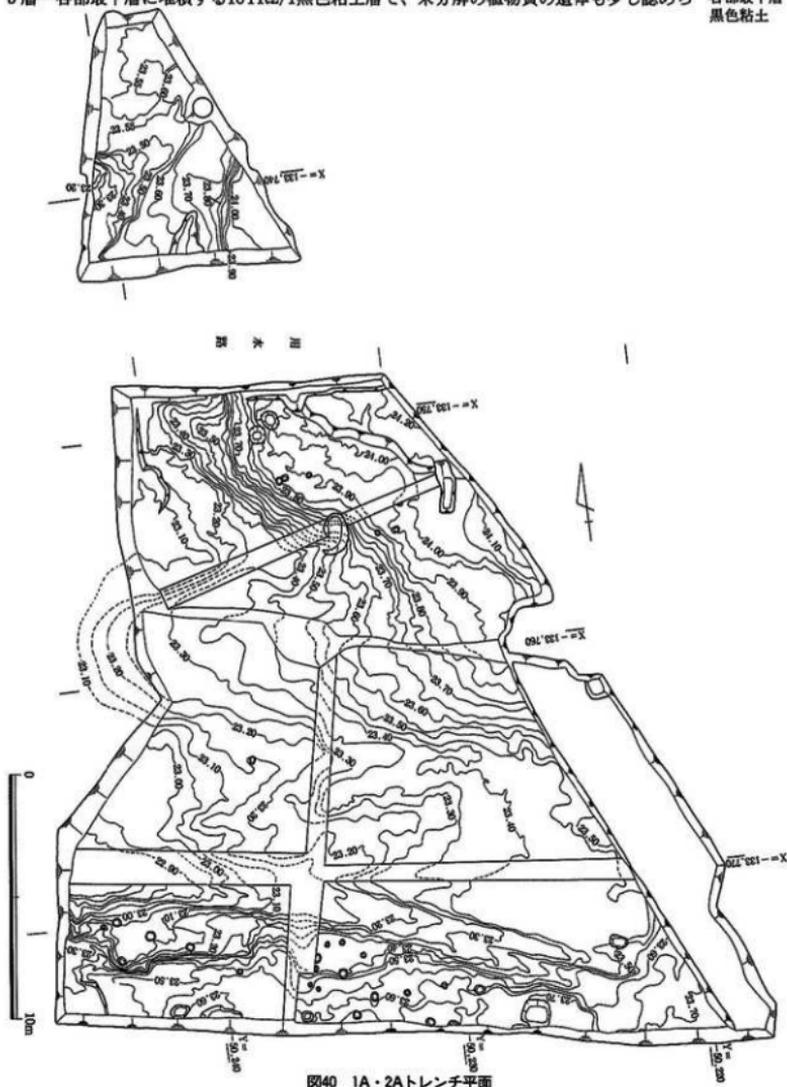


図40 1A・2Aトレンチ平面

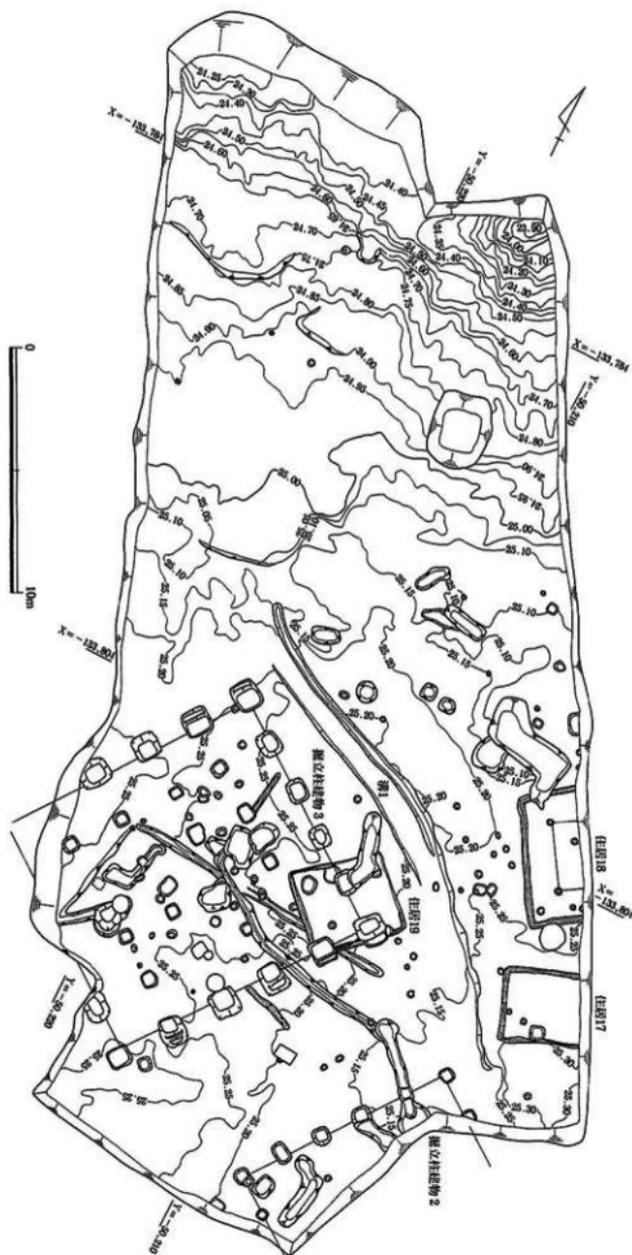


図41 3Aトレンチ平面

れた。堆積の範囲は谷の中心から3Aトレンチ北端部の比較的狭い範囲で、層厚10~40cmである。遺物の量は比較的多い。古いものでは弥生時代Ⅳ様式の壺口縁部(1)、新しいものでは奈良時代のもと考えられる土師器甕(12・13)があり、大半を占める遺物は、古墳時代中期~後期の土師器・須恵器類である。出土した須恵器のなかには融着したものや焼け歪みのあるものも数点みられた。また(14・15)の磁器は、層厚が薄い2Aトレンチ北東部からの出土のため、上層からの混入の可能性も考えられる。これより本層の堆積期間は弥生時代から奈良時代と考えられる。また、この5層上面からは、掘立柱建物の存在を示唆する直径60~70cmのピットが8個検出された。出土遺

物がなく時期は不明であるが、本層の堆積環境は湿潤な環境が考えられ、住環境に適していない土壌であることから、上層からの掘込みと考えられる。

6層一段丘特有の礫と粘土から構成され、今回地山と認識した層である。地点によっては地山礫を主体とする地点、礫と粘土が同率の地点、粘土を主体とする地点など、地山面の状態は決して一様ではなかった。また、9Aトレンチではこの面からわずかに10数cm掘り下げただけで水がわき、実測・撮影等の調査に支障をきたした。

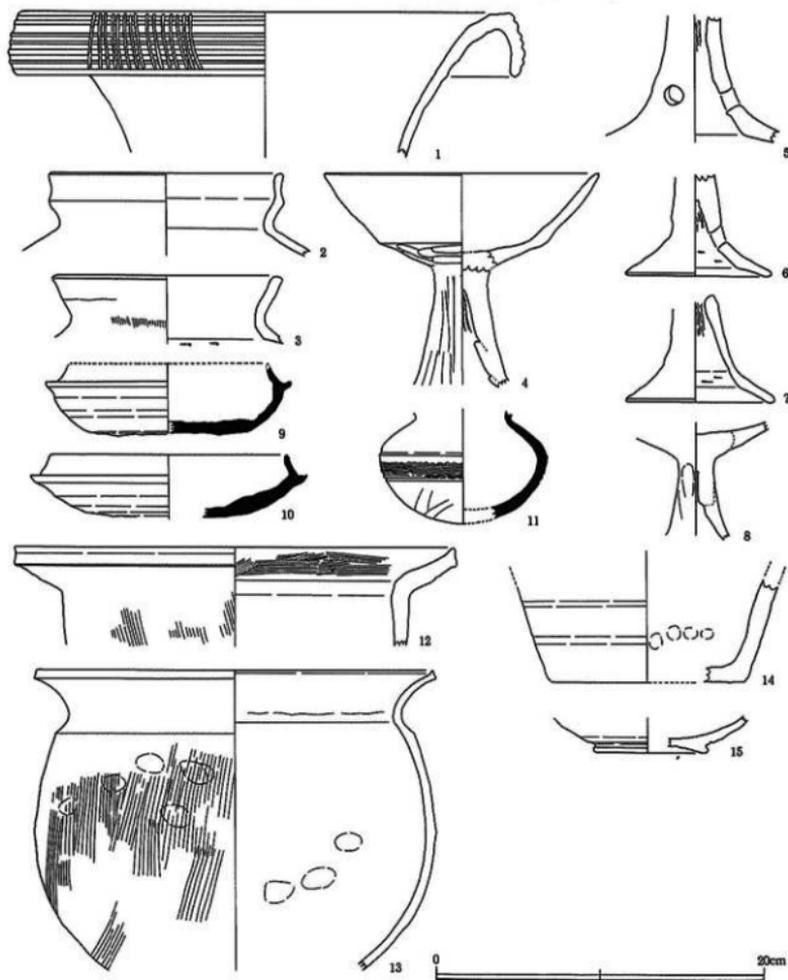


図42 谷出土遺物

## (2) 古墳時代の遺構と遺物

掘立柱建物4棟、竪穴住居32棟、土坑2基が検出された。このうち、大形の掘立柱建物1～3と竪穴住居の一部については、遺構を中心にすでに第4節まとめにあげた参考文献(3)(4)においてその概略を報告している。その後の検討によって、前回報告と若干異なる点もあるが、今回の報告を正規の報告とする。また、掘立柱建物については、大阪市法円坂遺跡や和歌山市鳴滝遺跡と同様規模の「倉庫」として報告したが、今回報告においてもこの見解に変わりはない。土坑は古墳時代後期および古墳時代後期末～飛鳥時代のものであり、第3節古墳時代以降の遺構と遺物で後述する。

なお、掘立柱建物の柱穴に関しては、文中で「掘形」、図中で「P」と表現する。

### 1 掘立柱建物

**掘立柱建物 1** 東西4間、南北3間を検出した。住居8と重複しており、住居電の袖の下から東柱の掘形が検出され、住居より古い建物であることが確認された。桁行5間・梁間5間の総柱形式の建物で、屋内に2本の棟持柱を持つ構造である。

**側柱** 側柱掘形は、妻側と棟持柱が比較的方形に近いのに対して、平側が桁方向に長い長方形をていする傾向がうかがえる。92×100cmもしくは70×110cmの規模である。掘形底面は、側柱と棟持柱が24.28～24.56m、内部東柱が24.80～25.10mでそれぞれ20～30cmのばらつきがあるが、側柱と棟持柱の方が一定の深さに揃っているものが多い。側柱の柱痕跡は明瞭で、直径30cmを測る。抜き取り穴などはみとめられなかったが、柱痕跡の上部がふくら

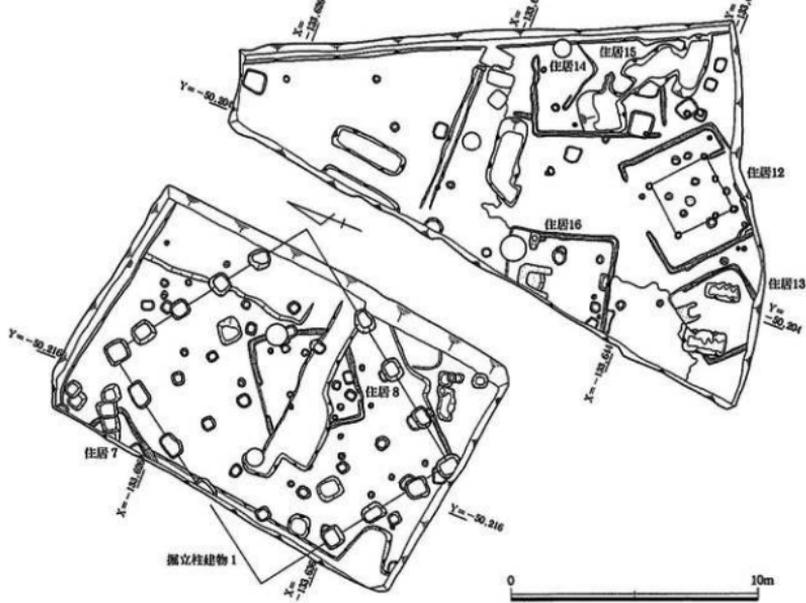


図43 6A・7Aトレンチ平面

むものがあることから、抜き取られた可能性も考えられる。また、東側側柱の掘形19・24には、建物内部側に一辺40cm、深さ10cm前後の方形のピットが重複しており、「大引き受け」を支える掘形の可能性が指摘されたが、他の側柱および掘立柱建物3では検出されていないことから、今回の指摘に対しては保留する。側柱の掘形埋土は、10YR2/4灰黄褐色シルトに10YR2/3黒褐色シルトがブロック状に混入する1層、10YR2/4灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入する2層、10YR4/6褐色シルトの3層に大別され、いずれにも、地山の10YR6/6明黄褐色粘土質シルトのブロックと小礫・粗砂が多く混入していた。

抜き取られた可能性

東柱の掘形には、法門板遺跡や鳴滝遺跡のような「内部通し柱」に該当する柱痕跡はみとめられなかったが、四隅の掘形が他の掘形に比べて若干深く掘られている傾向がうかがえた。柱痕跡は直径20～25cm前後である。

棟持柱は、側柱より1間内側に入った柱筋より柱1本分、約30cm、妻側に出た位置に建

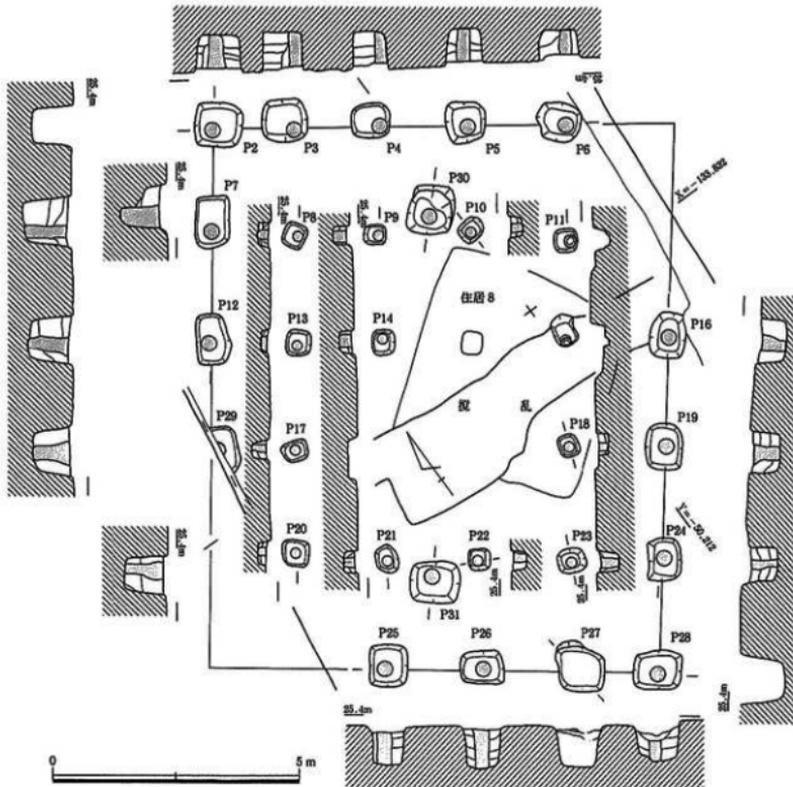


図44 掘立柱建物1平面・断面

てられている。掘形30には、「階段掘り」が北側に1段なされている。柱痕跡はあまり明瞭ではない。堆積状況および掘形底面が北西方向にふくらんでいることから、側柱と同様抜き取られた可能性

柱間 各柱間は図46に示すとおり桁方向の柱間が平均221cm、梁方向の柱間が平均185cmと桁方向が長く、柱の通りも桁方向を通る傾向にある。棟持柱間は740cmを測る。側柱の柱のとおりを復元すると、南側妻方向の柱筋と棟持柱のとおり、それと西側側柱のとおりが直角にとおるのに対して、東側柱は約1.5°東に、西側柱と北側妻柱は1.6°北側に開いている。この結果、建物全体の平面形態を復元した場合、北東方向にずれた形態となる。復元された規模は、桁行長1100cm～1120cm、梁間長915cm～940cm、床面積100.65～105.28㎡の規模になる。棟方向は棟持柱のとおりでN-42°40'-Eにある。

出土遺物 出土遺物は全て土師器のみである。図化できなかった遺物には、掘形13出土の朱塗りがされた小形丸底壺細片、掘形35出土の口縁端部を内面に肥厚させた甕の細片がある。掘形27・28からは、建物廃絶後、一括廃棄された状態で土師器甕・壺・高杯が出土した。掘形27では土師器甕(1・5)・高杯(10)が出土し、(1)の甕とともに18×8cm大の石が打ち捨てられていた。(1)は、器壁の磨滅が著しいために外面の調整は観察できなかった。肩部内面には指頭瓦痕が顕著に観察される。口縁端部は内面に肥厚させ、端部外面は丸くおさめている。口径15cmを測る。(5)の口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は内面に肥厚する。口径14.2cmを測る。(10)の高杯杯一脚部接合部には、脚部を接合する際の円板が残る。杯部屈曲部には貼り付けによる稜がめぐる。掘形28では土師器甕(2・3)・直口壺(4)・短頸直口壺(6)・高杯(9)が出土した。(2)の甕口縁部は外上方にまっすぐ立ち上がり、端部は上端と外面を軽くナデることで平坦面をなす。体部外面には1cmあたり6本

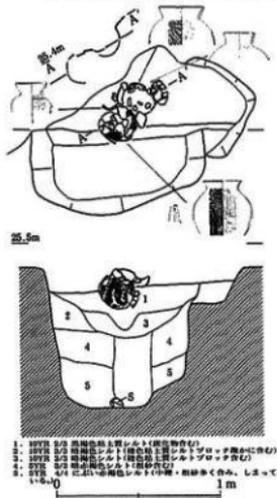


図45 掘立柱建物Ⅰ P28遺物出土状況平面・断面

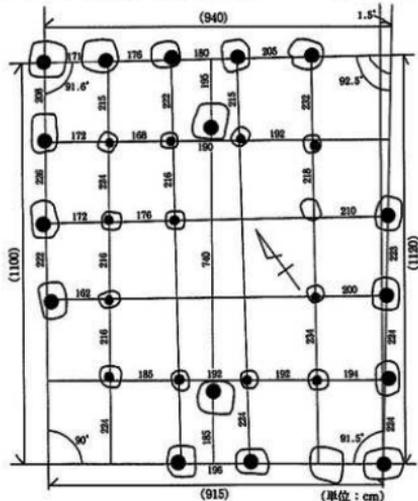


図46 掘立柱建物Ⅰの柱配置

の粗いハケメが肩部以下は縦方向に、肩部から頸部にかけてはやや斜め方向に施される。肩部内面はヘラケズリによって指頭圧痕が消されている。口径16.2cmを測る。(3)は最大径が体部中央にあり、肩部がなだらかに下がって卵型をていし、口縁部はわずかに外反して開く。口縁端部は外方にわずかにつまみだされる。外面のハケメは(2)と同様に施されるが、原体のあたりは強く、全体に粗く短いピッチである。ハケメは1cmあたり8本と、(2)より細かい。体部上半には縦～斜め方向の粗いナデがヘラケズリ後施される。口径14cmを測る。(4)の口縁端部は軽くつまみナデられる。外面は磨滅が著しく調整不明である。内面には肩部上半に指頭圧痕と巾1.5cmの粘土紐の縦目が観察される。口径11.4cmを測る。(6)は器壁が4～6mmと薄い。口縁部はまっすぐ立ち上がり、端部は丸くおさめる。器壁の磨滅が著しく、肩部内面の指頭圧痕のみがみられる。掘形3からは高杯(8)が出土した。この高杯は柱痕跡から出土しており、建物廃絶後混入したことを示す。

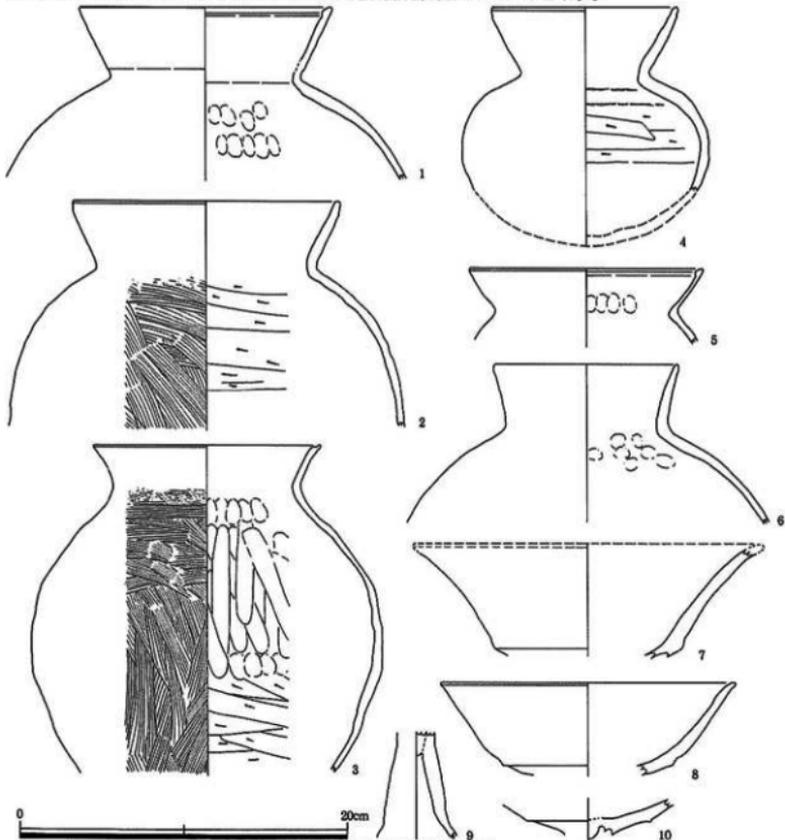


図47 掘立柱建物1出土遺物

掘立柱建物  
2

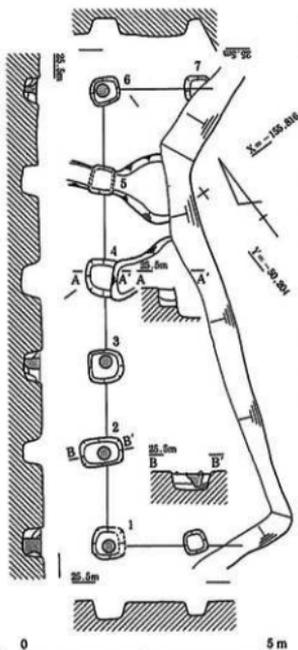


図48 掘立柱建物2 平面・断面

柱抜き取り  
後に据え置  
いた状態  
出土遺物

このうち図示できたのは掘形3出土の高杯(1)のみである。外面は器壁の磨滅が著しく、部分的に口縁端部下2cmから底部までは内面底部のハケメと同じ原体によるタテ方向のハケメが観察される。内面は、底部は不定方向に、口縁端部下2cmまでは斜方向に、口縁端部は横方向にハケメが施され、さらに底部と口縁部との境にはその後、強いナデが施されている。口径16.8cmに対して深さ4.2cmと比較的浅い杯部である。杯一脚部接合の方法は、

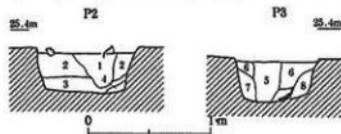


図49 掘立柱建物2 P2・P3断面 P3出土遺物

残された断面から、脚部挿入方法によると考えられる。

掘形2出土高杯は、残存状態が悪く、実測可能な状態に復原することができなかったが、器形・調整等は掘形3出土の高杯に類似することから、これと同形式のものと考えられる。

掘立柱建物2 掘立柱建物3の東側約6.2m、掘立柱建物1の北側約6.9mの地点にある。南北5間(9.3m)、東西1間(2.0m以上)を検出した。桁行長は、建物3のほぼ4間分に相当する。

西側掘形は、一辺70cmの方形で、建物1・3の東柱より若干大きい。確認された柱痕跡は直径20~25cm前後である。柱間は、掘形6-3-2-1が、553-185-185cmを測り、平均185cmで一定している。

内部東柱が想定される位置についても精査を行ったが、これを検出する事はできなかった。ただし、建物3の東柱掘形の中にもその痕跡を留める程度のももあることから、建物2についても総柱形式の倉庫である可能性は否定できない。

桁行長と梁間長の比率が建物1・3と同様で、5間×5間の総柱形式の建物とすると、84.63㎡の規模と推定される。

棟方向は、西側側柱のとおりで、N-43°40'-Eを示し、他の建物2棟とほぼ同方向である。

出土遺物は土師器のみである。掘形2からは柱抜き取り後に廃棄された状態で、また掘形3からは柱痕跡の底部付近から出土し、柱抜き取り後に据え置いた状態を示している。

1. 10YR 4/1 褐色シズト (10YR 6/6 明黄褐色粘土質シズトの小ブロック・小塊破片)
2. 7.5YR 6/8 緑色粘土質シズト (10YR 3/1 黒褐色シズトのブロック破片)
3. 7.5YR 6/8 緑色粘土質シズト・10YR 3/1 黒褐色シズト・10YR 3/1 褐色シズトが受けてブロック状になって破片
4. 7.5YR 6/8 緑色粘土質シズト
5. 10YR 4/1 褐色シズト (10YR 6/6 明黄褐色粘土質シズトのブロック破片)
6. 10YR 4/1 褐色シズトと10YR 6/6 明黄褐色粘土質シズトブロック状になって破片
7. 3と同じ
8. 10YR 4/1 褐色シズト

掘立柱建物3 梁間5間、桁行5間の建物、ほぼ1棟分を検出した。住居19・6と重複し掘立柱建物3  
ており、住居より古い。総柱形式の建物で、屋内に2本の棟持柱を持つ構造である。

側柱の掘形は一边1.15~1.25caの方形であり、東西桁側の掘形が妻側より大きい傾向が側柱  
ある。また、桁側の掘形のなかには1~2段の「階段掘り」がなされているものがあり、  
段はいずれも外側に残されている。この掘形底面の平面形は80~100×60~70caで、建物  
1同様、桁方向に長い長方形である。柱痕跡は明瞭で、直径30ca前後を測り、なかには炭  
化物が多く混入しているものもある。その断面形はゆがんでいるものや上部がふくらむも

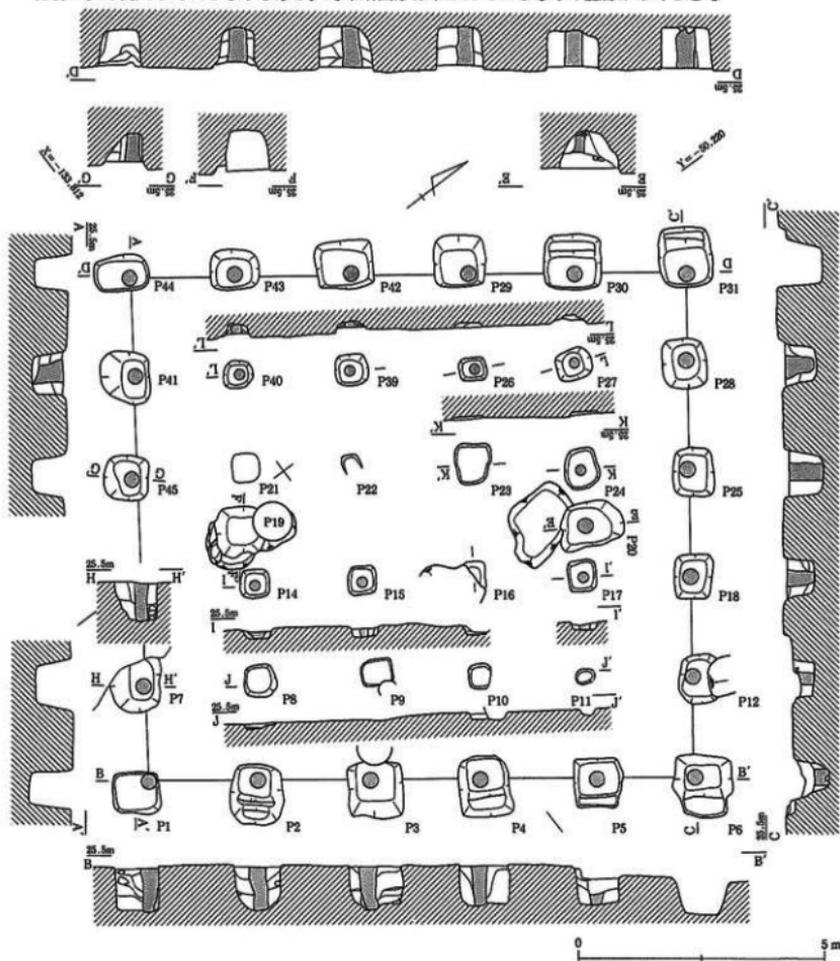


図50 掘立柱建物3平面・断面

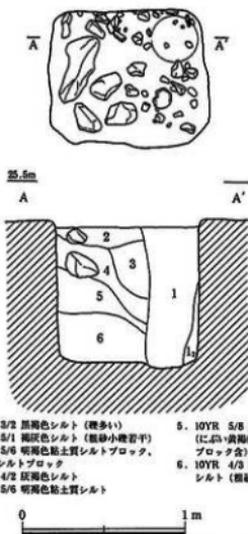
のがあり、抜き取られた可能性がある。掘形底面では、柱痕跡が2～3ca、最大で9ca沈下しているものがある。掘形は、10YR2/3黒褐色粘土質シルトで一気に埋められたものと、10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/2灰黄褐色シルトがブロック状に混入する層、10YR5/8黄褐色粘土質シルトに10YR5/4にぶい灰黄褐色粘土質シルトがブロック状に混入する層、10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトの3層に大別されるものがあるが、いずれも地山の10YR4/6褐色シルトのブロック・粗砂・礫を多く含む。特に掘形1では1層の柱痕跡の回りが10～25caの巨礫で固められていた(図51)。

**東 柱** 東柱の残りはあまり良くなく、掘形底面の痕跡を留めるだけのものもある。いずれも一辺40～50caの方形で、柱痕跡は直径20ca前後である。建物1同様、「内部通し柱」はみとめられなかった。また、四隅の掘形には、建物1のような特徴はみとめられない。

**棟 持 柱** 棟持柱は、建物1と異なり、妻側より1間内側に入った柱筋上にある。柱痕跡は掘形19・20ともに不明瞭である。掘形20では、掘形が東南方向へふくらんでいることと、堆積状況より抜き取られた可能性が考えられる。

**抜 取 可 能 性** 掘形底面の高さは、側柱と棟持柱が24.3～24.4m、東柱が25.0～25.2mである。特に側柱及び棟持柱の掘形底面は建物1とレベルが近い。

**柱 間** 各柱間は図54のとおり桁方向が長く、平均226ca、梁方向が平均207ca、棟持柱間が690caを測る。柱のとおりは建物1と同様に桁方向がよいが、南側側柱のとおりに対して西側側柱は西に約1°25′、東側側柱は東に約1°50′開く(図54)。建物の規模は桁行長1108～1130ca、梁間長1025～



1. 7.5YR 3/2 黒褐色シルト (礫多い)
1. 10YR 5/1 黒褐色シルト (礫少小礫多)
2. 7.5YR 5/6 黄褐色粘土質シルトブロック、黒褐色シルトブロック
3. 7.5YR 4/2 灰黄褐色シルト
4. 7.5YR 5/6 黄褐色粘土質シルト
5. 10YR 5/8 黄褐色シルト (L200-黄褐色粘土質シルトブロック含)
6. 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト (粗砂を多く含む)

図51 掘立柱建物3 P1礎出土状況平面・断面

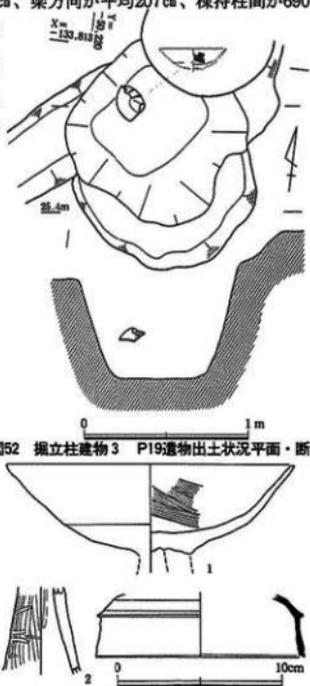


図52 掘立柱建物3 P19遺物出土状況平面・断面

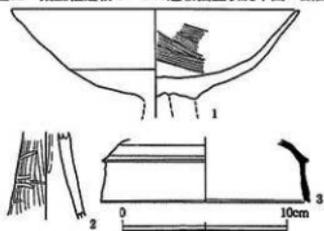


図53 掘立柱建物3出土遺物

1030cm、床面積100.

65~105.28mになる。

棟方向は棟持柱のとおりでN-42°40'Eに振っており、建物1・2とはほぼ同じ棟方向にある。

遺物は、土師器高杯(1・2)、須恵器杯蓋(3)のほか、端部を内面に肥厚させた壺口縁部や刺突痕のある甕肩部片などが出土しているが、量は少ない。また、建物1・2のように建物廃絶後に廃棄さ

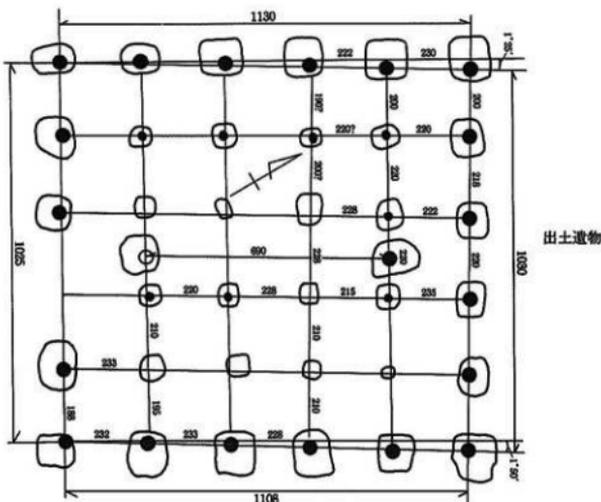


図54 掘立柱建物3の柱配置

れたような出土状況を示すものはなかった。(1)は、棟持柱掘形19の柱痕跡の横から出土した(図52)。層準との対応はできなかった。外面は磨滅が著しく調整不明だが、内面には斜方向の細かいハケメがほどこされる。胎土は2mm大の砂粒が多く含まれ粗い。(3)は、掘形41から出土している。小片のため出土層位は不明である。器壁は薄く、口縁端部や天井部端面は鋭い。建物1~3のなかで須恵器の出土が確認されたのはこの1点のみである。

掘立柱建物16 9A1トレンチ北西隅で検出された3×4間の東西棟の建物である。掘形出土遺物は土師器高杯(図56)以外は土師器片のみであり、古墳時代後期末以降の掘立柱建物群と方位が若干異なることから、古墳時代の建物と判断した。掘形は一辺50cm前後、深さ30cm、柱痕跡は直径15~20cmを測る。柱間は、桁方向の掘形14~15で120-135-145-125

cm、平均131cm、梁方向の掘形15~47で120-140cmを測る。掘形埋土は、建物1~3とは異なり、上層から10YR4/2灰黄褐色シルト、10YR3/2黒褐色粘質シルトに地山ブロックを含む、10YR3/3暗褐色粘質シルトである。高杯は、残存高6.4cmを測る、小形のものである。脚部の器壁は全体に厚く、裾端部は極端に薄い。脚柱部から裾部へはなめらかに移行す

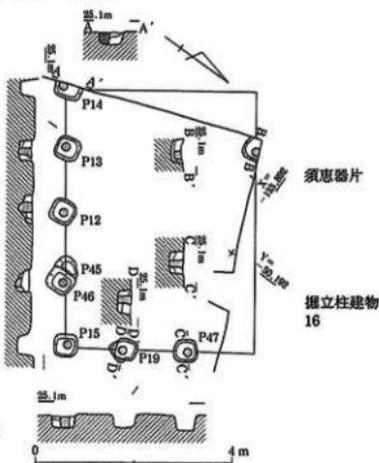


図55 掘立柱建物16平面・断面

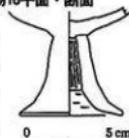


図56 掘立柱建物16出土遺物

るが、裾部は脚部に対して極端に短い。杯一脚部の接合方法は円板充填による。脚部内面上半には成形時のシボリメをそのまま残し、下半にはヘラケズリとみられる砂粒の動きが観察される。脚部外面には縦方向のナデが施されたとみられる若干の面が観察されるが、磨滅しており明確ではない。

ピットのひろがり

この他、調査区内で多くのピットが検出されている。そのうち、出土遺物から古墳時代のもと考えられるピットもいくつかあり、建物16以外にも古墳時代の掘立柱建物は存在していたものと考えられる。ピットはいずれも一辺40~50cmの方形をていするものであり、柱痕跡が確認されたものは、直径15~20cmを測る。これらのピットは、2~9Aトレンチにわたって検出され、とくに4・5・8・9Aトレンチで密であるが、大形の掘立柱建物1~3の周辺では確認されていない点は注目される。

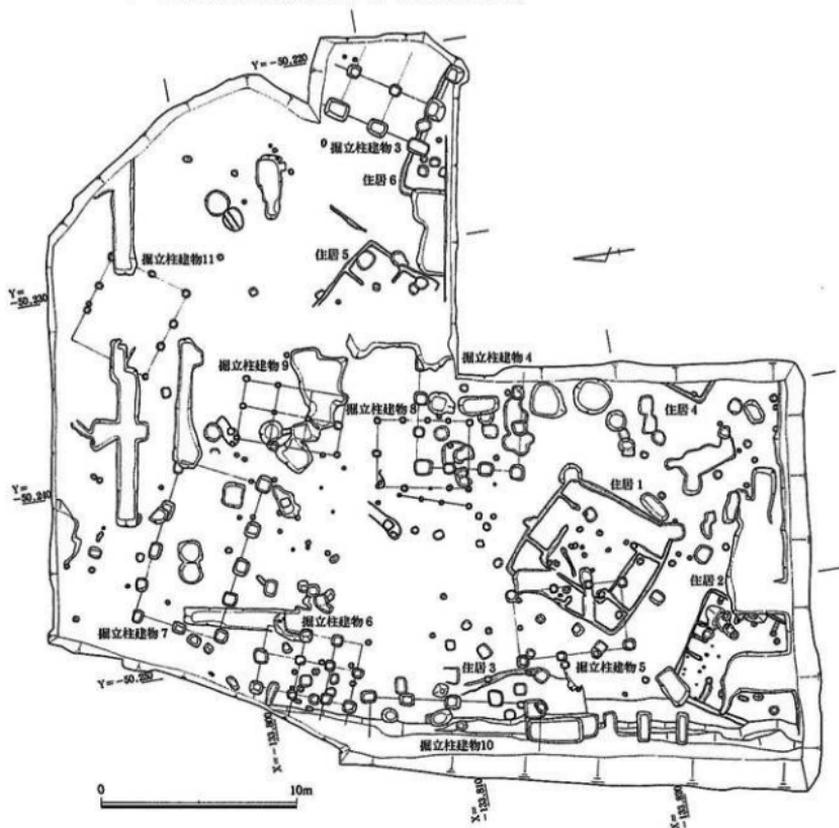
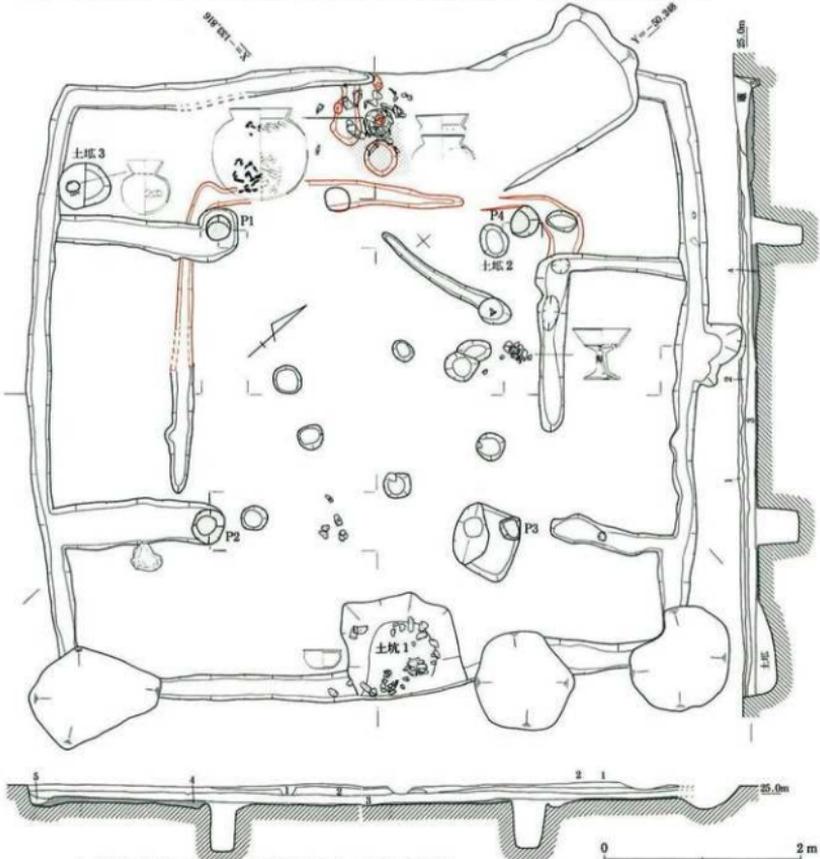


図57 4A・5Aトレンチ平面

## 2 竪穴住居

古墳時代前～後期の竪穴住居(以降、「住居」と略称)を、32棟検出した。住居が検出された範囲は3～9Aトレンチであり、南北120m、東西100mを測る。集落は北東から南西にのびる段丘の先端部に立地し、西側は段丘崖で、北側は段丘の小開折谷で、南側は段丘上をはしる溝で区切られる。住居は段丘上に立地し、中世以降の水田開発による削平のため、検出面から地山面まで5～10cm前後の埋土が遺存するものが大半である。出土遺物のなかでも、土師器は剝離のため、調整観察不可能なものが大半である。出土遺物から時期が判明した住居は、古墳時代前期が1棟、初期須恵器TK216～TK208型式併行の時期



1. 7.5YR 3/4 暗褐色シルトに7.5YR 5/6 明褐色シルトブロック凝じる(中世耕土)
2. 7.5YR 3/3 暗褐色シルト土師器片を含む(住居埋土)
3. 7.5YR 3/2 黒褐色黄砂凝じりシルトに多大の礫多く含む(住居埋土)
4. 7.5YR 5/6 明褐色シルト(地山)ブロックを含む(7.5YR 3/3 暗褐色粘性のあるシルト(灰土、柱穴埋土を除く))
5. 7.5YR 3/3 暗褐色シルトに7.5YR 5/6 明褐色シルト(地山)ブロックを含む(周溝埋土)

図58 住居1平面・断面

(以降、古墳時代中期と呼称)が18棟、古墳時代後期が6棟である。7棟の住居からは遺物が出土しなかった。

住居 1 住居 1 5Aトレンチのほぼ中央で検出した。外側にややふくらむ方形をていし、一辺6mを測る。検出面から床一面まで、住居中央で約20cmを測る。

埋土は、上層から中世耕土層である暗褐色シルト層、古墳時代住居埋土である土師器片を含む暗褐色シルト層と礫混じり黒褐色微砂混じりシルト層、床土と考えられる明褐色シルト(地山)ブロックを含むやや粘質の暗褐色シルト層であり、同層上面を床面として検

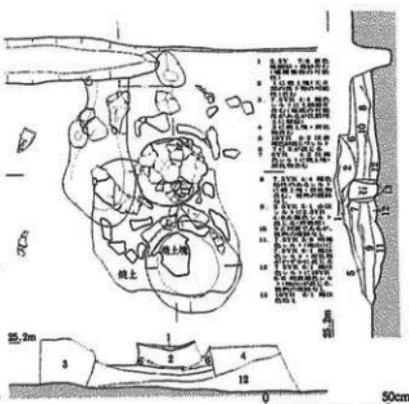


図59 住居1 電平面・断面

床土 出した。床土は、人為的に貼ったものか、住居使用時の自然堆積層かは判別できなかったが、層厚は約5cmで住居内ではほぼ均一に堆積する。このような床土の状況は全ての住居に共通する。

床面は中央が低く支柱穴より外側の周縁部にかけて高くなる。とくに土坑から電手前を結ぶ線が比較的低く、床溝のはしる住居の両側がこれより5~7cmならだかに高くなる。これは地山面においても同様であったため、竪穴掘削時に住居内使用区分がある程度決められていた可能性が考えられる。

床面では、支柱穴・周溝・床溝・竈・土坑を検出した。支柱穴はP1~4で、P1・P2は周溝からのびる床溝と連結する。P2の東脇には30×20cm、厚さ7~8cmの台石がある。台石は砂岩で、上面は摩耗のためなめらかな面をなす。支柱穴の掘形は直径20~30cm、床面からの深さは約40cmで、柱痕はみとめられない。P3は掘形上部が楕円形をていし、柱痕がみとめられないことから柱が抜き取られた痕跡と考えられる。周溝は床面から深さ5~7cmを測り、小ピットはみとめられない。周溝と床溝の新旧関係はみとめられない。床溝の断面形は浅いU字形である。電手前を横切る床溝は、床面では検出されず地山面で確認した。竈背後の周溝埋土が竈構築土と類似し、焼焼部堆積物の下に床土が残存することを考え合わせると、住居構築当初、竈は設置されていなかった可能性が考えられる。

電手前の床溝

竈

遺出土状況

竈は、住居北西辺中央に設けられ、土師器甕(5)の下半分が石製支脚の上に底部をおしつぶされながらかかった状態で検出された。この甕の前面と後面に甕をとりまくように別個体の甕の体部片が立った状態で検出された。掛口の補強材の可能性が考えられたが被熱の痕跡はみとめられない。この外周には、(5)の上半部の破片が内面を上にした状態で、他個体の甕口縁部(3・4)とともに出土した。同レベルが、竈廃棄時の面と考えられ、床面からの高さは約15cmである。袖部と考えられる土は住居埋土と類似し、袖部外側は住居埋土と判別しがたいが、内側は焼焼物が堆積し、何らかの構築物があったことは確かである。甕の前面には長さ10~15cmの焼土塊がひろがり、その下層に炭化物が堆積することか

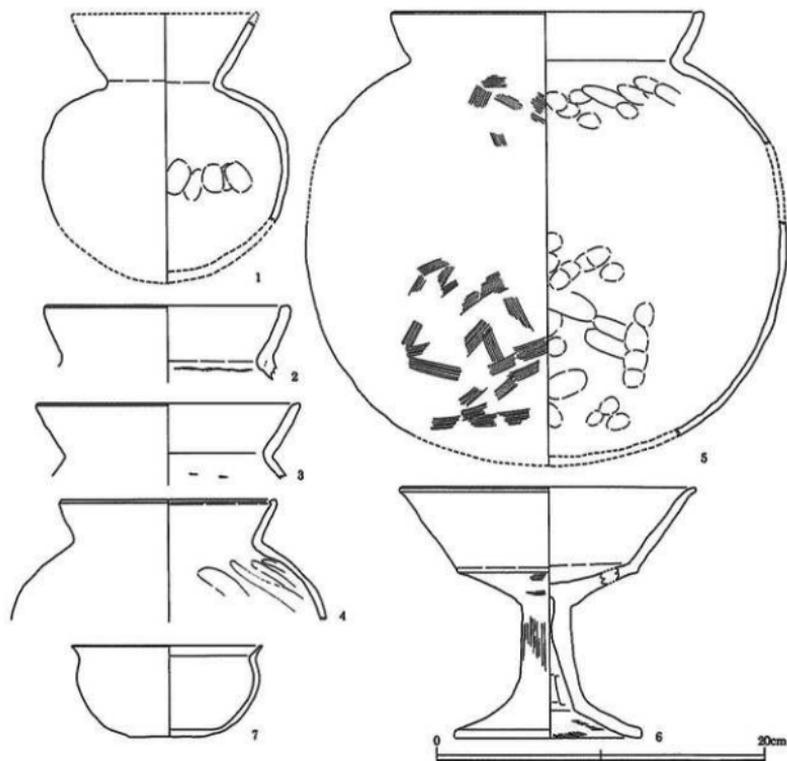


図60 住居1出土遺物

ら、焼土塊は天井部の崩落と考えられる。然焼部の堆積物は焼土粒を含む炭化物であり、支脚前面には炭化物が多くみられるが後方にいくにつれて炭化物は少ない。明らかな煙出口はみとめられなかったが、地山面で検出した壁際の小ピットがこれに関連する可能性をもつ。石製支脚は地山をわずかに掘りくぼめて設置され、粘土が貼られているため被熱の痕跡はない。竈の構造は明確ではないが、竈廃棄時の袖部が低いこと、支脚にかかった甕内部に竈構造物と考えられる焼土塊が含まれること、甕の外側に別個体の甕片を巡らせることから、竈廃棄時に意識的に破壊するなどの行為があった可能性が考えられる。竈の手前右側、P4に接する土坑2は、直径20~30cm、深さ7cmを測り、焼土・炭化物が充満する。竈内より掻きだした燃焼物を置いたものであろうか。近接する浅いくぼみからは、ほぼ完形の高杯(6)が出土した。

竈廃棄時の  
行為

土坑1は竈の対辺中央に位置し、周溝との新旧関係はみとめられない。埋土上層から甕・高杯・鉢(7)が礫とともに出土した。土坑3では埋土上面ではほぼ完形の直口壺(1)が出土した。

遺物は、土師器直口壺(1)・甕(2~5)・高杯(6)・鉢(7)が出土した。甕は口縁端部が、面をなすもの(2・5)・丸くおさめるもの(3)・内側に肥厚するもの(4)がある。(4・5)は、肩部内面にナデあげたような指頭圧痕がある。甕は、頸部内面に明確な稜をもたず、やや肥厚しながら丸く仕上げる。高杯は、杯部が深く、端部がやや外反する。鉢は、器壁が薄く、頸部内面に稜をもつ。竈から須恵器片が一片出土した。

本住居は、古墳時代中期と考えられる。

住居 2 住居 2 5Aトレンチの南西隅部で検出した。一辺6mを測る方形住居である。検出面～床面までは20cmを測る。

埋土は、基本的に小礫を含む暗褐色シルト(7・45・60・61)のみで、床土は住居1同様のものである。住居北辺では、两层の間に炭化物を含む暗褐色粘質シルト(12・51・65)が溝埋土上にみとめられ、住居廃棄後の流入土と考えられる。

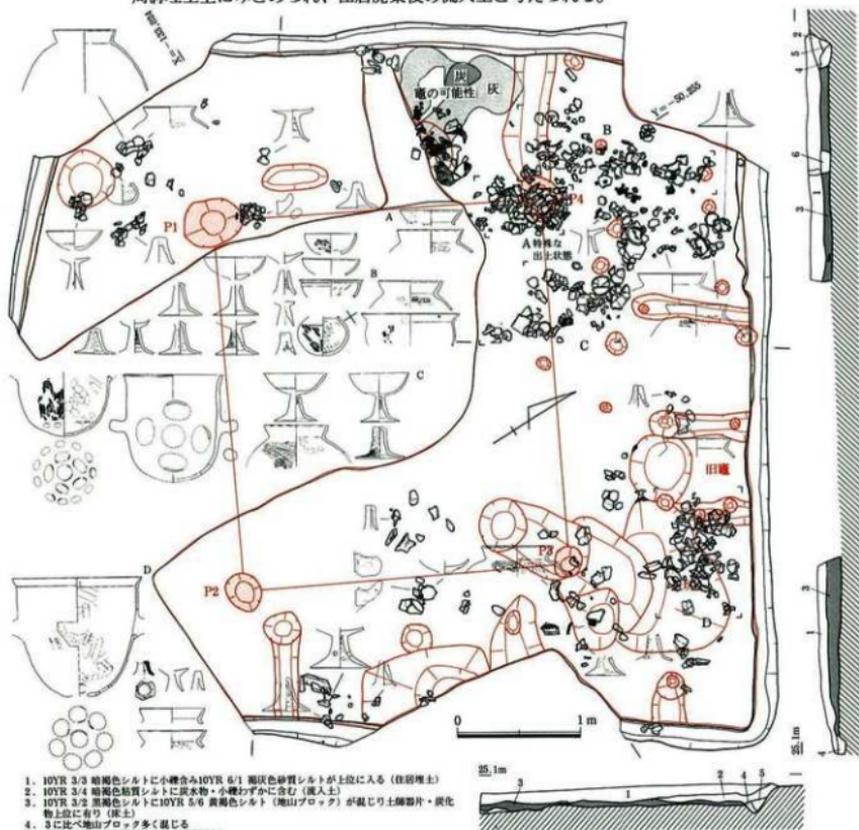


図61 住居2平面・断面

床面では、住居西辺中央で灰・炭のひろがりを検出し、ほぼ床面全体で土器を多数検出した。

灰・炭はほぼ1×1mの範囲にひろがり、その下層では焼土ブロック・土器片を含む層およびしっかりとした焼土がみられる。これらを除去後浅い土坑状となったことから、この部分は竈の焚口から燃焼部と考えられた。支脚や袖部などの構架部は確認されないものの竈であった可能性があり、この場合、上層の灰・炭は竈廃棄後の散布の可能性が考えられる。

竈の可能性

土器はとくに住居北部、東部に集中し、南半は希薄である。床面上には、直径1~2cmの炭化物が散在し、10~20cmの炭化物がわずかにみられる。土器片は炭化物上で検出される。土器は完形で出土したものはなく、破片が多いが、住居北部では甕の上半部、甕の底部、高杯が復元できる状態でまとまって出土した。とくに注意されるのは、北部ほぼ中央で出土した甕(1)の出土状態である。ほぼ2個体分の甕の破片が、内面を上にした状態で、口縁部片を一番下かつ外側におきバラの花びら状に破片が重なった状態で出土した。中心にはこぶし大の石がおかれ、この石で割ったというよりも人為的に破片を並べ石をおいたと考えられる出土状態である。

特殊な出土状態

土器を除去後、床面を少し下げたレベルでP1~P4の主柱穴を確認した。柱痕はいずれもみとめられない。P1からは高杯(20)が正立した状態で出土し、P2の底からは炭化物が出土した。同面ではほかに床溝・土坑・小ピットを検出した。小ピットは住居北部に集中し、何らかの施設が存在した可能性が考えられる。地山面では、旧竈・土坑1を検出した。旧竈とした遺構は、住居北東辺の周溝からのびる2本の床溝状の遺構とこれに挟まれた焼土の入ったピットからなるもので、床溝状の遺構が袖部下位、ピットが燃焼部と考えられる。旧竈南側に位置する土坑1は上層に茶黒色シルト、下層に炭化したような黒色土が堆積し、深さ20cmを測る。旧竈から抜き出した炭・灰を入れたものであろうか。

旧竈

住居床面の炭化物は、竈周辺に集中するものではなく、住居全体でみられるため、竈に伴うものではないと考えられる。しかし、焼失家屋とするほど炭化物は多くなく、出土炭化物を住居の焼失に伴うものとすれば、焼失後いったん炭化材の片づけがあったと考えられる。土器は床面の炭化物上で出土し、土器廃棄時の人為的行為がみとめられ、周溝上に遺物がのることを考えると、出土遺物は住居焼失直後に廃棄されたものと考えられる。また、遺物の集中が竈右側、および地山面の旧竈右側にあたり、特殊な出土状態を示す甕はP4上に位置することから、廃棄する場所についても竈や主柱穴の存在が意識された可能性がある。

廃棄する場所

以上より、本住居の廃棄は、主柱の抜き取り→住居の焼失→炭化材の片づけ→抜き取り穴への高杯の埋納→土器の廃棄と考えられる。

遺物は、土師器短頸直口壺(1)・小形丸底壺(2・58)・甕(3~14)・高杯(15~53)・鉢(54・55?)・小形鉢(56・57)・甕(59~64)・須恵器甕(65)・甕(67)・高杯(66)、石織が出土した。土師器甕・高杯が多い。土師器小形丸底壺は、胴部最大径が約12cm、約8cmの2種類がある。ともに器壁は厚く、胎土は砂粒を多く含む。土師器甕は、口縁端部が、面をなし、やや内側に肥厚する(3・6・7・8・10・11)・丸くおさめる(4・12)・外側に面

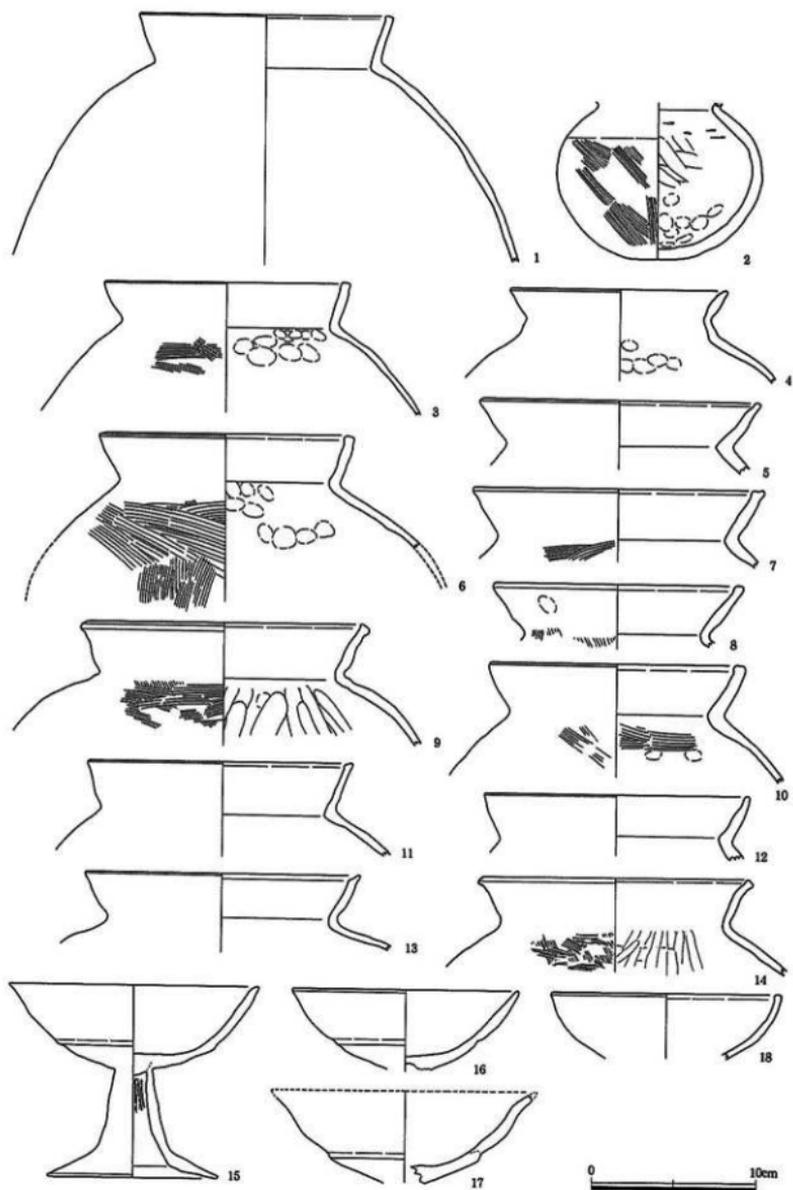


图62 住居 2 出土遺物(1)

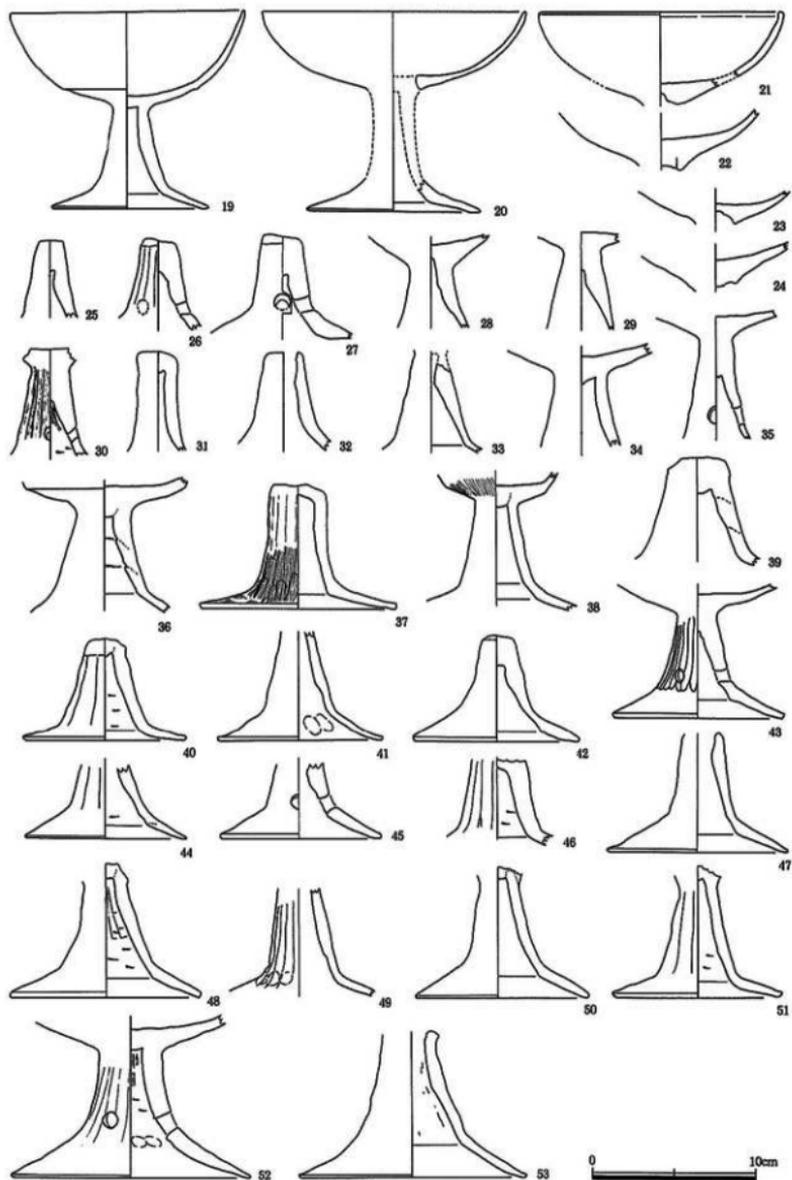


图63 住居2出土遺物(2)

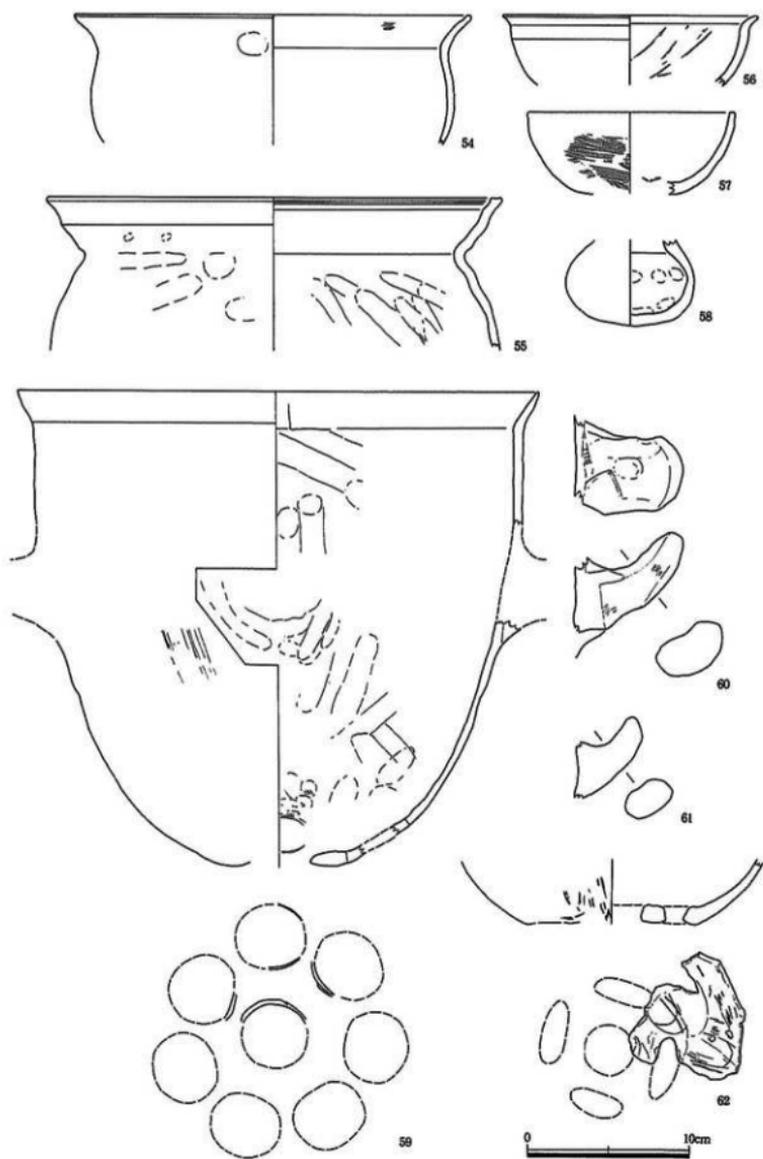


图64 住居 2 出土遺物(3)

をもつ(5・9・12)・外側へつまみあげる(13)があり、多様である。頸部は、稜をもつ(1・5・7・10・11・12)・丸くしあげる(3・6・8・9・13・14)ものがあり、(4)は内傾気味にたちあげた後口縁部を付加する、他とは異なる形態である。口縁部の直径は、15~17cmの範囲におさまり、斉一性を示す。(1)は、胴部上半のみの残存であるが、復原形を考えると口縁部に比べ胴部がかなり大きなものとなる。稜の調整は、外面ハケメ、内面指オサエ・下→上方向の指ナデが多く、(10)のみ内面ハケメがある。高杯杯部は、見込

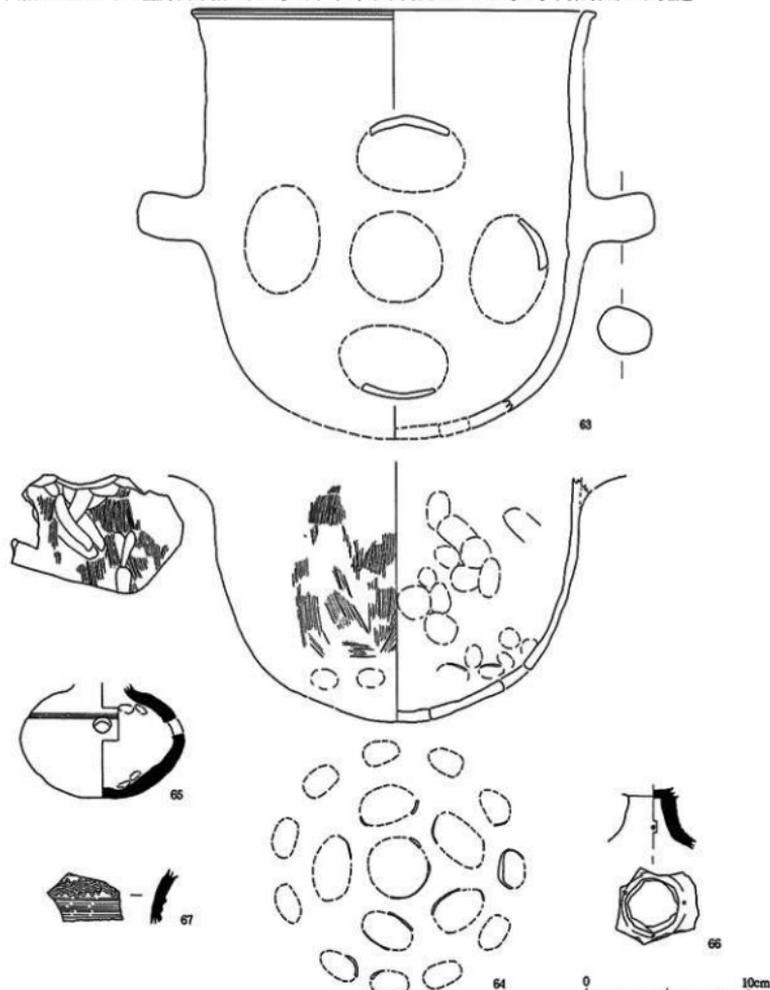


図65 住居2出土遺物(4)

みに平坦面をもち、外面に稜をもつ(15)・内面が碗形で、外面に稜をもつ(16・17・19)・碗形(18・20・21)があり、杯→碗への型式変遷の資料がそろそろ。碗形の口縁端部は、丸くおさめる(20)・内面に肥厚する(18・21)がある。(17)の口縁端部はやや外側に開く。調整は剝離のため不明のものが多いが、脚部との接合部にハケメ(38)が施されるものが1点みられる。高杯脚部は、裾部に稜をもつ(36・37・38・40・41・44・45・47・48・49・50・51)・裾部内面のみ稜をもつ(42・43・53)・ラッパ状に開く(52)がある。成形技法として注目されるのは、裾部から粘土紐をまきあげて脚部を成形するもの(36)で、内面にまきあげ痕が明瞭に残る。外面調整はヘラナデが多く、ハケメ(30・37)が2点ある。内面調整は、右回りのケズリが多く、脚部先端にはシボリ(30・52)、原体のアタリ(48)がみられる。杯一脚部の接合方法は、脚部先端の空洞の有無で2つに分けられる。脚部先端に空洞が有るもの(32・47・53)は、杯部接合の際に空洞部分に粘土を充填し、(15・38・40・48・50)のような接合状態となる。脚部先端に空洞がないもの(25~31・35・39・42)は、直接杯部が接合されると考えられる。鉢は大形・小形がある。(55)は、鍋になる可能性がある。小形鉢は口縁端部が外反するもの(56)、やや平坦面をもちながらも丸くおさめられるもの(57)がある。甑は、口縁部が稜をもってやや外反するもの(59)、端部が外側につまみだされるもの(63)がある。底部は(59・63・64)が丸底、(62)が平底であり、円孔または楕円孔が穿たれる。(59・62・63)は中心円十一重円、(64)は中心円十二重円であり、(64)は外周の円孔が小さくなる。把手は舌状(60・61)、棒状(63)がある。(64)の外面調整は縦方向ハケメであり、把手周辺では把手接合時のナデがハケメを消す。(67)は、波状文+3条突帯からなり、外面に煤状のものが付着する。須臾器甕の頸部と考えるが、器台の可能性を残す。(66)は須臾器高杯の小形の脚部であり、裾部屈曲部に貫通しない三方向の刺突がある。

本住居は古墳時代中期と考えられる。

住居 3 住居 3 5A トレンチの西端で、段丘先端をはしる溝に切られた状態で検出された。東辺6.5m、南辺1.6mを測り、東辺が外側にややふくらむ。攪乱等で判然としないが、一辺7mの隅丸方形住居となる可能性が考えられる。検出面と住居床面は、同レベルで、地山面

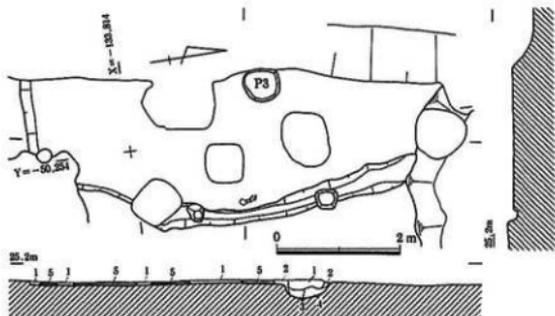


図66 住居3平面・断面

まで5caを測る。床面では、周溝・P3を検出した。P3は直径28ca、深さ20caを測り、埋土は黒褐色シルトである。東辺周溝際で、薄い器壁をもつ、甕と考えられる個体の体部片とその上に重なる状態で叩きの文様をもつ壺(1~3)が出土した。

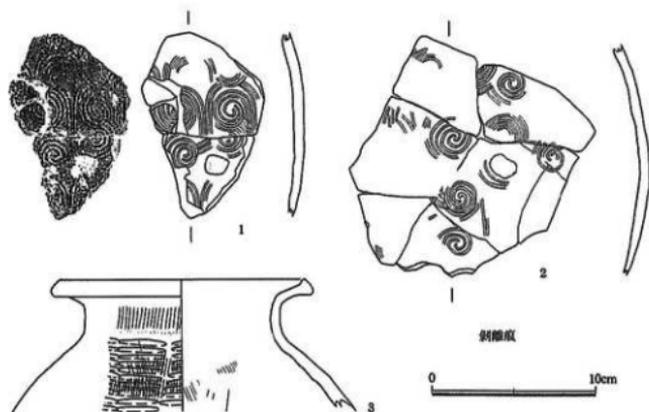


図67 住居3出土遺物

壺は、体部片(1・2)、口縁~肩部(3)がある。(1・2)は同一個体片である。(3)は(1・2)とともに出土し、胎土も類似することから、同一個体となる可能性は高いが、接合箇所がなく確定できない。(1・2)は、外面に浅いスタンプ文が施される。スタンプ文は、同一方向に巻く二重の渦文の先が直線にのびるものが対称に配置されるもので、厥手文と呼称される文様である。(1・2)ともに内面はナデである。(3)は、短く直立する頸部から口縁部が屈曲して開く広口壺である。頸部外面はハケメ、肩部外面はタタキのちハケメを施す。内面には一部ハケメがみられる。

本住居は、薄い甕体部片からは古墳時代前期と考えられる。他の古墳時代中~後期の住居に比べ、1棟のみ軸が異なっている。

住居4 5Aトレンチ東部で、方形住居の隅部のみを検出した。検出長は、西辺2.4m、南辺1.4mである。検出面から地山面まで3cm程度であり、周溝のみの検出である。周溝は、幅16cm、深さ5cm、隅部では幅25cm、深さ10cmを測る。遺物は出土していないが、他の古墳時代中期住居と軸が同じため、本住居も古墳時代中期の可能性が高い。

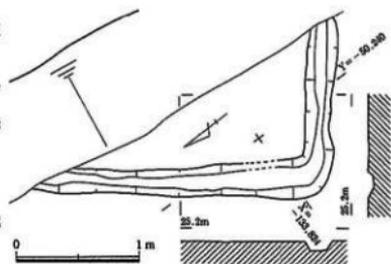


図68 住居4平面・断面

住居5 4A・5Aトレンチで検出された、北東辺4.5m、南東辺4.1mを測るほぼ方形の住居である。北西・南西辺は攪乱のため検出されなかった。検出面から地山面までは8cmを測る。地山面上の層厚4cmの床土上層に、地山ブロックを含む中世耕作土が堆積し、床面は部分的にしか残っていない。

床面および地山面では、周溝・床溝・支柱穴・土坑を検出した。住居東隅部から北西・南西へそれぞれ2mのところ、周溝から床溝が1mのびる。支柱穴P1はこれら床溝先



図69 住居5平面・断面

住居 6

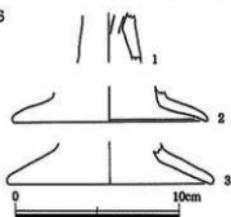


図70 住居5出土遺物

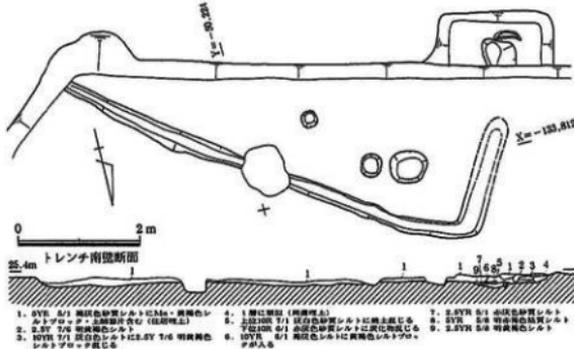


図71 住居6平面・断面

端より住居内側に位置する。周溝は幅18cm、深さ10cm、床溝は幅15cm、深さ5cmである。P1の深さは32cmである。土坑1は深さ7cmの浅い土坑で、遺物は出土していない。南隅部の土坑2は後世の土坑に切られた状態で検出された。深さ30cmを測り、埋土は上層から灰黄褐色シルト、炭化物を含む黒褐色シルトである。下層上面で土師器？(4)・須恵器片が出土した。床面出土遺物は、土師器高杯片(1~3)のみである。(4)は中実であり、外面は雑なナデである。器種は不明である。被熱の痕跡はない。

遺物が少ないが、住居主軸から、本住居は古墳時代中期と考えられる。

住居6 5Aトレンチ東端で、掘立柱建物3を切る状態で検出した。北辺6m、西辺50cmを測る。トレンチ南壁断面で、本住居に伴うと考えられる竈を確認し、拡張して調査した。竈は、住居の北隅部から3mの箇所に位置することから、竈が西辺中央に位置すると仮定す

ると、住居6は一边6mの方形住居と考えられる。検出面から住居地山面まで約5cmであり、ほぼ周溝のみの残存である。埋土は、褐灰色砂質シルトに黄褐色シルト(地山)ブロックを含むもので、住居埋土と床土が

混じたような土質である。中世の耕作で攪乱されたものであろうか。住居内では、竈のほかに直径30~60cm、深さ約10cmの浅いピットを3カ所確認した。

竈は、焚口から向かって左側のみが残存する。石製支脚とそれを取りまく二~三重の要部出土状況

竈は、焚口から向かって左側のみが残存する。石製支脚とそれを取りまく二~三重の要部片が検出された。住居1竈の出土状況に類似する。支脚上において要部片が集積し、

それをとりまく状態で甕体部片が内側に傾斜し、立った状態で検出された。その内側に直径5cmの石がおかれる。甕片は脆弱でありとり上げることはできなかったが、胎土が赤色のものと黄灰色のものがあり、支脚前方では黄灰色甕片が一重に、後方では二重に立ち、赤色甕片がそれをとりまく。これらの左側に広がる焼土上に脆弱な甕片の重なりが一群あり、その左側に袖部とみられる盛土が住居床土上に長さ50cm、幅10cm、高さ10cmの弧状に検出された。しかしこれを袖部とした場合、支脚から袖部内側まで40cmを測り、疑問が残る。支脚前面には舟底状をていする、箕口から燃焼部にかけて深さをますくぼみがあり、被熱した地上上に焼土が堆積する。甕の出土状態から、住居1と同じ竈廃棄に際しての人為的な行為が考えられる。

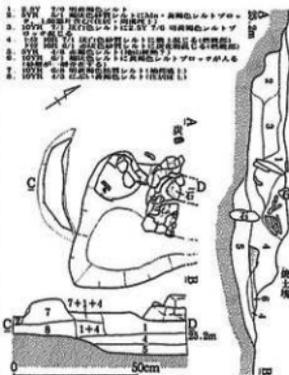


図72 住居6竈平面・断面

竈廃棄時の行為

遺物は、竈出土の土師器甕体部のみである。したがって本住居の時期の特定は難しいが、竈の出土状況・住居主軸が住居1と同じであることから、古墳時代中期と考えられる。

住居7 6Aトレンチの北西端で検出された、方形住居の東隅部である。検出長は、東辺2.6m、北辺1.5mである。検出面から床面までは10cmを測り、埋土は小礫を含む灰褐色シルト一層である。

住居7

床面では、周溝・ピット・焼土塊と土器を検出した。周溝は幅15cm、床面からの深さは10cmである。ピットは住居東辺の周溝沿いで検出され、二段に掘り込まれる形状を示す。埋土は上層から褐色シルト、明褐色シルトである。焼土塊はトレンチ西壁に沿って確認した。焼土塊は住居北辺から50cmの箇所に位置し、長さ30cm、高さ10cmを測り、床面から盛り上がる。焼土の下層には炭化物が充満する舟底状の土坑があることから、壁際のみでの確認であるが、竈と考えられる。土器は、土師器壺(1)・小形丸底壺(2)・高杯(3・4)、韓式系土器の甎(5)が出土した。壺は、竈と考えられる舟底状の土坑前面で出土した。小形丸底壺は、住居北東隅部の周溝際で、体部のみが正位でこなごなに割れた状態で出土した。高杯杯部も正位の出土状態を示す。甎は、把手がピットの埋土上、口縁部がピットの底で出土している。ピット埋土はブロック土を含まず、埋土からは人為的な埋め戻しはうかがえないが、甎が同一個体であることから、ピットが埋まり住居の廃絶までにはあまり時間を要しなかったものと考えられる。

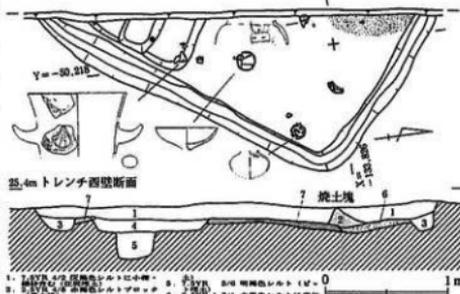
竈  
韓式系土器

図73 住居7平面・断面

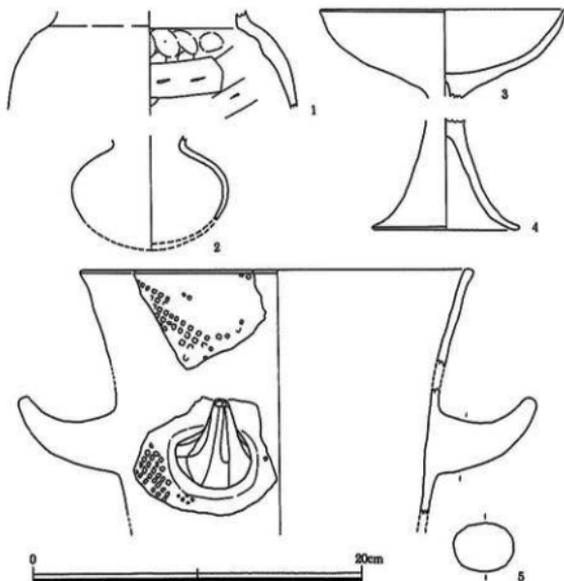


図74 住居7出土遺物

なお、竈周辺から住居外にかけて、住居床面下から、切り合いをもつピットが3カ所検出された。

壺(1)は、頸部が直立し、厚手の器壁をもち、内面指オサエのちケズリを施す。小形丸底壺(2)は、直線状の肩部から胴部が張りだす。高杯は碗形の杯部(3)と、内面にわずかに線をもち

つものラッパ状に裾が広がる脚部(4)があり、別個体である。(3)は脚部との接合箇所に棒状の原体を突き刺した痕跡がみられる。韓式系土器の甌(5)は、外面に格子タタキを施すもので、把手に刻みはみられない。

本住居跡は、古墳時代中期と考えられる。

住居8 住居8 6Aトレンチのほぼ中央で検出された、一辺4.0mを測る、方形住居である。検出面から地山面まで部分的に4caを測り、床面のほとんどは削平された状態での検出である。

掘立柱建物1との前後関係

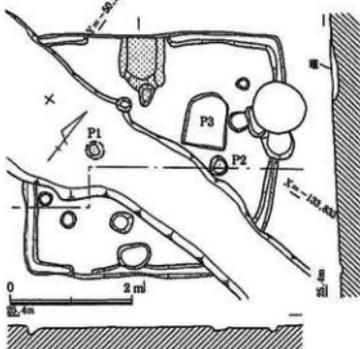


図75 住居8平面・断面

掘立柱建物1→住居8である。

床面では周溝・主柱穴・ピット・竈を検出した。周溝は竈のある北西辺中央とその対辺である南東辺の南隅部近くが途切れた状態で検出された。周溝の幅は18ca、住居地山面からの深さは5caである。主柱穴は、P1・P2であり、2本柱の住居と考えられる。主柱穴は直径30ca、住居地山面からの深さは30caを測る。P3は竈手前右側、竈と主柱穴P2との間に位置する88×65ca、深さ5caの浅いピットである。埋土は炭化物・焼土であり、竈内からかきだした燃焼

物を置いたものと考えられる。竈は、住居北西辺中央で削平された状態で検出された。住居北西壁から、袖部基底部とみられる灰色シルトが高さ1cm以下、幅10~15cm、長さ北側80cm、南側70cmのびる。燃焼部中央には土師器高杯杯部(1)が伏せた状態で置かれ、その周辺で高杯(2)・甕底部が、焚口で甕、袖部右側で壺・高杯(3)が出土した。袖部上では出土していない。煙出口・煙道は検出されなかった。燃焼部から焚口にかけては、地山が

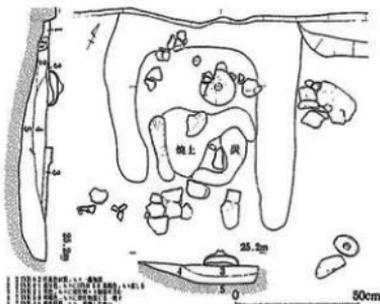


図76 住居8竈平面・断面

舟底状に掘りくぼめられ、被熱により焼けしまった地山上に炭化物・焼土が、その上層に炭層が堆積する。燃焼部中央の高杯杯部は炭層を覆うように焼土上に置かれており、被熱の痕跡もないことから、支脚ではなく、竈の廃棄に際して置かれたものと考えられる。

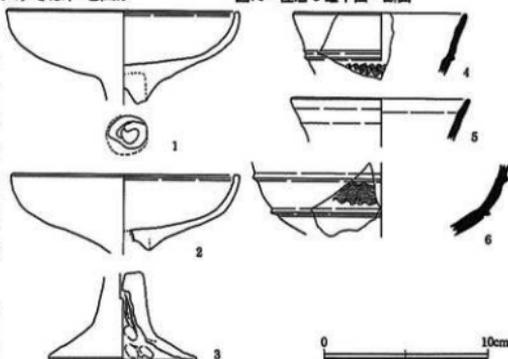


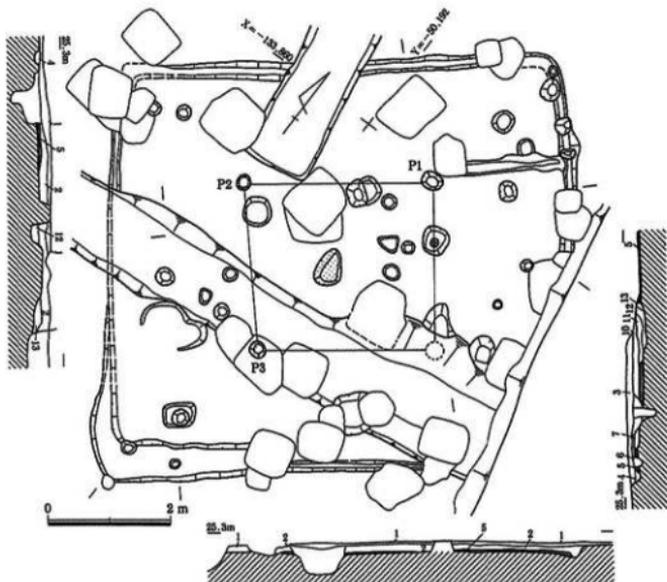
図77 住居8出土遺物

竈廃棄時の行為

土師器高杯杯部(1・2)は、碗形であり、口縁端部は内側へわずかに肥厚する。脚部との接合は、脚部先端から杯部をつくりだす方法であり、(1)の脚部先端内側には、棒状原体によるラセン形のアタリ痕がみられる。高杯脚部(3)は、脚柱部内面にシボリメ、脚裾部内面に指オサエが残る。先端には直径3~4mmの棒状原体による穿孔がある。須恵器壺または直口壺口縁部(4・5)・高杯杯部(6)は床面出土である。(4・6)は、シャープな突帯と波状文がみられる。(6)内面には煤が付着する。

本住居は古墳時代中期と考えられる。

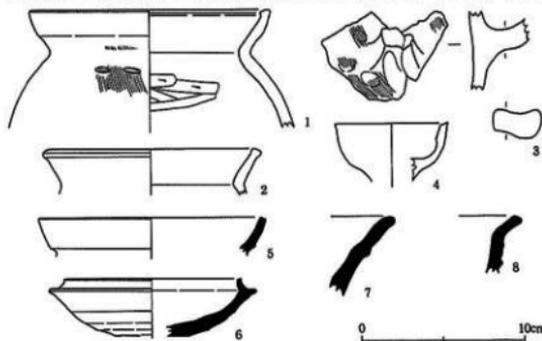
住居9 8A・8A3トレンチにまたがって検出された、一辺7mの方形住居である。検出面から床面まで10cmを測り、中世耕土下の住居埋土は基本的には炭化物を含む暗褐色シルト一層であるが、住居北側ではやや赤褐色をている。床面では、主柱穴・周溝・炉が検出された。主柱穴は、4カ所とみられるがそのうち、P1~P3が検出された。P1・2間は3m、P2・3間は2.9mを測る。直径22~35cm、深さ30~40cmを測る。周溝は幅20cm以上、床面からの深さ8cmを測る。北・南隅部の周溝内において、直径15~24cm、深さ10cm程度のピットを検出した。炉は住居中央に位置し、長径60cm、短径40cm、深さ5cmを測る浅いものである。緻密な赤褐色シルトが堆積し、炭化物は含まない。



- |   |  |
|---|--|
| <p>1. 10YR 4/8 に近い黄褐色シロトに小粒多く含む (中世終土)<br/>       2. 10YR 3/3 暗褐色シロトに小粒・土層断片・炭化物多く含む (住居埋土)<br/>       3. 8YR 3/2 暗赤褐色シロトに地山ブロック・粗砂・小粒多く含む (下部に炭化材あり)<br/>       4. 7.5YR 3/2 黄褐色シロトに7.5YR 4/8 褐色シロト・粗砂混かに含む (埋居埋土)<br/>       5. 10YR 4/4 褐色シロトに地山ブロック多く入る (原土)<br/>       6. 8YR 3/3 暗褐色シロト</p> | <p>7. 7.5YR 3/2 黄褐色シロトに10YR 4/4 褐色シロトブロック混入<br/>       8. 8YR 3/3 暗褐色シロトに10YR 5/4 に近い黄褐色シロトブロック・中粒混入<br/>       9. 7.5YR 3/2 黄褐色シロトに地山ブロック・粗砂・小粒多量混入<br/>       10. 7.5YR 3/1 黄褐色粘土質シロトブロックと地山粘土混入<br/>       11. 7.5YR 4/1 黄褐色粘土質シロト<br/>       12. 10YR 3/4 暗褐色シロトに土層断片・地山ブロック混かに含む<br/>       13. 12に類似するが土層断片は含まない</p> |
|---|--|

図78 住居9平面・断面

遺物は、すべて埋土出土である。土師器甕(1・2)は、口縁端部が内側に肥厚するもの(1)、平坦面をもつもの(2)がある。(1)は、外面肩部にハケ原体のアタリ痕がある。把手(3)は断面形が隅丸長方形であり、舌状の把手になると考えられる。(4)は残存が1/8程度であり、復原形に不安が残る。器種は不明である。(5)は、器種不明である。口縁端部に平坦面をもつ。



(6)は杯身。(7)は甕口縁部である。突帯が一条通り、文様は無い。(8)は器台片か。口縁部下に凹線をともなう突帯が巡る。文様は無い。

本住居は古墳時代後期と考えられる。

図79 住居9出土遺物

住居10 8A・8A3トレンチのそれぞれ南西・南東隅部で検出された。検出長は東辺2m、住居10北辺3.8mである。東辺は、住居9西辺と20cm隔てて平行しており、確認できた範囲では切り合いはみとめられない。住居南半は住居28に切れ、不明である。削片が著しく、周溝と電痕跡のみの検出である。周溝は電後方にもめぐる。電は攪乱のため全体の1/4程度の検出である。住居北辺から西側袖部基底部とみられる灰色シルトが10~15cm幅でのびる。袖部の内側、周溝際で、直径30cmの焼土が堆積し、その前面には炭・灰がひろがる。それぞれ燃焼部・焚口と考えられる。

遺物は、燃焼部・焚口相当部分から土師器高杯脚部(1)が1点出土したのみである。

本住居は、東接着して検出された、古墳時代後期と考えられる住居28に切られており、主軸・電の設置箇所が近接する住居26・13などと共通することから、古墳時代中期の可能性が高いと考えられる。

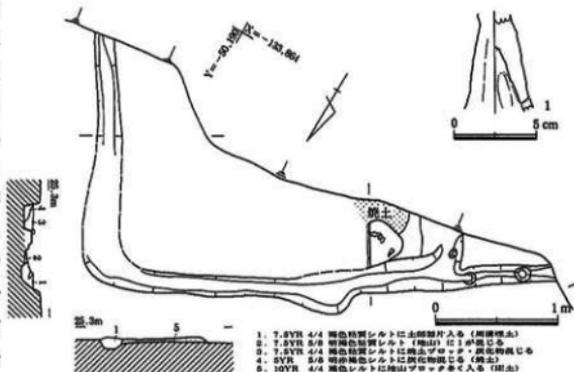


図80 住居10平面・断面 出土遺物

住居11 8Aトレンチの北東隅部で検出された、方形住居の南隅部である。検出面から床面まで、10cmを測り、埋土は土師器片・小礫を含む暗褐色シルト一層である。床面では、二重の周溝とP1・P2が検出された。二重の周溝の検出長は、外側の周溝は、南西辺2.7m、

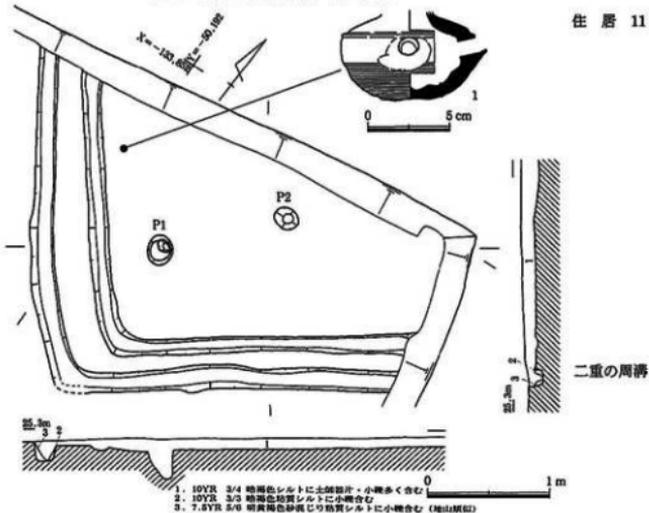


図81 住居11平面・断面 出土遺物

南東辺2.6m、内側の周溝は、南西辺2.5m、南東辺2.4mである。内側の周溝は床面をやや下げて検出された。二重の周溝間は南西側で30ca、南東側で15caを測る。内側の周溝は、深さ5caと浅い。二重の周溝は内→外への住居の拡張にともなうものであろうか。P1は、床面からの深さが20caを測り、主柱穴の可能性をもつ。P2は、浅いすり鉢状のピットであり、深さ10caを測る。南西辺際で臙体部(1)が一点倒位で出土した。遺物はこれのみである。

(1)は、偏平な肩部に凹線がめぐり、体部下半はカキメ、底部は回転ヘラ切りで仕上げられる。円孔周辺には粘土を付加し、ナデつける。

本住居は、古墳時代後期と考えられる。

住居 12 住居 12 7A トレンチの南端中央で検出された、方形住居である。北西辺が5.2m、北東辺が4.5mを測る。検出面から床面までは10caを測り、埋土は土師器片・須恵器片(7・8)・小礫を含む暗褐色シルト一層である。床土はみとめられなかった。

床面では、主柱穴・周溝・床溝・炉を検出した。主柱穴は、P1~P4の4本で、主柱穴間は2.3~2.5mである。主柱穴の床面からの深さは22~26caを測る。周溝は、削平のため

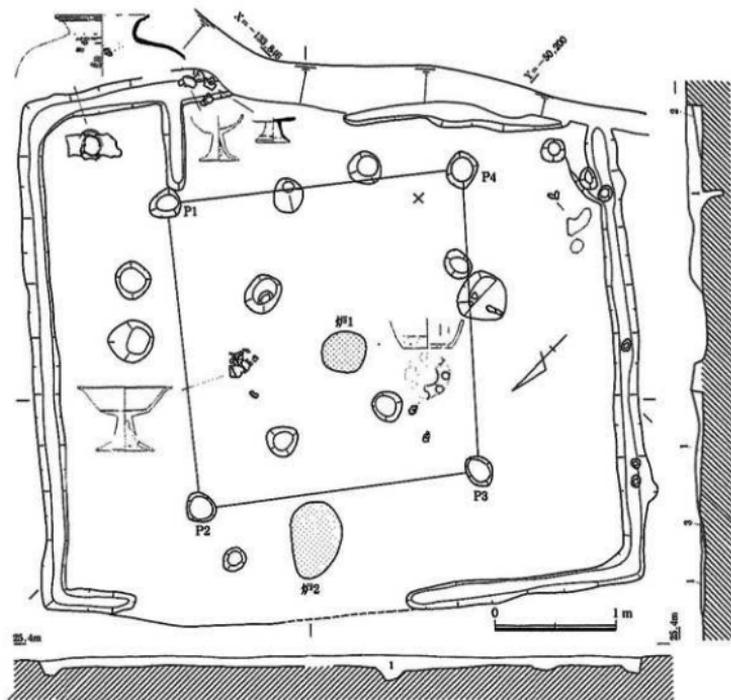


図82 住居12平面・断面

住居北西辺の一部が途切れた状態で検出された。周溝は、幅16cm、床面からの深さ6cmを測る。南西辺の周溝底では、直径8cm、深さ7cm前後の小ピットが検出されたが規則的に並ぶものではない。床溝は、南東辺からP1に向かって伸び、周溝との切り合いはみとめられない。断面形は浅いU字形である。炉は中央(炉1)とP2・P3間の外側(炉2)の2ヶ所でみとめられた。炉1は、直径30cm、深さ3cmの円形、炉2は、長径64cm、短径44cm、深さは2cmの楕円形をていし、両者とも均質な赤褐色シルトの焼土が堆積する、床面が焼けた程度のものである。焼けしまりや焼土ブロックはみとめられない。他に注意されたものに、南東辺中央、トレンチ断面でみられた均質な黄色シルトがある。おもに断面での観察であるが、住居壁側から床面に向かって、10cmの比高差をもって均質な黄色シルトが斜めに堆積しており、住居入口に伴うものである可能性が考えられる。遺物は床面および周溝埋土上で出土した。床面では、東隅部で須恵器大形甕(9)が口縁部を下にした状態で肩部までが出土した。他に、炉1の東側では土師器高杯(1)がほぼ一個体分まとまって

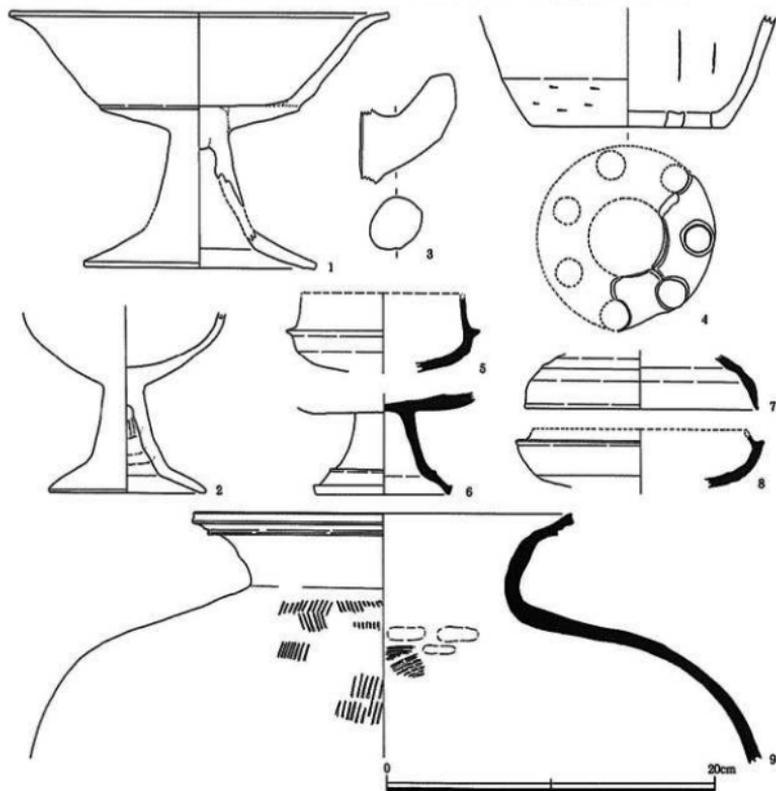


図83 住居12出土遺物

出土し、甕底部(4)・把手(3)、須恵器杯身片(5)が散在する。周溝埋土上では、土師器高杯(2)、須恵器高杯(6)が出土した。

(1)の杯部は、明確な稜をもつ深い杯であり、口縁部は外半する。杯一脚の接合は、脚部に杯部を縫ぎ足す方法である。(2)は、杯部の口縁部が欠けているが、碗形の杯部をもつ土師器高杯である。脚部は、稜をもって裾部がひろがる器形であり、裾部からの粘土紐巻き上げて成形される。内面先端にはシボリがみられる。(4)は甕底部である。底面の穿孔は外→内方向になされる。(6)は、杯部外面で回転ケズリが一部みられるほかはナデ調整である。杯部内面中央には、直径3.5cmの円がみられ、杯一脚の接合痕と考えられる。(7・8)は小片を復原しているため、直径に不安が残る。(9)は、頸部が外反する広口の須恵器甕である。口縁部下に凹線をともなう突帯が1条めぐる。体部外面は、平行叩きのちナデ、内面は頸部下に指押サエ、その下には同心円文当てがみられる。

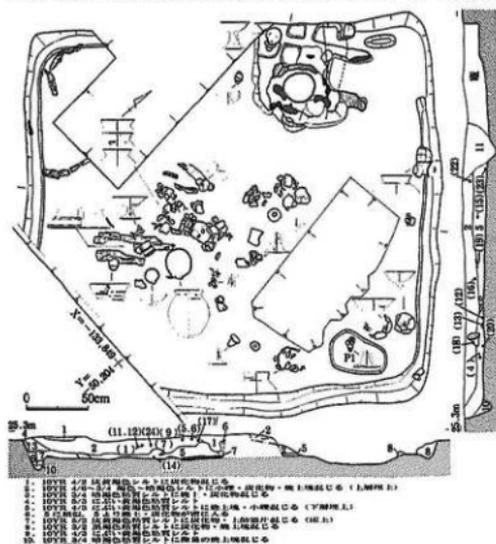
本住居は、古墳時代中期のもので、古墳時代中～後期に廃絶・埋没したと考えられる。

住居13 住居13 7Aトレンチ南西隅部で検出された、北西辺3.5m、北東辺3.3mを測る小形の方形住居である。比較的残存状態が良好であり、検出面から住居床面まで15cmを測る。埋土は、上層から微細な焼土塊・炭化物を含むしまった暗褐色シルト、焼土塊・炭化物を含むぶい黄褐色粘質シルトであり、床土である灰黄褐色粘質シルトは住居中央で部分的に確認したのみで地山にいたる。

遺物出土状況 本住居では、埋土の二層中から遺物・炭化物が多く出土した。

遺物は、床面でも一部出土(3・13~15・18・21)するが、大半は埋土から出土し、床面と埋土の出土遺物に時期差はみとめられないことから、住居廃絶後埋土は短期間で堆積し

焼失後に腐葉



たものと考えられる。また、埋土中の遺物は床面の焼失材や周溝・ピット上で出土することから、住居焼失後に廃棄されたものと考えられる。

遺物は住居中央に集中し、一部北東・南東辺ぞいの周溝・ピット上に散在する。

遺物は、土師器壺(1~4)・甕(5~9)・高杯(10~21)・小形丸底壺(22)・甕(23)・須恵器甕・器台(24)が出土した。

大半が破片での出土であるが、住居中央部では、後世の削平のため半載さ

図84 住居13平面・断面

れた状態で、要(9)が横位で出土した。

炭化材は、住居床面・周溝際・壁で出土した。全面で出土するものではないため、焼失炭化材家屋とみた場合、炭化材の片づけがあった可能性がある。床面出土の炭化材は、幅7.5cm、長さ40~55cm、厚さ1cmであり、加工痕は不明であるが厚さが均等であり板材の可能性が大きい。壁際の炭化材は、南西辺で1カ所確認した。周溝外側の壁に沿って、周溝底から立った状態で検出された。幅15cm、長さ20cmを測る。

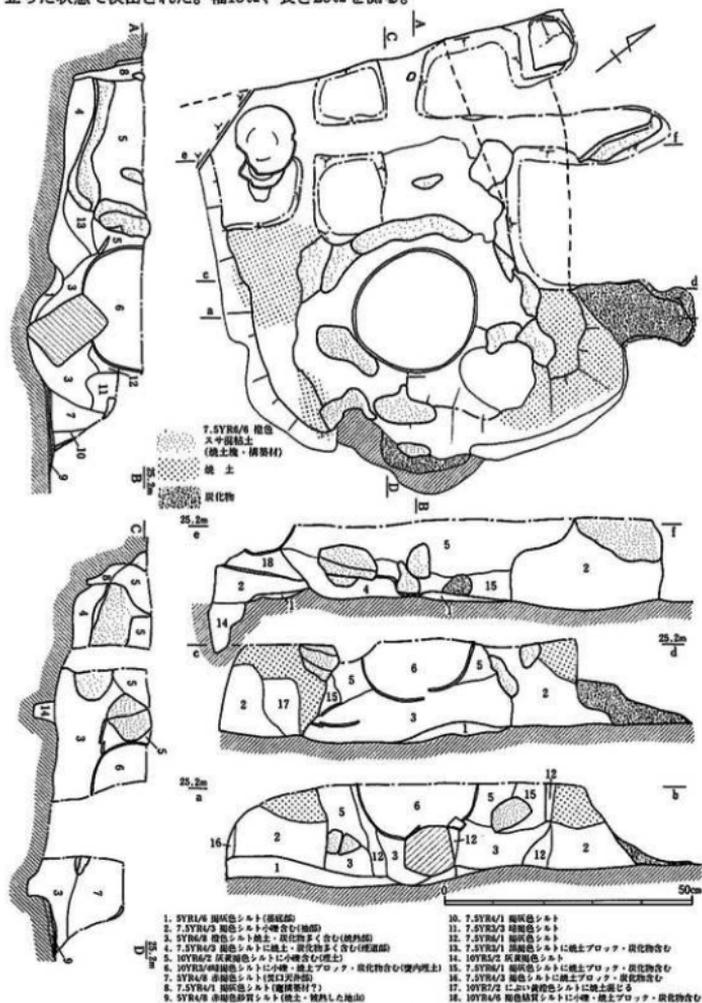


図85 住居13竪平面・断面

床面では周溝・ピット・竈を検出した。

周溝は竈後面で途切れる。周溝埋土には焼土塊が含まれ、住居焼失後に流入したものと考えられる。

P1は、住居東隅部で検出された。50×35cmの楕円形をていし、深さは70cmである。埋土は暗褐色シルト一層のみであり、埋土から炭化物・焼土塊・遺物は出土しなかった。他にピットは検出されないことから、本住居は、掘立柱による建物ではないと考えられる。

#### 竈

竈は、北西辺中央よりやや東寄りに位置する。竈の大きさは、長さ80cm、幅75cm、残存高20cm、袖部の幅15cm、燃焼部幅45cmである。燃焼部では、丸底甕が石製方形支脚上にかかった状態で検出された。袖部と住居埋土との判別は困難であり、上面検出時に被熱のためやや赤褐色をていする部分を袖部として検出した。東側袖部後方を掘りすぎてしまったが、東側袖部前方では袖部外側に沿うように炭化物が検出されたため、この部分での袖部外側は確認できた。この炭化物が竈にともなうものか、住居焼失にともなうものかは不明

#### 焼土帯

である。燃焼部にかかるとの甕の回りでは、スサ入りの焼土が、幅5cmの帯状に検出された。焼土の帯は袖部内側に貼り付けられて掛口後方へ巡る。縦断面をみると、甕後方の焼土帯は長さ12cmを測り、燃焼部と煙道部を区切る障壁のような形態で甕後方に巡る。煙道部では炭化物上に焼土帯があり、その上に住居埋土が堆積する。焼土帯は燃焼部後方から煙道部にかけての天井部が落下したものである可能性が考えられる。地山は、燃焼部で舟底状に掘りくぼめられ、煙道部は壁に向かって緩やかな傾斜をもってあがる。電構築物を除去後、地山面で直径3cm、深さ5cmの小ピットが袖部外側、および掛口をめぐるスサ入り焼土帯の下にあたる部分で検出された。電構築時の補助材の痕跡であろうか。

遺物は、土師器二重口縁壺(1・2)・広口壺(3)・直口壺(4)・甕(5～9)・高杯(10～21)・小形丸底壺(22)・甕(23)・把手(24)、須恵器甕・器台(25)が出土した。

(1)は、口縁部に縦方向の1条の線と鋸歯文状の文様が描かれ、稜線をはさんで上下にそれぞれ2条の波状文が線描される。波状文は、双方とも2条の原体によって描かれたものではなく、1条づつ描かれる。破片のため連続する文様は不明である。頸部には原体のアタリ痕がみられる。(2)は(1)と胎土が似るが、口縁部稜線下に波状文がなく、頸部内面が(1)ほど直立しないため、別個体として図示した。(3・4)は、内外面とも剝離のため調整は不明である。甕は、口縁端部をみると、(5・6・9)が丸くおさめる、(7)はわずかに内側に肥厚する、(8)は内側に肥厚する、とさまざまである。頸部内面の稜は、(5～7・9)がゆるやかに屈曲し不明瞭、(8)が比較的明瞭である。(6・7・8)の内面調整は下から上方向のナデであり、ナデ以前のケズリの有無は不明である。(9)の調整は剝離のため不明である。高杯杯部は、稜をもち外反してたちあがる(11)、稜をもち内湾してたちあがる(14・15)、稜をもち直線的に外側に開く形でたちあがる(10・13)、椀形?(16)のものがあり、口縁端部は外反気味である。高杯脚部は、裾部が稜をもちひろがる(12・18・21)、稜がなく外側に開く形(10・19・20)のものがある。(20)は、粘土紐巻き上げて成形される。調整は不明のものが多いが、(14)内面、(18・21)裾部内面端部にはハケメが施される。杯一脚接合部は、(13)が椀状の粘土を充填するほかは、(12・18)は脚柱部上半が中実、(10・17・19・20)が中空であり、仕上がった脚部に杯部を

継ぎ足したと考えられる。(22)は内面、底部・胴部・頸部付近と方向は異なるがヘラケズリである。(23)は口縁端部と底部の屈曲部片のみの出土であり、全体形の復原は任意である。底部片は約1/6の残存であり、外→内方向の穿孔が2カ所みとめられた。胎土は、砂粒を多く含み、精製品ではない。(24)は、甌または鍋の把手である。須恵器甕は体部片の

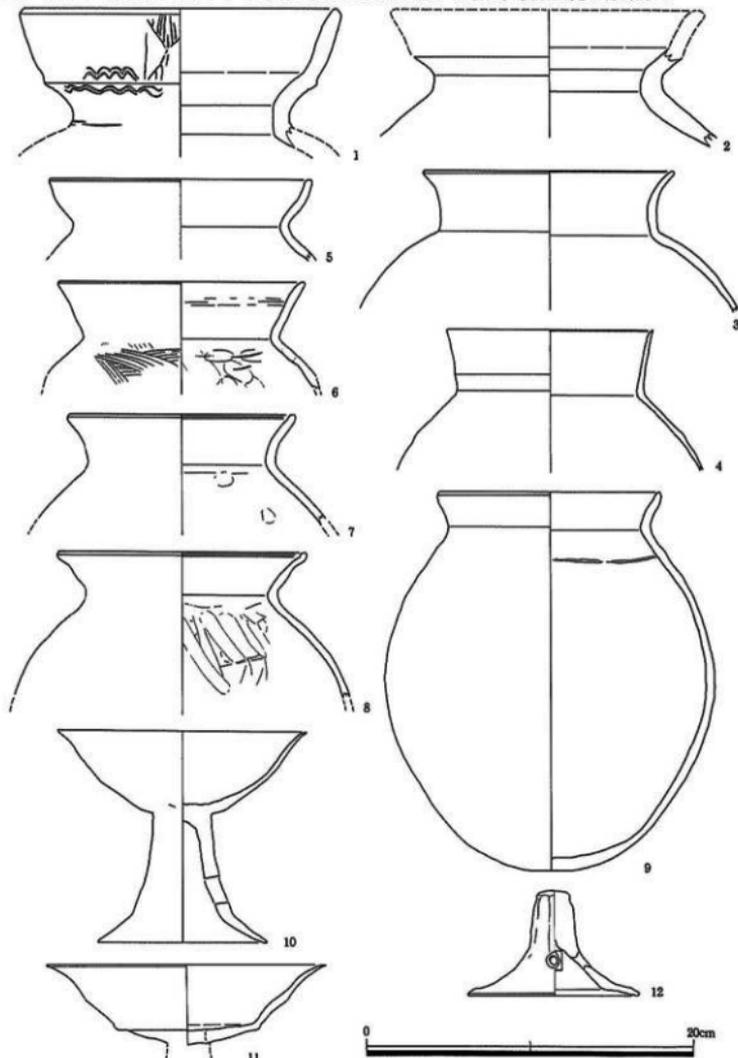


図86 住居13出土遺物(1)

ため図示しなかったが、内外面とも丁寧なスリケシである。(25)は、長方形スカシをもち、スカシ下に2条の突帯+凹線、裾部に1条突帯がめぐる。

本住居は古墳時代中期と考えられる。

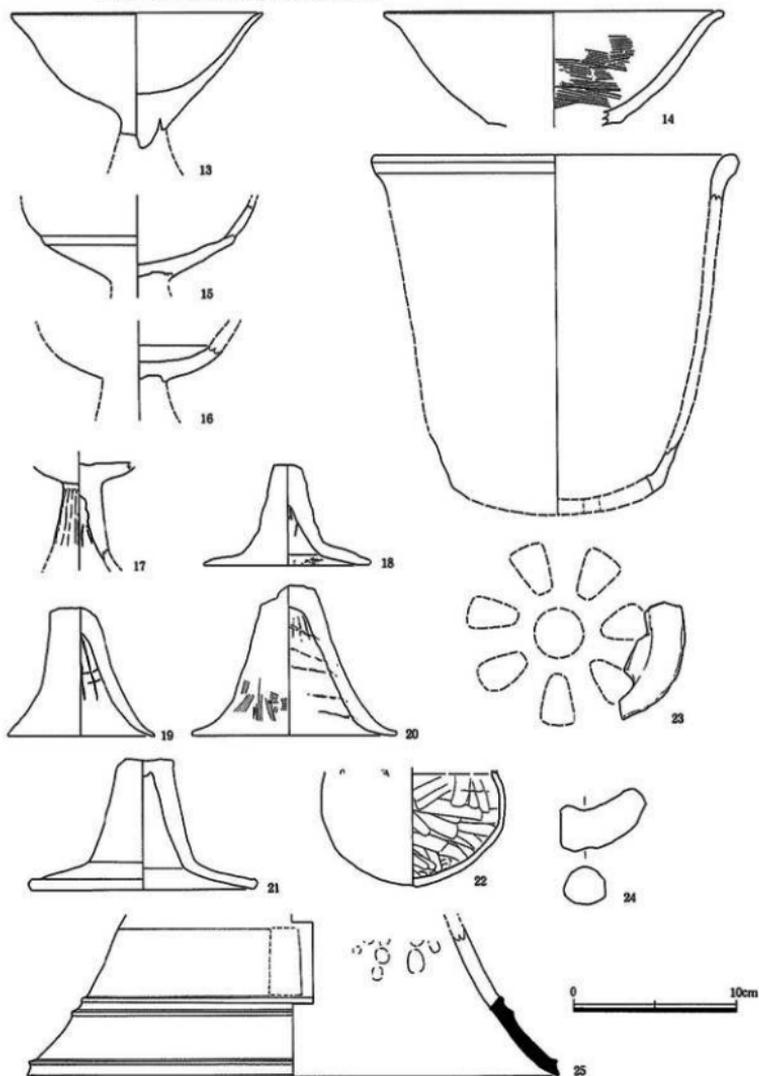


図87 住居13出土遺物(2)

住居14・15 7Aトレンチの南東部で、方向が異なる住居が重なって検出された。両者と住居14・15にも削平が著しく、床面の一部と周溝のみの検出であり、新旧関係は不明である。

住居14は、L字状に周溝が検出された。周溝幅20cm、残存する深さ5cmである。

住居15は、コ字状の周溝と床面の一部が検出された。西辺5.6m、北・南辺の残存長はそれぞれ、3.5m、2.1mを測る。残存する深さは5cmである。

遺物は、住居14・15の重複部床面から出土した。床面は部分的な残存であり、遺物がいずれの住居に帰属するかは不明である。

遺物は、土師器高杯(1)、須恵器杯身(2)である。(1)の杯部は、稜をもつ深いもので、口縁端部はやや面をもつ。脚部は、裾部に稜をもち、外面はヘラナデをほどこす。(2)は、古墳時代後期の遺物である。

住居15は、古墳時代後期と考えられる住居16と主軸が同じである。これより出土遺物は住居15に帰属する可能性が考えられるが、断定にはいたらぬ。

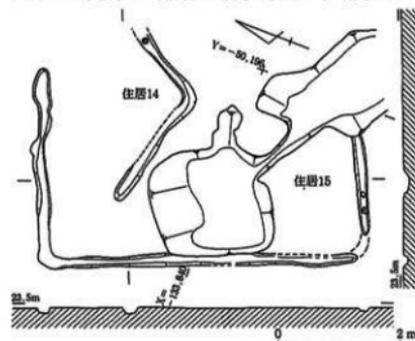


図88 住居14・15平面・断面

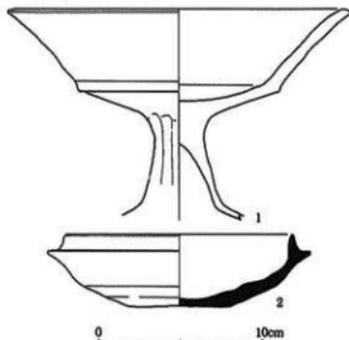


図89 住居14・15周辺出土遺物

住居16 7Aトレンチの南西部に位置し、住居15と4mの間隔をもって平行する。東辺4.3m、北辺・南辺の検出長はそれぞれ2.1m、3.9mを測る方形住居である。検出面から地山面は4cmを測る。埋土は、床土とみられる焼土・地山ブロック混じりシルトがかろうじて部分的に残存する。

床面では、周溝・ビット・竈を検出した。周溝は、東・南辺に巡り、幅10~18cm、深さ10cmを測る。周溝は、住居北東隅部および竈の後面にあたる北辺には巡らない。東辺で周溝が途切れる部分および南辺中央よりやや東寄りの部分では、周溝ぞいで土坑が検出され、両地点とも土坑・周溝埋土の上位で土師器甕(1・2)が出土した。ビットは5カ所確認したが、主柱穴は不明である。竈は、住居検出時に、住居北辺中央とみられる壁際から50cm内側で、ドーナツ状の明黄褐色~浅黄色シルトの中央に炭化物・焼土がみられる状態で検出された。黄色シルトの南北長は1.35m、焼土の直径は70cm、黄色シルト帯の幅は、20~35cmである。焼土・炭化物と黄色シルトが接する部分は、円周の1/4にあたる北東部分が赤く焼けしまっていた。黄色シルトの袖部は基本的に地山上に構築されるが、部分的に褐灰色シルト上に構築されており、この場合、褐灰色シルトは電構築時のベースとして用い

竈  
ドーナツ状  
の黄色シル  
ト

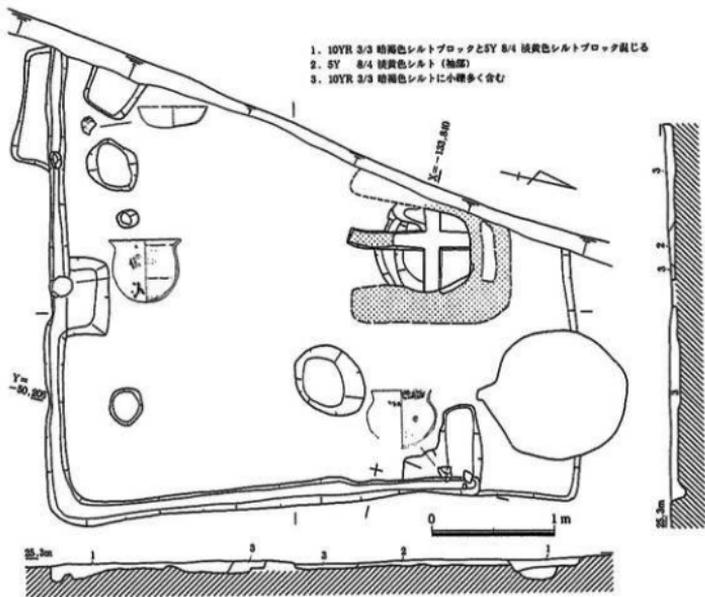
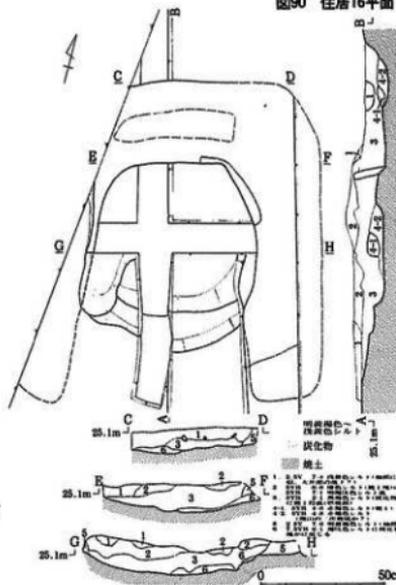


図90 住居16平面・断面



竈改装の  
可能性？

図91 住居16竈平面・断面

られた可能性が考えられる。焚口から燃焼部にかけては舟底状にくぼみ、炭化物・焼土からなる燃焼物が堆積する。焚口および掛口後方では燃焼物上に黄色シルトがみられ、落下した天井部と考えられる。注意される点は、縦断面において燃焼部とみられる炭化物・焼土の入った土坑と煙出口とみられる地山上で焼けしまった焼土の組み合わせが二カ所みとめられたことである。他の竈の観察によると、煙道部では炭化物の集積がみとめられないことから、後方の炭化物・焼土の堆積は煙道部にとまうものとは考え難い。燃焼部が縦に二カ所並ぶような様相をていることから、竈を壁際から手前へ改築した可能性が考えられるが、基底部のみの残存であり断定できない。

土師器壺(1・2)・杯(3)、須恵器杯蓋(4)が出土した。(1)は外面に、(2)は内外面にハケメが部分的にのこる。(3)は床面出土である。薄い器壁であり、口縁端部がやや肥厚するが、剝離のため明確ではない。(4)は住居南西部の埋土出土の可能性ある。

本住居は、古墳時代後期には廃絶したと考えられる。

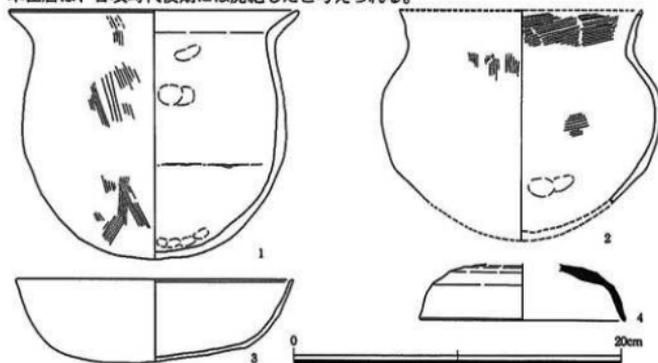
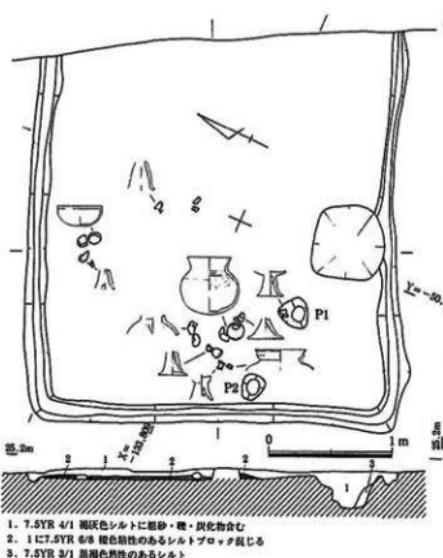


図92 住居16出土遺物

住居17 3Aトレンチの南東端で、住居18と近接して検出された。北辺検出長3m、西辺 住居17  
3m、南辺検出長3.3mを測る、やや長方形をている住居である。埋土は上層から粗砂・  
礫・炭化物を含む褐灰色シルト(10~12)、床土であり、検出面から地山までは10cm、床土



1. 7.5YR 4/1 褐灰色シルトに粗砂・礫・炭化物含む
2. 1に7.5YR 6/8 褐色粘性のあるシルトプロット混じる
3. 7.5YR 3/1 黒褐色粘性のあるシルト

図93 住居17平面・断面

の厚さは4cmである。

床面では、周溝・土坑・ピットと住居西半にひろがる遺物を検出した。周溝は幅10~18cm、床面からの深さ12cmを測る。土坑は、住居南辺の周溝沿いで検出された。土坑は、一辺60cmの隅丸方形をいし、深さは30cmを測る。埋土は周溝側の下層に黒褐色粘性のあるシルトが堆積し、その上層は住居埋土と同じである。住居南西部で検出されたP1・2はいずれも浅いものであり、P1では埋土上で土師器高杯(4)が出土した。床面出土遺物は、土

師器甕(2)・壺(1)・高杯(5~9)・杯(13)、須恵器壺(3)があり、高杯の脚部が多い。その他、少数の炭化物・礫が出土する。

(2)の内面は、ケズリののち指ナデ・指オサエで仕上げる。土師器高杯脚部は、裾部に綾をもつもの(4・6・10~12)、ラッパ状に開くもの(5・7)がある。(8)は内面ケズリであり、脚内部先端部にヘラ状工具のアタリ痕がみられる。

本住居は、古墳時代中期と考えられる。

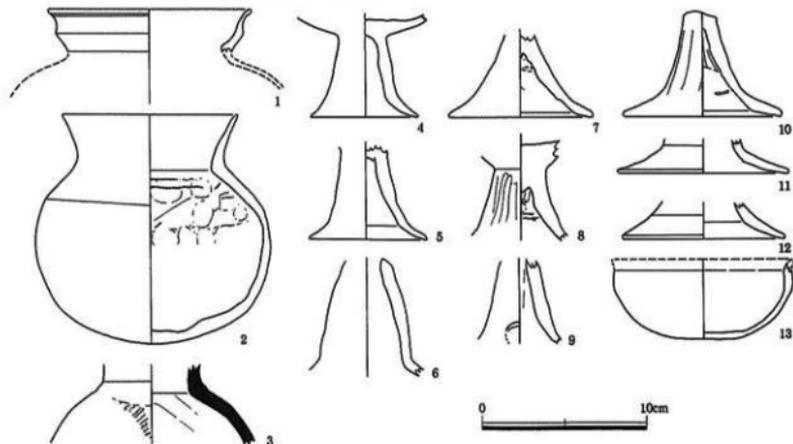


図94 住居17出土遺物

住居 18 住居18 3Aトレンチの南東端で検出された。方形住居の西半部であり、西辺は5.3m、北・南辺の検出長はそれぞれ2.4m、2.1mである。検出面から地山面まで12cmを測り、埋土は上層から粗砂・小礫を含む灰黄褐色シルト・床土である。

床面では、周溝・ピットを検出した。周溝は幅20cm、床面からの深さ8~12cmを測る。周溝埋土には、地山ブロックが含まれる。P1・2は、直径約25cm、深さ30~40cmを測り、主柱穴と考えられる。P1・2間は、2.8mである。

本住居は、近接する住居17と主軸がほぼ同方向であり、古墳時代中期の可能性も考えられるが、遺物が出土せず、時期は不明である。

住居 19 住居19 3Aトレンチの南半部、掘立柱建物3の東端部上で検出された、北西・南東辺3.8m、北東・南西辺3.5mを測る方形住居である。検出面から地山面までは20cmを測り、埋土は上層から粗砂・小礫混じり褐灰色シルト、焼土塊・炭化材を包含する黒褐色粘質シルト、地山ブロック混じり黒褐色粘質シルト、粗砂・小礫混じり均質な褐灰色シルトである。焼土塊・炭化材は地山ブロック混じり黒褐色粘質シルト上で検出されることから、同層が住居廃絶時の床土と考えられる。また、後述するが、竈が位置を変えて改築されていることから、最下層の均質な褐灰色シルトは竈改築前の床土となる可能性がある。

炭化材 床面では、多数の炭化材・焼土塊、少数の土器を検出した。炭化材は、丸太材が多く、板材はその可能性をもつものがわずかにみとめられる程度である。丸太材は直径8~10cm

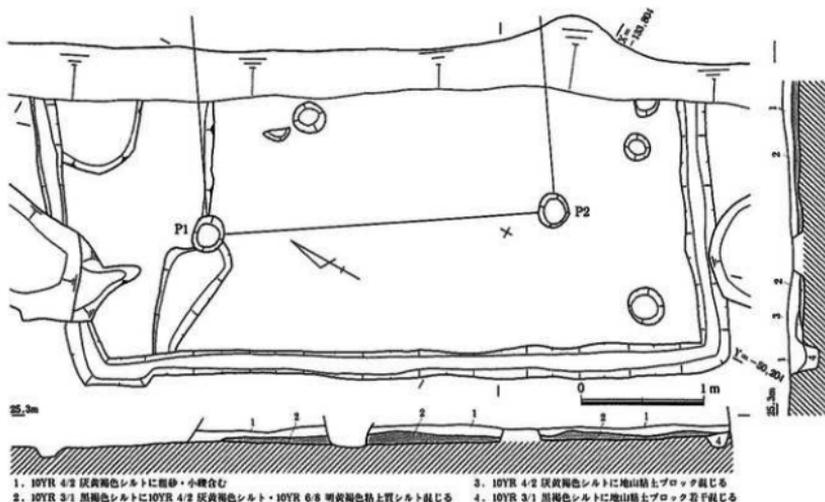


図95 住居18平面・断面

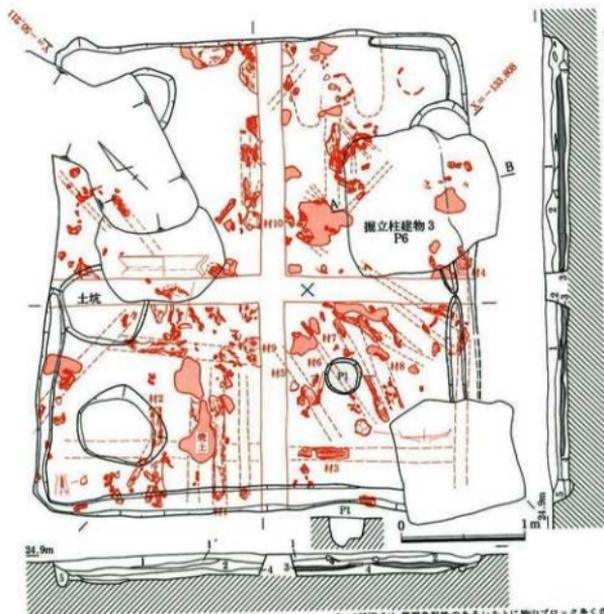
のものと同直径4～5cmのものがある。前者は、長さ25～87cmであり、住居の辺に平行して検出される材が多い。顕著なものには、材1～4があり、材1・2は壁から垂直に、材3・4は壁に平行に検出され、材3・4は桁・梁材の可能性が考えられる。後者は、長さ10～50cmであり、復元的みにと放射線状に検出される材が多い。とくに住居南側では10～20cm間隔で材5～8がみとめられ、垂木材の可能性が考えられる。板材の可能性をもつものは材9・10であり、材9は厚さ3cm、材10は厚さ0.8cmである。焼土は、厚さ4～5cmの塊状のものが多く、その他厚さ2cmの板状のものがある。焼土と炭化材との上下関係がみられるものについてはすべて、焼土が炭化材の上で検出されている。

住居北東辺中央やや南寄り、壁際から40cmの地点で、こぶし大の石を中心にして土師器甕の体部片が取りまき、焼土ブロックが集中する箇所を検出した。竈の可能性が考えられ断面で確認したところ、袖部など明らかな構造物は不明であるが、床土をほりくぼめ、焼土・炭化物が充満する燃焼部が確認された。住居1・6の竈出土状況を参考にすると、土師器甕体部片を燃焼部でめぐらせる、竈廃棄時の行為があった可能性がある。

本住居は掘立柱建物3廃絶後に構築されている。掘立柱建物3東隅のP6と本住居の切り合い関係を見ると、P6下層から、柱痕が残る掘形、ブロック混じり土、焼土・炭化物を多く含むシルト、住居床土の厚い堆積、住居廃絶時の炭化材・焼土塊包含層である。これより、建物掘形が埋まった後（ブロック混じり土のため、人為的に埋めた可能性が高い）、住居床土の間に堆積した焼土・炭化物を多く含む層が注意される。同層を平面的に確認していないため確定はできないが、焼土・炭化物の集積からみると、同層は住居構築当初の竈の可能性が考えられる。この場合、竈は、南東辺から北東辺へ改築されたことになる。

地山面では、住居南隅部でP1、西側で土坑、西隅部で浅い落ち込みが検出された。

竈の可能性  
竈廃棄時の  
行為  
掘立柱建物  
3との前後  
関係



1. 7.5YR 4/1 褐色色シルトに粗砂・小礫若干含む
- 1' 7.5YR 4/1 褐色色シルトに粗土層・炭化物若干含む
2. 10YR 3/1 黄褐色粘性のあるシルトに10YR 4/1 褐色色シルト・10YR 4/2 灰褐色シルトを含む(焼土塊・炭化材集中)
3. 10YR 3/1 黄褐色粘性のあるシルトに地山ブロック多く含む(焼土)
4. 10YR 4/1 褐色色シルトに粗砂・小礫若干含む
5. 10YR 3/2 黄褐色粘性のあるシルトに地山ブロック若干含む

遺物は、床面で土師器甕(1)・高杯(4~6)、土坑で土師器甕(2)・高杯(3)が出土した。明らかに炭化材上で出土した遺物は甕口縁部(1)である。(4)の杯部は、粘土を継ぎ足し屈曲をもって立ち上がる。(6)は内面にシボリ痕がある。

本住居は、古墳時代中期と考えられる。

図96 住居19平面・断面



1. 住居土色の3と同じ(焼土塊・炭化材集中する住居焼土)
2. 住居土色の3と同じ(住居焼土)
3. 10YR 4/1 褐色粘性のあるシルト
4. 7.5YR 4/1 褐色色シルト(陶器・灰材?)
5. 7.5YR 4/2 灰褐色シルト
6. 粗砂・小礫多く含む。炭化物少し含む。
7. 10YR 5/1 黄褐色シルト 地山ブロック・小礫含む。
8. 10YR 4/1 褐色粘性のあるシルトブロックが盛れる
9. 10YR 4/2 灰褐色シルトが盛れる
9. 5YR 4/1 褐色粘性のあるシルト
- 5~9は独立柱建物P6

図97 住居19・独立柱建物3 P6断面

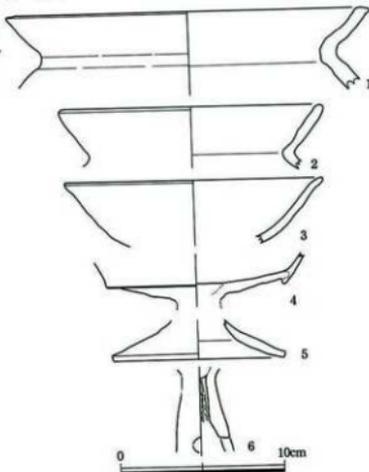


図98 住居19出土遺物

住居20 9A2トレンチの北端で検出された小形の方形住居である。南辺2.7m、東辺・西 住居 20  
辺の検出長はそれぞれ1.1m・2.1mを測る。検出面から地山面までは14cmを測り、埋土は  
小礫をわずかに含む暗褐色粘質シルト、床土類似土である。床土類似土の厚さは5cmである。

床面では、周溝・ピットを検出した。周溝は幅16cm、床  
面からの深さ8cmを測る。周溝の断面は、床面側がほぼ垂  
直である。周溝内には、直径  
5~10cm、深さ5cmの小ピ  
ットが4カ所みとめられた。P  
1は、深さ7cmのすり鉢状の  
浅いピットであり、埋土上  
で高杯脚部(3)が正立した状  
態で出土した。他に伏せた状  
態の高杯杯部(1)、横位の状  
態の高杯(2)、高杯杯部破片が  
出土した。

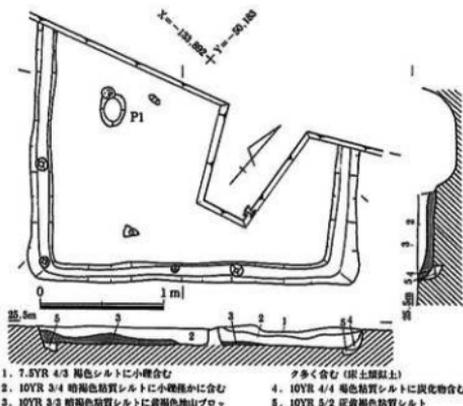


図99 住居20平面・断面

(1)は、稜線からやや内湾気味に杯部  
が立ち上がり、口縁端部は外反する。外  
面には粗いハケメがほどこされる。(2)  
は、脚部内面先端部に棒状工具でねじ  
った痕跡がある。裾部には布目圧痕がみ  
られる。

本住居は、須恵器は出土していないが、  
住居23と方向が同じであり、古墳時代中  
期と考えられる。

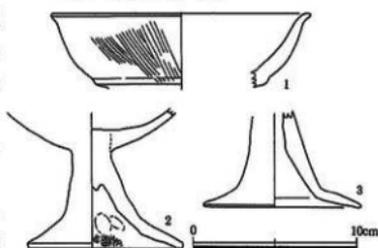


図100 住居20出土遺物

住居21 9A1・2トレンチで検出された。二重の周溝が確認され、外側住居南西辺の復原 住居 21  
長は4m、内側住居南西辺は3.3mである。検出面から地山面までは20cmを測り、埋土は  
上層から暗褐色粘質シルト、床土である。

外側住居床面では、周溝・炉・ピット  
を検出した。炉は、ほぼ住居の中心に位  
置し、トレンチ東壁沿いで検出された。  
直径40cm、深さ5cmを測り、均質な明褐  
色シルトが堆積する浅い炉である。

外側住居床土を下げた段階で内側住居  
周溝が検出された。したがって、内側住  
居→外側住居への改築が考えられる。

遺物は出土していない。

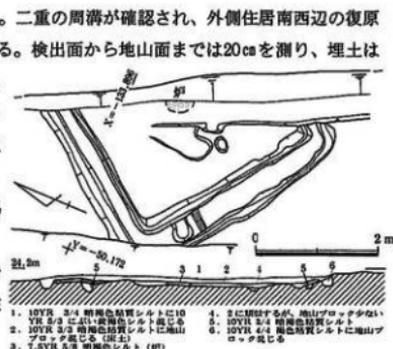


図101 住居21平面・断面

住居22・23 住居22・23 9A1トレンチの北部で重複して検出された。コ字状に周溝のみ検出されたものが住居22、全形が検出されたものが住居23である。

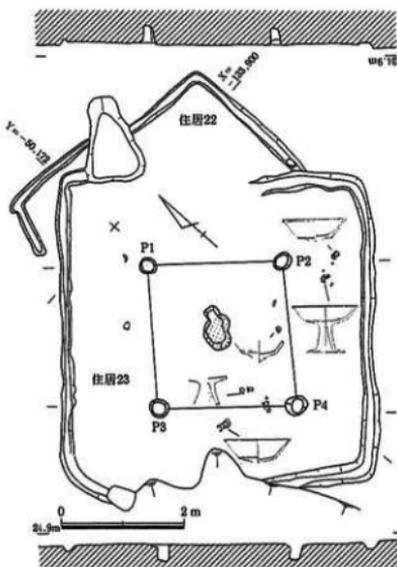


図102 住居22・23平面・断面

住居22は、北辺3.8m、東・西辺の検出長は2.2m・0.9mを測る。残存する周溝は、幅14~20ca、深さ4caを測る。床土は確認されなかった。周溝の切り合い関係から、住居22→住居23は明らかであり、住居22周溝底の高さと住居23床面の高さがほぼ同じであることから、住居22の南半部は住居23構築時に削平されたと考えられる。

住居23は、一辺5mを測る、方形住居である。埋土は、暗褐色粘質シルト(3・6)が地山面まで2~5ca堆積する。床土は確認されず、地山上で遺物が出土したことから、地山面を床面と認識した。

床面では、周溝・支柱穴・炉を検出した。周溝は、幅20~25ca、床面からの深さ5~8caを測る。支柱穴は、

P1~P4であり、直径16~20ca、深さ26~30caを測る。柱痕は確認されなかった。P1・2とP3・4間の距離は2.2m、P1・3とP2・4間の距離は2.4mである。炉は住居中央に位置し、長径60ca、短径40caの不整円形をている。深さ6caの舟底状であり、炭化物が充満する。炉の南側の地山は被熱のため赤褐色をている。床面では、高杯5点(1・2・4・5・7)・土器片・拳大の礫が出土した。高杯は、(4)が横位、(2)が伏せた状態で出土した。

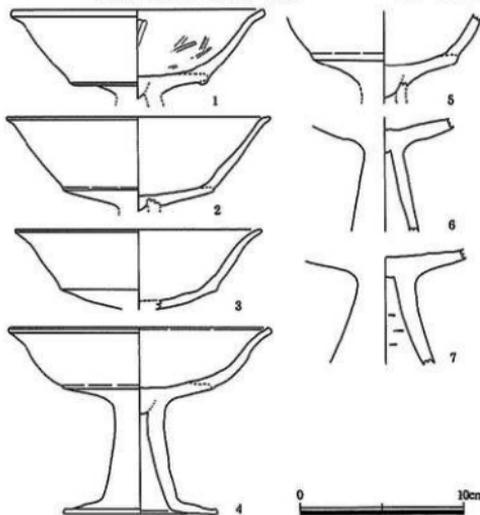


図103 住居23出土遺物

高杯杯部は、明確な稜をもつもの(1~3)、立ち上がりやや内湾するために不明確な稜をもつもの(4・5)がある。口縁端部は外反する。(1)の内面はミガキがみられる。杯一脚接合部は、円盤充填(1・2・4・5・6)のものが多い。(4)の脚部は、裾部の屈曲が強く、裾部がほぼ平坦である。

本住居は、古墳時代中期と考えられる。

**住居24** 9A1トレンチ南東部に位置し、南西辺4.8m、北西・南東辺の検出長3.0m×1.9mを測る方形住居である。検出面から地山面まで10cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトであり、明確な床土はみとめられない。

床面では、周溝・支柱穴・床溝・土坑・ピットを確認した。周溝は、内側のラインが不明瞭であるが幅20~30cm、深さ5cmを測る。支柱穴はP1・2であり、P1は直径22cm、P2は直径28cmである。P1・2間の距離は1.6mである。床溝は住居南東辺周溝から垂直に伸び、長さ1.1m、幅20cmである。床溝に接して住居南隅部で、周溝に向かって深さをます土坑を検出した。1.5×0.6m、深さ20cmであり、埋土は土師器片を含む黒褐色粘質シルトである。土坑底部で浅いピットが検出された。土坑埋土と同じ土師器片を含む黒褐色粘質シルトは、側溝をはさんだトレンチ東壁においても確認された。同層は側溝内で収束し、住居内ではみられない。断面形は、土坑と同様に周溝に向かって深さをます形状を示す。浅いピットが、一辺40cmの三角形形状に住居のほぼ中央で検出された。深さは5cmであり、住居埋土を埋土とする。被熱を受けた痕跡はない。土器は、床溝埋土上で甕(2)、床溝肩部で小形甕(6)、P1・2間で高杯脚部・土器片が出土した。甕(1)は、若干床面より浮いた状態で出土した。周溝からは、高杯(3・4・5)が出土した。出土位置から、住居廃絶直後のものは少なく、床面上というよりも埋土にともなう土器が多い。

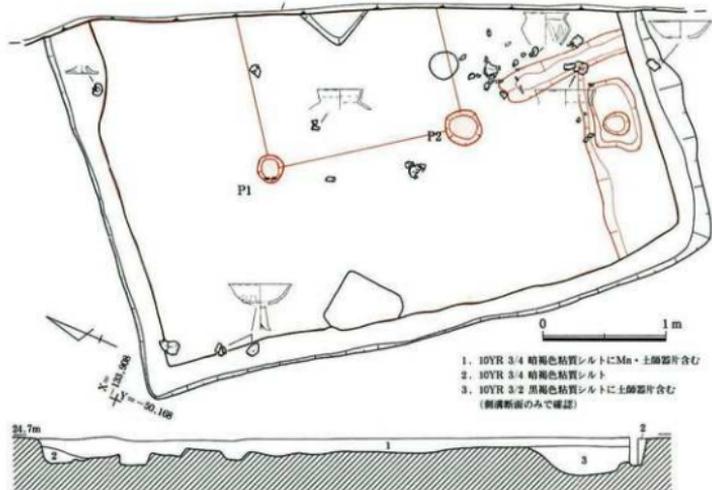


図104 住居24平面・断面

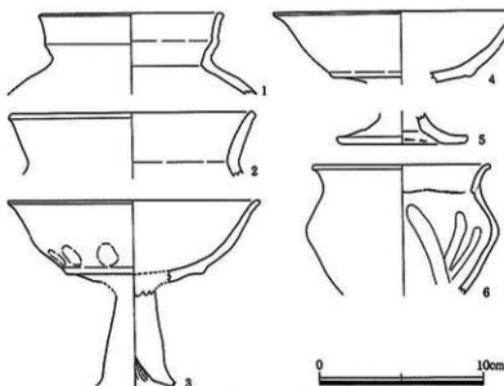


図105 住居24出土遺物

(1)は、二重口線をもつ甕である。(3)の高杯脚部は、ほぼ中実であり、内面にはシボリ痕がみられる。(6)は小形の甕である。胴部が張り出す。内面は下→上方向の指ナデで仕上げる。

本住居は、遺物から古墳時代中期と考えられる。

住居 25 住居25 9A1・2トレンチ南半で、住居24と2mの間隔をもち、平行して検出された。北東辺4m、北西・南東辺の検出長は3.2m、4.1mを測る。南西辺は削平のため検出されて

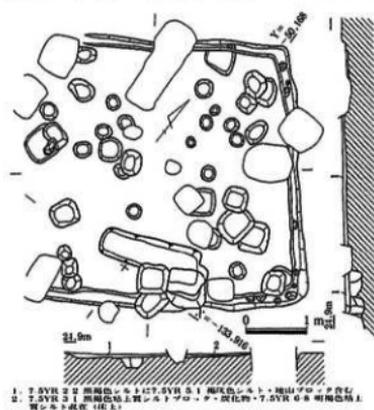


図106 住居25平面・断面

いないが、一辺約4mの方形住居になると考えられる。後世のピットが多数検出され、床面の残存状態はよくない。検出面から地山面まで4cmを測り、炭化粒を含む床土が部分的に残る。

床面では周溝を検出した。周溝は、幅20cm、床面からの深さ10cmを測る。周溝内では、住居北・東隅部で小ピットが検出された。支柱穴はピットの重複が多く、特定できなかった。遺物は外面にハケメをもつ甕口縁部片が一片出土した。

本住居は、住居23・24と方向が同じであることから、古墳時代中期と考えられる。

住居 26 住居26 8A2トレンチの中央で検出された。南接する住居27の北隅部を切って、全形が確認された。北辺2.7m、西辺2.9mを測る、小形の方形住居である。埋土は上層から、礫混じり暗褐色シルト、炭化物混じり黒褐色シルト(住居廃絶直後の埋土)、床土であり、検出面から地山面まで10cmを測る(P156参照)。

床面では、周溝・床溝・支柱穴・土坑・ピット・甕を検出した。

周溝は、甕後面を除いて検出され、床面で幅5cm、底面で幅2~3cm、床面からの深さ10cmを測る。周溝埋土は、緻密な黒褐色シルトが垂直に堆積するものである。南辺周溝では、周溝埋土と住居壁間で、幅2cm、床面からの深さ13cmの緻密な褐灰色シルトが部分的ではあるがみとめられた。また、周溝内側の床面下において、幅10cm、深さ12cmの地山ブ

ロック混じり土が、とくに住居西辺で顕著にみとめられた。当初、褐灰色シルトを板壁の痕跡、黒褐色シルトを板壁の抑え土、地山ブロック混じり土をこれらの作業で攪乱を受けた土と認識した。その後、隣接する箇所で見本市教育委員会が実施された堂池東遺跡第7次調査で検出された竪穴式住居1の報告にふれ、年代は異なるものの、同様の周溝埋土、暗褐色土(黒褐色土)

を板壁、地山ブロック混じり土を埋め戻し土と認識されたことを知った。本住居でみとめられた褐灰色シルトは部分的な検出であることから、後者の認識にも賛同でき、現時点では、二通りの認識を示し、今後の良好な資料をまけて判断したい。周溝は南辺中央よりやや東寄り、幅をひろげ土坑状になる。床溝は、壁から50cm離れた箇所で南・西辺に平行して検出された。断面浅いU字形をていし、深さ3cm程度であるため、地山では確認されない。西辺に平行するものは幅30cmを測り、床溝とするには幅広いが、検出状態が南辺に平行する床溝と同様であり、床溝と認識した。

主柱穴はP1・2の2カ所で、2本柱の建物と考えられる。P1・2は、直径13~14cm、床面からの深さは20cmを測る。主柱痕はないものの、P2の先端は直径6~8cmと細くなることから、材の直径が推測される。埋土には焼土ブロックが混じり、上層を住居廃絶後の埋土が覆うことから、住居廃絶時に柱が抜き取られた可能性がある。

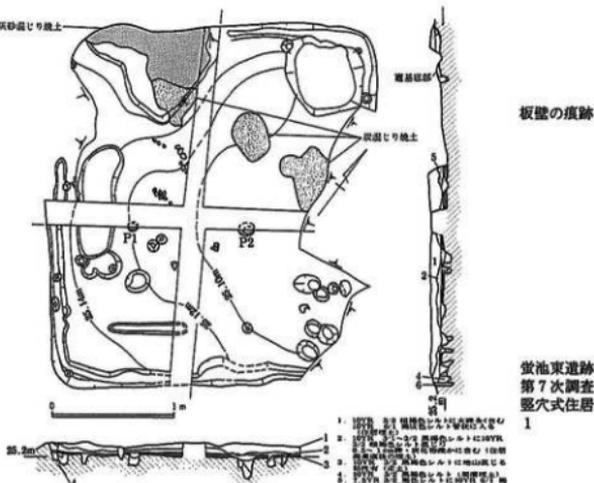


図107 住居26平面・断面

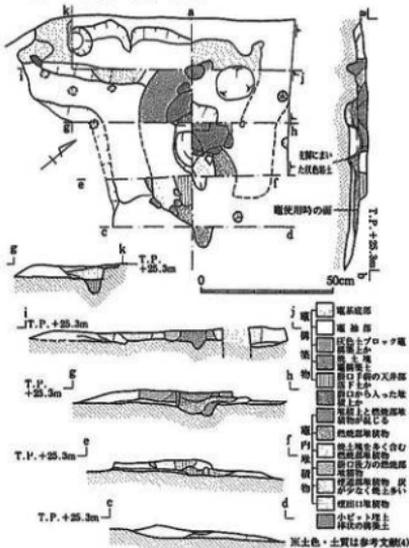


図108 住居26竪平面・断面

主柱痕はないものの、P2の先端は直径6~8cmと細くなることから、材の直径が推測される。埋土には焼土ブロックが混じり、上層を住居廃絶後の埋土が覆うことから、住居廃絶時に柱が抜き取られた可能性がある。

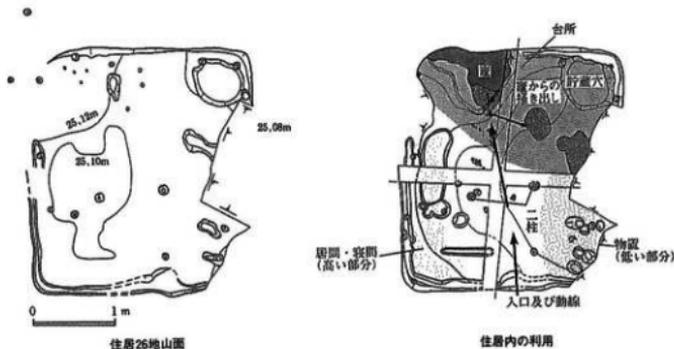


図109 住居26地山面 住居内利用の復原

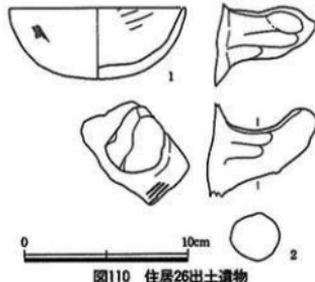


図110 住居26出土遺物

土坑は、住居北東隅部で検出された。ほぼ垂直に掘られたもので、一辺60cm、深さ23cmを測る。壁際には周溝がめぐり、壁からは一段周溝の段をもって落ちる。周溝内側の部分では、土坑の端と隅部の3カ所で小ピットが検出された。住居の壁体を支える杭跡であろうか。埋土は上層から、住居埋土、炭化物・焼土を多く含む褐色シルト、土師器片を含む黒褐色砂混じりシルトである。土師器片以外の遺物は出土しなかった。ピットは、直径10~20cm、深さ5cmの浅い皿状のものが住居南東隅部で集中して検出された。地山まで掘りこむものは少ない。ピットが集中する南東隅部は床面が低く床土がやわらかい。

横煙道をもつ竈

竈は、北辺中央よりやや西寄りで検出された。壁際に沿ってのびる横煙道をもつ竈であり、本体は幅75cm、長さ80cm、残存高10cm、煙道部をいれると幅110cmを測る。袖部は、住居埋土との判別が困難であったが、袖部構築土がややしまり褐色シルトブロックを含む点をもとに検出した。燃焼部中央には土師器杯(1)が伏せた状態で地山上に置かれ、周囲に炭化物・焼土粒(燃焼部堆積物)が2~3cm堆積することから、支脚としてもちいられたものと考えられる。土師器杯には灰色粘土がまかれ被熱の痕跡はないものの、非常にもろい状態であった。支脚前面の燃焼部堆積物上には焼土塊が落ちており、掛口天井部である可能性がある。燃焼部後方から煙道部にかけては炭化物が少ない。煙出口では焼土・焼土塊がみとめられることから空気にふれ高温であった可能性が考えられる。燃焼部・煙道部以外の部分では、地山上で厚さ1~2cmの褐色シルトが面的にひろがり、その上に袖部が構築される。褐色シルトには地山である明褐色シルトが混じる。同層は、竈基底部と考えられる。竈除去後地山面において、小ピットが検出された。構築時のものであろうか。

竈狭口の右手前にあたる、住居北東部の南半部では、焼土粒・炭化物が面的に検出された。これを削ると、深さ4cmの浅い皿状の土坑2カ所に焼土粒・炭化物が充満する図109

(右)のような状態となった。焼土粒・炭化物は竈内燃焼部の堆積物に類似し、住居他の部分ではみられないことから、これを掻き出したものと考えられる。

床面は、硬度差は得られなかったが、高度差は図107のように得られた。

床土除去後の地山面は、図109(左)のような状態であり、住居構築当初より、竈の設置箇所をはじめとする住居内利用が想定されていた可能性がある。

遺物は、竈支脚の土器酒杯(1)のほか、竈前面で土器片、主柱穴間で把手(2)、南東隅部のピット集中部で甕底部が出土した。

(1)は、ハケメがわずかにみられるが、磨滅のためその他の調整は不明である。(2)は、ナデで仕上げられ、把手下にはタタキがみられる。

本住居は、古墳時代中期と考えられる。

本住居については、検出状態から、図109(右)のような住居内利用が想定された。詳細は、第4節まとめにあげた参考文献(4)を参照されたい。

住居27 8A2トレンチ南半部で検出された。方形住居の北隅部であり、隅部は住居26に切られる。検出長は北西辺2.2m、北東辺1.5mである。住居は、ほとんど削平された状態であり、部分的に厚さ4cmの暗褐色シルトの住居埋土と床土が残る。

床面では、周溝・ピット・炉が検出された。周溝は、幅14cm、床面からの深さ6cmを測る。周溝内では、直径5cm、深さ7cmの小ピットが検出された。周溝埋土は、黒褐色粘質シルトであるが、周溝の下および内側の部分で5cm程度、埋土と地山土が混じる部分がある。ピットは、直径10~25cm、深さ7~27cm

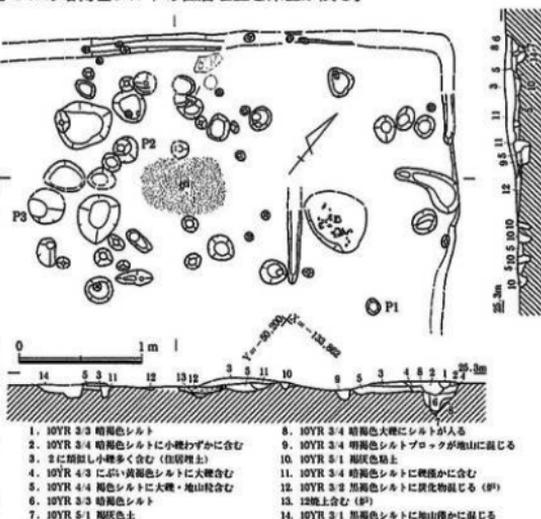


図111 住居27平面・断面

のものが、炉の西側を中心に多数検出された。P1~P3が深さ20cm以上を測るが、規則的に並ぶものではなく、主柱穴は不明である。炉は北西辺から1m離れた地点で検出された。長径60cm、短径35cm、深さ3cmの浅いものである。炉には炭化物が充満し、炉の底部北側には焼土がみられる。

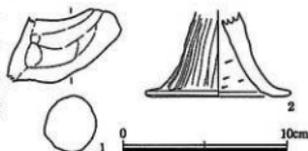


図112 住居27出土遺物

遺物は、炉の北側50cmのところで把手(1)が出土した。また、炉の東側80cmのところで土器片が70×50cmの範囲で集中して出土し、土器片には高杯脚部(2)が含まれた。

本住居は、古墳時代中期と考えられる。

住居 28  
黄色粘土で構築された竈

住居28 8A3トレンチの北西隅部で検出された。ここでは、住居9・10・28が重複して検出されたが、攪乱・削平のため切り合い関係は確認できなかった。本住居は黄色粘土で構築された竈の存在がまず確認され、周辺を精査するなかで、竈と住居南西隅部が検出された。検出長は、西辺80cm、南辺1.4mである。検出面から地山面までは12cmを測り、埋土は上層から小礫混じり暗褐色シルト、床土である。

床面では、竈・土坑・ピットが検出された。竈は、西辺に位置し、長さ1.05m、幅70～85cmを測る。袖部は、床土上で黄色粘土をもちいて構築される。黄色粘土は、住居壁を掘り込む煙出口部分を除いて馬蹄形に検出された。北側袖部焚口側はやや外向きに開く。袖部の幅は10～25cmを測り、高さ5～9cmが残存する。焚口から60cm入った地点で、破砕した倒位の小形甕(1)が検出された。小形甕は、炭化物をわずかに含む褐色粘質土上に口縁部を置き、焼土・炭化物を含む燃焼部堆積物に10cm程度埋まることから、竈構築時からの支脚と考えられる。小形甕内部の土は、小形甕の土(炭化物をわずかに含む褐色粘質土)に類似し、被熱する。同様の土は、燃焼部をのぞく焚口から煙出口まであり、袖部下にはない。竈内部には、この層とともに住居床土に類似するしまった土があり、両層ともに、竈構築時の竈内部の整地土と考えられる。燃焼部は、やや掘り込まれ、とくに焚口から向かって左奥にあたる袖部内側は被熱のため焼土化が著しい。焚口および竈脇では、直径5～10cmの黄色粘土ブロックが炭化物を含む焚口堆積物上面および住居床面でみられた。

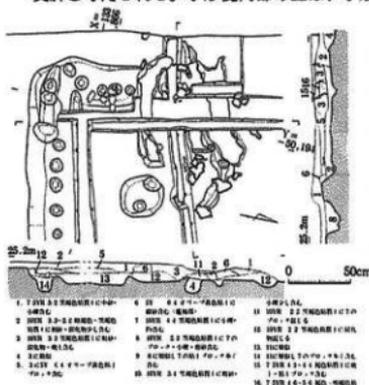


図113 住居28竈平面・断面

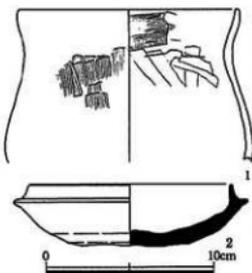


図114 住居28出土遺物

住居絶時に竈が破壊された可能性が考えられる。煙出口は、幅・長さともに13cmを測る。遺物は、支脚の小形甕周辺で須恵器片、焚口・煙出口で土師器片、北側袖部脇住居床面上で須恵器杯身(2)が割れた状態で出土した。周溝は確認されなかったが、小ピットが住居隅部を除き、壁沿いに並んで検出された。直径10cm、深さ10～15cmを測る、垂直に掘り込まれたピットである。

本住居竈が、西辺中央に位置するものと仮定すると、住居は一辺2.4mの非常に小形のものとなる。竈袖部がやや北側に開いており、燃焼部焼土が左奥に位置することからも、竈は住居西辺中央より南寄りに位置する可能性が考えられ、この場合住居辺長は2.4m以上になる。

(1)の小形甕は、頸部の縁が不明瞭であり、胴部外面に縦方向ハケメ、口縁部内面に横方向ハケメ、胴部内面に板ナデをほどこす。

本住居は、古墳時代後期と考えられる。

住居29・30 8A3トレンチ中央で、重複して検出された。攪乱・削平が著しく、周溝で直接切り合い関係は確かめられなかったが、住居30の北東隅部が検出当初より明瞭に検出されたことから、住居29→30と考えられる。

住居29は、北辺4.2m、これから屈曲する東・西辺が60~80cm、その他東・南辺が部分的に検出された。検

出面から地山面まで4cmであり、埋土は炭化物をわずかに含む黒褐色粘質シルト、床土である。床土は削平のため、周溝周辺で部分的に検出されるのみである。床面では周溝を検出した。周溝は、幅10cm、床面からの深さは5cmを測る。

住居30は、検出長北辺3.2m、東・西辺1.0m、南辺4.4mを測り、一辺4.4mの方形住居になると考えられる。埋土・床面の状態は住居29と同じであり、残存

状態はよくない。床面では、周溝・主柱穴・竈を検出した。周溝は、幅10~18cm、深さ8~12cmを測る。主柱穴は、P1~P4である。直径20~38cm、深さ20~52cmを測る。P3・P4では、直径14cmの柱痕がみられた。掘り埋土は、黄色粘質シルトであり、竈構築材と類似する。竈は、北辺中央で痕跡のみがみとめられた。袖部基底部と燃焼部底部が残存する。

遺物は、住居30東隅部で、土師器高杯(1)・甕底部(2)が出土した。(1)は、内面にシボ

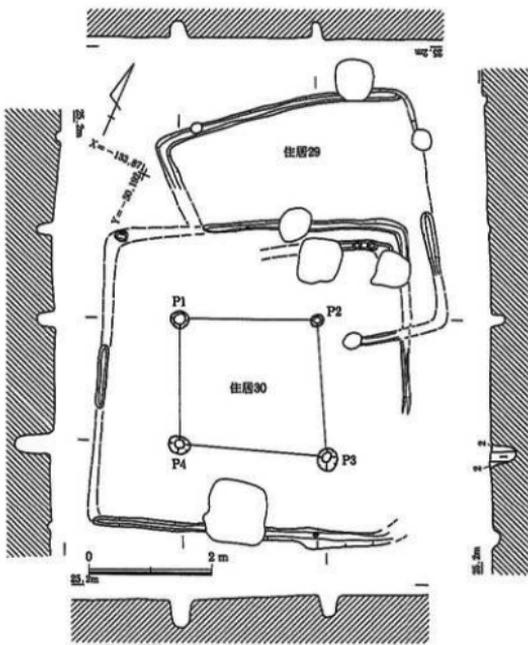


図115 住居29・30平面・断面

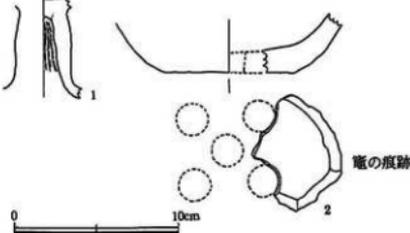
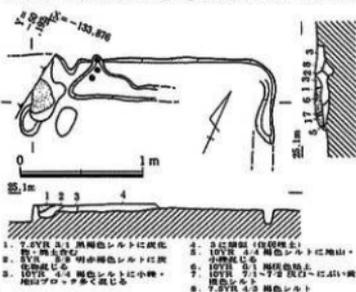


図116 住居30出土遺物

リメを残す。(2)は底部の1/6程度の残存である。底部は屈曲して立ち上がるものではなく、やや面をもって曲線状に立ち上がる。底部は平面をなし、円孔が穿たれる。残存部から復原すると、中央に1、周縁に4の円孔をもつ底部となる。

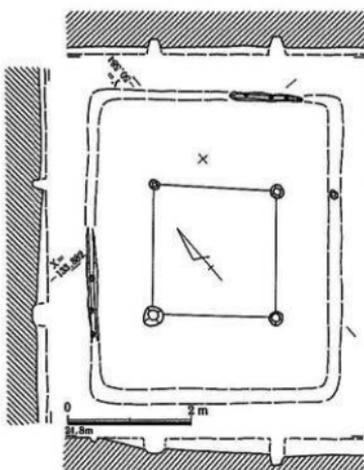
住居30は、古墳時代後期の土坑2に切られることから、古墳時代中期の可能性が高いと考える。

住居 31 住居31 8A3トレンチ南半部は、中世の水田造成にともなう削平のため、北半部に比べ一段低く地山が検出された。住居31もこれに伴いその大半は削平され、住居北東隅のみが残存する。検出長は、北辺1.7m、東辺65cmである。周溝は、東辺のみで検出され、幅12~20cm、深さ10cmを測る。竈は、東側半分が残存する。袖部は幅15~20cmである。袖部は、住居埋土に類似するが、地山ブロックを含む点で区別できる。焼焼部は焼土・炭化物が5cm残存し、下面は被熱のため赤褐色ををている。焚口から焼焼部にかけて、舟底状に地山が掘りくぼめられる。竈の東側では、浅い土坑が検出された。北壁をわずかに切り込む点



住居 32

図117 住居31平面・断面



住居域の継  
続

図118 住居32平面・断面

が注意された。深さ4cmを測り、東壁にちかづくにつれ浅くなる。埋土は、住居埋土に似るが、地山ブロック土をわずかに含む。底部北壁際には直径5cmの小ピットが3カ所検出された。遺物は出土していない。

本住居は、住居30と方向が同じであることから、古墳時代中期の可能性が高いと考えられる。

住居32 8A3トレンチ南半部中央で検出された。住居31同様、中世水田造成時の削平

のため、周溝・主柱穴のみの検出である。周溝は、北東・北西辺が、1.1m・1.9m検出された。主柱穴は4カ所確認したが、削平のため掘形下半部を残すのみである。直径20~30cmを測り、柱痕は不明である。周溝から床面の高さを推定すると24.8mとなり、柱掘形の深さは、30~50cmと考えられる。

遺物は出土していない。

本住居の検出によって、8A~9Aトレンチにかけて、原地形はゆるやかに下降しながら住居域が続くことがわかった。

### (3) 古墳時代以降の遺構と遺物

#### 1 掘立柱建物

掘立柱建物21棟の他、多数のピットを検出した。これらの中には、出土遺物がなく、時期の特定が困難な建物も多くあり、ここでは一括して古墳時代以降として扱った。包含層出土遺物の中にも、平安時代後半のものが極めて少ないことや、周辺遺跡の調査結果でも、平安時代の集落がなくなることから、当遺跡の動向もこれと軸を一つとするものと推定され、この取扱も妥当と考えられる。

建物群は、棟方向によって、1-北東方位の建物、2-北西方位の建物に2大別され、また、その分布から、A-4A・5Aトレンチ西側に展開するグループ、B-8Aトレンチに展開するグループ、C-9Aトレンチ南側に展開するグループに分けることが可能である。また、今回調査区の最も高く平坦で古墳時代の大型掘立柱建物が検出された空間に1棟も検出されていない点が注目される。

**掘立柱建物4** 南北3間(5.3m)、東西3間(5.3m)分を検出した。更に東側へ1間ないし2間分広がる東西棟の掘立柱建物と推定する。柱間は、1.8mでほぼ等間隔である。西側掘形は一辺55cm、深さ30cmとしっかりしており、柱痕跡も明瞭で、直径20cmの規模である。掘形埋土は、地山の粘土をブロック状に多く含む層と黒褐色シルトの2層に大別され、焼土・炭化物等の混入は認められなかった。土師器の細片が少量出土しているが、器種・時期とも判別できなかった。

**掘立柱建物5** 住居1と重複している。2間×3間の南北棟の建物である。掘形の向きは不揃いであるが、一辺40cm、深さ35cmの方形で、柱痕跡は直径18cmの規模である。妻側中央のみ直径30cmの円形をていし、深さ15cmと浅い。黒褐色粘土質シルトと明黄褐色シルトがブロック状に混在している。出土遺物はない。

**掘立柱建物6** 南北3間 東西3間の総柱形式の建物と推定される。西側柱列は近世以降の溝によって削平されている。柱間は不揃いで、掘形26から17の南北方向で、1.9-1.7-1.4m、掘形26と28、

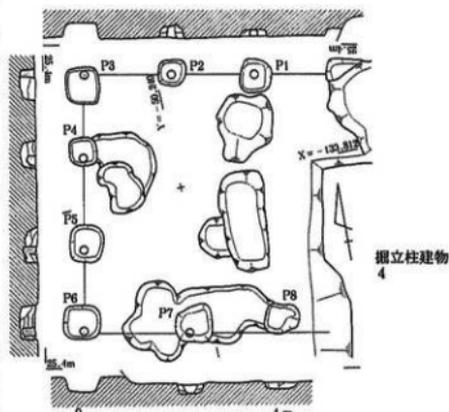


図119 掘立柱建物4 平面・断面

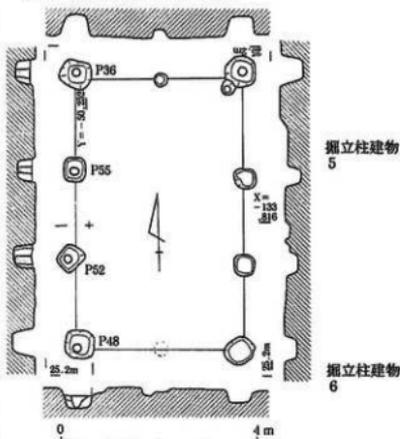
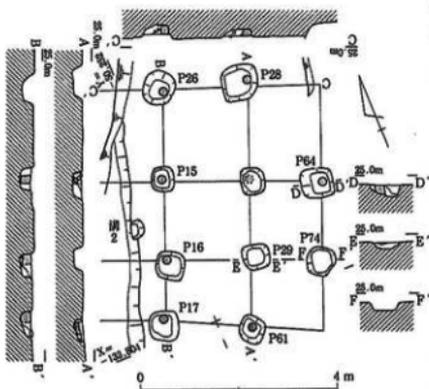


図120 掘立柱建物5 平面・断面



掘立柱建物  
7

図121 掘立柱建物6平面・断面

棟の建物である。柱間は、南北梁方向で2.1~2.2m、東西桁方向掘形5から9までで、2.4~2.0-(1.7)-(1.9)mとばらつきがあり、また、梁方向の柱のとおりが悪い。掘形は一辺70~80cmと比較的大きく、また、柱痕跡の中には、抜き取られたような堆積状況を示すものもある。柱痕跡は25cm前後の大きさである。掘形からは、布目瓦細片や須恵器杯身高台片の他に、土師器皿(1・2)や須恵器壺口縁部(3)が出土している。土師器は器表面の磨減が著しい。(1)の底部外面には指おさえの後、不定方向のナデが施されている。

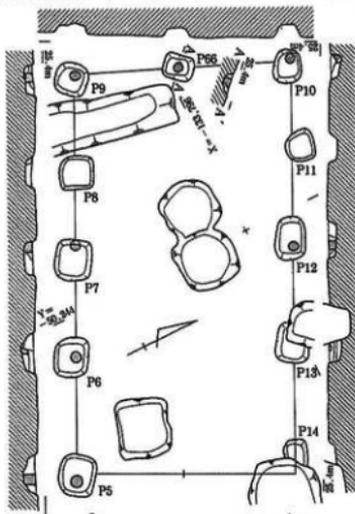


図122 掘立柱建物7平面・断面

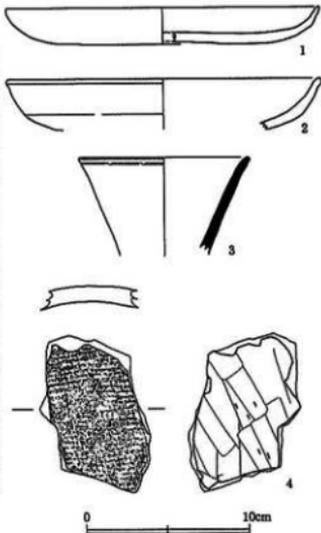


図123 掘立柱建物7出土遺物

(2)は調整の観察ができなかった。

**掘立柱建物8** 2間×4間の南北棟の建物である。明褐色シルトを埋土とする直径30caのピットで構成される。柱間は、梁方向で1.7m、西側桁方向で1.3-1.4-1.0-1.0m、平均1.7mを測る。出土遺物はない。

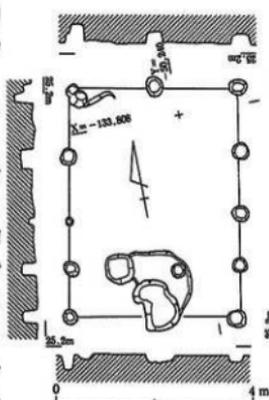


図124 掘立柱建物8平面・断面

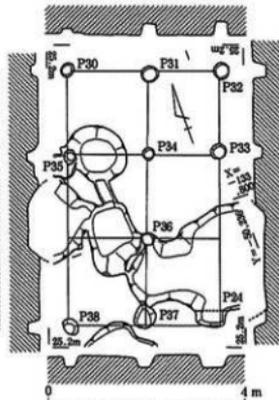


図125 掘立柱建物9平面・断面

**掘立柱建物9** 2間×3間、面積約16㎡であり、建物8と同規模の南北棟の建物である。建物8とは約2~2.5mの近接した位置にある。

**黒褐色シルト**を埋土とする直径25~30caのピットで構成される。柱間は、梁方向で平均1.55m、桁方向で平均1.8mで、建物内部にも東柱と考えられるピットがある。土師器がわずかに出土しているが、器種・時期とも不明である。

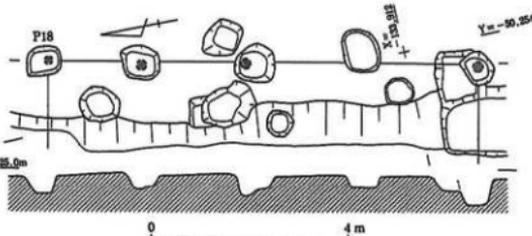


図126 掘立柱建物10平面・断面

**掘立柱建物10** 南北方向に4間分のみが検出された。周辺のピットの分布状況から西側に展開する南北棟の建物と推定される。掘形は一辺70caと比較的大きい。柱痕跡は不明瞭で、掘形底面に残る痕跡によって位置と規模が推定される。直径30ca前後の太さである。柱間は、北から2.0-2.0-(2.4)-(2.4)mを測る。掘形内には、小礫や大礫が多く混入している。比較的大形の建物が予想される。出土遺物はない。

**掘立柱建物11** 2間×3間の南北棟の建物である。建物9と同様黒褐色シルトを埋土とする直

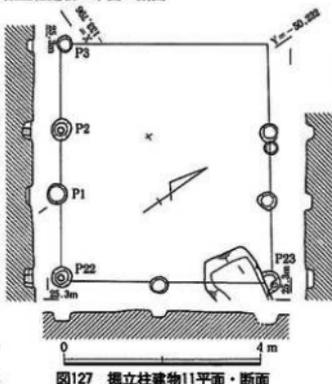


図127 掘立柱建物11平面・断面

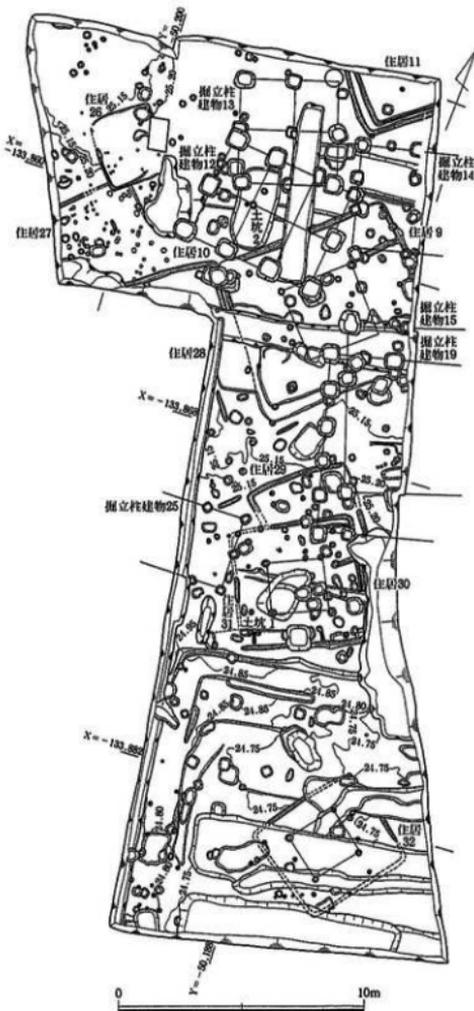


図128 8Aトレンチ平面

径40cmのピットで構成される。掘形2・22で直径18cm前後の柱痕跡が確認された。柱間は、梁方向で平均2.17m、西側桁方向で1.74—1.31—1.70m、平均1.58mを測る。

8A・8A3トレンチ北半部では、方形のピットが多数検出され、複数棟の建物が存在していた事を示している。8A3トレンチ南半部は後世の水田開発によって大きく削平を受けているが、その部分においても古墳時代住居の周溝が検出されている事から、掘形の分布が当時の建物の広がりを反映していると考えてよく、南北25mの幅をもって調査区外へ展開する建物群と推定される。西接する8A2トレンチでは未検出であるが、未調査区を隔てた西2～3mの地点における豊中市教育委員会の調査においても、同規模の掘形が数個検出されている事から、この付近にも一群が予想される。検出された建物は、総柱形式の建物で倉庫と推定されるものが多い点と、比較的大形の建物が推定され

る点に建物群としての特徴をうかがう事ができる。また、重複関係や位置関係などから、複数の変遷があったものと推定されるが、各時期を知ることでできる遺物の出土が少ない。掘立柱建物12 2間×3間の東西棟の総柱形式の建物で、倉庫と考えられる。土坑2と重複関係にあるが、新旧関係を判別することができなかった。しかし、7世紀後半の土器器皿を出土した建物13より新しいことから、土坑2→建物13→建物12となる。掘形は一辺70

掘立柱建物  
12

~75cm、深さ40cm、柱痕跡も明瞭で直径20~25cmの規模である。掘形底面は24.6m~25mとほぼ揃っており、また、10~20cm、柱が沈下しているものも見られた。掘形44・45では柱痕跡は、掘形埋土中程で検出され、また、掘形15では柱痕跡上部が南側へ広がっていることなどから、柱が抜き取られたと考えられる。掘形埋土には一様に1~3cm大の地山粘土のブロックや小礫が混入しており、また、一見版築状につき固められたような堆積状況を示しているものもある。

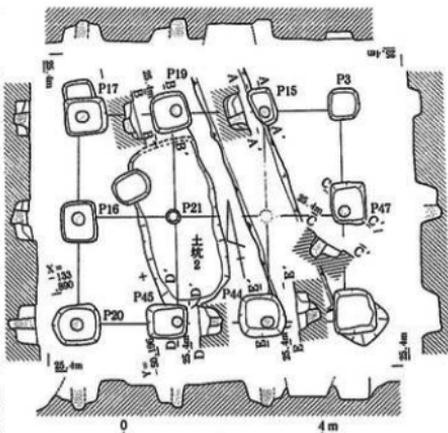


図129 独立柱建物12平面・断面

柱間はバラツキがあり、掘形17~20で2.05~2.2m、掘形17~3で1.95~1.95-(1.54)m、掘形20~44で2.05~1.80-(1.55)m、平均2.0mを測る。各掘形からは土師器・須恵器が出土しているが、細片のため器種・時期とも識別できなかった。

独立柱建物13 2間×2間の南北棟の総柱形式の建物で、倉庫と考えられる。建物12と重複している。掘形は、一辺70~80cm、深さ30cmで柱痕跡が認められないものもあるが、直径20~25cmの規模である。柱間は、梁方向が1.85~2.05m、桁方向が2.13~2.2mで桁方向の方が

長い。出土遺物は少ないが、掘形13からは土師器皿(1)が出土している。器表面の磨滅が著しく細部の観察は困難であるが、体部下半から底部に

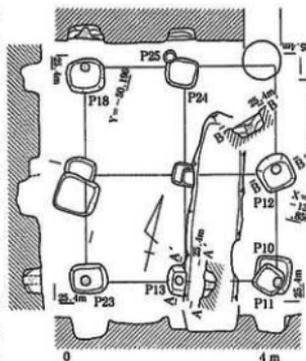


図130 独立柱建物13平面・断面

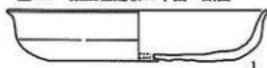


図131 独立柱建物13出土遺物

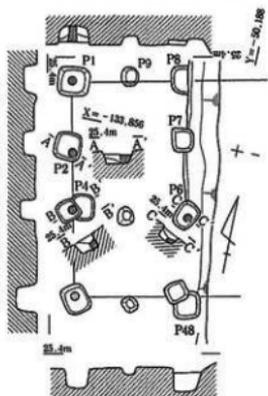
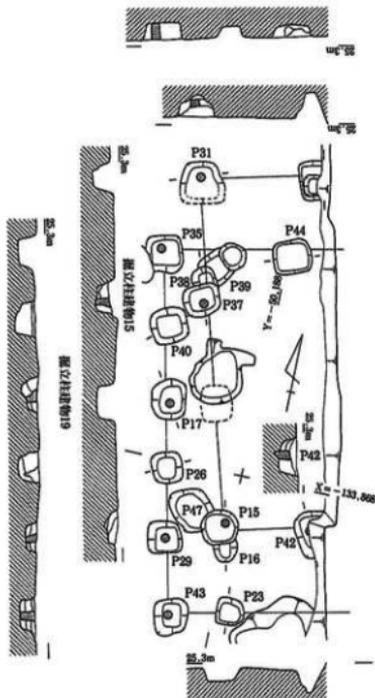


図132 独立柱建物14平面・断面

掘立柱建物  
14



掘立柱建物  
15

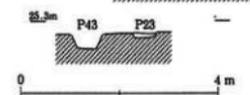


図133 掘立柱建物15・19平面・断面

掘立柱建物  
19

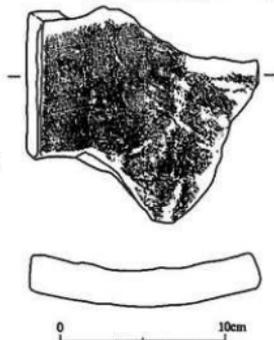


図134 掘立柱建物19出土遺物

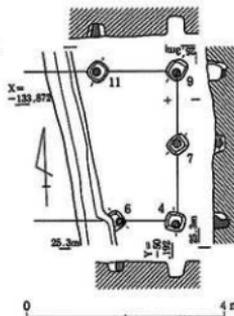


図135 掘立柱建物25平面・断面

かけては不定方向のナデ調整が施され、煤の付着が認められる。口径15.9ca、高さ3.2caの土師器皿Aである。

掘立柱建物14 南北3間、東西1間を検出し、更に東側へ展開する建物である。直接の重複関係は認められないが、建物12とは0～1m、建物15とは3mの近接した位置にある。柱間は、東西2.3mに対して南北平均1.4mと短いことから、2間×2間もしくは3間×3間の20～30㎡程度の総柱形式の建物と推定される。柱痕跡は、直径15～20caである。各掘形から土師器、須恵器杯身高台などが出土しているが細片のため詳細な時期については不明である。

掘立柱建物15 南北3間、東西1間を検出し、更に東側に展開する南北棟の建物である。掘形のなかには視乱と重複し未検出のものもある。一辺75～80ca、深さ40ca、柱痕跡は直径20ca前後の規模の建物である。掘形37の柱痕跡中には1×3ca大の炭化材が多く含まれた。柱が抜き取られた堆積状況を示す掘形もある。この柱痕跡の位置は掘形底面の痕跡と堆積状況から推定した。柱間は、東西平均2.1m、南北平均2.4

mである。土師器・須恵器などが出土しているが細片のため種類・時期は不明である。

掘立柱建物19 南北5間、東西1間を検出し、更に東側に展開する南北棟の建物である。直接の切り合い関係はないが、建物15と重複する。建物15より約5°東に振っている。掘形

は、一辺75cmで比較的揃っており、掘形底面も掘形17・29が若干浅い他は、24.7mで揃っている。柱痕跡は抜き取られた痕跡を示すものもあるが平均15cm前後である。掘形埋土には小礫や炭化材の小片の混入が認められた。柱間は、南北桁方向で平均1.5m、東西梁方向で2.1mで、桁方向の方が一定している。掘形からは土師器・須恵器の細片が出土しており、なかでも掘形40からは布目瓦、鉄滓が出土している。

**掘立柱建物25** 南北2間 東西1間を検出し、更に西側に展開する東西棟の建物と推定される。掘形は一辺40cm前後の方形で柱痕跡は直径15cmの規模である。柱間は、南北平均1.6m、東西平均1.2mを測る。土師器・須恵器が出土しているが細片のため器種・時期については判別できなかった。

9Aトレンチでも多数のピットが検出されている。地山面は、24.6~24.85mで、南に向かって緩やかに下がっている。また、包含層も厚さ10cmで良好に存在しており、比較的多くの遺物が出土している。大半が土師器・須恵器で、検出された遺構の年代もこの幅の中で考えられる。最も新しい時期のもので瓦質の三足釜の脚部が1点、他に布目の軒丸瓦が1点出土している。ピットは特に調査区南半部に集中しており、古墳時代の竪穴住居やピット同士が複雑に重複しているため、調査時点で認識された掘立柱建物は3棟のみで、これについても柱のとおりや出土遺物の検討から事実誤認であった建物もある。南端は東西方向の水路によって遺構が削平されているが、建物群は更に南側の府教育委員会試掘調査地点付近までは広がるものと推定される。

**掘立柱建物17** 東西1間、南北

**掘立柱建物25**

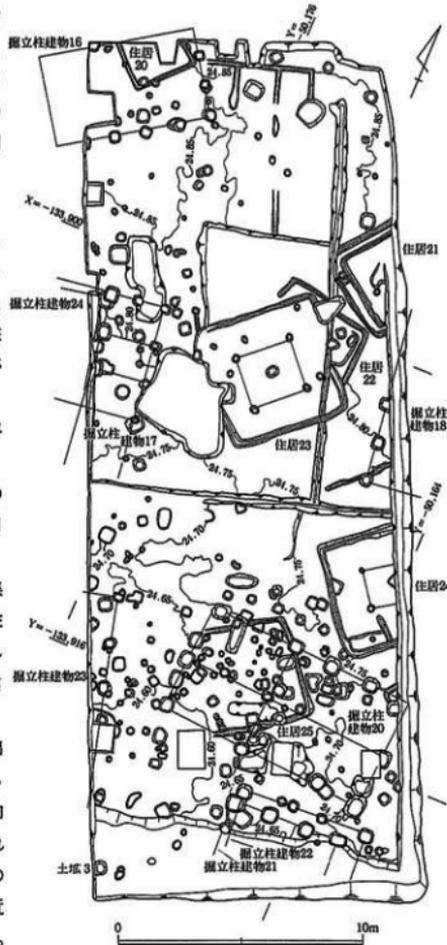


図136 9Aトレンチ平面

**掘立柱建物17**

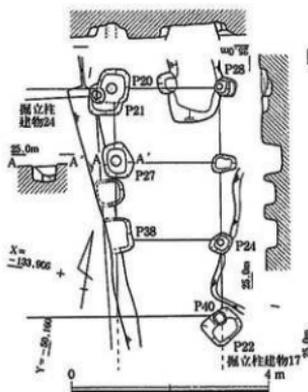
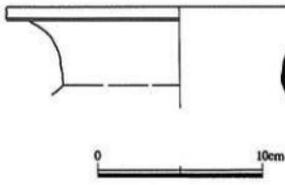
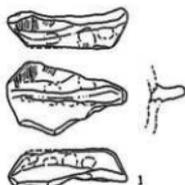


図137 掘立柱建物17・24平面・断面

2間を検出した。建物24と重複し、これよりは新しい。掘形は、 $20 \cdot 27 \cdot 38$ が一辺70cm、柱痕跡直径20cmと大きいのに対して、東側掘形28~40が一辺30cm、柱痕跡直径10cmと小さいことから建物は底付きの建物であった可能性が考えられる。周辺のピットの状況から、建物は南側へ1~2間程度と西側に展開する南北棟の建物と推定される。柱間は、南北方向が1.5m、東西方向が2.15mを測る。掘形20の堆積状況は柱が抜き取られたことを示しており、柱位置は掘形底面に残る痕跡から推定した。掘形からはP40で土師器鍋の把手、P20で須恵器広口壺口縁のほか、土師器片、



須恵器甕片が出土しているが細片のため細かな時期については判別できなかった。

掘立柱建物  
24

図138 掘立柱建物17出土遺物

掘立柱建物24

南北1間のみを検出であるが、建物17と同様西側へ展開する建物である。掘形は建物17とほぼ同様の規模である。柱痕跡は認められなかったが、その痕跡から直径20cmと推定される。褐色粘土質シルトに地山の粘土をブロック状に多数混入する埋土で一気に埋められていた。出土遺物はない。

掘立柱建物  
18

**掘立柱建物18** 建物17とほぼ棟方向を揃えて建物17の東側10mの地点に位置する。南北2間のみを検出で、東側に展開する南北棟の建物である。掘形は一辺55cm、建物18の底部分の掘形とは若干平面規模は大きい、深さが浅いことからこれも庇の掘形である可能性がある。いずれも地山の粘土をブロック状に多く含む暗褐色粘土質シルトで埋められており、柱痕跡は認められなかった。掘形33と重複する幅20cm前後の溝は、古墳時代の竪穴住居の周溝であろう。土師器細片が少量出土しているが器種・時期については判別できなかった。

掘立柱建物  
20

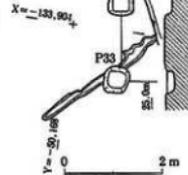


図139 掘立柱建物18平面・断面

**掘立柱建物20** 調査時点では建物21の掘形1~4と合わせて1棟の建物と認識されたが、検討の結果異なる2棟の建物と判断された。南北2間、東西5間の東西棟の建物である。建物内部にも掘形44の様に東柱と思われる位置にあるものもあるが、東側2個については未確認である。掘形は一辺65~70cmの方形で、確認された柱痕跡は、平均直径18cmの規模である。柱間は、梁方向では一

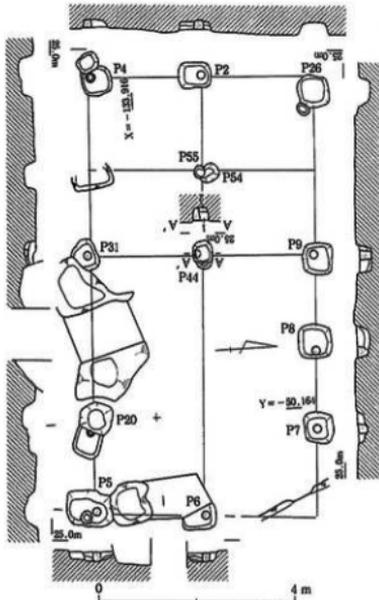


図140 掘立柱建物20平面・断面

**掘立柱建物22** 両側は削平され、東西3間、南北1間の検出である。掘形は、東西両端のP22とP12が一边60~65cm、深さ20cmと大きく、内側2つが一边45cmと小さく浅い。柱痕跡は、東西両端の掘形でのみ確認され、直径20cm前後である。柱痕跡内には炭化物や中礫が混入しており、掘形12では抜き取られた痕跡を示す。各掘形間の距離は、西から1.5-0.9-1.4mと中1間が約半分近く短い。妻側の中1間が短い南北棟の建物が想定される。出土遺物はない。

掘立柱建物  
21

掘立柱建物  
22

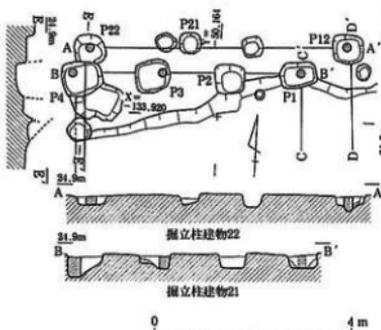


図141 掘立柱建物21・22平面・断面

定しており2.3mであり、桁方向ではバラツキがあり、掘形7-8-9が1.95-1.60m、掘形4-31が3.65mで平均1.8mである。掘形内には5mm程度の焼土粒や炭化物片を多く含むもの、柱が抜き取られた柱痕跡を示すもの、掘形2のように柱痕跡内に大礫が混入しているものがあった。遺物は把手、須恵器杯(図143)が出土しており、奈良時代と考えられる。

**掘立柱建物21** 東西3間のみ検出され、南側は溝1によって削平されているため棟方向は明らかではない。柱のとおりは、N-85°60'-Wを向く。建物22と重複しており、これより新しい。掘形は一边60~70cm、断面で確認された柱痕跡は直径28cmと大きく、建物12のような総柱形式の建物も想定される。柱は抜き取られた堆積状況を示しており、掘形埋土には、多量の焼土と3mm程度の炭化物が混入していた。出土遺物はない。

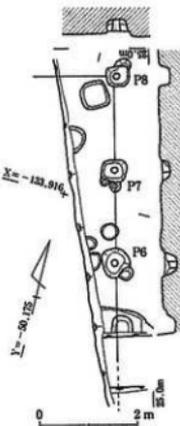


図142 掘立柱建物23平面・断面

掘立柱建物 掘立柱建物23 南北3間のみが検出された。西側に展開する南北棟の建物と推定される。

23

さらに南側へのびる可能性があるが、調査区境のため明らかではない。掘形は、一辺40～50cmの方形で比較的辺を揃えて並んでいる。柱痕跡は抜き取られた状況を示すものもあるが、確認できたものでは直径15cmを測る。柱間は、1.95mで揃っている。掘形6・7の柱抜き取り後の堆積土中には焼土・炭化物の混入がみとめられた。出土遺物はない。

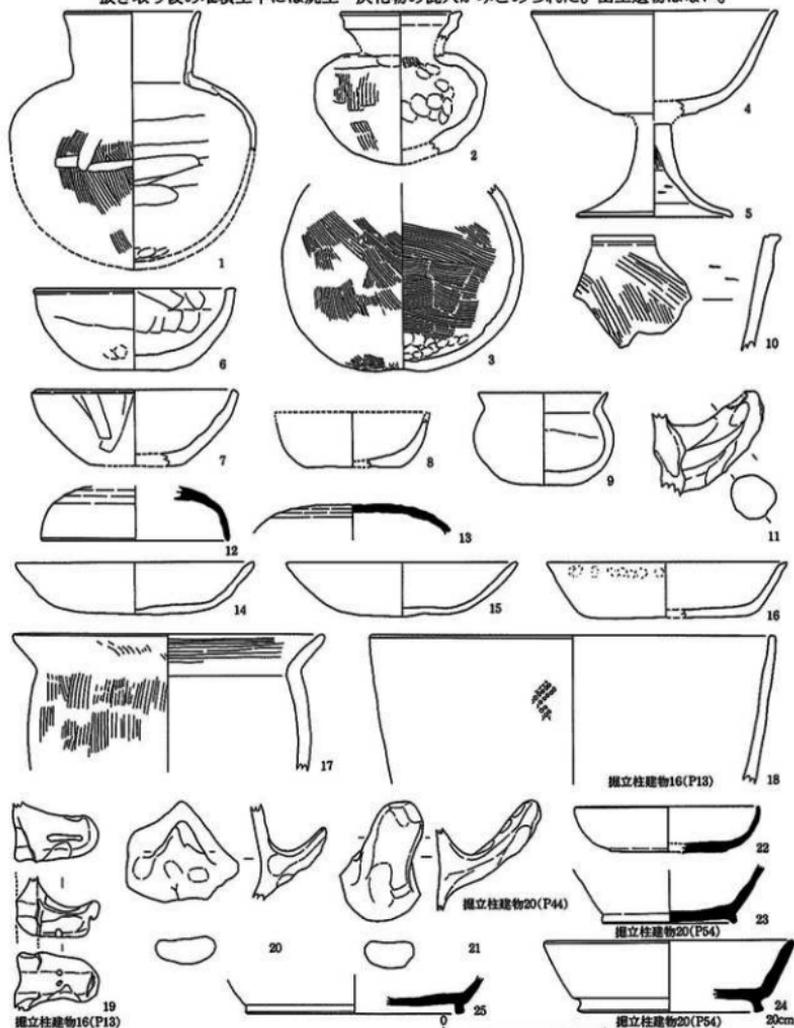


図143 掘立柱建物・ピット出土遺物

2 土坑

土坑1 8A3トレンチのほぼ中央、住居30内で検出された。住居30検出面で確認され、住居30→土坑1の新旧関係である。

土坑は、最大長2.65m、最大幅1.6m、深さ40cmを測る。平面は不整な長円形であり、北側が段をなしゆるやかに傾斜するのに対し、その他の面は急な角度をもって掘り込まれる。埋土は上層から、炭化物・礫を多く含む細砂混じり黒褐色シルト、炭化物・地山ブロックを含む細砂混じり黒褐色シルト、炭化物を含む細砂混じり暗褐色粘質シルトである。3層のほかには、肩部に炭化物をわずかに含む黒褐色粘質シルトが堆積する。遺物は、全層で出土し、とくに中～下層で多い。遺物は、土師器壺(1)・鍋(2～4)、須恵器杯(5～15)・短頸壺(16)・甕(17)・器台(18)が出土し、とくに須恵器杯はほぼ完形のものが多い。土坑底部は掘り込まれたような形であり、底面では須恵器杯が並べ置かれたような状態で2個体(7・9)出土し、中・下層境で直径10cmの礫が2個体出土することから墓墳の可能

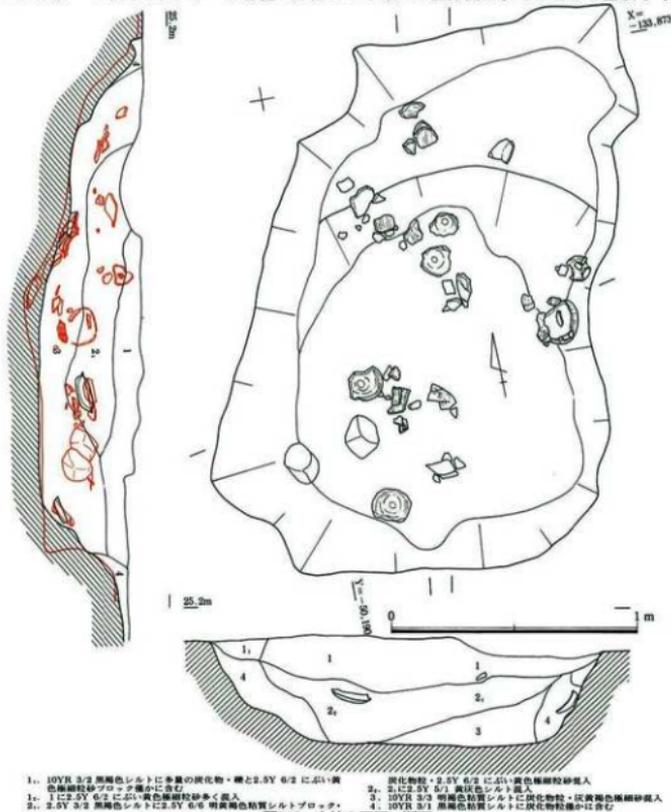


図144 土坑1平面・断面

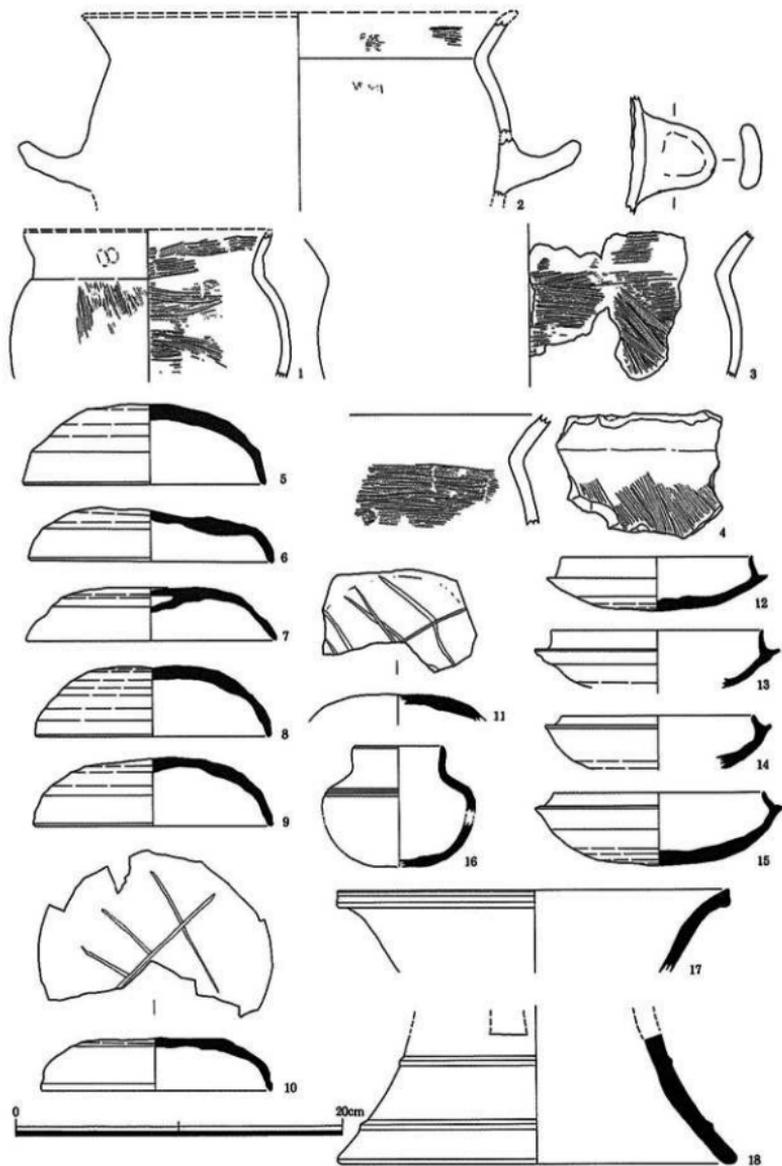


图145 土坑1出土遗物

性も考えられるが、溶着した須恵器杯蓋(9)や破片が多く含まれることから廃棄土坑の可能性も残す。

(7)は器壁に気泡が含まれ、内面におおきくふくらむ。(9)の天井部には高さ5mm、面積約 $1 \times 3$ cmの釉の塊が付着する。(10・11)は天井部にヘラ記号が記される。(16)は肩部に2条の凹線がめぐり、胴部下半は不定方向のナデである。須恵器杯には、桜井谷竈跡群産の須恵器に特徴的な、黒色粒子を多く含むものがある。これら出土須恵器については、胎土分析を実施しており、P159を参照されたい。

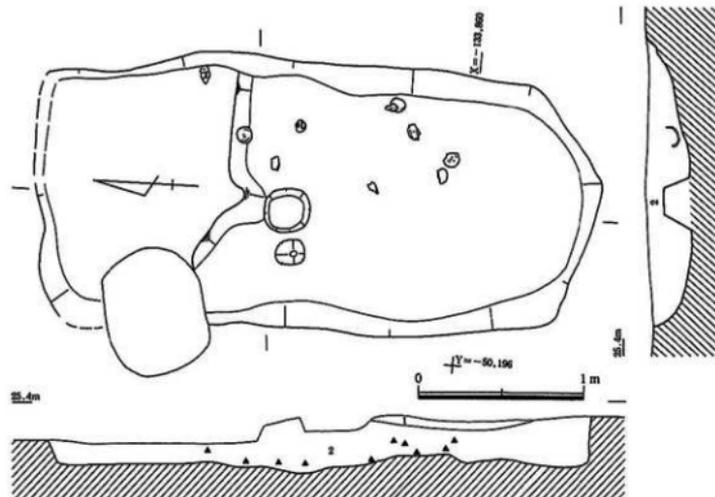
本土坑は、古墳時代後期後半と考えられる。

土坑2 8A1トレンチの中央で検出された南北方向の長方形の土坑である。長さ3.45m、幅1.65m、深さ20cmを測る。短辺がほぼ直角に掘り込まれるのに対し、長辺は浅いU字状に掘り込まれる。埋土は、炭化物・小礫・地山ブロックを含む黒褐色粘質シルト1層である。遺物は、東側中央部で、底面もしくはわずかに浮いた状態で、ほぼ完形の須恵器杯(2~8)、土師器小形丸底壺?(1)が出土した。須恵器杯は身・蓋ともに内面を上にした状態で出土した。本土坑は、宮の前遺跡2Gトレンチ土坑1に類似し、本土坑では木棺の痕跡はうかがえなかったものの、土墳墓である可能性がある。

土墳墓の可能性

(1)は平底であり、頸部がややたちあがる。外面は、回転ナデのため幅1cmの面取り状にしあがる。底部外面は不定方向のナデである。胎土は砂粒を多く含む粗いものである。杯は、外面のケズリの範囲が大きいもの(2・5・7)と小さいもの(4・6・8)、全面ナデのものがある。

本土坑は、古墳時代後期末~飛鳥時代と考えられる。



- 10YR 5/2 黒褐色粘土質シルトに黒細砂を多く含む
- 10YR 5/2 黒褐色粘土質シルトに10YR 4/2 灰黄褐色シルトブロック・炭化物・小礫多く含む

図146 土坑2平面・断面

土坑 3

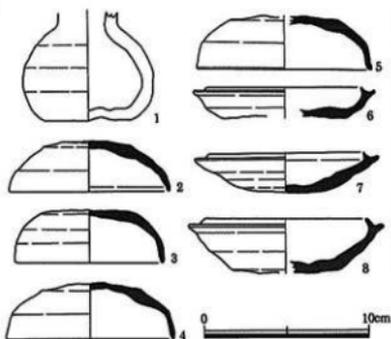


図147 土坑2出土遺物

人為的な出土状況

壺？(2)上にバケツ形土器が置かれたような、人為的な出土状態を示す。他に直径15cm・5cmの礫が出土した。

(1)は、高さ31.5cm、口径25cm、底径16cmであり、器壁は1.2~2.0cmと厚手である。外面口縁部には5条の沈線をめぐらせ、胴部は粗い縦方向のハケメをほどこす。沈線上に部分的に斜方向のヘラナデがみられる。内面は口縁部はヨコナデ、胴部は斜方向の粗いハケメをほどこす。外面には焼成時の黒斑がある。(2)は、平底の底部から直線的にたちあがる体部をもち、壺の可能性もある。器壁は薄く、内外面ともに縦方向のヘラナデで仕上げられる。

時期がくだる可能性

本土坑は、(2)からは古墳時代の遺構と考えられるが、(1)の類例をしらず、時期がくだる可能性もある。

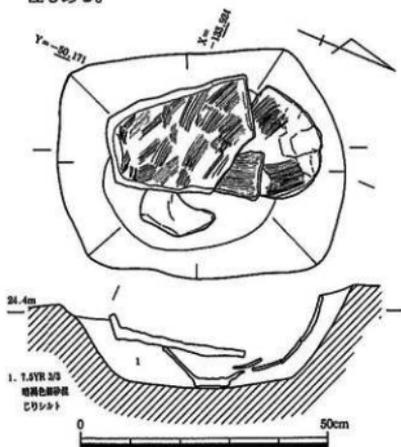


図148 土坑3平面・断面

土坑3 9Aトレンチ南端を東西にはしる溝1の西部底面で検出された。45×60cm、深さ20cmのやや長方形の土坑である。断面形は浅い掘鉢状であり、埋土は細砂混じり暗褐色シルトである。検出面からやや下がった時点で、縦に半載されたバケツ形の土師器(1)が内面を上にして横たわった状態で検出された。バケツ形土師器の口縁部の下で器壁の薄い土師器の体部が内面を上にして検出され、バケツ形土師器の下でこれにつづく平底の底部が土坑のほぼ中央底面上で出土した。土師器

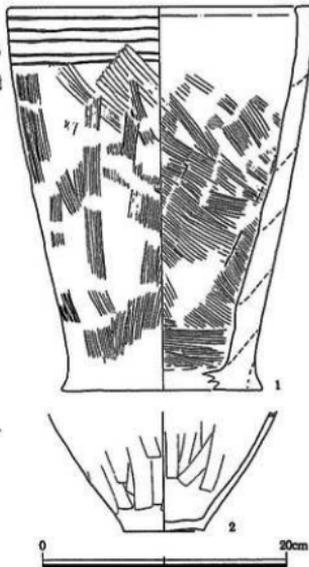
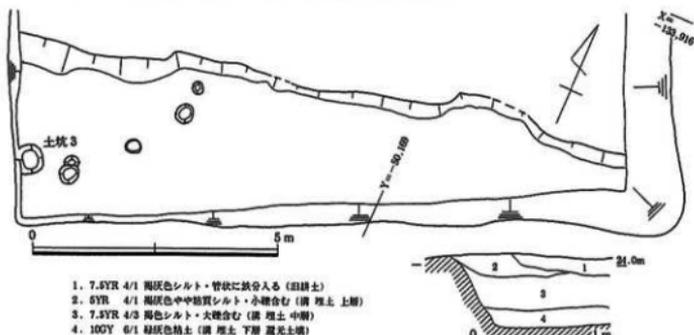


図149 土坑3出土遺物

## 3 溝

溝1 9Aトレンチの南端を東西方向にはしる溝である。12mにわたり検出され、幅80cm 溝 1  
 ～3.6mを測る。本溝は、近世遺物が出土する新しい時期の遺構であるが、麻田藩陣屋跡・  
 螢池遺跡で検出されている東西南北方向を示す溝や鋤溝などの水田遺構と方向を同じくす  
 ため、段丘上の開発を考えるにあたり重要と考えられる。



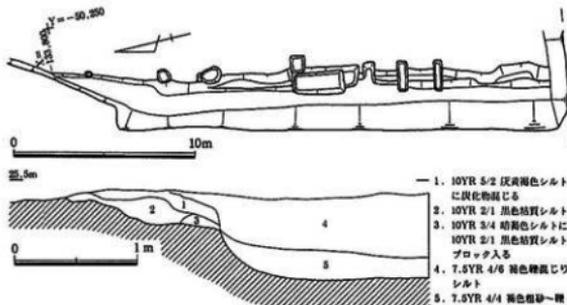
1. 7.5YR 4/1 黒灰色シルト・管状に炭が入る(埋土上層)
2. 5YR 4/1 黒灰色中や粘質シルト・小礫含む(溝埋土上層)
3. 7.5YR 4/3 黒色シルト・大礫含む(溝埋土中層)
4. 100Y 6/1 緑灰色粘土(溝埋土下層 避土土壌)

図150 溝1平面・断面

溝2 5Aトレンチ西端で検出された南北方向の溝である。掘立柱建物6・10、住居3を溝 2  
 切ってはしる。溝の最深部がトレンチ西端であり、溝の西側は検出してない。溝は埋土  
 から古・新の2段階に分けられる。古段階溝は、東西部の浅い部分であり、幅1.2m、深  
 さ30cmが残存する。埋土には炭が多く混じる。新段階溝は、これを切る深い溝であり、幅  
 2.1m、深さ70cmを測る。埋土は粗砂～礫である。遺物は両溝とも、出土しなかった。

低位段丘の先端に建てられた奈良・平安時代掘立柱建物の西柱列が溝に切られること  
 から、溝はこれ以降のものと考えられる。螢池東遺跡の南には、江戸時代の麻田藩陣屋跡  
 がある。調査地に西接し、段丘崖直上をはしる南北道路は、麻田藩大名の「おなりみち」と  
 伝承されている。遺物が出土せず確証はないが、溝は「おなりみち」の側溝の可能性があ  
 る。

「おなりみち」  
 の側溝の可  
 能性



1. 10YR 5/2 灰褐色シルトに炭化物混じる
2. 10YR 2/1 黒色粘質シルト
3. 10YR 3/4 暗褐色シルトに10YR 2/1 黒色粘質シルトブロック入る
4. 7.5YR 4/6 褐色粘質シルト
5. 7.5YR 4/4 褐色粗砂～礫

図151 溝2平面・断面

## 4. まとめ

### (1) 遺構について

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代中期の大形の掘立柱建物3棟、古墳時代中～後期の掘立柱建物1棟、竪穴住居32棟、古墳時代後期の土坑1基、古墳時代以降の掘立柱建物21棟、古墳時代後期末～飛鳥時代の土坑1基、近世の溝2条、時期不明の土坑1基、弥生時代中期～平安時代遺物が出土する谷である。遺構は、以下の4期の変遷がおえる。古墳時代中期(TK216～TK208型式)以前

大形の掘立柱建物

大形の掘立柱建物3棟が検出された。うち掘立柱建物1・3は、棟持柱をもつ5×5間の総柱形式の建物である。規模は桁行・梁間長を平均すると、掘立柱建物1が11.1×9.3m=103.2㎡、掘立柱建物3が11.2×10.3m=115.4㎡である。掘立柱建物2は5×1間以上の建物で、内側の柱は確認されず、また柱掘形も他2棟に比べ小さいため、掘立柱建物1・3に比べ規模が小さい建物と考えられる。規模は9.3×2m以上である。建物群は、掘立柱建物2・3の北東辺が直線上にあること、掘立柱建物1～3の桁行方向は同一であることから、計画的に配置されたと考えられる。建物の軸をみると、3棟とも桁行き方向はN-42°-43°-Eであり、桁行方向は調査区の西側でおちる段丘崖にほぼ平行するため、建物の軸を設定するにあたっては、方位よりも地形に規制された可能性が高いと考えられる。建物の広がり、調査区内において、建物群の北西・北東・南東の3方向にはみとめられなかった。調査区の東辺を走る阪急宝塚線を越えて東側で実施された池田東遺跡調査会による調査<sup>(1)</sup>および約40m南へ離れた段丘縁辺で実施された豊中市教育委員会による調査<sup>(2)</sup>においてはこれに対応する建物遺構は検出されず、建物群のひろがり考えるならば、南西側にひろがる段丘上、約20～40mまでの範囲である。南西側へ建物群が展開した場合、2列約10棟が最大となる。

計画的な配置

年代 建物の年代については、掘立柱建物3出土のTK208型式に位置づけられる須恵器杯蓋片が重要な資料となる。掘立柱建物1～3出土土器中、須恵器はこの一片のみであり、他は掘形埋土上層から土師器が出土する。掘立柱建物1～3を切る住居からは、住居6・19では土師器のみ、住居8ではTK208型式の須恵器が出土する。土師器はTK208型式併行またはその直前の年代に位置づけられる。掘立柱建物3出土の須恵器杯蓋片の出土層位が不明であるが、住居8出土の須恵器から、建物の下限はTK208型式といえることができる。

掘立柱建物1・3の上屋復原については、第3節および参考文献(3)を参照されたい。  
古墳時代中期(TK216～TK208型式)

住居 古墳時代中期に位置づけられる住居は、14棟である。その他、出土遺物が破片のため年代がわからないが、住居の軸、竪の位置、切り合い関係から古墳時代中期の可能性が高い住居は7棟あり、計21棟の住居の存在が推定される。住居は近接するものもあり、同時存在とはいえず、一部は大形の掘立柱建物と併存する可能性も残す。住居の軸は、大形の掘立柱建物とほぼ同じである。大形の掘立柱建物上に住居が設けられており、とくに大形の掘立柱建物跡を意識した住居の立地はみられないが、建物の方向性は引き継がれた可能性がある。竪はほとんどの住居で北西辺に設けられる。集落は段丘縁辺の平坦地に立地して

住居の軸と配置

おり、段丘崖下との比高差は約3mであることから、斜面地に立地する集落のように風向きによる電位置の設定という推定は成り立ちがたい。あえて推定するならば、集落の北・西側は谷・段丘崖で集落のひろがり期待できないことから、集落は南東側にむかってひらく構造をもち、この南東側に住居の入口を設けたため、電はその反対側の北西辺に設けられたのではないかと考える。住居の規模を、大形住居(一辺6~7mで床面積約40㎡)、中形住居(一辺4~5mで床面積約20㎡)、小形住居(一辺3mで床面積約10㎡)に三区区分すると、各々、4、10、7棟となる。これらの分布からは、規模の異なる住居の組み合わせや列状の配置など、めだつた規則性は見出しがたい。また、竈または炉をもつ住居、竈も炉ももたない住居は混在する。炉は、住居中央に位置するものと、やや壁寄りに位置するものがある。これらの火処と住居規模との関連性をみると、大形住居では4棟中竈が3棟、中央炉が1棟、中形住居では竈が2棟、中央炉が2棟、壁寄り炉が1棟、もたない住居が3棟、不明が2棟、小形住居では7棟中竈が5棟、不明が2棟である。限られた資料ではあるが、大形・小形住居での竈設置率は高い可能性がある。

竈と炉

特異な住居を列挙する。焼失住居は住居13・19、焼失住居の可能性が高い住居として住居2があり、このうち住居2・13では土器がまとめて出土している。住居19は、炭化材が良好に遺存し、住居構造復原の一資料となる。住居2・13は炭化物上で遺物が多く出土しており、住居焼失後に土器を廃棄したと考えられる。住居2では多数出土した土器片中、土師器甕片が斜めに立ち花びら状に重なった中央に拳大の石が置かれた出土状態が目目された。また、同住居では、主柱穴から土師器高杯が伏せた状態で出土しており、住居廃棄にともなう何らかの行為があった可能性が推定された。竈に甕がかかった状態で出土した住居は、住居1・6・13であり、なかでも住居13は残存状態が良好で、竈の復原を試みる<sup>(2)</sup>ことができた。住居1・6の竈では、土師器甕片がリング状に2~3重に直立した状態で出土しており、竈廃棄時の行為が推定された。住居出土遺物では、土師器のみの住居が大抵であるが、住居2・8・12・13でTK216~TK208型式の須恵器が出土した。これら住居に伴う土師器は、他の土師器のみが出土する住居の土師器と共通するため、両者は近接する時期と考えられる。須恵器が出土した住居4棟中3棟が竈をもつが、住居12は炉をもつ住居であり、必ずしも須恵器をもつ住居すべてが竈を導入したとはいえない。住居2・19では、設置する辺を違えて、竈の改築があることがわかった。また、住居1では、床溝をうめる床土上に竈から掻き出した炭化物がみられたことから、当初竈のない住居の床を一部貼り直して竈を設置した可能性が考えられた。住居26は、比較的残存状態が良好な住居であったため、床面精査により住居内使用の空間復原をこころみる<sup>(4)</sup>ことができた。

焼失住居  
炭化材  
土器の廃棄  
住居廃棄にともなう行為

竈廃棄時の行為

竈の改築

竈の設置  
空間復原

住居の存続期間

古墳時代中期に、おおきく大形の掘立柱建物→住居の変遷がおえることは、遺構の切り合いからあきらかである。大形の掘立柱建物と住居出土土器については(2)で後述するが、建物の廃絶から住居(古墳時代後期住居は除く)の廃絶までは、1~2土器型式内という年代幅におさまるものであり、住居の存続期間を考えるにあたっての一資料となる。また、こうした存続期間が短期であることは、住居がほとんど重複しない点とも整合性をもつ。古墳時代後期

古墳時代後期に位置づけられる住居は5棟あり、その他土坑1基が検出された。住居と

土坑は7～8Aトレンチにかけて検出され、前段階の集落に比べ、谷や段丘崖から離れ、調査区内の段丘上でもより高燥な、比較的安定した平坦地に集中して立地する。土坑は住居群の東側に位置し、土坑以南に住居は展開しないこと、土坑内より須恵器杯・土師器鍋など多くの土器が出土することから、廃棄土坑と考えられるが、出土土器に完形品を含むことから断定にはいたらない。住居の軸は、南側3棟は前段階とほぼ同じであるが、北側2棟はN-20°-Eで、軸を具にする。周辺の既往の調査地をみると、8Aトレンチ西側の豊中市教育委員会調査地、および阪急電鉄の線路を越えて東側の蛍池東遺跡調査会調査地<sup>(5)</sup>では、同時期の住居は検出されておらず、限られた範囲の調査地ではあるが、本段階の住居は前段階に比べ検出された棟数が少ない。本段階の集落の出土土器は、TK43型式前後に位置づけられ、TK216～TK208型式である前段階の集落との間に土器型式で概ね7段階の年代差がある。したがって、両者が系譜を同じくするかどうかは不明であるが、本段階の集落の規模は前段階に比べ小さい可能性がある。住居の規模は、大形が1棟、中形が3棟、小形が1棟である。竈は、中・小形住居各々1棟に付設される。住居16の竈は、焚口をもつものの壁からはなれた箇所に設置されていた可能性が高く、通常の竈とは異なるものである。住居28の竈は、袖部の長さが約80cmと長く、支脚の位置も焚口から約50cmあることから、焚口からの煮沸具の掛けは少しは困難であり、竈横方向からの使用が示唆された。注意される点は、両者ともに袖部が黄色粘土で構築される点である。これは、前段階の竈にはなく、本段階の竈に特徴的である。住居28の竈は、この構築材である黄色粘土が竈周辺に散在して検出されたことから、竈廃棄時に竈を意図的に破壊した可能性が考えられる。住居28の壁際には、限られた検出部分ではあるが、小穴が並ぶ点に注意された。しかし、この周辺では、とくに目立ったブロック土などは検出されず、土壁の可能性などは考えられなかった。住居9では中央炉が検出された。同住居は竈を設置する住居28を切って構築されるものであるが、竈ではなく炉が設置されることから、同年代の住居でもすべてに竈が設置されるとは限らないことがわかった。

高燥な平坦地への集中土坑の性格

集落の規模

竈の横方向からの使用  
黄色粘土の竈

#### 古墳時代（後期末）以降

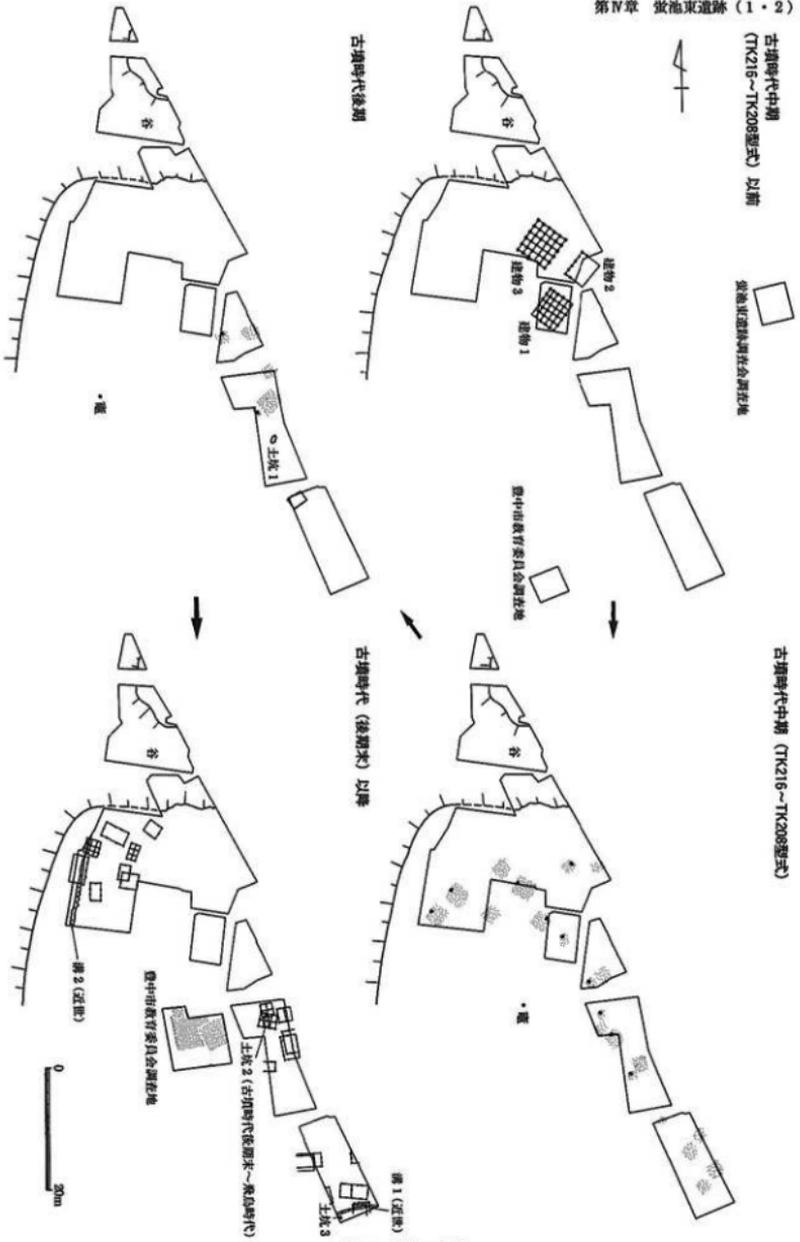
古墳時代（後期末）以降の掘立柱建物21棟、古墳時代後期末～飛鳥時代の土坑1基、近世の溝2条、時期不明の土坑1基、弥生時代中期～平安時代の遺物が出土する谷がある。

掘立柱建物は、柱穴からの出土土器は少なく、すべての建物の年代を明らかにすることはできなかったため、古墳時代（後期末）以降としてとらえた。限られた遺物からは、奈良時代が建物群の中心時期と考えられる。

掘立柱建物の分布

掘立柱建物は、Aグループ-4・5Aトレンチ西側、段丘崖縁辺に立地、Bグループ-8Aトレンチに展開する、Cグループ-9Aトレンチ南側に展開する、の3グループに分かれる。建物をなさない柱穴の分布も同様であり、建物・柱穴ともに、古墳時代中期の大形の掘立柱建物とその周辺をさけるような分布を示す。先述したように、住居は大形の掘立柱建物廃絶直後に建物上に設けられており、とくに大形の掘立柱建物を意識した立地はうかがえない。掘立柱建物は、住居より年代も下り、その立地が大形の掘立柱建物を意識したものである可能性は低いと考えられるが、注目された点としてあげておく。建物の軸はおおきく、①N-10°-E、②N-25°-E、③N-80°-E、④ほぼ方位にのるもの、の

掘立柱建物の軸



152 遺跡の概要

4種類がみられる。Aグループでは①・②が、Bグループでは③が、Cグループでは④が主である。Aグループのうち、段丘崖に最も近いところに立地する建物は、溝に平行する柱列のみが残存する。相対する柱列は、溝掘削時に削平された可能性が考えられる。溝は段丘崖とほぼ同方向であることから、Aグループ建物の軸は段丘崖に規制され、設定された可能性が高い。一方、B・Cグループ建物は、段丘上平坦地に立地し、軸はほぼ方位にのるものが多い。段丘上平坦地では、8Aトレンチ南側の中世水田の段落ちが示すように、条里にのった土地区画が施行されている。段丘上の建物の軸は、条里制に規制された可能性が高い。

土墳墓? 古墳時代後期末～飛鳥時代土坑2は8Aトレンチで検出され、完形の須恵器杯が多く出土した。宮の前遺跡2Gトレンチ土坑1と類似することから土墳墓の可能性が考えられるが、遺物の出土状態、木棺などの痕跡がみられないことから、断定はできない。なお、8Aトレンチ西側の豊中市教育委員会調査地<sup>(6)</sup>では同時期の住居4棟が検出されており、土坑2を基とした場合、墓域と居住域が近接することになる。

溝 近世の溝のうち、溝1は東西方向にはしる溝で、条里制にのった段丘上の開発を考える上で重要な遺構である。溝2は出土遺物がなく、年代は不明であるが、麻田藩陣屋跡にむかう藩主専用の「おなり道」の側溝の可能性が高いものである。

「おなり道」の側溝?

## (2) 古墳時代中期の遺物について

初期須恵器段階の資料

本調査では初期須恵器段階の資料が特筆されるため、これについてまとめておきたい。初期須恵器が出土した住居は、住居2・8・12・13である。これら住居出土の須恵器は少数であり、TK216・TK208型式の区別をしがたいため、TK216～TK208型式の幅をもって考えたい。

器種分類 住居のうち、土師器資料が最も豊富な住居2資料をもととし、また住居2出土土師器以外の器種については他住居出土資料を援用し、大きさ・形態・製作技法をもとに以下のような器種分類をこころみた。

- 壺A1 大形（復原直径20cm以上）で、短い直立する頸部をもつ二重口縁壺
- 壺A2 大形（復原直径20cm以上）で、外反する口縁をもつ広口壺
- 壺A3 大形（復原直径20cm以上）で、短い直立する口縁をもつ短頸直口壺
- 壺B 中形（直径15cm前後）で、長頸・丸底の直口壺
- 壺C 小形（直径10cm前後以下）で、丸底壺
- 甕A1 口縁端部が内面に肥厚するもの。内面口頸部境に明確な稜はもたない。
- 甕A2 口縁端部が平坦面をもつもの。内面口頸部境に明確な稜はもたない。
- 甕A3 口縁端部を外側につまみあげるもの。内面口頸部境に明確な稜はもたない。
- 甕A4 口縁端部を丸くおさめるもの。内面口頸部境に明確な稜はもたない。
- 高杯杯部A1 明確な稜をもつ杯部で、口縁端部が外反する。
- 高杯杯部B1 不明確な稜をもつ杯部で、口縁端部が外反する。
- 高杯杯部B2 不明確な稜をもつ杯部で、口縁端部を丸くおさめる。
- 高杯杯部C1 稜がなく外側に開く形の杯部で、口縁端部を丸くおさめる。
- 高杯杯部D1 碗形の杯部で、口縁端部が内面に肥厚するもの。
- 高杯杯部D2 碗形の杯部で、口縁端部を丸くおさめるもの。
- 高杯脚部A1 明確な稜をもつ脚部で、上半が内実のもの。
- 高杯脚部A2 明確な稜をもつ脚部で、中空のもの。

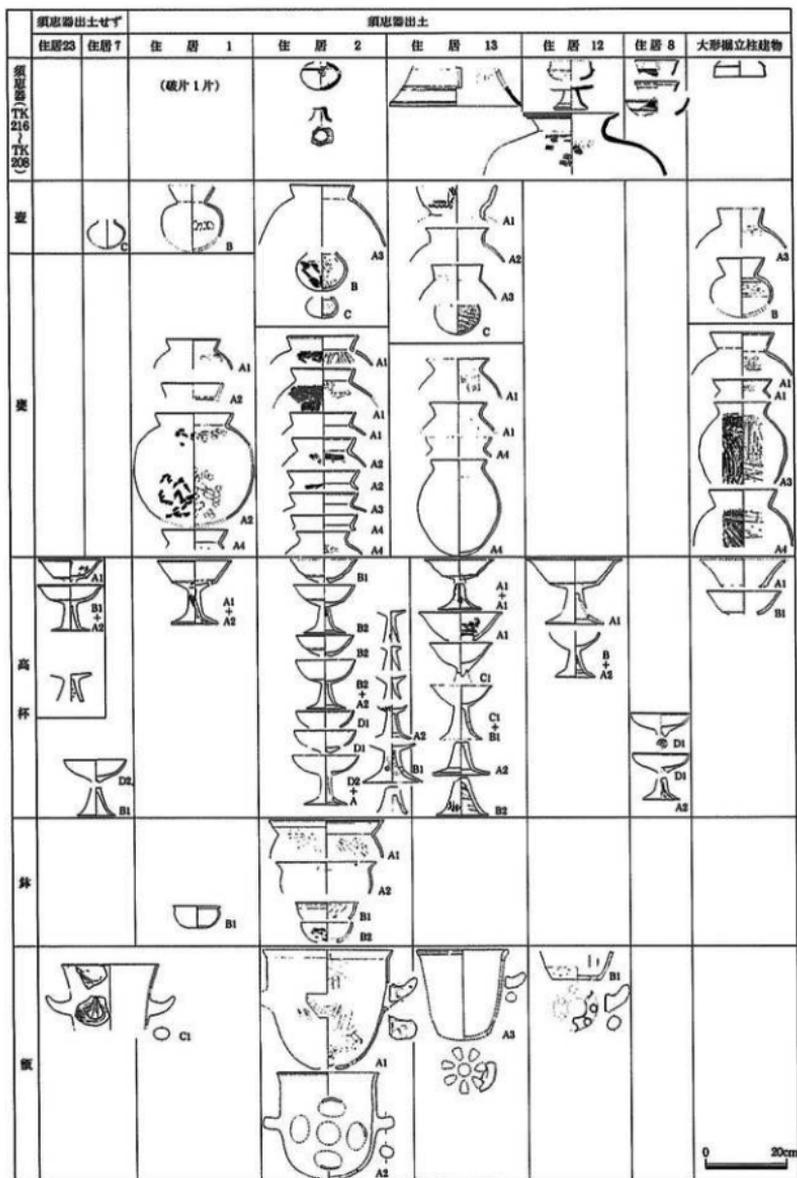


图153 須恵器(TK216~TK208)・土師器一覽

- 高杯脚部B1 稜がなく外側に開く形の脚部で、中空のもの。
- 高杯脚部B2 稜がなく外側に開く形の脚部で、粘土紐巻き上げによって成形するもの。
- 高杯杯一脚部接合A 円板充填によるもの。脚部A2—杯部A・B1・B2でみられる。
- 高杯杯一脚部接合B 脚部先端から杯部をつくりだすもの。脚部A1—杯部A、脚部A2—杯部A・B2・D1・D2、脚部B1—C1、脚部B2—?でみられる。
- 鉢A1 (鍋?) 大形(口径20cm以上)で、口縁端部が平坦面をもつもの。
- 鉢A2 大形(口径20cm以上)で、口縁端部を丸くおさめるもの。
- 鉢B1 小形(口径20cm以下)で、口縁端部が外側へ屈曲するもの。
- 鉢B2 小形(口径20cm以下)で、口縁端部を丸くおさめるもの。
- 甌A1 丸底で、口縁部が稜をもって外側に開くもの。
- 甌A2 丸底で、口縁端部に面をもつもの。
- 甌A3 丸底で、口縁端部を丸くおさめるもの。
- 甌B1 平底のもの。
- 甌C1 口縁端部に面をもち、格子目タタキで仕上げるもの。

注意された点 以上が、TK216～208型式の須恵器併行の土師器器種である。以下の点が注意された。

- ・丁寧なつくりではないが、小形丸底壺が存在する。
- ・口縁端部が肥厚する甕や、明確な稜をもつ高杯杯部が存在する。
- ・高杯杯一脚部接合技法には円板充填と脚部から杯部をつくりだす技法がある。
- ・甕・高杯は、上記分類のような多様な形態のものが存在する。
- ・高杯脚部では、脚部上半が内実で棒状のものをつきさした痕跡があるものや、粘土紐巻き上げによって成形するものが注意された。
- ・甌は丸底・平底があり、多様な形態のものが存在する。少ない資料だが丸底が多い。

図153には、以上みてきたTK216～208型式の須恵器をともなう住居2・13・12・8資料のほかに、須恵器1片が出土した住居1、須恵器は出土していないが格子目タタキで仕上げる甌(韓式土器)が出土した住居7、須恵器は出土していないが高杯が数個体出土した住居23資料をともに掲載した。また、これとともに、須恵器杯身(TK208型式)1片が出土し、これが下限資料になると考えられる、大形の掘立柱建物出土資料をともに掲載した。

これらをあわせみると、土師器の共通性から、住居1・7・23とも限られた資料ではあるが、明確な須恵器を伴わなくとも、TK216～208型式の須恵器に併行する時期として鑑別はないと考える。また、大形の掘立柱建物出土資料も同様である。

大形の掘立柱建物出土資料は、唯一の須恵器資料である杯身片の掘形における出土位置が不明確な点がよくやまれるが、土師器資料はすべて建物廃絶時の資料である。また、住居出土資料も、住居廃絶時の資料である。遺構の切り合い関係から、大形の掘立柱建物→住居の新旧関係は明らかであり、大形の掘立柱建物の廃絶から住居(古墳時代後期住居は除く)の廃絶までは、1ながくみても2土器型式内という年代幅におさまるものとする。

#### 参考文献

- (1) 堂池東遺跡調査会 1991 『堂池東遺跡発掘調査報告書』
- (2) 豊中市教育委員会 1992 『豊中市埋蔵文化財年報』1
- (3) 金光正裕・合田幸美 1992 「堂池東遺跡の発掘調査—古墳時代前期の大形掘立柱建物と作り付け竈について—」『大阪文化財研究—20周年記念増刊号—』
- (4) 合田幸美 1994 「堂池東遺跡・住居26の調査」『大阪文化財研究』6号
- (5) 豊中市教育委員会 1993 『豊中市埋蔵文化財年報』3

## 4. 付論 掘立柱建物1・3の復原について

奈良女子大学生活環境学部 上野邦一

## まえがき

蜷池東遺跡で発見された建物のうち掘立柱建物1と掘立柱建物3は、棟持柱を持った総柱建物で、倉庫と考えるのが妥当な建物である。また掘立柱建物2は、建物の一部しか検出していないが、掘立柱建物1・掘立柱建物3と平行に存在し、これらの建物と同時期に存在していたと考えられる。

棟持柱をもつ倉庫群としては、和歌山市鳴滝遺跡や大阪市難波宮下層遺跡倉庫群が著名で、建物の復原案が表示されている。また建物の性格は不明なもの、棟持柱をもつ建物の例は発掘調査で数多く報告されている。こうした復原案や棟持柱の事例を参考にしながら、蜷池東遺跡で発見された棟持柱をもつ総柱建物の復原を試みたい。柱穴に大小があり、その配置がよく似ていることや、規模がほぼ同じであることなどが、難波宮下層遺跡倉庫

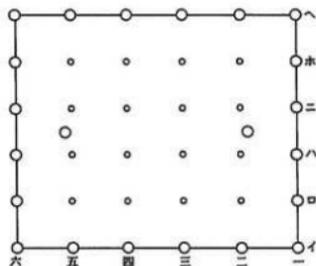


図154 掘立柱建物1平面

群と共通する。時期は蜷池東遺跡の建物が5世紀前半、難波宮下層遺跡倉庫群が5世紀後半と少し時間の差があるものの技術的にはつながると思われるほど共通している。掘立柱建物2は掘立柱建物1と掘立柱建物3に比べて規模が小さく、総柱建物で倉庫となるかどうか不明である。なお、柱列の説明のために、妻側を東からイロハニホへの柱列、平側を北から一二三四五六の柱列と呼ぶことにする(図154)。

## 遺構の特徴

掘立柱建物1と掘立柱建物3の棟持柱を結ぶ方向を桁行、それに直交する方向を梁間とする。掘立柱建物1と掘立柱建物3はともに、柱間には多少のばらつきがあるものの、桁行5間、梁間5間である。掘立柱建物1は桁行約11.1m、梁間約9.3mで桁行が少し長く、掘立柱建物3は桁行約11.2m、梁間約10.3mで掘立柱建物1に比較して正方形に近い。

柱穴の大小とその配置に掘立柱建物1・掘立柱建物3には共通する特徴がある。側柱と棟持柱の柱穴は、掘形80~90cm、深さが50~60cmで柱痕跡から柱径は30cmほどと考えられ、一方、内部柱の柱穴は掘形40cm前後、深さは10~20cmと浅く、柱径は20cmほどである。このように側柱は、棟持柱を除く内部の柱穴より一様大きく、柱が支持すべき荷重の差を表していると考えられる。このことは、棟持柱を除く内部の柱穴は側柱より小ぶり、床の荷重のみを支える柱で、高床の建物が考えられ、柱穴の大小の配置から、側柱は均質で同等の荷重を支持することを表していて、この建物の構造は、棟持柱と側柱で成り立つと考えると合理的に説明できる。しかし、後述するように、具体的な構造を考えると内部の柱穴が床だけを支える束跡とは考えにくく、屋根荷重も支える柱跡と考えないと構造に無理が生じる。

掘立柱建物1と掘立柱建物3とは、基本的に同じ柱配列をしているが、棟持柱の位置が少し違う。掘立柱建物1の棟持柱は柱列二・五から少し外側に位置するのに、掘立柱建物3は柱列にそろっている。しかし、この棟持柱の位置の違いは構造の差異を示すとは考えられない。図では水平材・垂直材ともに直材で示したが、実際は曲がった材を組み合わせただろうし、少しのずれは締結するときに問題とならないからである。

なお、屋根葺材は草葺と考えるのが妥当であろう。草葺とすると、屋根勾配は45度ほどが必要であり、このことを前提にして復原を試みる。

柱・梁構造と校倉風に横木を積み重ねた構造も1案として考えられる。平側・妻側が同等に荷重を受けることを重視すれば、校倉風に横木を組み上げる構造も不可能ではない。この場合壁に伝わる荷重は均質に近くなる。ただし、小屋組と壁との組み合わせ部分が明確ではない。校倉風としても、屋根の形は入母屋・寄棟・切妻など様々な形が可能である。校倉としても、隅で正確な組み合わせを要する仕口ではなく、横木を積む程度の構造と考えられよう。しかし、桁長さが10mほどであり、棒状の材をそろえる量を考えると柱・梁構造の方が無難であろう。

#### 構造の復原

内部の柱跡を床を支えるだけとすると、桁を支える柱や束がないことになる。柱穴の大小からだけだと、内部の柱穴は束の柱穴になる。しかし、棟と側桁までの距離が約5mと長く、途中で母屋桁を設定するのが望ましいのに、途中の桁を支える柱に相応する内部の柱跡は小ぶりの柱穴しかない。この小ぶりの柱穴に上まで立ち上がる柱を想定すると、柱穴の大小が荷重負担の軽重と対応しないことになり、問題をはらむことになるが、構造の復原を試みて、柱穴の大小の意味も考えてみたい。

床を地表から1.5mの高さとし、側壁の高さも1.5mとすると、45度の勾配で立ち上げると、棟木の高さは8mほどとなる。梁間断面図では、壁の種類や屋根の形状の差を考

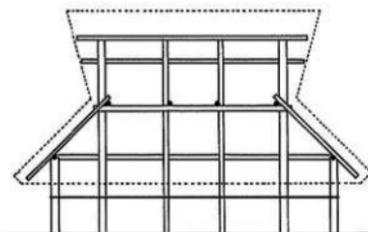


図155 入母屋案1の桁行断面

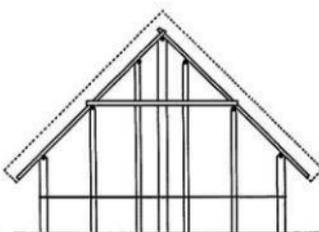


図156 入母屋案1の梁間断面

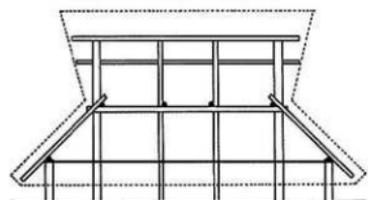


図157 壁を立ち上げない桁行断面

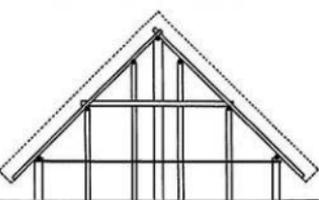


図158 壁を立ち上げない梁間断面

も、小屋組は変わらない(図155・156)。

壁を立ち上げずに、床のレベルで垂木下端を止める1案も考えることができる(図157・158)。もちろん、この場合建物の内部空間は狭くなるが、建物全体の高さを減じることができることになり、多少とも構造上の安全性が増す。しかし、これらの建物の利用者が、これほどの構造を考える以上、壁を立ち上げて内部空間を広くする案の方がよいだろう。

### 屋根の形

屋根の形にはいくつかの案が考えられる。第1案は入母屋案で、第2案としては棟持柱付近を棟の両端とする寄棟屋根である。第3案は全体に切妻造りとする案である。いずれの案も検出遺構と構造との関係に長所・短所があり、決定的ではない。それぞれの案について検討を加える。

屋根の形は同時代の埴輪や、民家や、民俗例が参考になる。

棟木は柱から柱半分ほど、外側に出すことにする。

#### 第1案(図155・156)

入母屋屋根とする案である。外側の隅柱の荷重負担が大きいし、隅木の尻を受ける位置に柱がなく、ここでの荷重負担をどう処理するかが問題となる。隅木の尻部分を支持する柱が明確にないから、構造上は束が必要となり、この束を桁行方向の二・五列に渡した水平材が受けることになる。しかし、こうすると桁行方向の二・五列に荷重が集中する。側柱が均等に荷重を受けることと整合しない。柱穴は小さいが、内部の柱も桁まで立ち上げると考えないと垂木を支持できない。

妻側からの斜材を棟まで立ち上げる場合も考えられる(図159)。

#### 第2案(図160)

棟持柱付近を棟の両端とする寄棟屋根の案である。側柱が均等に荷重を支持する点では、柱穴が均質であることに一致する。しかし、棟持柱付近に荷重が集中するし、棟から桁行方向と梁間との距離が違うという問題がある。この場合でも側柱と棟木との間は約5mで、垂木だけでは支持できず桁が必要である。桁が必要で、柱が立ち上がるとすると、寄棟にする意味がなくなる。

#### 第3案

切妻造りすると、屋根荷重を主に平側の柱が支持することになる。妻側の柱が平側の柱と同じ大きさであり、この点が問題となる。荷重支持の不公平さと、柱の大きさが側回

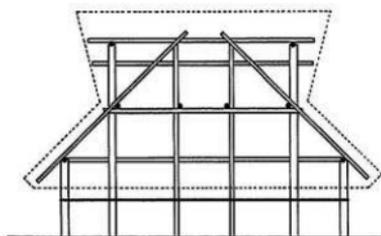


図159 妻側から斜材を棟木までのばす案

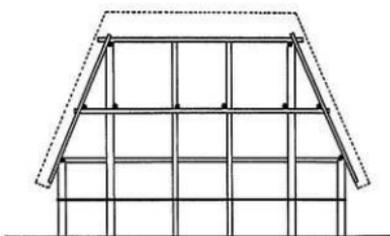


図160 寄棟屋根の場合の桁行断面

りでは均質であることが矛盾する。切妻屋根も可能性が薄い。

#### 第4案

桁行中央3間分を切妻屋根とし、その妻側の両方に庇をかける形とする案である。外観は入母屋屋根になるが、隅木がはいらぬ。この場合、妻側の柱が平側の柱より低くなり、妻側の荷重負担と平側の荷重負担が同等ではなくなる。とくに桁行方向の二・五列に荷重が集中する。こうした荷重の差異があるのに、柱穴が均質であることが整合しない。

しかも、二・五列で異なる屋根が相互にうまく納まらず、この案には無理があることになる。

#### むすび

第2案・第3案は構造上で無理があり、考えにくい。第4案も構造上と納まりから、考えにくい。柱穴の大小が構造上で柱・束の役割に見合う構造は想定しにくく、柱穴の大小が構造にも反映するというにだけ依拠すれば、どの復元も可能性が薄いことになる。結局、構造上の条件を考えて、内部の柱穴は桁まで立ち上げて考える入母屋案が有力となる。側柱と棟持柱が大きく深いのは、難波宮下層倉庫群の5間四方高床建物と共通する。側柱が建物の枠組みを決め固定度を高めて立ち上げ、内部の柱は桁を支えることを意図したと考えざるをえない。

(挿図は構造の考え方を図示したものであり、厳密ではない。)

謝辞 復原案を考えるに当たって、植木久氏(大阪市教育委員会)から御教示を得た。記して感謝する。

#### 参考文献

- 和歌山県教育委員会 1983 『鳴滝遺跡発掘調査概報』  
和歌山県文化財協会 1989 『大阪市中央体育館地域における難波宮跡・大坂城跡発掘調査中間報告』  
岡田英男 1991 「棟持柱をもつ独立柱建物の構造復原」『文化財学報』第9集 奈良大学文学部  
植木 久 1991 「高床式建築の変遷」『クラと古代王権』ミネルヴァ書房  
金光正裕・合田幸美 1992 「堂池東遺跡の発掘調査」『大阪文化財研究』(大阪文化財センター)

## V 螢池遺跡 (1・2)

### 1. 調査の方法

調査地は、阪急宝塚線螢池駅から豊中駅へのびる線路沿いの西側、御神山古墳が立地する丘陵の先端がはりだす南門前池から北へ約50mの部分である。調査地の立地は、線路沿いの低位段丘縁辺部と低位段丘を開析する谷地形を利用した池（南門前池）の中に二分される。平成4年度は1～4A・6～8A、平成5年度は9Aトレンチを調査した。

平成4年度の調査では、低位段丘上は本調査として全面調査した。平成4年度時点での螢池遺跡の範囲は段丘上に限られるため、池の中は試掘調査としてモノレール橋脚部分のみを調査した。低位段丘上の調査範囲は、幅約5～20m、長さ約50mであり、1～4Aトレンチとして北から順に調査した。各トレンチとも、バックホーによる機械掘削で盛土を除去後、人力掘削によって各層の発掘および面の検出をおこなった。池の中は、排水後、工事中用道路を造成、矢板を打設後、6～8Aトレンチとして北から順に調査した。6・7Aトレンチは、池底の泥土の下に、螢池センター建設時の固い改良土があり、これらを機械掘削によって除去後、人力で調査をおこなった。5Aトレンチは、当初段丘際に設定していたが、4Aトレンチ調査時に、段丘縁辺が大きく削平されていることがわかり、調査を実施しなかったために欠番となっている。なお、南門前池南側堤防の橋脚部分は、機械掘削時の立会において、その大半が近世以降の盛土と判断されたため調査はおこなわなかった。

平成5年度の調査は、9Aトレンチの調査を1～4Aトレンチと同様の方法でおこなった。

### 2. 調査の成果

#### (1) 基本層序

層序は、調査地の東側断面を記録した。低位段丘上と池の中をわけて記述する。

低位段丘上は、段丘の縁辺にあたり、北から南にかけてゆるやかに傾斜する。段丘と南門前池との境は、調査前には石垣で土留めされ、約4mの比高差があった。調査の結果、段丘を大きく削り石垣が築かれていることがわかった。



図161 トレンチの位置

低位段丘上の基本層序は以下のとおりである。

**I層（盛土）**—戦後の住宅建て替えにともなうものと考えられる、瓦・陶磁器を多く含む層が、調査区全域にわたり0.8～1.0mの厚さで堆積する。調査区内では、瓦・建材・石を多く含む1×2m前後の長方形土坑が多くあり、住宅建て替えにともなう廃棄土坑と考えられる。なかには、土坑底面に直径0.7mの火鉢を埋め込んだものがあり、戦時中の空襲に備えての保管場所ではないかと、地元の方から教えていただいた。

**II層 灰黄褐色シルト層（中・近世耕土層）**—I層除去後面を1面とした。1面では、鋤溝を検出した。II層は、マンガンを多く含む灰黄褐色シルト層であり、段丘上の乾田の耕土層と考えられる。北では、層厚30cmを測り、南へいくにつれ薄くなり、3Aトレンチでは10cm、4Aトレンチではみられない。1・2Aトレンチでは、灰黄褐色シルト層間に層厚2cm程度の粘性の強い黄褐色シルトが1～2層介在し、床土とみられることから、中・近世のなかで複数回の耕土の整地があったと考えられる。各床土面で精査したが、1面と基本的に鋤溝の方向・単位は同じであった。II層からは、土師器・瓦器・陶磁器が少量出土し、中・近世耕土層と考えられる。

**III層 褐灰色シルト層（奈良・平安時代包含層）**—II層除去後面を2面とした。2面では、鋤溝・溝を検出した。III層は、上位にマンガンを含む褐灰色シルト層であり、直径1cmの炭化物・遺物を多く含む包含層である。II層と同様、北から南に向かって層厚を減ずるが、II層と異なり、III層上面はほぼ水平であり、中・近世水田造成時の削平によるものと考えられる。1・2Aトレンチでは層厚20～30cm、3Aトレンチでは層厚10cmを測り、4Aトレンチではほとんどみられない。1Aトレンチでは、トレンチ東側をはする南北溝より東側にのみ堆積し、南門前池から箕輪池にぬける北東—南西方向の谷筋と8Aトレンチで後述する南門前池内の北西—南東方向の谷筋に挟まれた段丘頂部のみの堆積と考えられる。奈良時代須恵器・土師器を多く含む、少量の黒色土器が混じることから、奈良・平安時代遺物包含層と考えられる。

**IV層 黄褐色シルト層（古墳時代後期・奈良時代包含層）**—III層除去後面を3面とした。3面では、不定形土坑・ピットを検出した。遺構埋土は、褐灰～黒褐色シルトである。IV層は黄褐色シルト層であり、土師器および須恵器細片・炭化物を少量含む。2Aトレンチのみに分布し、層厚は10～20cmである。IV層はある程度しまった層であるため、当初IV層を地山と考えたが、遺物細片が含まれ、IV層除去後面である4面で新たな遺構が検出されたことから、IV層は包含層と再認識した。遺物は細片が主で時期の特定が困難であったが、須恵器杯片より古墳時代後期・奈良時代包含層と考えられる。

**V層 褐灰～黒褐色シルト（遺構埋土）混黄褐色粘土層（土坑埋土）**—IV層除去後面を4面とした。4面では、3面同様の不定形土坑を検出した。本層は不定形土坑埋土下層である褐灰～黒褐色シルトが混じる黄褐色粘土層である。4面では、黄褐色粘土面にドーナツ状に褐灰～黒褐色シルトが巡る状態で土坑が検出され、輪郭が明瞭な土坑のみを精査した。土坑は本層のなかで複雑に切り合い関係をもち、本層すべてが土坑埋土といえる状況であり、4面精査後、遺物検出のため本層を掘削した。遺物は弥生時代中期土器、古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器、旧石器剥片が少量出土した。



黄橙色粘土層より下層が地山である。黄橙色粘土層の下層には、明オリーブ灰色粘土に砂粒が混じり、下位にいっにつれて砂粒の割合がまず粘土層から砂層への漸移層、明オリーブ灰色砂層、明オリーブ灰色粘土層、明オリーブ灰色礫層である。各層とも基本的に水平堆積であるが、やや南にむかって傾斜する段丘形成層である。

本遺跡周辺は、螢池北、螢池西遺跡など旧石器が出土する遺跡が多いため、今回の調査では部分的ではあるが、黄橙色粘土層より下層で旧石器の存否の確認をおこなった。しかし、旧石器はみとめられず、V層形成時に混入があったことを確認するにとどまった。

池の中である6～8Aトレンチの基本層序は以下のとおりである。

6Aトレンチ 機械掘削前後地山である青灰色シルトを確認した。

7Aトレンチ 層厚10cm程度の中世包含層、地山である青灰色シルトを確認した。

8Aトレンチ 無遺物の層厚40cmの粘土層、層厚40cmの中世包含層が地山である青灰色シルト層上に堆積する。

## (2) 段丘上

### 1 面 1面

麻田藩陣屋  
設置以降の  
土地区画

鋤溝・ピットを検出した。鋤溝は、幅10cm、長さ1～8m、深さ3～4cmを測る。調査区北部では、比較的密に検出されたが、中・南部では攪乱土坑が多く、まばらである。鋤溝の方向は、南北方向のものが多く、1Aトレンチ西側ではやや北西-南南東方向のものがある。これは、現在の宅地割りと同じ方向、すなわち麻田藩陣屋設置以降の土地区画にそうものであり、最も新しい鋤溝と考えられる。ピットは、直径10～15cm、深さ5cmを測り、規則的に並ぶものはみとめられない。

### 2 面

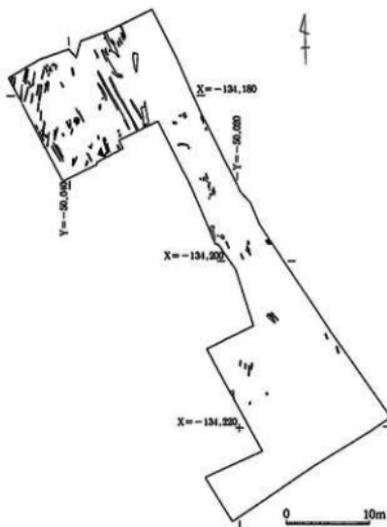


図163 1面平面

### 2面

溝・鋤溝・落ち込みを検出した。  
溝1 1Aトレンチ中央よりやや東側を南北方向にはしり、幅1m、深さ20cmを測る。溝1は、東側はⅢ層、西側はⅡ層類似層をベースとしており、西側にはⅢ層は存在せずⅡ層類似層下層はⅣ層に至る。埋土は、灰黄色シルト1層であり、Ⅱ層中の黄橙色粘土の床土でおおわれる。遺物は瓦器片が出土した。溝1は、方向が鋤溝と同じ南北方向であること、溝東側のⅢ層上面は水平に削平された状態であること、砂層はみとめられずまとまった水流はなかったと考えられることから、東から西にむけて落ちる水田の段落ちにともなう溝と考えられる。したがって、Ⅱ層除去後の面である2面を厳密に検出

するならば、溝1西側のII層類似層除去後面が2面となるが、II層類似層は溝1のベースであったため、その上面を2面として検出した。II層類似層からは遺物は出土していない。

溝2 2・3Aトレンチ境を東西方向にはしり、検出長2m、幅60cm、深さ15cmを測る。溝1と同様、水田の区画にともなう溝と考えられる。

鋤溝 幅10cm、長さ1～5m、深さ3～4cmを測る。溝1西側に密に検出される。方向はすべて南北・東西方向であり、重複して検出される鋤溝もあることから、複数時期の耕作痕と考えられる。9AトレンチのX=-134,180ラインで東西方向の鋤溝がまともって検出され、このラインから南へ浅い落ち込みがあることから、このライン前後に水田区画があった可能性が考えられる。鋤溝からは、瓦器片が少量出土した。

落ち込み 9Aトレンチ西端で検出した。東西方向のラインを境に北から南へ落ちる段落ちおよび東から西にむけてゆるやかに落ちる段落ちが検出され、水田の区画にともなう落ち込みと考えられる。これは、南門前池内の北西-南東方向の谷筋に向かって落ちると考えられる。

溝1のベースであるIII層は奈良・平安時代包含層であることから、2面は奈良・平安時代以降、中世の水田面である。2面は、今回の調査でもっとも時期がさかのぼる水田面であり、低位段丘上の水田開発は、奈良・平安時代以降、すくなくとも中世にはおこなわれたことがわかった。

### 3面

建物2棟、土坑、ピットを検出した。その他、3Aトレンチ南西部で掘削痕を確認した。  
 建物1 3Aトレンチ南半で検出され、東西2間、南北5間、桁行10m、梁間4.2m、床面積42m<sup>2</sup>である。土坑群と重複しており、土坑群より新しい。柱の掘形は、平面形が不整円形であり、直径60～80cm、深さ25～40cmを測る。P31・44～46は、柱痕跡がみとめられた。柱の太さは18～20cmと考えられる。埋土は基本的に、柱痕跡部分は黒褐～褐灰色シルト、掘形埋土は上層がIV層黄褐色シルト混じり灰白色シルト、中層がIV層黄褐色シルト混じり褐灰色シルト、下層が地山である黄褐色粘土ブロック混じり褐灰色シルトである。柱の掘形はIV層黄褐色シルト、褐灰～黒褐シルト混黄褐色粘土、地山である黄褐色粘土層まで達しており、掘形埋土から、掘削土を柱設置後順に埋め戻したと想定される。P27・45では礎石が、P46では掘形に入れた礎がみとめられた。

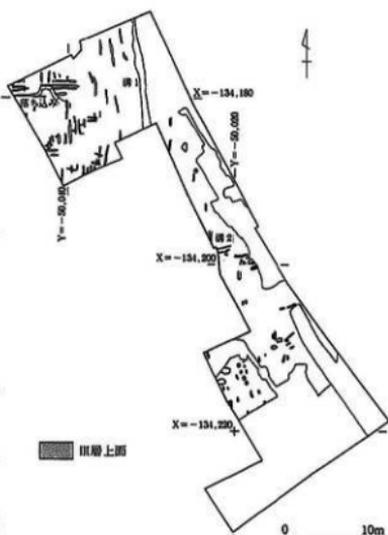


図164 2面平面

低位段丘上の水田開発

3面

建物

建物2 3Aトレンチ北半で検出され、東西3間、南北2間、桁行5.6m、梁行4.6m、床面積25.7㎡である。土坑群とわずかに重複しており、土坑群より新しい。柱の掘形は、平面形がほぼ隅丸方形であり、一辺50~60cm、深さ20~50cmを測る。P18は、深さ50cmであり、底部に柱痕跡が深さ10cmみとめられた。P18のほか、P17、P38に、柱痕跡がみとめ

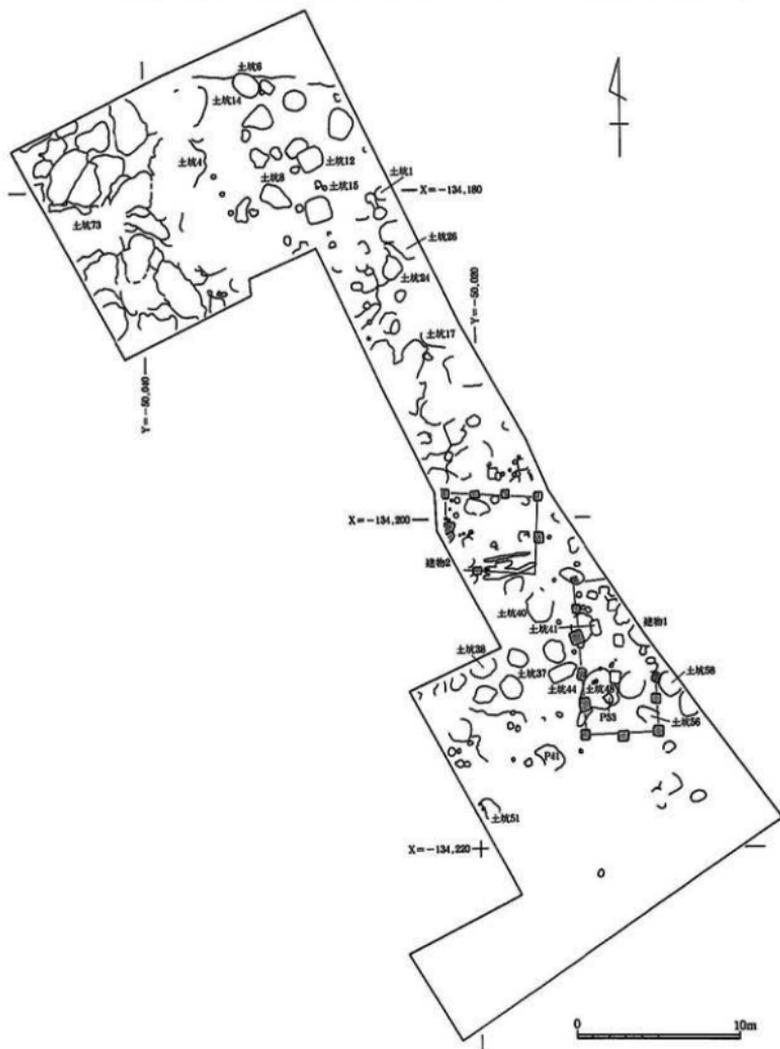


図165 3面平面

られた。柱の太さは直径10～18cmと考えられる。埋土は基本的に、柱痕跡部分は黒褐～褐灰色シルト、掘形埋土は上層がⅣ層黄褐色シルト混じり褐灰色シルト、下層が地山である黄褐色粘土ブロック混じり褐灰色シルトである。建物1同様に柱の掘形は地山である黄褐色粘土層まで達しており、掘形埋土から、掘削土を柱設置後順に埋め戻したと想定される。土坑 1・9A～4Aの北東部まで分布し、計79基を確認した。土坑は、3～4面で、黄褐色シルトまたは黄褐色粘土面に褐灰～黒褐色シルトがドーナツ状にめぐる状態で確認される。褐灰～黒褐色シルトは、オーバーハング状に入りこむものや掘削途中で別の褐灰～黒褐色シルトとつながるものが多いことから、土坑は重複して掘削され、これによってⅤ層の褐灰～黒褐色シルト混黄褐色粘土層が形成されたと考えられる。1～4Aでは明瞭に輪郭を確認した土坑、すなわち最終段階の土坑のみを調査した。9Aでは、重複する土坑をすべて調査した。したがって、図165のような、粗密のある土坑の検出状況を示す。土坑の平面形は円・楕円・不整形円・方・長方・不整形である。大きさは0.3～3.7mであり、長径1～2mのものが約60%を占める。断面形は浅いU字形のものが多く、深さは、12～46cmであり、20～40cmのものが約66%を占める。埋土は、上層から、灰白色シルト混じり黄褐色シルトまたは黄褐色粘土、褐灰～黒褐色シルト、褐灰色シルト混じり黄褐色シルト～粘土である。遺物は、9基、12パーセントの土坑から、個体またはまとまった破片が出土した。遺物は、土坑端の斜面から下端にかけてはりついた状態で出土するもの(土坑1・8・14・38)、土坑中央底面から出土するもの(土坑44)、底面に散在するもの(土坑58)がある。出土層位をみると、土坑38が最下層の黒色層上面で須恵器瓦片がまとまった状態で出土する以外は底面の地山上で出土する。遺物は弥生時代中期～奈良時代の年代幅をもつ。

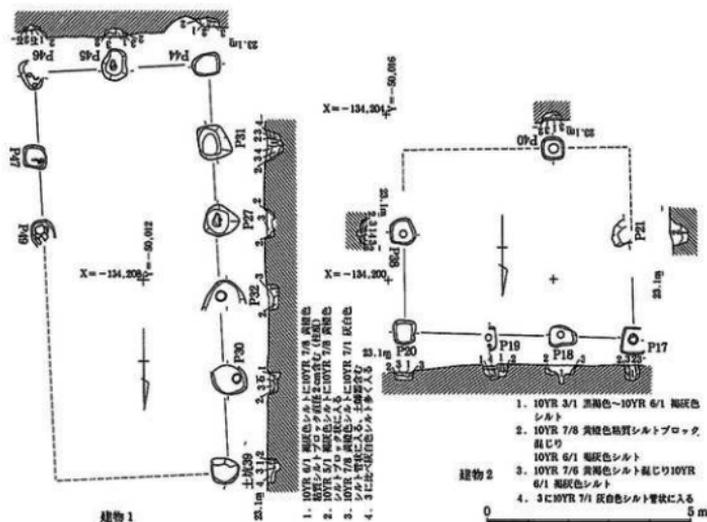


図166 3面建物1・2平面・断面

器種は弥生土器壺、古墳時代後期～奈良時代須恵器壺・甕、奈良時代土師器甕・杯、須恵器鉢・杯である。杯は小片で出土するものが大半である。出土土器中、古墳時代後期～奈良時代須恵器壺・甕が、個体またはまとまった破片で出土する傾向がある。これらは、完形のものはないが、体部下半が出土する場合、腹部または肩部までの破片がそろっており、完形の壺・甕の上半を故意に割り取った状態で埋納した可能性が考えられる。また、埋土中から国府型ナイフ形石器の可能性をもつ石器、剥片が11点出土した。黄橙色粘土は、今回下層確認において無遺物であったため地山と認識しているが、土坑が形成される段階で黄橙色粘土上層が掘削され、旧石器はこれに含まれていた可能性が考えられる。

故意に割り取った状態の旧石器の二次堆積

脂肪酸分析 土坑37・40埋土を試料とし、脂肪酸分析をおこなった（P167参照）。両土坑の試料に残存している脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬したことに関する試料に残存している脂肪と類似していることがわかった。とくに土坑37では、ヒト遺体は西方に頭部、北方もしくは東方にかけて腹部が位置していたと推測された。

遺物 (1)は、頸部のくびれが弱く、しもぶくれのプローションをもつ甕である。外面はハケメ、内面は剝離のため調整不明である。胎土の素地は緻密であり、直径1～2mmの赤色酸化粒を多く含む。口縁端部はつまみあげられ、頸部内面の稜がわずかに残る。古墳時代後期末～飛鳥時代か。(2)は平底底部であり、底面からはくびれずに直行してたちあがる。古墳時代壺の底部か。(3)は直立後外反する頸部と張り出す肩部をもつ須恵器壺である。肩部には凹線の下に横推列点文をほどこす。肩部、頸部内面に緑色の釉が厚くかかる。中村編年Ⅱ型式の後半か。(4)は長胴壺口縁部である。端部は面をもち、内側になわずにつまみあげる。内面には横方向の粗いハケメをほどこす。(5)は、口縁端部に面をもち内面への肥厚はほとんどみられない。剝離のため調整は不明である。(6)は小片であり、口径復原に不安を残す。中村編年Ⅳ型式と考えられる。(7)は壺体部である。外面上半は、平行タタキ後カキメ、下半は格子タタキがほどこされ、内面は同心円文当て具痕が残る。(8)は鍋の把手である。(9)は口縁端部にわずかに面をもつ。外面に横方向ミガキがわず

トレンチ	遺物名	平面形	長径[cm]	短径[cm]	厚径[cm]	遺物	トレンチ	遺物名	平面形	長径[cm]	短径[cm]	厚径[cm]	遺物
1A	土坑1	円	0.30	0.40	0.18	土師器壺	4A	41	長方	0.96	0.50	0.24	弥生土師器
	2	正方	1.30	1.30	0.34	土師器・須恵器片		42	不正方	1.4	0.80	0.31	土師器片
	3	不正方	1.4	1.0	0.31	土師器片		43	円	1.02	1.20	0.23	土師器片
	4	不正円	2.00	(2.4)	0.44	土師器・須恵器片		44	長方	1.4	0.80	0.22	土師器片・須恵器片
	5	不正円?	0.40	0.40	0.12	土師器片・須恵器片		45	不正円	1.70	1.30	0.30	土師器片・須恵器片
	6	不正方?	10.00	(4.5)	0.31	土師器片・壺・須恵器年輪		46	不正円	1.52	1.12	0.20	須恵器片
	7	楕円	0.52	0.36	0.20	土師器片		48	長方	2.4	1.70	0.20	弥生土師器
	8	不正方	1.0	1.12	0.30	土師器片・須恵器片		49	不正方?	(1.40)	(0.40)	0.34	須恵器片
	9	不正円	1.52	0.72	0.36	土師器片		50	不正方?	(1.20)	(0.90)	0.18	須恵器片
	10	不正円	1.20	1.20	0.30	土師器片		51	長方	(1.2)	(0.50)	0.22	須恵器片
	11	不正円	1.40	1.40	0.40	土師器片		52	不正方	0.72	0.60	0.10	須恵器片
	12	正方	1.44	1.20	0.46	土師器片		53	円	1.04	0.7	0.18	須恵器片
	13	不正方	1.44	1.44	0.30	土師器片		54	円	(1.20)	(1.00)	0.20	須恵器片
	14	楕円	1.70	1.20	0.32	土師器片		55	楕円?	(1.20)	(0.80)	0.12	須恵器片
	15	正方				土師器片・須恵器片		56	楕円?	(0.8)	(1.20)	0.14	土師器片
	16	円		1.20	1.2	土師器片		57	長方	(1.40)	(1.12)	0.26	須恵器片
2A	土坑17	長方	0.50	1.40	0.22	土師器片	58	長方	(1.20)	(0.80)	0.44	土師器片・須恵器片・壺・年輪	
	18	長方	(1.44)	(1.2)	0.21	土師器片	59	楕円	(1.4)	(1.20)	0.46	須恵器片・須恵器片	
	19	円	(1.4)	0.80	0.21	土師器片	60	不正方	(1.4)	(0.80)	0.20	須恵器片	
	20	楕円	0.8	0.64	0.26	土師器・須恵器片	63	不正円	(2.40)	(1.0)	0.20	須恵器片	
	21	不正方	(1.20)	(0.60)	0.42	土師器片	64	不正円	(2.80)	(2.0)	0.20	須恵器片	
	22	不正方	1.20	(1.4)	0.26	土師器片	65	不正方	(2.20)	(1.60)	0.20	須恵器片	
	23	楕円	(1.20)	(0.8)	0.26	土師器片	66	楕円?	(2.20)	(1.2)	0.22	須恵器片	
	24	楕円	(1.20)	(1.4)	0.26	土師器片・須恵器片・弥生土師器	67	円	(1.4)	(1.0)	0.22	須恵器片	
	25	楕円	(1.20)	(0.8)	0.16	土師器片	68	楕円	(1.40)	(1.2)	0.28	須恵器片	
	26	楕円	(1.20)	(1.12)	0.26	土師器片・壺・須恵器片	69	不正円	(2.0)	(1.4)	0.14	須恵器片	
	27	不正円	(20.8)	(0.30)	0.30	土師器片	70	不正円	(1.2)	(0.70)	0.22	須恵器片	
	28	方	(1.8)	(1.40)	0.22	土師器片	71	不正円	(2.60)	(1.60)	0.20	須恵器片	
	29	不正円	(0.72)	(0.64)	0.12	土師器片	72	不正円	(1.80)	(0.60)	0.17	須恵器片	
	30	円	0.8	0.8	0.20	土師器片	73	不正方?	(2.4)	(2.60)	0.20	須恵器片	
	31	楕円	1.20	0.96	0.16	土師器片	74	不正円	(3.30)	(2.0)	0.24	須恵器片	
	32	不正円	1.20	1.04	0.22	土師器片	75	不正円	3.7	3.3	0.20	須恵器片	
33	不正円	(0.8)	(1.0)	0.12	土師器片	76	楕円	2.0	1.4	0.20	須恵器片・須恵器片		
34	正方	1.20	1.20	0.26	土師器片	77	不正円	(3.20)	(2.2)	0.20	須恵器片		
35	方	1.44	1.20	0.44	土師器片	78	不正円	(3.0)	(1.0)	0.20	須恵器片		
36	楕円	1.4	(0.8)	0.20	土師器片・須恵器片	79	楕円	(3.0)	(1.0)	0.20	須恵器片		
38	長方	1.52	0.8	0.32	土師器片								
40	楕円	2.00	1.4	0.44	弥生土師器								

表2 3面土坑一覽



かに残る。内面は剥離のため調整不明。(10)は鉢である。外面は底部周辺がケズリ、他はナデ、内面は底部が強いナデ、他はナデである。外面上半には煤が付着する。中村編年Ⅳ型式と考えられる。(11)は甕口縁部である。口径より長胴ではなく、口径＝高さのプロポーションをもつ甕と考えられる。口縁端部に面をもち、内面にやや肥厚する。外面ハケメの

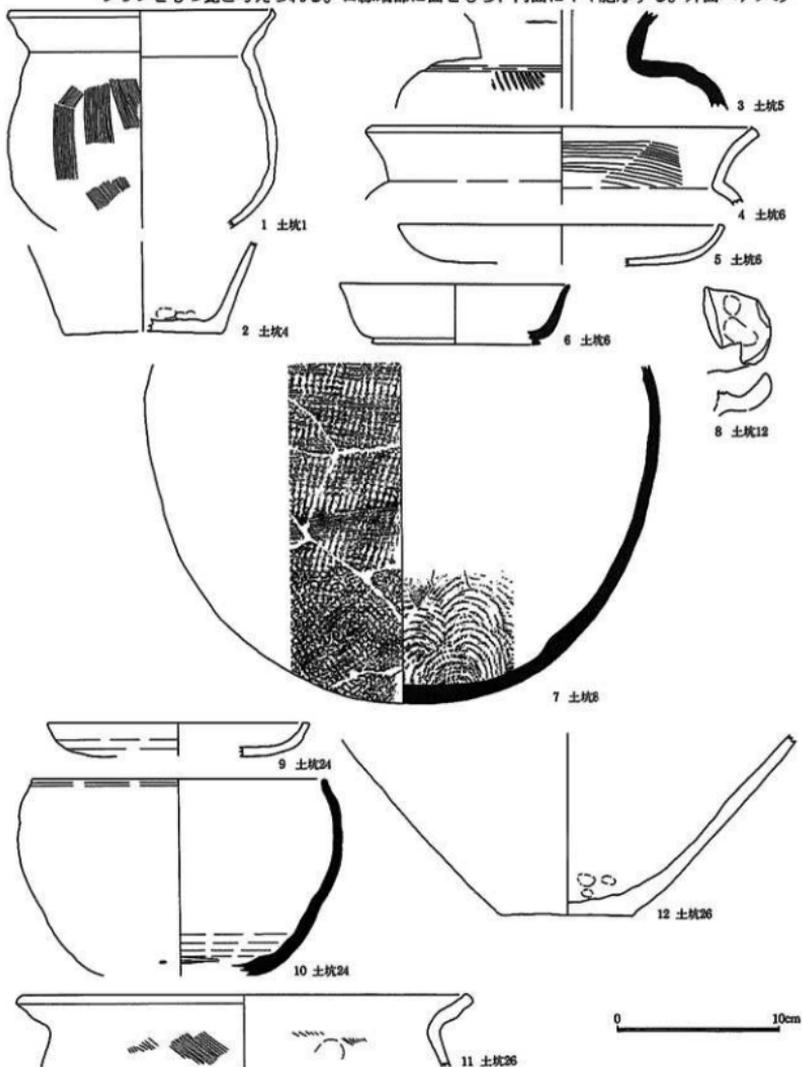


図168 3面土坑出土遺物

後、頸部を強くナデる。(12)は壺の体部下半から底部である。底部外面からはほぼ直行して  
 たちあがる。(13)は肩部がややはりだす須恵器壺体部である。外面は平行タキが横方向  
 に帯状にほどこされ、体部上半にはタキ上に回転カキメがめぐる。肩部内面は回転ナデ、  
 腹部内面は自然釉のため調整不明、底部内面は同心円文タキ後ナデがほどこされる。  
 (14)は壺の底部と考えられる。底面からくびれずに開きながらたちあがる。弥生時代中期  
 か。(15)は広口壺口縁部である。(17)のような口頸部をもつと考えられる。(16)は須恵器  
 壺体部下半である。外面は磨滅しているが腹部には回転カキメがみとめられ、底部周辺は

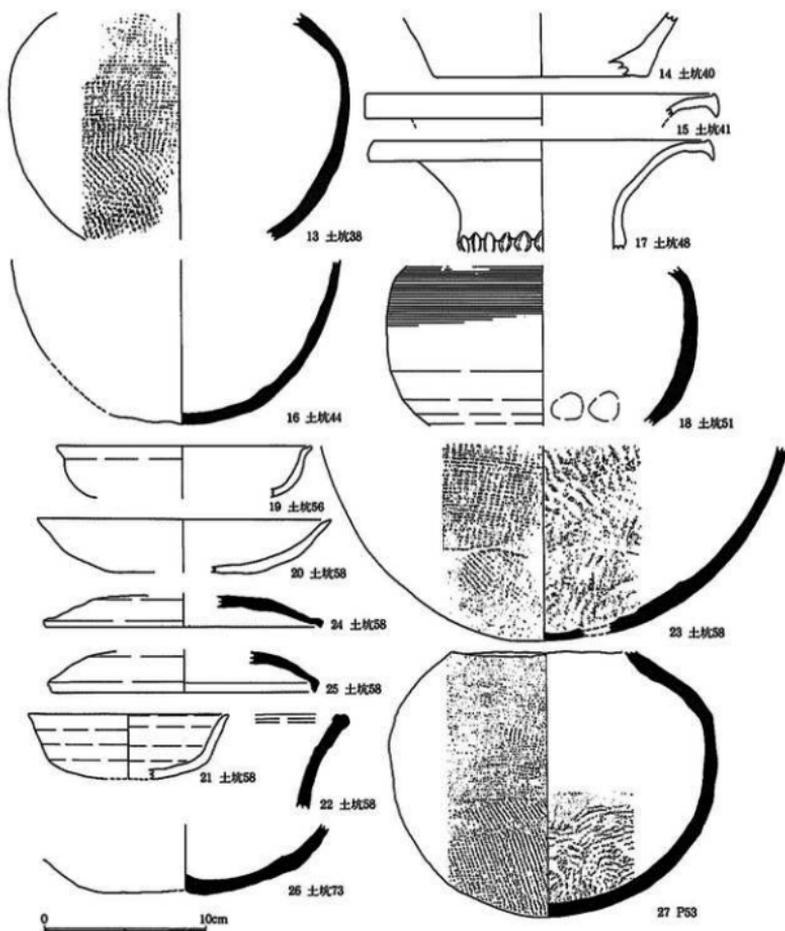


図169 3面土坑・P53出土遺物

回転ヘラケズリである。内面は横ナデである。(17)は口縁部が頸部から大きく外反する大口壺口頸部である。頸部には指頭圧痕突帯文をもつ。磨滅のため調整は不明である。弥生時代中期Ⅲ・Ⅳ様式である。(18)は須恵器壺体部片である。外面上半は回転カキメ、下半は回転ヘラケズリである。内面は回転ナデであり、底部周辺は指オサエ後回転ナデでしあげる。(19)は土師器杯である。口縁端部をわずかに外反させる。調整は磨滅のため不明である。(20)は土師器杯である。平底から口縁部はおおきく開き、口縁端部はつまんだ状態でしあげられる。調整は剝落のため不明である。(21)は土師器杯である。底部外面は剝落のため調整不明であるが、その他の部分は回転ナデである。(22)は須恵器壺口縁部である。口縁端部はやや肥厚する。ナデ調整でしあげられ文様はみとめられない。(23)は須恵器壺底部である。外面は縦方向の平行タタキ後回転カキメ、底部周辺は斜方向の平行タタキがほどこされる。内面は同心円文当て具痕が全面にある。底部の器壁はうすく、5mmである。(24)は須恵器杯蓋である。外面上半は回転ヘラケズリ、他はすべて回転ナデである。外面には自然釉がある。口縁端部内面には、杯身の口縁端部が付着しており、身に蓋をかぶせた状態で焼成されたい。(25)は須恵器杯蓋である。残存部の調整はすべて回転ナデである。(26)は須恵器壺あるいは壺の底部である。外面はヘラケズリ、内面はナデである。

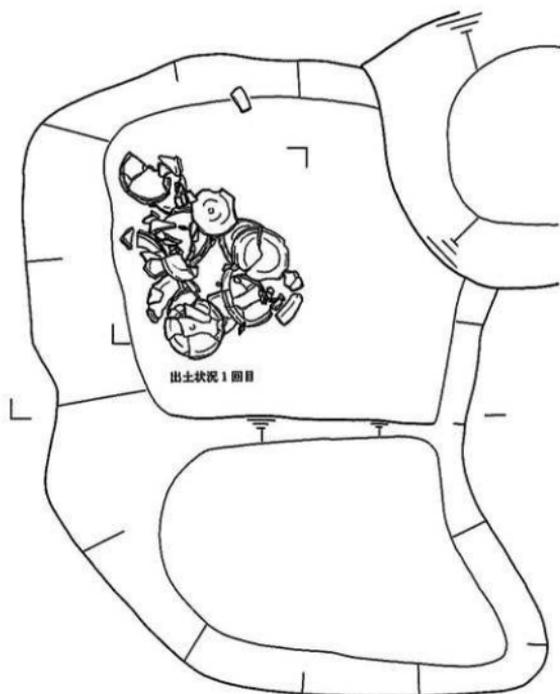
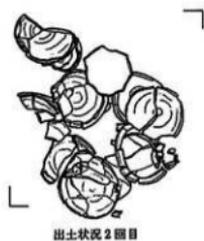
ピット ピットは、P53、P41がある。

P53 4Aトレンチ北部、建物1内に位置する。短辺60cm、長辺80cm以上の不定形な方形をていし、深さ50cmである。ピット北側は攪乱のため不明である。埋土は上層から、灰白色シルト混じり黄橙色シルト、黄褐色シルト混じり褐灰色シルト、褐灰色シルト、黄褐色粘土混じり明オリープ灰色粘土(地山類似土)である。底面で頸部より上の口縁部を欠く須恵器壺(27)が1点やや傾いた状態で出土した。壺内部の土を上・中・下部と3点採取し、脂肪酸分析したところ、高等動物に特徴的にみられる高級脂肪酸、また動物由来のコlestロールの含有量がとくに下部試料に多く、他遺跡との比較からも、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる試料に残存している脂肪と類似していることがわかった(P167参照)。

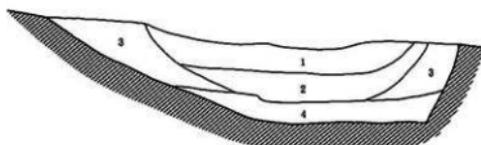
#### 脂肪酸分析

(27)は、やや肩がはる丸底の須恵器壺であり、頸部以下が完形で出土している。頸部破砕面が細かく打ち欠いた状態であることから、人為的に頸部より上の口縁部は打ち欠かれたと考えられる。外面上半は回転カキメ上に一部平行タタキ、下半は底部の無文部分をのぞいて斜方向の密な平行タタキ、内面上半は回転ナデ、下半は同心円文当て具痕がある。P41 4Aトレンチの北部中央、土坑群の南端に位置する。短辺1.1m、長辺1.6m、深さ20cmを測る。平面形は、不定形な長方形である。埋土は、上層から黒褐色緻密なシルト、黒褐色シルトがラミナ状にはいる褐灰色シルトである。肩部には褐灰色シルトが管状にはいる黄褐色シルトが斜めに堆積し、土坑掘削の際ゆるんだ地盤に埋土が貫入したものと考えられる。最下層の灰色シルトが管状にはいる黄褐色シルトは地山類似土であり、土坑掘削後一定時間オープンな状態であったため、土が乾燥しひび割れがおきたため灰色シルトの貫入がみられると考える。したがって本来の埋土は上層2層と考えられる。土器群はこの最下層上面から上層にかけて出土していることもこれを裏付けるであろう。土坑南東隅部で須恵器杯が重なった状態で、約50×50cmの範囲で出土した。内面を上にした杯身・蓋が7個体と、身に蓋がかぶさった杯1個体の上および周辺に須恵器杯片・土師器片が散在す

#### 遺物出土状況



22.1m



- 1 10YR3/1 黒褐色細帯なシルト上位に10YR4/6 褐色粒直径 2mm含む。
- 2 10YR4/1 ~5/1 褐灰色密なシルトラミナ状に黒色層入る。
- 3 10YR7/8 黄褐色シルトに2が管状に入る。
- 4 10YR7/8 黄褐色シルトに10YR7/1 灰色シルト管状に入る。

0 50cm

図170 3面P41平面・断面

る状態で出土した。内1個体は、身か蓋かは不明であるが、頂部のみが出土し、周縁部は打ち欠かれた状態である(4)。身と蓋がセットになった個体は土器群の北端、土坑中央に近い位置で出土した。最下層から、土師器小形壺が2個体出土した。その内、北側の個体は底面を上にした状態で出土し、底面には人為的な円形の打ち欠きがみられた(2)。

**脂肪酸分析** 身と蓋がセットになった杯の中の土壌の脂肪酸分析をおこなった結果、高等動物の脂肪が多少残存していることがわかった(P167参照)。

**遺物** 遺物は、須恵器杯蓋2点(3・5)、杯身9点(6~14)、杯か蓋か不明のもの1点(4)、土師器小形壺2点が出土した。(3)の杯蓋は、焼成があまくやや軟質であり、胎土は他の須恵器杯とかわらないが、土師質に近いしがりである。須恵器杯は12点中7点がほぼ完形である。外面は、回転ヘラケズリと回転ナデ、内面は回転ナデで仕上げられる。(5)は外面中央に線状のヘラ描きがある。須恵器はII型式5~6段階と考えられる。土師器小形壺(1・2)は、ともに頸部のくびれがほとんどみられない。(2)は口縁部内面にやや稜をもつことで口縁部と頸部をわけると。(1)は磨滅のため調整不明である。(2)は外面頸部に指オサエ、腹部にハケメ、内面にハケメが一部みられる。底部やや上方に直径4cmの円形の打ち欠きが外面からほどこされ、焼成後の打ち欠きと考えられる。

**掘削痕** 3Aトレンチ南隅、土坑51東側の3×2mの範囲で、横20cm、縦10cmの不定形な長方形の褐灰色シルトが重複してみられた(図版38)。長辺の一辺が明確であり、断面はこれに向かって深くなる三角形であるため、掘削痕の可能性が考えられる。

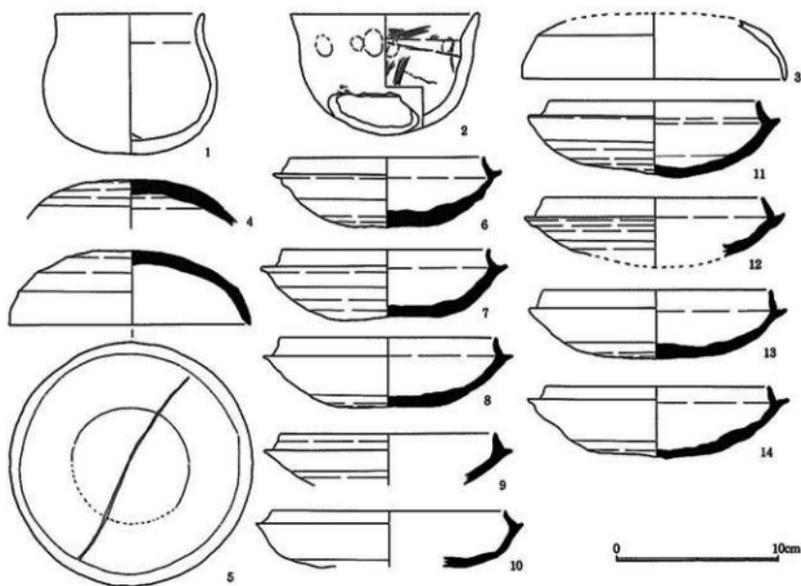


図171 3面P41出土遺物

## (3) 池の中

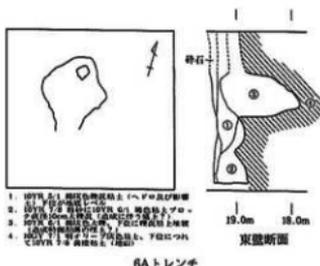
南門前池は、千里丘麓から南西にのびる段丘の縁辺部に位置する。池の北側は蜷池遺跡がのびる段丘であり、この南端は削平され石垣によって補強されていることがわかった。段丘の削平は明治43年の阪急電鉄宝塚線の開通にとまなうものと考えられる。池の北東側には国道176号線をはさんで箕輪池があり、南門前池から箕輪池へのびる北東—南西方向の谷筋がある。この谷筋の南側には南刀根山遺跡・御神山古墳が立地する細長い段丘があり、御神山古墳が立地する段丘先端は南門前池に突き出るような形状である。南門前池は南側に東西方向の堤防が、西側には南にむけて高さをます堤防がある。現在、水の入口は池の北西隅部、出口は南側堤防の中央やや東寄りの樋門であり、北西—南東方向の谷の存在が考えられた。蜷池遺跡では、地山がやや西に下降することからも、この方向の浅い谷があると考えられた。したがって、南門前池には北東—南西、北西—南東方向の2本の谷が埋没すると考えられた。

6~8Aの調査の結果、6Aでは近世~近代の井戸、7Aでは箕輪池にぬける北東—南西方向の谷筋にそった自然流路、8Aでは南門前池の現在の樋門の方向には北西—南東方向の奈良時代の溝を検出し、2本の谷の存在を確認した。池底の高さは、南へ向かって下降する。

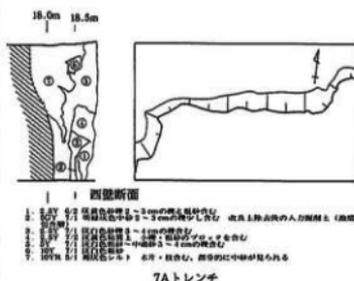
以下各トレンチについて記述する。

6Aは、碎石、池底の泥土、蜷池センター建築に伴う造成土(計2m)を機械掘削により除去後、19mの高さでしまった粘土層に達し、同面を精査した。トレンチ東南部には、幅1.5m、深さ1mを測る壷状の掘り込みがある。バックホーの爪跡がみられ、埋土はブロック土であることから、造成時の攪乱と考えられる。トレンチ北西部で1辺2m、深さ90cmの隅丸方形の土坑を検出した。埋土は礫を多く含むブロック土である。土坑北端隅で直径50cm、高さ30cmの底無しの桶を検出し、桶の中から柴付の磁器碗・陶磁器片が多く出土した。桶底は砂礫層に達しており、近世井戸の底部と考えられる。土坑は、井戸の掘形であり、造成時に攪乱をうけたと考えられる。井戸上部は段丘削平時に失われたと考えられる。

7Aは、碎石、造成土(計1.6m)を機械掘削により除



6Aトレンチ



7Aトレンチ

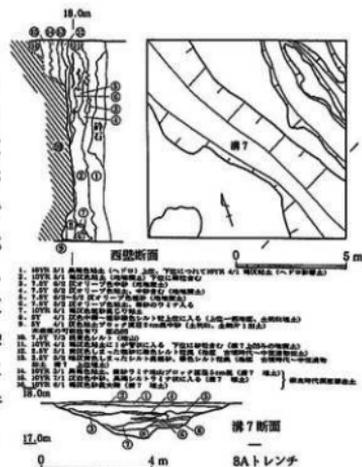


図172 6A・7A・8Aトレンチ平面・断面

去後、池底の埋土である褐色シルト～粘土（10ca）を掘削した時点で、18.7mの高さで砂混じりのしまった粘土層に達し、同面を精査した。池底の埋土から遺物は出土しなかったが、土質から8Aの中世包含層につづく層と考えられる。トレンチ北東部から南西部にかけて北東—南西方向の自然流路の肩部を7mにわたり検出した。自然流路の埋土は、上層から黒色シルト～粘土腐食土層、灰白色細砂～微砂、二層の互層、砂礫層である。トレンチ北西隅で深さ90caを測る。遺物は出土しなかった。

8Aは、碎石、池底の泥土（計1.6m）を機械掘削により除去後、粘土層に達し、同面を精査したが遺構は検出されなかった。粘土層（40～60ca）から遺物は出土しなかった。その下層には褐色シルト（20ca）、粗砂（10ca）が堆積し、とくに粗砂層から陶器片・須恵器杯片・土師器片・瓦など古墳時代～中世の遺物が出土した。17.6mの高さで砂混じりのしまった粘土層に達し、同面を精査した。同面では、北西—南東方向の溝7とこれの東側で平行する小溝3条を検出した。溝7は幅2.0m、深さ80caを測る。断面形が浅いV字形であることから、人為的に掘削された溝と判断できた。埋土は上層から、黒色シルト～粘土腐食土、黒色シルトと灰色細砂～粗砂の互層、粗砂層である。遺物は、須恵器片、土師器片のほか須恵器耳付壺の耳の部分が出土し、これより奈良時代の溝と考えられる。小溝は、幅50ca～1m、深さ10～20caを測り、埋土は粗砂である。遺物は出土しなかった。

奈良時代溝

### 3. まとめ

堂池遺跡の調査成果は以下のとおりである。

- ・1面では近世水田面を検出した。鋤溝・溝の方向は東西南北方向のものと、現在の宅地割りにのるものがあり、後者は麻田藩陣屋設置以降の土地区画にのっている。
- ・2面では中～近世水田面を検出した。鋤溝・溝の方向は東西南北方向ののっており、中～近世には段丘上が開発され、条里制にのった水田区画が段丘上にあることがわかった。また、南北方向の溝1を境に水田面は西へ一段下っており、南門前池からのびる北西—南東方向の谷の存在を考えることができる。
- ・3層は、古墳時代後期～中世の遺物包含層である。偏平な宝珠つまみをもつ須恵器杯蓋、高台をもつ須恵器杯身、土師器甕など奈良時代の遺物が主体的であり、黒色土器片・瓦器片が10片程度混じる。奈良時代（中村編年Ⅳ型式2・3段階）の遺物が多量に含まれることから、この年代を存続年代とする生活域の存在が考えられた。3面で検出された掘立柱建物2棟もこれにともなうと考えられる。
- ・3面では掘立柱建物2棟と土坑群を検出した。掘立柱建物は東西南北方向に軸をもち、奈良時代には段丘上で東西南北方向の土地区画をもとに建物が配置されたと考えられる。堂池遺跡周辺では、同じ段丘の北側に位置する堂池東遺跡で奈良時代以降の掘立柱建物が、堂池東遺跡と谷をはさんだ北側の段丘上に位置する堂池北遺跡、宮の前遺跡で掘立柱建物が検出されている。堂池遺跡からその北側の段丘上に奈良時代以降の集落がひろがっていたと考えられる。また、堂池遺跡の南東、南門前池をはさんだ狭小な段丘上に立地する南刀根山遺跡では、奈良時代の蔵骨器が出土している。段丘をたがえて、居住域と墓域の使い分けがあった可能性が考えられる。

・3面で検出した土坑群は、79基を数える。土坑群は切り合い関係から、掘立柱建物以前に位置づけられる。土坑群からはその12パーセントにあたる9基の土坑から弥生時代中期～奈良時代の遺物が出土し、古墳時代後期～奈良時代の遺物が主体をしめる。遺物は土坑底面の縁辺で個体またはまとまった破片で出土するものが多い。脂肪酸分析からヒト遺体の埋葬の可能性が考えられることから、土器は供物が入れられた可能性が考えられる。土坑37では、脂肪酸分析から、西に頭、北に腹部が位置する形で埋葬された可能性が指摘されている。

・土坑の平面形は不整形が多く、大きさは直径1～2m、深さ20～40cmが大半である。長方形土坑は少数であり、伸展葬にたえられそうな土坑は、1.52×0.8m、深さ32cmを測る土坑39のみである。土坑を墓と考える場合、屈葬の割合が高かった可能性が考えられる。

・土坑埋土の堆積状況を褐灰～黒褐色シルトの入り方をもとに分類すると、褐灰～黒褐色シルトが、1.下層に入る、2.中層に入る、3.間層をはさみ、上層と下層に入る、4.不規則に入る、がある。このなかで1・4は、褐灰～黒褐色シルトが地山類似土である黄褐色粘土とブロック状に混じる場合がみられる(図版37)。また、褐灰～黒褐色シルト層の上層は、ブロック土のものも少数あるが大半は灰白色シルト混じり黄褐色シルトである。密集土坑群の性格としては、粘土採掘坑、墓が一般的に仮定される。螢池遺跡の密集土坑群は、良質な粘土とみられる黄褐色粘土が下層にあるが、そこまで掘削はおよんでいないという点で粘土採掘坑の可能性が小さいが、埋め戻し土とみられるブロック土が上層にみられる土坑は少数であるという点で墓とするには困難である。土層観察による土坑の性格付けは困難である。今回は脂肪酸分析の結果をもって、墓の可能性が高いと考える。

・土坑群の南端、段丘縁辺に位置するP41で、須恵器杯12点、土師器小形壺2点が重なった状態で出土した。壺は底部に打ち欠きがある。P41から段丘の落ち際まで10mを測るが、P41を境に土坑の密集はみられなくなることから、P41は墓域の端を示す指標のような性格をもつ可能性が考えられる。

・土坑群は、たびかさなる切り合いで、最終段階の土坑以外は平面形が不明瞭である。断面をみると、土坑群による褐灰～黒褐色シルト混黄褐色粘土層が調査区をとおして1層形成されていることがわかる。土坑埋土および上記層からナイフ形石器をふくむ旧石器約10点が出土した。螢池遺跡周辺では、螢池西・螢池北遺跡で旧石器が出土している。本遺跡で出土した旧石器は、原位置をとどめるものではないが、段丘構成層である黄褐色粘土層にふくまれたものが、土坑掘削時に攪乱、混入した可能性が考えられる。

・段丘上では、現在の地表面から2mの深さである、22mの高さで段丘礫層にいたる。

・南門前池の中の調査では、池のなかをはする北東-南西、北西-南東方向の2本の谷の存在が明らかになり、後者では奈良時代に溝が掘削されていたことがわかった。

・南門前池につきだす段丘上には御神山古墳が存在する。御神山古墳は、三角縁神獣鏡、車輪石の出土が伝えられる前方後円墳もしくは円墳とされる前期古墳である。その掘に位置する南門前池は、古墳の周濠ではなく中世ごろに谷をせき止め築造した溜め池であるとする藤沢一夫氏の見解が豊中市史に記されている。今回、池底では中世包含層を確認し、その下層で奈良時代溝を検出したことはこれを検証するものである。

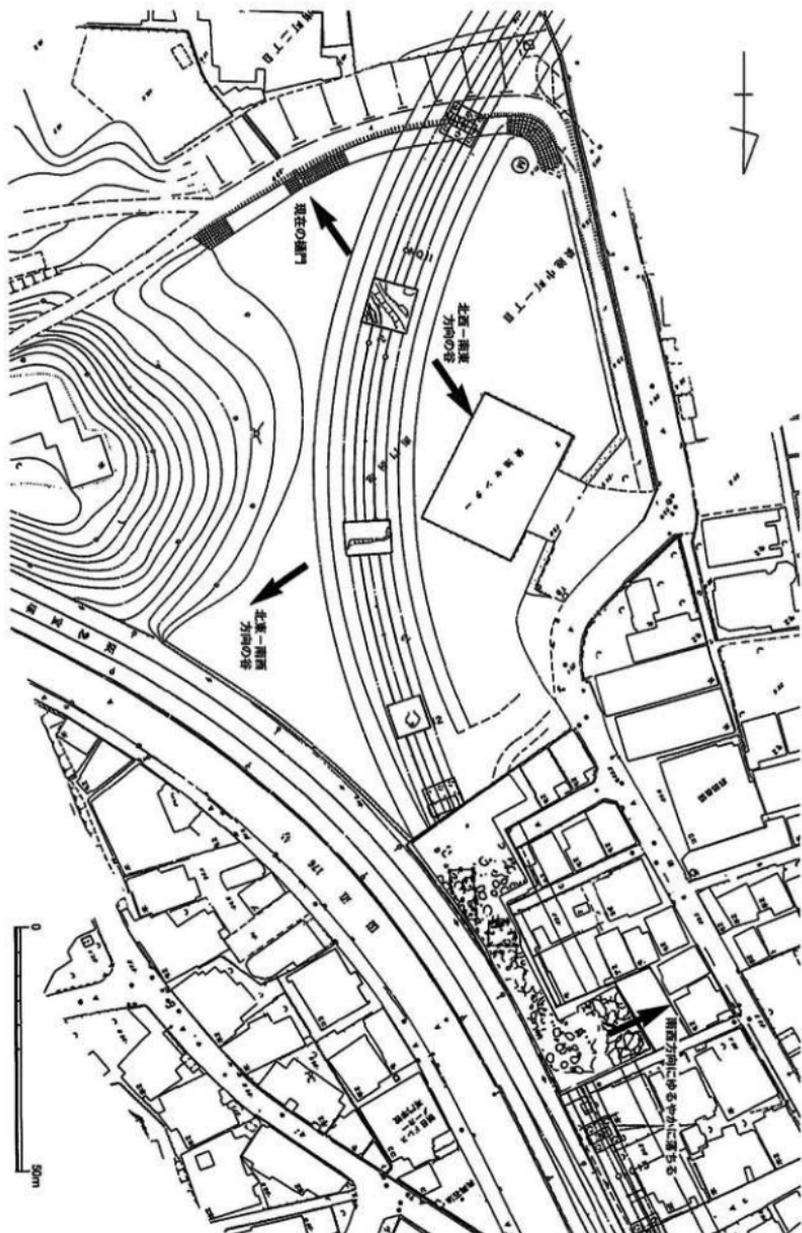


图173 遺構全体図

## VI 蛍池西遺跡(1)

### 1. 調査の方法

蛍池西遺跡は豊中市蛍池西町1丁目から3丁目にかけて広がる遺跡である。

刀根山丘陵の西裾に広がる低位段丘の南西崖下、猪名川水系の沖積地に立地している。

今回の調査地は1993年度現在は周知の遺跡としての蛍池西遺跡の範囲から南東に外れた位置にあり、豊中市立蛍池小学校の南隣、蛍池南町3丁目地内にある(図174)。

そのため、試掘調査の扱いでモノレールのピア部分のみ調査を実施した。しかし、立地と調査成果から見ても蛍池西遺跡の範囲に含めるのが妥当と思われる。

堆積状況の  
違い

但し、段丘崖直下には、ある程度の幅をもった緩傾斜面が帯状に続いており、その部分は現在の遺跡範囲には含まれていないが、今回の調査地点はその裾部分である。

また、調査地点の北北東の段丘崖に、昔、溜池として利用され、現在埋め立てられ、麻田公園となっている、小さな開析谷があり、そこから供給される堆積物が現遺跡範囲と本調査地点の堆積状況を異なるものになっている可能性もある。

本調査地点では東西70m程の間に4基のモノレールの橋脚が計画されており、それに合  
トレンチ  
わせ、ほぼ7m×7mのトレンチを東西に4個ならべたトレンチ設定となった。

トレンチ名は東から1A・1B・1C・1Dとした。層と面の関係は1層の上が1面というように層とその上面の数字を同じくした。また遺構名の数字は各トレンチ各面毎に付けた。

### 2. 調査の成果

#### (1) 基本層序

今回は試掘の意味合いもあるので、盛土・現耕土直下から調査を実施し、下は硬い砂礫層の存在が知られていたため、その上部を確認する事を一応の目安とした(図175)。

1層は2.5Y6/2(灰黄色)の砂質土で、上部は酸化鉄が多く2.5Y5/6(にぶい黄色)を  
をている。若干、酸化マンガン粒が見られる。主体粒子はシルト～細砂で粗砂を含む。

2層は2.5Y6/1(黄灰色)～5Y6/3(灰オリーブ色)で上部は酸化鉄が多く2.5Y6/6(明黄褐色)を  
をている。酸化マンガン粒や土質は1層と同じである。どちらも砂質土系の耕土のようで平均的な  
層厚は10cm弱である。

3層は2.5Y5/6(黄褐色)～2.5Y6/8(明黄褐色)の酸化鉄の多い粘質土  
で、主体粒子は粘土～シルト、細砂～粗砂を若干含み、1Cトレンチの一部  
ではかなり砂質である。酸化マンガン粒もわずかにみとめられる。ブロック



図174 トレンチの位置

状の構造が見られる部分があり、上面がかなり平坦になっていることからみても、整地客土層の可能性はある。層厚は10cm強である。

4層は1Aトレンチにはなく、1B・1Cトレンチでも一部にしかない。西にいくほど砂っぽくなる砂質土で土色は2.5Y6/3にぶい黄色～5Y6/2灰オリーブ色である。主体粒子は中砂～シルトで粗砂を若干含み、部分的に酸化マンガン粒がみられる。層としてはみられない部分でも5面（4面でもある。4層がないため重複）の遺構に似た土を埋土とするものがあり、かつてはかなり広範に存在したようである。耕土の可能性もあり。層厚は安定していない。

5層は2.5Y4/6オリーブ灰色～2.5Y6/8明黄褐色の粘質土で主体粒子は粘土～シルト、細砂を若干含み酸化マンガン粒もわずかにみられる。上部がかなり土壌化した止水堆積層と思われる。1Dトレンチではあまり遺存しておらず、平均的な層厚は10cm弱である。

6層は10YR4/4褐色～10YR5/1褐灰色の粘質土で、主体粒子は粘土～シルトだが、酸化マンガン粒がびっしり詰まった層なので堆積状況は不明である。土壌化が激しいのでかなり長い間、地表面に露頭していた感がある。層厚は大体10cm強～20cm弱。

7層は2.5Y6/2灰黄色～2.5Y6/3にぶい黄色の砂質土で、主体粒子は中砂～シルト、下にいくほど粒子が粗い、止水堆積層である。酸化マンガン粒あり。酸化鉄若干あり。層厚は20cm前後だが、1Cトレンチでは30cmを超える。やや土壌化した止水堆積層である。

8層は2.5Y6/4にぶい黄色の粘質土、主体粒子は粘土でシルト～細砂を含む。酸化マンガン粒と斑状酸化鉄がみられる。

8面には明確な土壌化の痕跡がなく、7層と堆積の断絶はあるが、その間、地表化しなかったのかもしれない。止水堆積層で、層厚は1A・1Dトレンチで約30cm、1B・1Cトレンチで約20cmである。

#### 黒色粘土層群

9層から11層までは一つの黒色粘土層群を成すが、の中で基本的には3層に分かれ、11層はさらに11-1層と11-2層にわけられる。

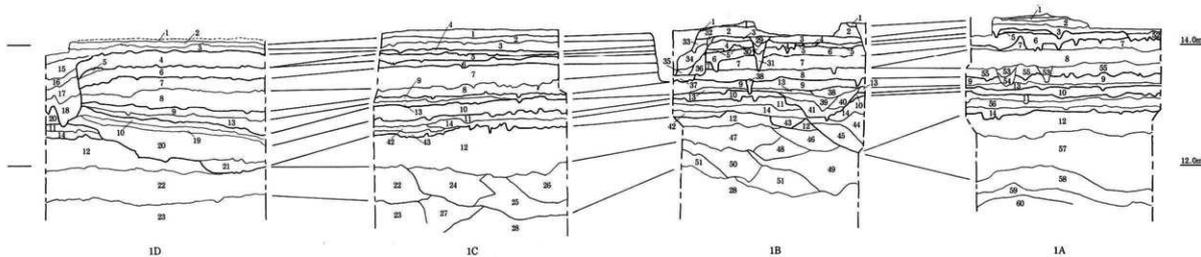
9層は5Y2/1黒色～10Y4/1灰色の粘質土で主体粒子は粘土～シルトだが、わずかに細砂～中砂を含み酸化マンガン粒や斑状酸化鉄も見られる。堆積した黒色粘土の上面が土壌化したものとも考えられるが、10層との間に10Y6/1灰色の薄い粘土～シルト層をはさむ部分もあり、耕土であった可能性も捨てきれない。層厚10cm強である。

10層は大体10Y3/1オリーブ灰色の粘土でシルトをわずかに含む。炭化物が若干あり、管状酸化鉄や酸化マンガン粒もみられるが、あまり土壌化していない止水堆積層である。層厚は10cm強～30cm弱である。

11-1層は5Y4/1灰色～2.5GY4/1灰色の粘質土で粘土主体、シルト～細砂を含む。斑状酸化鉄も若干みられる。粒状構造がみられるところから耕土の可能性もある。層厚5～10cmが平均的である。

11-2層は7.5Y4/1灰色～2.5GY4/1灰色の粘質土、粘土主体でシルト～細砂含む。炭化物がわずかにみられるほか、下部に青灰色粘土の小ブロックがみられる部分もある。これも耕土の可能性はある。層厚は大体5～15cmである

11-1層・11-2層は耕土である可能性も捨てきれないが、否定的にみれば黒色粘土の



## 土層・土質

1. 2.5V 6 2 灰黄色粘土 上部は酸化鉄が多く2.5V 5 6 に近い黄色を呈する。主体粒子シルト～細砂、粗砂を含む。酸化マンガン粒若千あり。(1層)
2. 2.5V 6 7 黄灰色～5V 6 8 オリーブ色砂質土 上部は酸化鉄が多く2.5V 6 8 明黄褐色を呈する。主体粒子シルト～細砂、粗砂を含む。酸化マンガン粒若千あり。(2層)
3. 2.5V 6 8 黄褐色～2.5V 6 9 明黄褐色粘土 主体粒子シルト～細砂、粗砂若千あり。酸化鉄多し。酸化マンガン粒わずかにあり。トレンチの底にのみならず砂質。(3層)
4. 2.5V 6 9 に近い黄色～5V 6 9 灰オリーブ色砂質土 主体粒子中砂～シルト。粗砂若千含む。西に向くほど硬質。面状の酸化マンガン粒若千あり。(4層)
5. 2.5V 6 9 オリーブ灰色～5V 6 8 明黄褐色粘土 主体粒子粘土～シルト。粗砂若千含む。酸化マンガン粒わずかにあり。上部硬質土。(5層)
6. 10V 4 4 緑色～10V 5 3 緑灰色粘土 主体粒子粘土～シルト。酸化マンガン粒若千あり。(6層)
7. 2.5V 6 9 灰黄色～2.5V 6 9 に近い黄色砂質土 主体粒子中砂～シルト。酸化マンガン粒あり。酸化鉄若千あり。粒子下部のほう粗相し。土水層あり。やや土酸化。(7層)
8. 2.5V 6 4 に近い黄色粘土 主体粒子粘土。シルト～細砂を含む。塊状酸化鉄あり。粒状酸化鉄あり。土水層あり。(8層)
9. 5V 2 1 黒色～10V 4 1 灰黄色粘土 主体粒子粘土～シルト。わずかに細砂～中砂を含む。酸化マンガン粒・塊状酸化鉄あり。(9層)
10. 10V 3 1 オリーブ灰色粘土 シルトわずかに含む。灰化物若千あり。管状酸化鉄・酸化マンガン粒若千あり。土水層あり。(10層)
11. 5V 4 1 灰色～2.5V 4 1 灰黄色粘土 粘土主体。シルト～細砂含む。塊状酸化鉄あり。粒状酸化鉄あり。(11～1層)
12. 10V 6 1 黄褐色～10V 6 1 黄灰色粘土 シルト 上部は黒色粘土の降下量しく10V 7 1 明緑灰色を呈し酸化鉄多し。(12層)
13. 10V 6 1 灰黄色シルト 粘土の降下量。土水層あり。8・10層間、同層
14. 7.5V 4 1 灰色～2.5V 4 1 灰黄色粘土 粘土主体。シルト～細砂含む。灰化物わずかにあり。12のサブゾナあり。(11～2層)
15. 2.5V 4 3 オリーブ黄褐色砂質土 細砂～シルト主体。粗砂若千あり。酸化マンガン粒多し。酸化鉄若千あり。上部粘土降下あり。(4面遺構埋土)
16. 6 2 灰土 4～7のブロックあり。(4面遺構埋土)
17. 7 2 灰土 4～6のブロックあり。(4面遺構埋土)
18. 5V 3 1 オリーブ黄褐色土 7のブロック若千あり。粗砂部分にあり。(4面遺構埋土)
19. 10V 7 4 3 1 粗緑灰色粘土 シルトわずかに含む。灰化物わずかにあり。(13層)

20. 2.5V 2 1 黄褐色粘土 シルト若千含む。灰化物あり。酸化鉄わずかにあり。(15層)
21. 2.5V 2 1 黄褐色粘土 粘土主体。粗砂～小砂含む。12のブロックあり。(11～1面遺構埋土)
22. 10G 5 1 緑灰色粘土 粘土主体。シルト～細砂若千あり。粗砂～中砂若千あり。酸化鉄わずかにあり。(13層)
23. 5D 4 1 粗黄灰色中砂～中砂 しまりよし。酸化鉄わずかにあり。(14層)
24. 10H 2 4 1 黄灰色細砂～シルト ラミナあり。一部2.5V 6 1 あり。(13層)
25. 2.5V 4 1 暗オリーブ灰色細砂～小砂。ラミナあり。(15層)
26. 10V 5 1 灰黄色～小砂と2.5V 5 1 灰色～10G 6 1 粗緑色細砂の互層。ラミナあり。(13層)
27. 7.5V 4 1 灰色～2.5V 6 1 緑灰色中砂～シルト 粗砂若千含む。ラミナあり。(13層?)
28. 10GV 6 1 緑灰色中砂～細砂 しまりよし。(14層)
29. 3～6のブロック。(3層の一層か)
30. 4～6のブロック。(4面遺構埋土)
31. 2.5V 5 1 黄灰色細砂～中砂 シルトを含む。酸化鉄・酸化マンガン若千あり。(4面遺構埋土)
32. 3～4のブロック 3のブロック多し。(3層の一層か)
33. 3～4のブロック 4のブロック多し。(3層の一層か)
34. 2.5V 4 1 黄灰色砂質土 シルト～中砂主体。粗砂若千あり。酸化マンガン粒若千あり。(4面遺構埋土)
35. 5V 4 1 灰色粘土～2.5V 5 1 黄灰色細砂の互層。ラミナあり。酸化マンガン若千あり。(4面遺構埋土)
36. 5V 5 1 灰色中砂～シルト しまりよし。酸化鉄・酸化マンガン若千あり。(4面遺構埋土)
37. 10V 5 1 4 6 粗褐色～褐色中砂～細砂 粗砂含む。酸化鉄・酸化マンガン多し。ラミナあり。(4面遺構埋土)
38. 2.5V 3 3 5 1 黄褐色～黄灰色粘土 粘土主体。粗砂～小砂含む。酸化鉄あり。(土の塊の観察?)
39. 10V 2 1 黒色粘土 粗砂若千あり。管状酸化鉄・酸化マンガン粒わずかにあり。(土の塊の観察?)
40. 10～100ブロックと小砂～粗砂多し。酸化鉄あり。(土の塊の観察?)
41. 10V 3 1 7.5V 4 1 オリーブ灰色～灰色粘土 シルト若千含む。11・12・14のぼやけたブロック下部に多し。酸化鉄若千あり。(土の塊の観察?)
42. 7.5V 5 1 灰黄色粘土 粘土主体。シルトを含む。酸化鉄若千あり。粒状酸化鉄多し。(11～2層)
43. 12～440ブロック
44. 10V 5 1 緑灰色粘土 粘土～シルト主体。上部酸化鉄あり。粗砂～中砂多し。(12層の二次堆積?)
45. 10V 6 1 10V 5 1 粗緑色～黄褐色中砂 粗砂主体。酸化鉄あり。ラミナあり。(15面遺構埋土)
46. 7.5V 4 1 灰色中砂～中砂 ラミナあり。酸化鉄あり。
47. 10GV 7 1 灰白色細砂～シルト 中砂～粗砂わずかにあり。酸化鉄上部に若干あり。(12層)
48. 2.5V 6 4 に近い黄色細砂～細砂 小砂若千あり。酸化鉄あり。ラミナあり。(13層)

49. 5V 4 1 灰色中砂～中砂 ラミナあり。(13層)
50. 5V 3 1 10V 7 1 灰色～明緑灰色細砂～中砂 シルト若千含む。粗砂わずかにあり。ラミナあり。(13層)
51. 10V 4 1 灰色中砂～細砂 粗砂主体。ラミナあり。(13層)
52. 6 2 7のブロック。(4～6)面の遺構埋土)
53. 5S 0 二次堆積
54. 5V 1 2 黒色粘土 酸化鉄・酸化マンガン若千あり。(13層)
55. 2.5V 5 2 粗黄褐色粘土 粘土～シルト主体。酸化マンガン粒多し。
56. 10V 3 1 オリーブ黄褐色粘土 管状酸化鉄若千あり。灰化物わずかにあり。
57. 10V 2 6 1 黄灰色粘土 下部シルトを含む。酸化鉄あり。上部や粘土～シルトの降下あり。植物物の痕跡あり。(12層)
58. 5V 6 1 黄褐色粘土 下部シルトを含む。酸化鉄あり。土水層あり。上部わずかに土酸化?(13層)
59. 10V 5 1 黄灰色シルト 粘土を含む。酸化鉄若千あり。土水層あり。一部細砂～粗砂。(13層)
60. 10V 6 1 緑灰色シルト 細砂多しを含む。酸化鉄あり。(13層?)

(注記 「管状酸化鉄」は上部で言う管状酸化鉄の他物のものである。「塊状酸化鉄」はそれとは別に断面上部に見られる酸化鉄分の観察を言う。単に「酸化鉄あり」とするは全体的に酸化鉄分が染まっている状態を指す。「酸化マンガン粒」は粒状に凝集したものを、「酸化マンガン」とあるのはそれが破砕されたかのような状態のものか。粒状に凝集していない状態のものを言う。)

各トレンチ間の距離は実際とは異なる任意の配置である。  
1B～1Dトレンチは北東断面だが、1Aトレンチは断面を避けたため東壁断面となっている。(S=横1/160)

図175 1A・1B・1C・1Dトレンチ断面

堆積が始まる際の流水により攪拌された堆積物とも思える。

青灰色粘土層

12層は5BG6/1青灰色～10BG6/1青灰色の粘土～シルト層で上部は黒色粘土の降下が激しく、やや土壌化して、10GY7/1明緑灰色をていし、酸化鉄も多い。基本的に層厚50cm程度の止水堆積層だが、1Aトレンチなどでは堆積単位が二つに分かれ、層厚が1mを越す部分もある。木の根の痕跡のようなものが観察されることがある。

13層は単一の層ではなく、青灰色系の粘土～シルト層・砂層・中礫～粗砂を多く含んだ粘土～シルト層が複雑に切り合う層群である。個々の堆積範囲も狭く、上下関係も必ずしも粒子の大きさに従うものではない。おそらくは段丘礫層が露頭する段丘崖を起源とする二次堆積層が主体となった層群と考えられ、ほとんどの層にラミナがみられる。

14層は基本的に礫を主体とした礫層であるが、シルト等もだいが含み、沖積層の一部と思われる。深度からいっても、ボーリング調査で貫入率60%を中心部で示す固い砂礫層の上部と考えられる。

礫層

1面の高さは概ね14.4mで、14層の頭の高さは12.5～10.8mである。

## (2) 1～3面

1・2面では鋤溝群が検出された。また、1面では耕運機の耕作痕跡もみられた。それらの方向は全て現在の耕地の区画と平行、もしくは直交している。1層内から昭和34年の10円硬貨が出土し、2面では土坑内にワイヤーを巻いた丸太を埋め込んだものがあるので、どちらも現代の面として良いだろう。ただ、埋没して耕作されなくなってからさほど時の経過していない層でも、酸化マンガング粒などの形成がみられるのは注目できる。

現代の層

3面では鋤溝などはみられず、一面に稲株の痕跡らしきものが見られた。直径が10cm弱の不整な円形で、輪郭は毛羽立つように周囲の土を破砕し明確ではない。埋土は2層の土から酸化鉄分を抜いたような白っぽい砂質土である。2層が耕土として機能していた時はその床面であったはずだが、鋤溝がないのが奇妙ではある。しかし、3層は整地客土の可能性があり、もしそうであるならば層厚から類推される土量が少なくないので、3層の形成自体が近代以降の機械力に頼ったものである可能性が高い。

整地客土か

1～3層から出土した遺物(図176)は、合計でもコンテナ箱半分にも満たない。須恵器がその半分以上を占め、古墳時代後期から奈良・平安時代頃のものまでである。しかし、ほとんどが細片で図化できるものは少ない。次に多いのは土師器片であるが、器種も分からない細片ばかりである。中世のものと思われる遺物はほとんどなく、わずかに土師質の三足釜の脚部片と思われるもの1点をみるばかりである。近世のものとしては染付も若干みられ陶器もわずかにある。ほかにサヌカイトのチップが1点ある。

それらの中から3点を図176で紹介する。(1)は染付の猪口片である。外面には菊花状の図柄があり、見込みには同心円になると思われる3条の円弧が描かれている。小さい高台は断面がシャープな三角形で、その内側には軸が及んでいない。(2)は須恵器杯片で、身の立ち上がり比較的緩いところから、奈良～平安時代でもやや新しいもののような感じがする。(3)は須恵器杯蓋片で6世紀中葉のものか。

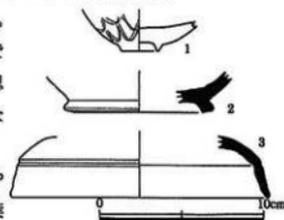


図176 1・2層出土遺物

### (3) 4面

#### 1Aトレンチ (図177)

不整形に枝分かれしたり、曲がったりする浅い溝群が検出された。幅も深さも一定していないが、基本的なところでは幅25cm、深さ10cm程度のような。底部には細かい凹凸があり、埋土は3層が直接入っている部分と基盤層のブロック土の部分がある。木の根の痕跡のようにもみえるが、深さが浅い事や直角に近い曲がりがあることがやや不自然である。しかし、人為的なものとしては規則性が無さ過ぎるともいえる。性格不明である。

#### 1Bトレンチ (図178)

北西から南東に抜ける大きめの溝(溝1)と、その北東側にはほぼ直角に取りつく2本の溝(溝2・溝3)、その2本の溝の中間に平行に走る畦畔一本、溝1の南西側で浅いピット群が検出された。

性格不明の  
溝群

溝1 幅約2m弱、深さ約60cm強で、底部は幅90cmほどがやや平坦な逆台形の掘形である。断面(図179)から見て、掘り直しが2回あったと考えられる。最下部にラミナのある砂層が形成された後、ラミナのある粘土〜シルト層が堆積し、その後オリーブ褐色の砂質土ではほぼ完全に埋まる。その後、北東側の埋まった部分を残して、幅1.45m、深さ50cm程に掘り直される。その最下部にラミナのある粘土〜細砂層が形成された後、黄灰色の粘質土である程度埋まって、再び幅90cm以上、深さ40cm程の溝がほぼ中央に掘り直される。その溝も最下部にラミナのある粘土〜細砂層が形成された後、黄灰色の砂質土(一つ前の溝の埋土とはほとんど同じ)で埋まった後、やや凹地になった部分を3層のブロック土で最終的

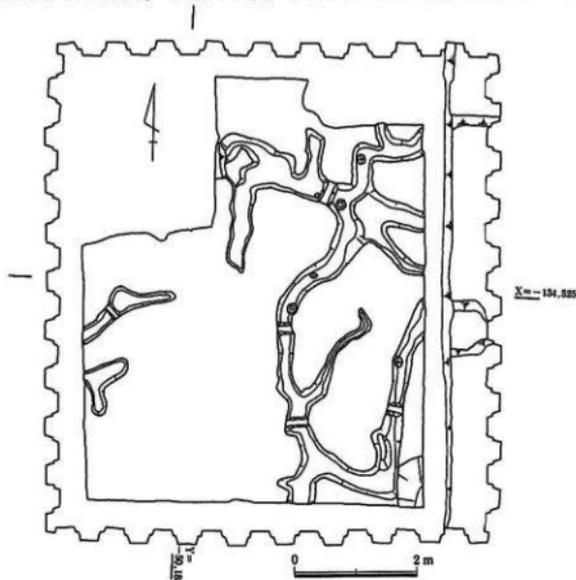


図177 1Aトレンチ4面平面

に埋められるようである。

最下部の砂層から須恵器の短頸壺片7(同一個体)、高杯杯部片1が出土している。短頸壺(2)は口縁部が強く外反し、その端部は外方へほぼ水平につまみ出す。頸部外面下端に粘土紐の接合痕を残す。胴部上半の調整は不明だが下半は外面ヨコヘラケズリ、内面は粘土紐の接合痕を若干残しながらの回転ナデである。胎土は1~2mmの長石・石英を含み、焼成はあまく灰白色をていし、磨滅が激しい。高杯杯部片(1)は内面の側面は回転ナデ、底面は回転ナデ、外面は側面下側は回転ヘラケズリ、底部は回転ナデである。脚部は剝離痕から三方透かしであることがわかり、長脚と思われる。胎土、焼成とも短頸壺とはほぼ同じである。他に須恵器では同じような焼成で胎土に砂粒を含まない、杯と思われる破片2

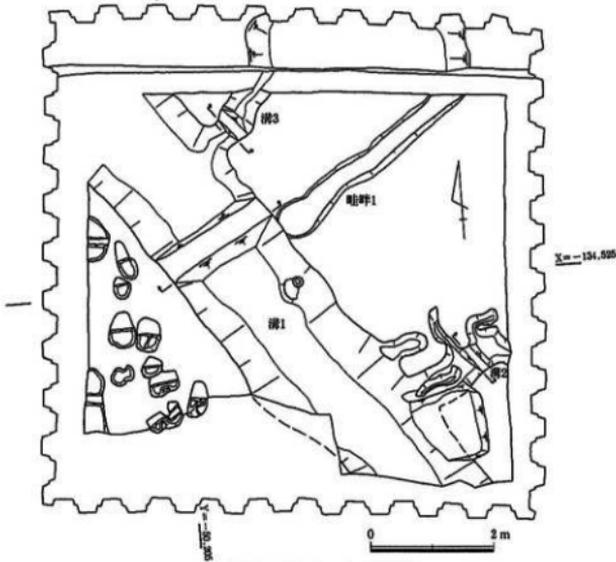


図178 1Bトレンチ4面平面



土色・土質

- 2.5Y 6/6 明黄褐色粘質土・10YR 4/4 褐色粘質土・2.5Y 6/6~5/3 明黄褐色~  
に灰~黄褐色砂質土のブロック。3~6層のブロックか?
- 2.5Y 5/1~4/3 黄灰色~オリーブ褐色粘質土 細砂主体、中砂・シルトあり、  
酸化マンガンあり。
- 5Y 4/1 灰色粘土~細砂 ラミナあり。
- 2.5Y 5/1~4/3 黄灰色~オリーブ褐色粘質土 シルト主体、細砂含む、粗砂若  
干あり、酸化マンガンあり。

- 7.5Y 4/1~5Y 5/1 灰色粘土~細砂 ラミナあり、管状酸化鉄・酸化マンガン粒  
若干あり。
- 5Y 4/1~2.5Y 4/4 灰色~オリーブ褐色粘質土 細砂~シルト主体、粗砂あり、  
酸化鉄若干あり。
- 5Y 3/1~5Y 6/1 オリーブ黒色~灰色粘土~細砂 ラミナあり。
- 2.5Y 5/1 黄灰色細砂~細砂 ラミナあり、下部に酸化鉄あり。
- 2.5Y 7層のブロック、4層の二次堆積、同にあり。

図179 1Bトレンチ4面溝1・2・3断面

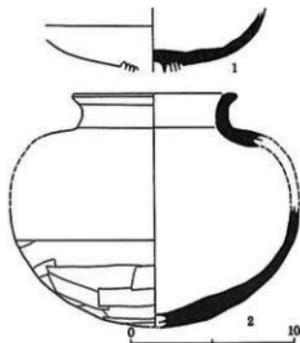


図180 1Bトレンチ4面溝1出土遺物

実際の形状

と暗灰色の壺らしき小片1があり、土師器では器種不明の小片5がある。

溝2 幅50cm、深さ40cm程で底部は丸い。埋土は溝1の最後に掘り直された部分と共通している(図179)。また深さも同じである。但し、北西辺は細い溝やピット状のものがあり、形が崩れている。

溝3 幅46cm、深さ40cm程で断面形はV字に近い。埋土はほぼ溝2に共通する(図179)。

畦畔1 幅約20cm、高さ5cm程で断面は台形をていする。この部分でわずかに残っていた4層らしき砂質土の上面で頭を出し、それを取り除いた形で検出したので、本当は5面の遺構であるようだ。溝との関係から、この位置に畦畔があるのはおかしい

が、断面図から考えると、本当は北西に落ちる直線的な段差があり、そこから南東に20cm程離れて浅い溝が平行に走っていたようで、溝の南西側を検出時に下げ過ぎたため、溝と段差の間のみが畦畔状に残ったものであるようだ。つまり、溝1の北東側は、溝と直角に段差があり、その上段にあたる南東側には浅い溝と深い溝が走り、下段の北西側は深い溝が一本走っていたことになる。

ピット群 溝1の南西側に集中している。この部分は4層がほとんどないが、ピットの埋土は4層に似た砂質土がそれより粗砂が多いものである。どれも不整形で深さは5cm前後の物ばかりで、底部は大体平坦なものが多い。ピット群というより、細かい凹凸の多い部分というべきかもしれない。

#### 1Cトレンチ(図181)

東北東から西南西に抜ける自然流路を検出した。

自然流路1 肩部は北北西側のみしか検出されていない。ただトレンチ南東隅で底部がかなり上がってくるので、全体の半分以上の幅は確認されていると思われる。幅は8m以上で16m以内か、深さは2.4m程度である。トレンチより北東側は1Bトレンチで検出されないことからやや北に向かって曲がっているようである。埋土(図182)は一番上はブロック状の3層があり、その下によく似た粘質土、さらにその下にラミナのないシルト～細砂層がある。ここまでは3層形成直前の人為的埋土のような感じがする。その下は上がシルト～細砂で下が粗砂中心の砂層という流水堆積層の組み合わせが2組ある。なおこの流路の切り込み面は4面だが、5面から7面までも流路に向かってやや下がっており、それが4面で流路が形成された後の土圧などによる変化なのか、7面ぐらいから流路が形成され始めていたのか即断できないところである。

出土遺物

遺物(図183)は最下の粗砂層のみから出土している。土器は細片が多いが、合計で314片出土しており、そのほとんどは弥生時代後期後半のものである。その内訳としては、甕は口縁部片からは9個体程の存在が確認され、底部片からは11個体が確認できる。壺は口縁部片からは5個体、底部片からは2個体。甗は底部片から2個体。高杯が脚部片から5個体、口縁部片から3個体が確認できる。しかし、各々口縁部と底部・脚部とで同一個体

と同定できるものはないのでどちらか多いほうを確認される個体数としたい。その他、土師器が11片あり、布留式甕が口縁部片から3個体は確認できる。他の破片もほとんどが布留式土器と思われるハケメを持つが、1片のみ庄内式と思われるタタキメを器表に残すものがある。胎土はほとんどが北摂系だが、1片のみ器種の方からない破片で生駒西龍系胎

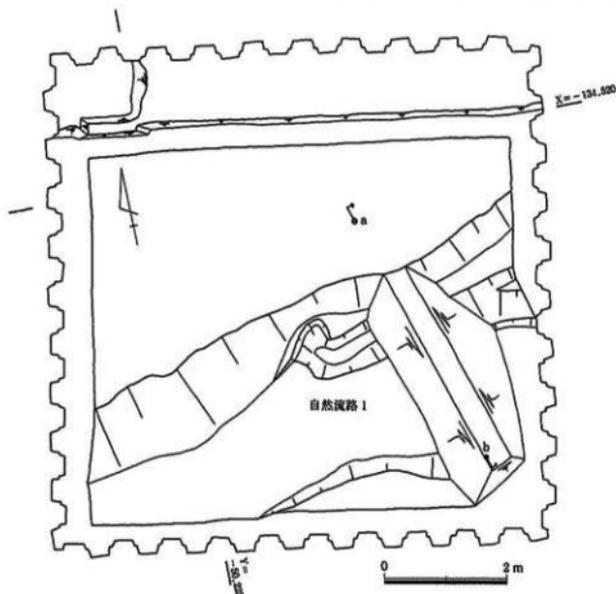
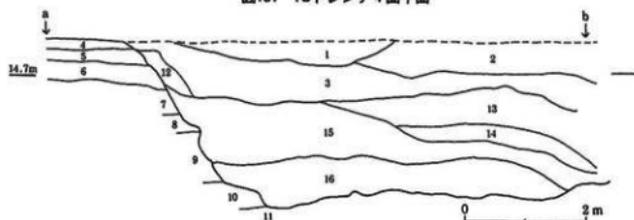


図181 ICトレンチ4面平面



土色・土質

1. 2.SY 6/6 明黄褐色粘質土 シルト主体、細砂若干あり、酸化マンガン粒若干あり、酸化鉄多し。(3層系?)
2. 2.SY 6/4 濃い黄色粘質土 シルト～細砂主体、酸化鉄あり、酸化マンガン粒わずかにあり。
3. 2.SY 6/1-7/7 灰黄色～明黄褐色シルト～細砂 酸化鉄あり、酸化マンガン粒部分多し。
4. 2.SY 6/4 濃い黄色粘質土 シルト～細砂主体、粗砂含む、酸化鉄あり、酸化マンガン粒若干あり。(4層)
5. 2.SY 6/6 黄褐色粘質土 粘土～シルト主体、細砂若干含む、粗砂わずかにあり、酸化鉄あり、酸化マンガン粒若干あり。(5層)
6. 10YR 3/3 暗褐色粘質土 粘土～シルト主体、酸化マンガン粒非常に多し、酸化鉄若干あり。(6層)
7. 2.SY 6/4 濃い黄色粘質土 細砂主体、シルト含む、酸化マンガン粒あり、酸化鉄あり。(7層)

8. 2.SY 6/3 濃い黄色粘土 炭状酸化鉄あり、酸化マンガンわずかにあり。(8層)
9. 10YR 3/1 黒褐色粘土 シルトわずかに含む、管状酸化鉄わずかにあり。(9層)
10. 10YR 4/1 黒褐色粘土 シルト含む、粒状構造あり。(9・10層間同層)
11. 8B2 7/1 明黄褐色粘土 酸化鉄若干あり、黒泥土の降下あり。(10層?)
12. 5・6のブロック。
13. 7.SY 5/1-7/1 灰～灰白色シルト～細砂 中砂若干あり、管状酸化鉄若干あり、炭化物わずかにあり、ラミナあり。
14. SY 6/4-7.SY 5/1 オリーブ黄～灰色細砂～細砂 小粒あり、シルト含む、酸化鉄若干あり、炭化物若干あり、ラミナあり。
15. 10Y 4/1-7.SY 5/1 灰色シルト～細砂 炭化物若干あり。ラミナあり。上部酸化マンガン粒・管状酸化鉄あり。
16. SY 5/2-2.SY 6/4 灰オリーブ～濃い黄色粗砂～中砂 中～小粒多し、炭化物あり、10・11のブロックあり、ラミナあり。

図182 ICトレンチ4面自然流路1断面

庄内〜布留

土のものがある。土器片はいずれもかなり磨滅しており、破片の状態で見つかったものと思われる。また接合もほとんどしない。他の遺物としては同一層から樹皮がそのまま  
で先端を削った、丸木の杭が数本出土している。(1)は布留式の甕片である。残存部分の  
外面全と口縁部の内面まではヨコナデがほどこされ、ハケメはみとめられない。内面の  
頸部以下には横方向右回りのケズリが見られる。口縁端部の折り返しによる肥厚は短く、  
やや内傾する面を成す。胎土には長石・石英粒が含まれ、赤色酸化粒もわずかにある。外  
面は黄褐色、内面はにぶい黄褐色をていする。(2)は庄内式の甕片である。口縁部の内外  
面はヨコナデがほどこされ、口縁端部は上につまみ上げられている。内面の頸部以下は  
ヘラケズリがほどこされるが方向は定かでない。ヘラケズリのため頸部内面は鋭い稜を成す。  
胎土には長石を多く、石英を若干含み、明褐色をていす。(3)は弥生時代後期の甕片であ  
る。口縁部内外面と内面はヨコナデがほどこされ、胴部内面は斜めのナデもみられる。胴  
部外面は左下がりの平行タタキがほどこされる。タタキの順は右から左だが、その前に、  
肩部には水平方向にタタキがほどこされていたようである。口縁部内面には何条かの粘土  
紐接合痕を残す。胎土には石英・長石を若干含み、外面は明黄褐色、内面は明褐色をてい  
する。(4・7)は弥生土器甕底部片と思われる。(7)は内部底面に左上がりのヘラナデが  
ほどこされる。(5・6)は器種は定かでないが、弥生土器底部である。(5)は小ぶりの底

弥生時代  
後期

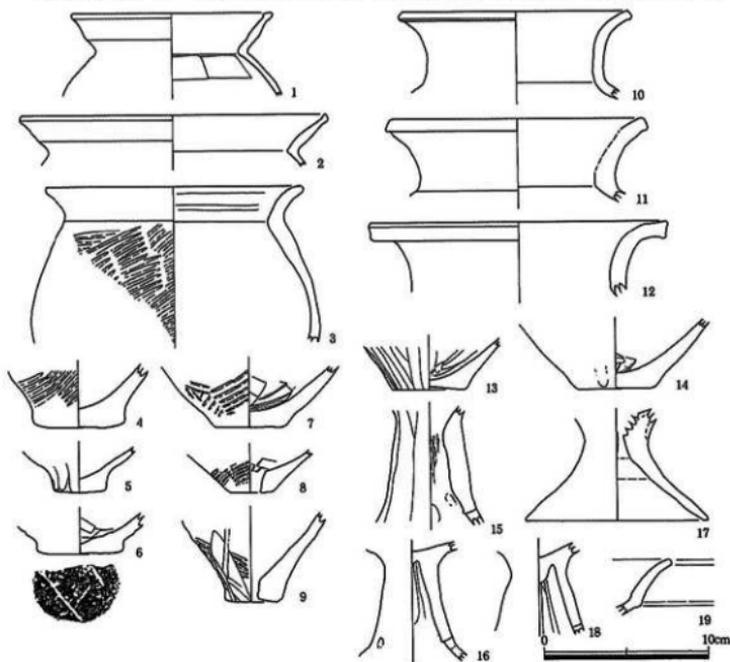


図183 1Cトレンチ4面自然流路1最下粗砂層出土遺物

側面に縦ヘラナデをほどこす。(6)は内面に左上がりのヘラナデがほどこされ、底部外面には幅2mm程の真っ直ぐな沈線が2条、ほぼ平行にある。土器製作時に底部の粘土板に押圧されたものようである。(8・9)は甕の底部片である。(8)は内面に左上がりのヘラナデ、外面に左下がりの平行タキがみられる。(9)は外面に左上がりの平行タキがほどこされた後、一部に縦方向のユビナデとヘラナデが交錯している。(10-12)は弥生土器広口壺口縁部片である。外反する口縁の端部に面をもつ。(10)の口縁は頸部から上に真っ直ぐ伸びてから外反し、外傾する端部の面は外側の縁がわずかに突出する。(11)は頸部から緩やかに外反し、端部の面は(10)より鈍いがやはり外側の縁の方が鋭い。(12)は垂直に立ち上がってきつからきつ外反し、端部の面はほぼ垂直で、凹面をていする。どれも磨滅によって調整は明らかでない。胎土は長石・石英を少し含み、黄褐色から黄橙色をていする。弥生時代後期後半に位置づけられる。(13・14)は弥生土器壺底部片と思われる。(13)は内面に放射状のヘラナデ、外面は縦方向のヘラミガキが見られる。(14)は内面はユビオサエ後ヘラナデ、外面は縦方向ヘラミガキ。胎土に含まれる長石・石英はわずかで、色調は橙色をていする。(15-17)は弥生土器高杯脚部片である。外面調整は(15)にタテナデがみられる他は磨滅により不明である。(15・16・18)は裾部に円孔の三方透かしがある。(16・18)は杯一脚接合方法が円板充填である。脚部内面の調整は(15)が上部にシポリメ、裾部への屈曲部分に指頭圧痕、(16)は上部にシポリメがあり、その上に一条だけ縦方向のナデが見られる。(17)は上部にシポリメ、裾部に横位のナデ一条、その下は不明である。(18)はシポリメを残しつつ、ナデが縦に入る。胎土はみな、長石・石英をわずかに含み、明褐色～橙色をていする。(19)は弥生土器高杯杯部片である。杯部が屈曲して立ち上がってから外反するタイプで口縁端部は面をもつ。石英・長石を多く含み、にぶい褐色をていする。

#### 1Dトレンチ(図184)

ピット群が検出された。状況は1Bトレンチの溝1南西側とほぼ同じでほとんどが浅く、砂質土の埋土を持つ。ただ異なるのは平面方形のものが多くことである。

南西端の落ち込み1の埋土は酸化マンガン粒の多い粗砂であり、北西隅のピット8は深さ1m強もあり、黒色粘土系の埋土をもつ。ピット8は平面形は判然としないが、井戸か溝の一部であるかもしれない。

#### 小結(図185)

1Bトレンチの溝1はその方向から見て1Cトレンチの自然流路1に取りついている可能性が大いであろう、また自然流路からは杭も出土していることから、溝が取りついた部分にしがらみが存在していた可能性も高いと思われる。また、それらのこととあわせ、1Bトレンチ溝2・3の深さが溝1とほぼ同じであったことはそれらが排水ではなく取水・分水の機能をもっていることを示している。それと、1Bトレンチの段差(畦畔1)やピット群を耕作にともなう区画や耕作痕跡と考えるならば、この地点に耕地の存在をみとめても良いと思われる。

導水施設

しかし、問題はその時期である。自然流路の弥生後期から布留式の土器群は、やや磨滅しており、ほとんど接合しない破片資料である。また、それと全く異なる時期を示す溝の

時期決定の問題点

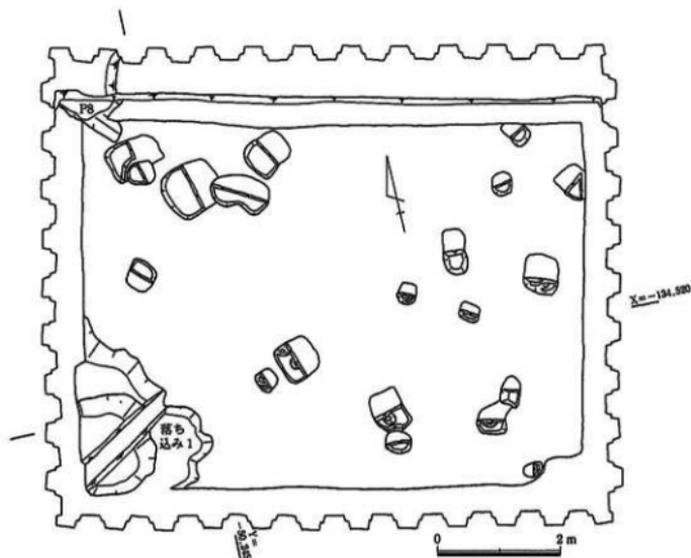


図184 1Dトレンチ4面平面

6世紀後半代の須恵器は、同一個体片があるといっても残存率は低く、決定的に量が少ない。

おおまかにいえることは、自然流路が弥生後期あたりから形成され、6世紀代にも機能して、その時期に溝が掘られた可能性が強いというぐらいである。さらに問題なのは、その最終的な埋没時期が3層の形成時期のようであるということ、もし3層が近代以降の整地客土であるなら、4面は不自然に長い間地表面であり続けたか、3層形成直前にかなり大規模な削平があったことになる。

いずれにしても今回、4面の時期を限定する確実な資料はないといえる。

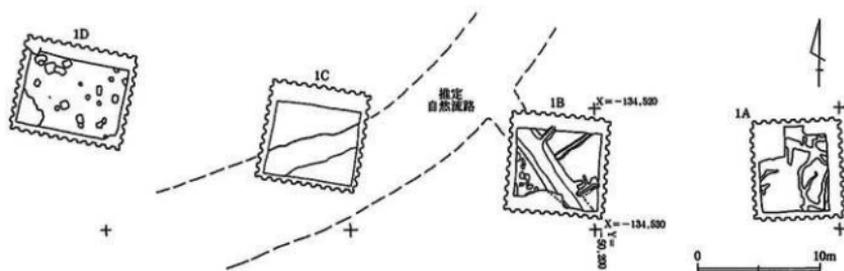


図185 4面遺構全体図

## (4) 5～11面

5面は4面と重複する部分が多く、ピット群や1Bトレンチの畦畔1などは5面の遺構といっても良いものかもしれない。しかし、4層を除去した段階で新たに検出された遺構はなかった。

6面は6層自体が異常に酸化マンガン粒の多いこともあり、遺構が存在しても発見できない場合が多いと思われる。遺構は検出できなかった。

7面はそのような6層が上部にあることもあり、遺構がある可能性が大きいと思われたが、検出されなかった。

8面は地表化した痕跡がなく、単なる堆積単位の境と思われたので平面的な調査はしなかった。しかし、1A・1Bトレンチの断面で7・8面に遺構(ピット?)らしきものが見られるので遺構面である可能性も完全には捨てがたい。

9層から11-2層は黒色粘土層群として認識でき、その内、9層・11-1・11-2層が耕土の可能性もあることは先述したが、それらの上下の面を全て調査する時間的余裕はなかったので、9面と11層の床面である12面を調査した。

9面は自然地形のゆるやかな凹凸が見られたのみで遺構は検出されなかった。12面に関しては後述する。

5層から11-2層までは全くの無遺物である。否定的に見れば全く調査対象にならないものであるかもしれない。しかし、今回の調査は面積的にもかぎられており、水田などの遺構では遺物量がかかなり少ない例が多いことからみても、今の時点で調査の必要がないとは断言できない。

無遺物層群

## (5) 12面

## 1Aトレンチ(図186)

不整形な凹みをいくつか検出した。いずれも11層と12層の混濁したような埋土をもち、浅い。人為的なものではないと思われる。

## 1Bトレンチ(図187)

三つの不整形な凹みと溝を一本検出した。

溝1 北東から南西に通る、やや不整形な溝で南西半分がだいたい幅1m弱、深さ10cmぐらいの浅いものであるのに対し、北東側は急に幅・深さともに増し、幅2m70cm、深さ48cmを測る。南東側の肩が南西半からほぼ一直線に通り、北西肩部がほぼ直角に広がることと、その広がった北西肩部がしだいに埋没する過程で、ブロック土の入った層のあることで(図188)、この溝が人為的な遺構である可能性を指摘することができる。なお、この溝は本来11-1面の遺構であったか、もしくは12面から11-1面まで存続したものであった可能性が高い。

人為的遺構の可能性

## 1Cトレンチ(図189)

不整形で浅い凹み一つと、小さなピット状のものを数個検出した。共に遺構である可能性は少ない。

## 1Dトレンチ(図190)

北東から南西へ抜ける自然流路を一本検出した。

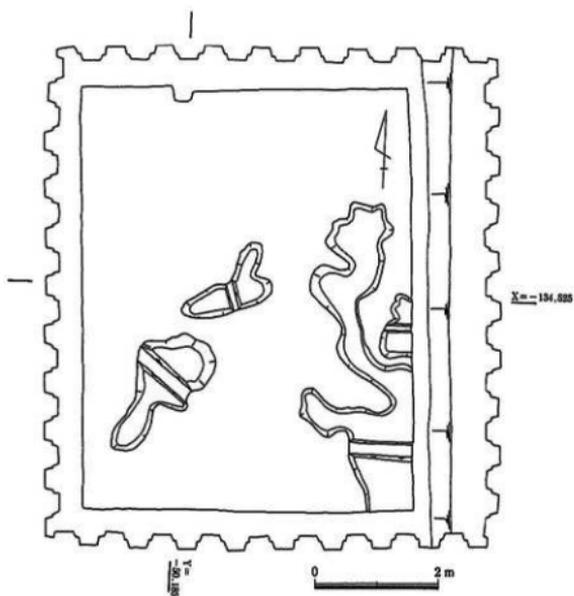


図186 1Aトレンチ12面平面

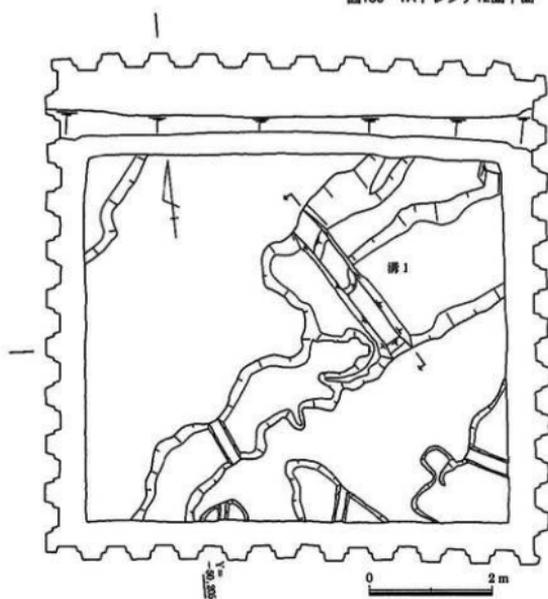


図187 1Bトレンチ12面平面



X=134.525

1. 1.50 2.1 3.0 4.0 5.0 6.0 7.0 8.0 9.0 10.0 11.0 12.0 13.0 14.0 15.0 16.0 17.0 18.0 19.0 20.0 21.0 22.0 23.0 24.0 25.0 26.0 27.0 28.0 29.0 30.0 31.0 32.0 33.0 34.0 35.0 36.0 37.0 38.0 39.0 40.0 41.0 42.0 43.0 44.0 45.0 46.0 47.0 48.0 49.0 50.0 51.0 52.0 53.0 54.0 55.0 56.0 57.0 58.0 59.0 60.0 61.0 62.0 63.0 64.0 65.0 66.0 67.0 68.0 69.0 70.0 71.0 72.0 73.0 74.0 75.0 76.0 77.0 78.0 79.0 80.0 81.0 82.0 83.0 84.0 85.0 86.0 87.0 88.0 89.0 90.0 91.0 92.0 93.0 94.0 95.0 96.0 97.0 98.0 99.0 100.0

図188 1Bトレンチ12面溝1断面

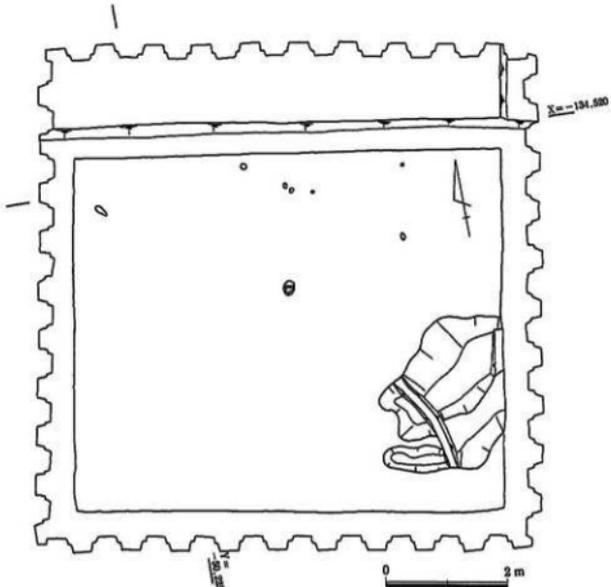


図189 1Cトレンチ12面平面

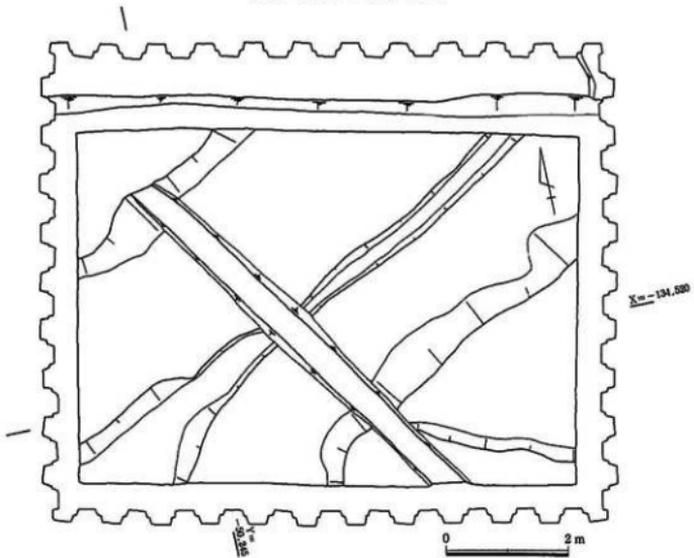


図190 1Dトレンチ12面平面

自然流路 幅5 m30cm、深さ50cmを測るが、断面から見ると、本来は11-1面からの切り込みで深さは70cm程となる。ほとんどが10層で埋没するが、流芯と思われる中央部の幅40cm程が20cmほど、窪んでおり、そこには粗砂〜小礫を多く含んだ黒色粘土が堆積している。直線的ではあるが、幅の広さと落ち込みの緩やかさから自然流路と判断した。

また、その南東側に段落ちが確認されたが、これも自然地形のようである。

小結 (図191)

12面で検出したものは、結局は11-1面切り込みのものか、11-1層・11-2層の床面のような意味での12面の微妙な凹凸のみであったといえる。しかし、その時点で自然流路が存在し、人為的遺構の可能性もある溝が確認されたことは一応の成果といえる。無遺物であり、その時期を限定するのは困難だが、後述する12層の遺物から考えても、この周辺で人の活動が見られる時期であるとはいえるだろう。

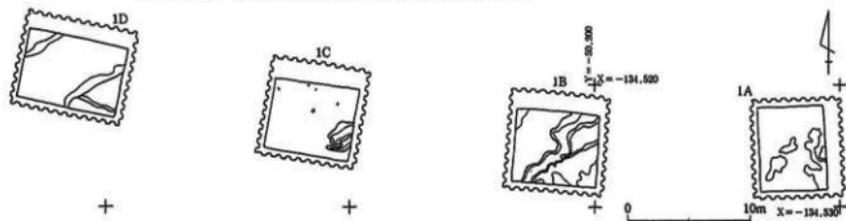


図191 12面遺構全体図

## (6) 12層

1Aトレンチの12層中から旧石器が11点出土した(図192)。ほとんどがサヌカイトの剥片で、質から見て同一母岩らしきものもある。他にチャート製のものが一点、結晶片岩系のものが一点ある。

**出土状況** いずれも直径5m程度の範囲から集中して出土したが、レベル的にばらつきがあり、掃風する面はみとめられない、どちらかといえば12層の下半部である。おそらく12層が低位段丘から二次的に堆積した層で、それと共に石器も段丘上から二次的に動いてきたのではないだろうか。

**出土遺物** (1)はポジ面もネガ面も打撃の方向がほぼ同じである。打面調整の際に生じた剥片であろうか。サヌカイト製、4.1g。(2)は両面とも一見複雑な剝離面をていするが、左の面がおおむね二つの剝離面から構成され、ネガ面といえる。右の面は一つの剝離面が大部分を占める。特に右の面は打点が剝離面の中心部にみとめられることから、副次的な剝離に伴うものと考えられる。全体に風化のため白っぽく変色している。サヌカイト製、重さ22.4g。(3)は縦長剥片で、ネガ面もポジ面と同じ方向に打撃を加えた結果、2枚の縦長剥片が取られている。剝離の際の打撃は礫面に直接加えられている。全体に風化のため白っぽく変色している。サヌカイト製、重さ5.8g。(4)はネガ面、ポジ面ともほぼ同じ方向から打撃が加えられた横長剥片である。ネガ面には一部微細な剝離がみとめられるが、ポジ面は一枚の剝離面からなる。打面調整の際に生じた剥片か? 全体的に風化により白っぽく変色している。サヌカイト製、2.0g。(5)もネガ面、ポジ面とも同じ方向から打撃が

加えられており、打点も明瞭に残っている。打面調整の際に生じた剥片であろうか。チャート製、重さ3.1g。(6)は両面とも打撃の加わった方向は同じだが打点が残っていない。副次的に生じたチップと考えられる。風化により白っぽく変色している。サヌカイト製、3.0g。(7)は結晶片岩系の石材と考えられる。風化のため細部の特徴はわからない。4.4g。(8)は風化が著しく、表面に細かい凹凸が生じている。横長剥片で、側面に一部礫面を残す。瀬戸内技法的な要素はみとめられるが、典型的なものとはいえない。

サヌカイト製、重さ

23.2g。(9)は打面を確保するため、石核から礫面を取り除いた際に生じた横長剥片である。ポジ面の打点は二次的な剝離により欠けている。風化のため白っぽく変色している。サヌカイト製、重さ16.8g。(10)は横長剥片で、ネガ面は礫面に直接打撃を加えて生じたもの。ポジ面は複雑な凹凸を有するが、これはポジ面の近くに亀裂が生じて、打撃の際にそこを起点とした剝離が生じたためと思われる。全体的に風化で白っぽく変色している。サヌカイト製、46.2g。(11)は著しく風化しており、剝離面に細かい凹凸が生じ、フィッシャーリングの方向を明確に読み取るのは困難である。打面調整の際に生じた剥片のようだが、ポジ面の打面及び打点は欠損したものである。サヌカイト製、30.8g。

それ以下の13層・14層内は旧石器の包含層である可能性は否定できないにしても、礫を多く含む事からして調査は困難であろう。

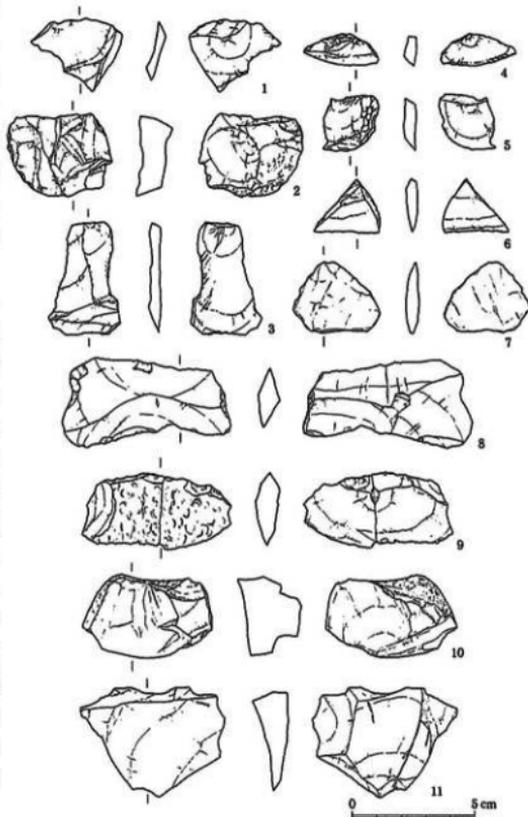


図192 1Aトレンチ12層出土遺物

### 3. まとめ

以下に全体の調査成果を簡単にまとめ列挙してみる。

・今回の調査地点は遺跡範囲である事が明らかになり、その立地条件からも蜷池西遺跡の範囲に含めるのが妥当であると考えられる。

・1～3層はほぼ現代に形成された層と見て良く、3層は区画整理等の整地客土の可能性が高い。

・4面では1Bトレンチの溝1～3の存在から、1Cトレンチの自然流路から取水する灌漑施設と耕地の存在が推定され、その存在時期は、遺物の少なさから断言はできないものの、古墳時代後期の可能性が高い。

・4面1Cトレンチの自然流路は6面ないし7面から形成されたかみせず、最終的には3層で埋められている。その形成時期は弥生時代後期～古墳時代前期の可能性が高い。

その方向からみると、下位段丘に今も麻田公園として痕跡を残す開折谷からの流路であったかもしれない。

・9層・11-1層・11-2層は、その質から耕土であった可能性が考えられ、今回は平面的な遺構の検出はできなかったものの、調査の必要性はある。

・10層は有機物の豊富な黒泥土系の止水堆積層で、層厚も厚い。沼のような状態であったと考えられるが、この段階で何故そういった状況になったかを考える必要はあろう。

・12面の調査で、おそらくは11-1面の段階で自然流路が存在し、人為的遺構の可能性のある溝もあったことがしられた。それらの性格や時期を限定する資料の発見が今後の課題であろう。

・12層は層の状態と遺物の出土状況からみて、段丘からの二次堆積層と思われるが、そのことから段丘上に旧石器の遺跡が存在した可能性を考えることができる。

以上が調査成果のまとめだが、今回は試掘調査という意味合いもあるので、調査上の今後の指針も示しておく。

・今回の調査地点で調査の対象としてみとめられるのは4面～12面で、加えて12層も遺物包含層としてみとめられる。ただし、6面と8面は層の状態から見て遺構の検出される可能性は低い。

・4層は遺存範囲に限られ、あっても層厚が薄いので、4面は5面と一括調査も可能であろう。

・11-1層と11-2層は、耕土とすれば、上下に間層を挟まずに重なっているので、11-2面で畦畔などの遺構が遺存している可能性は少ないであろう。調査対象としては11-1面と12面に限定できる。

・調査必要深度はG.L.-3～3.5m、12面は、-2.5m程に位置する。

## Ⅶ 自然科学的調査の成果

### 1. 自然科学的調査の概要

今回実施した発掘調査にともなう自然科学的調査の概要は以下のとおりである。

#### ●花粉・珪藻分析（蜷池東・蜷池・蜷池西遺跡）

目的

- ①竪穴住居（住居26・古墳時代中期）の住居廃棄直後の埋土・周溝埋土・床土（生活包含層）を試料とした、住居周辺の古植生・住居壁材・敷物の推定（蜷池東）
- ②低位段丘上の堆積環境と古植生の推定（蜷池）
- ③密集土坑（土坑48・66）の堆積環境と古植生の推定（蜷池）
- ④南門前池内で検出された8Aトレンチ奈良時代溝7の堆積環境と古植生の推定（蜷池）
- ⑤南門前池底の中世包含層の堆積環境と古植生の推定（蜷池）
- ⑥水田耕土の可能性の検討と旧石器～古墳時代以降の古植生の推定（蜷池西）

成果

- ①「蜷池東遺跡住居26の植物珪酸体・花粉分析」として別記（P156）。
- ②花粉・珪藻化石ともほとんど検出されず不明。
- ③花粉・珪藻化石は少ない。ただし埋積物下部から産出した珪藻化石の多くが乾いた環境に耐性の強い陸生珪藻であることや花粉化石の保存状態が悪いことから、同層はしばしば乾燥する好気的環境下で堆積した可能性がある。
- ④珪藻化石群集は、弱酸性をていた沼沢地のような水域環境を示唆するものであるが、完形殻の出現率が低いことから二次的に搬入された異地性の珪藻化石の可能性もある。花粉化石群集は、モミ・ツガ・トウヒ・マツ属などが産出し、冷温帯～亜寒帯性の針葉樹林が森林植生として推定される。同様の化石群集は本遺跡が位置する低位段丘堆積層の相当層である富田累層でも確認されており、珪藻化石で指摘されたように二次堆積による化石群集である可能性がある。
- ⑤珪藻化石はほとんど検出されず、花粉化石が多産する。花粉化石はマツ属、草本花粉ではソバ属がみとめられ、中世にはマツ属を主とする植生が存在し、周辺では畑作など栽培が行われていた可能性もある。
- ⑥花粉・珪藻化石ともほとんど検出されず不明。花粉化石では針葉樹が多くみられるが、針葉樹の花粉は分解に対して強いために残ったか、古い地層からの二次堆積の可能性がある。縄文～弥生時代、弥生時代後期の層からソバ属の花粉化石が検出され、周辺でソバ栽培が行われていたことが示唆される。

#### ●胎土分析（蜷池東・蜷池遺跡）

目的

- ⑦・蜷池東遺跡出土初期須恵器の産地同定

- ・ 蛸池東・蛸池遺跡出土6世紀須恵器の産地同定
- ・ 産地同定の比較試料として桜井谷窯跡群（神戸層群に立地する2-27窯・大阪層群に立地する2-17窯）と陶邑（TK73・MT71・MT84）の分析データを得る

以上3点を目的とし、土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定（X線回折による）と土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラスの生成度合の観察（電子顕微鏡による）を計63点の試料についておこなった。

#### 成果

⑦「蛸池東・蛸池遺跡出土土器胎土分析」として別記（P159）。別記でのまとめを受け、気付いた点を下記に列挙する。

- ・ 陶邑の試料数が少ない点が難点であるが、今回の試料でおこなった化学分析をみる限り、陶邑と桜井谷の須恵器は化学分析において判別しがたいようである。
- ・ しかし、桜井谷の試料中、神戸層群を材料にしたであろう2-27窯試料と大阪層群を材料にしたであろう2-17窯試料は、Qt-Pl、 $Fe_2O_3$ -MgOの相関によるグループ分類では分類することができた。
- ・ 蛸池東遺跡の初期須恵器は、 $SiO_2$ - $Fe_2O_3$ 、 $Fe_2O_3$ -MgOの相関によるグループ分類でABラインを境に偏在するが、これはとくに陶邑もしくは桜井谷窯跡群試料と関連するものではなく、産地の同定にはいたらない。
- ・ 蛸池東・蛸池遺跡出土古墳時代後期須恵器は、化学分析のなかでとくに遺跡ごとに分類されるものではなく、混在する。これは2遺跡は接する遺跡であり、当然のことであろう。ただし16点中4点は、桜井谷窯跡群の領域に分布し関連性がうかがわれる。
- ・ 胎土に黒色粒を多く含むものとして蛸池1、蛸池東25、桜井谷14・17・19試料がある。これらは化学分析において同一グループになることもなく、肉眼観察による胎土の差（混和材の差）は化学分析にはあらわれないようである。一方、粘土・造岩鉱物（モンモリロナイト・雲母類・角閃石）の組成分類によるタイプ分類では、蛸池東25、桜井谷17・19試料が63点中3点のみ別分類となり、黒色粒本体の鉱物名などは不明であるが、鉱物分類に黒色粒の有無が反映される可能性が考えられる。

以上の成果より、今回の方法による胎土分析は、距離的に近くとも神戸層群と大阪層群というように母岩を異にする場合有効であるが、千里・泉北丘陵と距離的には離れるが母岩が共通する（双方とも大阪層群）場合判別は困難と考えられる。

#### ●<sup>14</sup>C測定（蛸池遺跡）

##### 目的

⑧蛸池東遺跡住居19・13の絶対年代測定

##### 成果

⑧「蛸池東遺跡出土炭化木の<sup>14</sup>C測定」として別記（P166）。

住居19・13ともに初期須恵器併行の土器が出土する。ともに焼失住居であり、床面出土の炭化材を試料とした。<sup>14</sup>C測定の結果、住居19は1750±30B.P.、住居13は2470±50B.P.であった。700年の年代差があり、有効な数値を得ることはできなかった。

●脂肪酸分析（宮の前・蜷池遺跡）

目的

⑨宮の前遺跡飛鳥時代土坑および蜷池遺跡古墳時代後期～奈良時代密集土坑が墓墳であるか否かの判定

⑩蜷池遺跡の密集土坑群を区切るP41出土の集積する須恵器杯の内容物の推定

⑪蜷池遺跡奈良時代土坑P43出土須恵器壺の内容物の推定

成果

⑨～⑪「宮の前・蜷池遺跡採集土壌の残存脂肪分析」として別記（P167）。

⑨宮の前・蜷池遺跡試料ともに、残存脂肪がヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存している脂肪と類似していることがわかった。とくに蜷池遺跡土坑37では、ヒト遺体は西方に頭部、北方もしくは東方にかけて腹部が位置していたと推測された。

⑩高等動物の脂肪が多少残存していることはわかったが、類似している動植物種を特定することはできなかった。

⑪残存脂肪がヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存している脂肪と類似していることがわかった。

●リン・カルシウム分析（蜷池遺跡）

目的

⑫墓墳の可能性をもつ密集土坑（土坑37・40）中の人骨の有無の推定

⑬⑭の比較試料として基本層序試料のリン・カルシウム含量の測定

成果

⑫特徴的な富化はみとめられず、人骨の痕跡を指摘することはできない。

⑬リンは上層から下層にかけて減少する。耕作による施肥などの影響と推定される。カルシウムは各層位ともほぼ同じ値を示す。カルシウムは土壌中を移動しやすいのでこのような結果となった可能性が考えられる。

## 2. 蛭池東遺跡住居26の植物珪酸体・花粉分析

榎ハリノ・サーヴェイ

### はじめに

千里丘陵南西部の低位段丘先端部に立地する蛭池東遺跡では、古墳時代の住居が多数検出されており、当時の集落域の実態が明らかになりつつある。今回の分析調査では、8 A 2 トレンチで検出された5世紀代の住居26の覆土を中心に植物珪酸体・花粉分析を実施し、当時の植生や住居内での動物の存在を検討するための情報を得る（P84参照）。

### 1. 試料

8 A 2 トレンチで検出された住居26の東西断面を図193に示す。試料は、周溝埋土の2層・4層、溝埋土上層の1層、住居廃棄直後の包含層とされる3層、住居床面下の「生活包含層」とされる8層、住居の壁土の可能性を図107の6層の各層位から採取された6点である。植物珪酸体は全試料について、花粉分析は2・3層について実施する。

### 2. 分析方法

#### (1) 植物珪酸体

試料約10g前後について、過酸化水素水 ( $H_2O_2$ ) と塩酸 (HCl) による有機物と鉄分の除去、超音波処理 (80W、250KHz、1分間) による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム (比重2.5) による重液分離の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。得られた残渣を検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し乾燥させ、プレウラックスで封入してプレパレートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパレート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部 (葉身と葉鞘) の短細胞に由来する植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬 (1986) の分類を参考にした。また、動物推定などの場合、植物体そのものが残ると珪化組織として確認されるため、組織片の産状も注目する。

結果は一覧表と植物珪酸体組成図として表示する。図中の各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体ともそれぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満の産出、+は機動細胞珪酸体が100個未満の試料における産出を示す。

#### (2) 花粉分析

花粉、胞子化石の抽出は、試料を湿重で2~4g秤量し、水酸化カリウム (KOH) 処理、0.25mmの篩による篩別、重液分離 ( $ZnBr_2$  比重2.2)、フッ化水素 (HF) 処理、アセトリシス処理 (無水酢酸: 水酢酸 = 9:1)、水酸化カリウム (KOH) 処理の順に行い、堆積物中から花粉化石を濃集する。処理後の残渣の一部についてグリセリンで封入してプレパレートを作製し、その中に出現する全ての種類 (Taxa) について同定・計数する。

### 3. 結果

#### (1) 植物珪酸体

結果を表3と図194に示す。植物珪酸体の産状は短細胞珪酸体は良好であるが、機動細胞珪酸体は図107の6層以外の試料で少なく、保存状態も悪い。

植物珪酸体組成はいずれの試料も類似し、ネザサ節を含むタケ亜科が多産する。このほか、キビ属、ウシクサ属などを伴う。栽培種ではイネ属が全試料、コムギ属が2・3層から産出する。

(2) 花粉化石

分析を行った2・3層試料からは花粉化石が全く検出されず、種類不明のシダ類孢子が各々2・3個体産出しただけである。

4. 考察

住居の周溝埋土2・4層、周溝埋土上層1層、住居廃棄直後の包含層の3層における植物珪酸体組成は類似しており、ネザサ節を含むタケ亜科が多産した。ネザサ節は河川の堤防や人為的破壊を受けた森林中の裸地などの陽地に分布するササ類である。このことから、住居構築時の頃以降、周辺には開けた場所が存在し、ササ類が生育していくことが推定される。また、床直上の3層では組織片が検出されたが、産出数が少ないのでその程度は不明である。

一方、花粉化石は2・3層ではほとんど検出されなかったが、これはネザサなどが生育する場所では土壤微生物の活動が活発であり、その影響により分解消失したものと考えられる。

住居床面下の「生活包含層」とされる8層の植物珪酸体組成は、覆土と同様な組成を示した。本層中の植物珪酸体は、住居が構築される直後から最終的な床面が形成されるまでに取り込まれたものであると判断される。この時期にも付近にはネザサ節などのササ類が生育していたことが推定される。

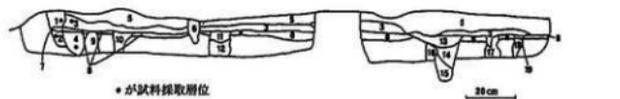
住居の壁土の可能性のある図107の6層の植物珪酸体の産状は、機動細胞珪酸体が良好に産出した点で上記の各層とは異なり、イネ属の組織片が他の覆土に比較して多い。このような産状の違いは、壁土が別の場所から持ち込まれた土を利用したことや、壁土の混和材としてイネ属などの植物体を使用した可能性がある。

今回分析した各層の試料からは、栽培種のイネ属の植物珪酸体が産出した。また、覆土の2・3層からはコムギ属が検出された。これらは周辺で栽培されたものが何らかの経路を経て堆積物とともに埋積したと考えられる。したがって、これらの種類が周辺で栽培されていたことが示唆される。

<引用文献>

近藤健三・佐瀬 隆 (1986) 「植物珪酸体分析、その特性と応用」『第四紀研究』25 p.31-64.

25.4m



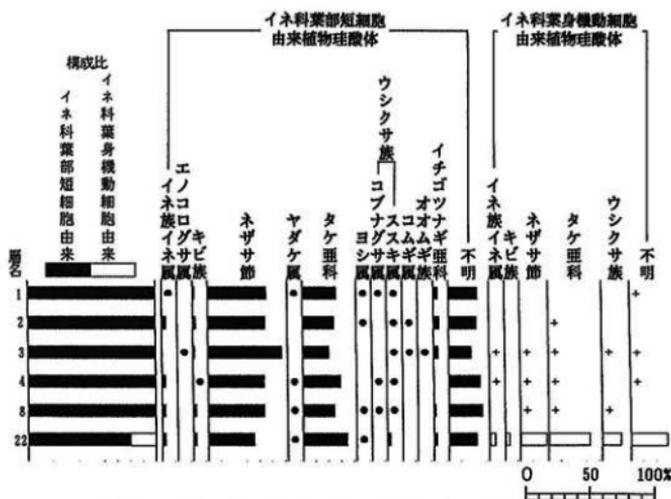
●が試料採取層位

- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 住居の埋積層(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)</li> <li>2. 1971/10採取(シロト) (埋積層)</li> <li>3. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>4. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>5. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>6. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>7. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>8. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>9. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>10. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>11. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>12. 1971/10採取(シロト) (埋積層)</li> <li>13. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>14. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>15. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>16. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>17. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>18. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> <li>19. 1971/10採取(シロト)に1971/10採取(シロト直上層)に1971/10採取(シロト直上層)の埋積層(埋積層)</li> </ol> |
|--|--|

図193 壁土東遺跡住居26植物珪酸体・花粉分析試料採取層位

種類 (Taxa)	層名	1	2	3	4	8	22
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>							
イネ族イネ属		1	10	-	6	7	8
キビ族エノコログサ属		-	-	4	-	-	-
キビ族		5	5	5	2	9	11
タケ亜科ネザサ節		160	132	231	147	187	156
タケ亜科ヤダケ属		3	-	-	-	2	1
タケ亜科		105	71	79	100	106	153
ヨシ属		1	2	-	-	2	4
ウシクサ族コブナグサ属		1	-	-	1	1	-
ウシクサ族スキム属		1	2	2	1	4	8
オオムギ族コムギ属		-	1	1	-	-	-
イチゴツナギ亜科オオムギ族		-	-	1	-	-	-
イチゴツナギ亜科		13	11	13	-	6	11
不明キビ型		13	11	17	11	19	6
不明ヒゲシバ型		5	11	7	10	7	14
不明ダンク型		69	42	43	61	89	75
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>							
イネ族イネ属		-	-	1	1	-	4
キビ族		-	-	-	-	-	3
タケ亜科ネザサ節		-	-	1	2	2	22
タケ亜科		-	1	2	1	1	35
ウシクサ族		-	-	1	-	1	16
不明		1	-	1	1	-	31
<b>合計</b>							
イネ科葉部短細胞珪酸体		397	298	403	341	439	447
イネ科葉身機動細胞珪酸体		1	1	6	5	4	111
検出個数		398	299	409	346	443	558
<b>組織片</b>							
イネ属短細胞列		-	-	-	1	-	4
エノコログサ属短細胞列		-	-	1	-	-	-

表3 植物珪酸体分析結果



出現率は、検出された短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともにそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は機動細胞珪酸体で100個未満の検出を示す。

図194 各層の植物珪酸体組成

### 3. 蛭池東・蛭池遺跡出土土器胎土分析

(独)第四紀地質研究所 井上 巖

#### 1. 実験条件

##### 1-1 試料

分析に供した試料は表4 胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

##### 1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target:Cu, Filter:Ni, Voltage:40Kv, Current:30mA, ステップ角度:0.02°

計数時間:0.5ESC。

##### 1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真を撮影した。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

#### 2. 実験結果の取扱い

実験結果は表4 胎土性状表に示すとおりである。

表4 右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示しており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に見える各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストパライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

##### 2-1 組成分類

###### 1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

図197に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

MO、Mi、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $Mo/Mo+Mi+Hb \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMO、Mi、Hbの3成分の含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は図195に示すとおりである。

## 2) Mo-Ch, Mi-Hb 変形ダイアグラム

図198に示すように変形ダイアグラムを1~9に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の内、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、chの2成分が含まれない、c) Mi、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

変形ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。

Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo/Mo+Ch \times 100$ と計算し、Mi、Hb、Chも各々同様に計算し、記載する。

変形ダイアグラム内にある1~7はMo、Mi、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は図196に示すとおりである。

## 2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストパーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストパーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランク I : ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。
- b) 焼成ランク II : ムライトとクリストパーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランク III : ガラスのなかにクリストパーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランク IV : ガラスのみが生成し、原土 (素地土) の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状をている。
- e) 焼成ランク V : 原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI~Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストパーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現す

ることになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

### 3. 分析結果

#### 3-1 タイプ分類

表4胎土性状表に示すように、蜆池東、蜆池、桜井谷、緑ヶ丘、陶邑遺跡より出土した須恵器を分析した。表4に示すように、土器はAとBの2タイプに分類された。

Aタイプ：Hb1成分を含み、Mont、Mica、Chの3成分に欠ける。固体数は3個と少ない。

Bタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠ける。高温焼成により鉱物が分解してガラスに変質したもの。

#### 3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地における砂はおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。

図199Qt-Pl相関図に示すように、I～Vの5グループと“その他”に分類された。

Iグループ：桜井谷の土器が集中し、蜆池東と緑ヶ丘の土器が混在する。

IIグループ：桜井谷と緑ヶ丘の土器が集中する。蜆池東と蜆池が混在する。

IIIグループ：蜆池東と蜆池の土器が集中し、桜井谷の土器が混在する。

IVグループ：蜆池東、蜆池の土器で構成され、桜井谷の土器が共存する。

“その他”：石英の強度が2300以下では緑ヶ丘、以上の領域では蜆池東の土器が分散して分布する。

以上の結果から明らかな様に、石英の強度が2300以下の領域には桜井谷と緑ヶ丘の土器、2300以上の領域には蜆池東と蜆池の土器が分布する傾向が認められるが、各グループとも混在し、分散傾向が強い。

#### 3-3 化学分析結果

表5化学分析表に示すように、分析対象元素は10元素である。分析結果に基づいて、図200SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、図201SiO<sub>2</sub>-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、図202Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgOを作成した。

##### 1) SiO<sub>2</sub>とAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の相関について

図200で明らかな様に、I～IVの4グループに分類された。

Iグループ：蜆池東の土器が主体で、蜆池と桜井谷の土器が混在する。

IIグループ：蜆池東、蜆池、緑ヶ丘の土器が集中し、桜井谷の土器が混在する。

IIIグループ：桜井谷の土器が集中し、蜆池東と緑ヶ丘の土器が混在する。

IVグループ：桜井谷の土器が集中し、蜆池東、蜆池、緑ヶ丘の土器が混在する。

以上の結果から明らかな様に、A-B線より上のAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の高い値の領域には蜆池東、蜆池、

緑ヶ丘の土器が分布し、線より下の $Al_2O_3$ の低い値の領域には桜井谷の土器が分布する。桜井谷の3、7、11の土器はA-B線より上の蛸池東と蛸池の領域に分布する。蛸池東の21と22、蛸池の4と6、緑ヶ丘の1、2、7は桜井谷の領域に分布し関連性が伺われる。蛸池東の2、10、23、25の4個はIIIグループの中で集中し、異なるグループを形成するかも知れない。

#### 2) $SiO_2$ と $Fe_2O_3$ の関連について

図201に示すように、I～Vの5グループに分類された。

Iグループ：蛸池、蛸池東の土器が集中し、桜井谷の土器が混在する。

IIグループ：蛸池東の土器が集中し、蛸池と緑ヶ丘の土器が共存する。

IIIグループ：緑ヶ丘の土器が集中し、蛸池東と桜井谷の土器が混在する。

IVグループ：桜井谷の土器が集中する。

Vグループ：桜井谷の土器が集中し、緑ヶ丘、蛸池東、蛸池の土器が混在する。

以上の結果から明らかな様に、A-B線より上の $Fe_2O_3$ の高い領域では蛸池東、蛸池、緑ヶ丘の土器が分布し、線より下の $Fe_2O_3$ の低い領域では桜井谷の土器が分布する。桜井谷の3、7、11はA-B線より上の領域に分布し、蛸池東の21、22、蛸池の4、6、緑ヶ丘の1、2、7はA-B線の下の桜井谷の領域に分布する。この傾向は $SiO_2$ - $Al_2O_3$ の傾向と同じものである。IIIグループは緑ヶ丘の土器が集中するもので、A-B線より下に分布し異質である。

#### 3) $Fe_2O_3$ とMgOの相関について

図202に示すようにI～VIIの7グループに分類された。

Iグループ：緑ヶ丘の土器が集中する。

IIグループ：緑ヶ丘と蛸池、蛸池東、桜井谷の土器が共存する。

IIIグループ：蛸池東の土器が集中し、蛸池、桜井谷の土器が混在する。

IVグループ：桜井谷の土器が集中する。

Vグループ：桜井谷の土器が集中し、蛸池東と蛸池の土器が混在する。

VIグループ：桜井谷の土器が集中し、蛸池東の土器が混在する。

VIIグループ：蛸池東、蛸池、桜井谷の土器が共存する。

“その他”：蛸池東の土器が分散して分布する。

以上の結果から明らかな様に、桜井谷の土器はA-B線より下のMgOの低い領域に分布し、蛸池東、蛸池、緑ヶ丘の土器はA-B線より上のMgOの高い領域に分布する。

#### 4. まとめ

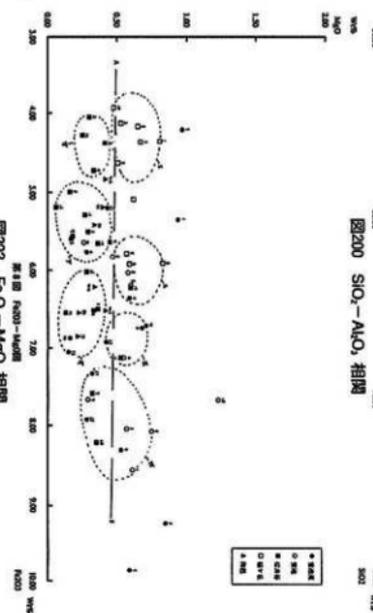
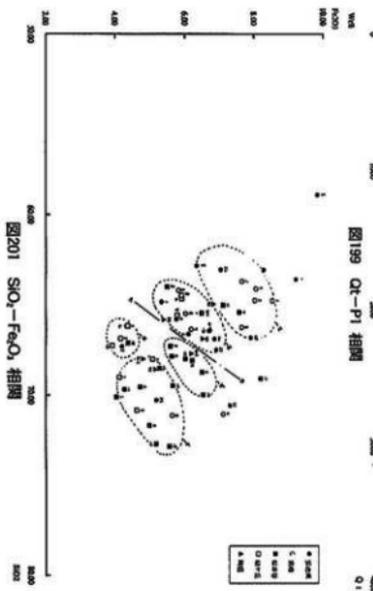
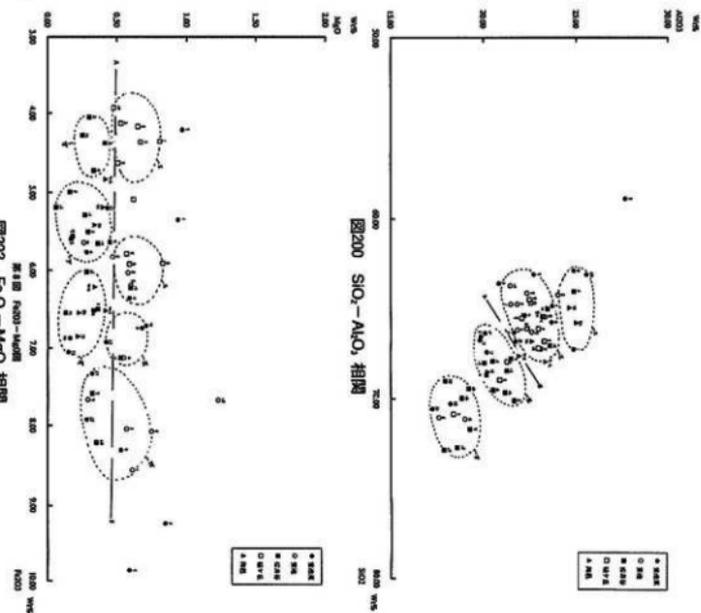
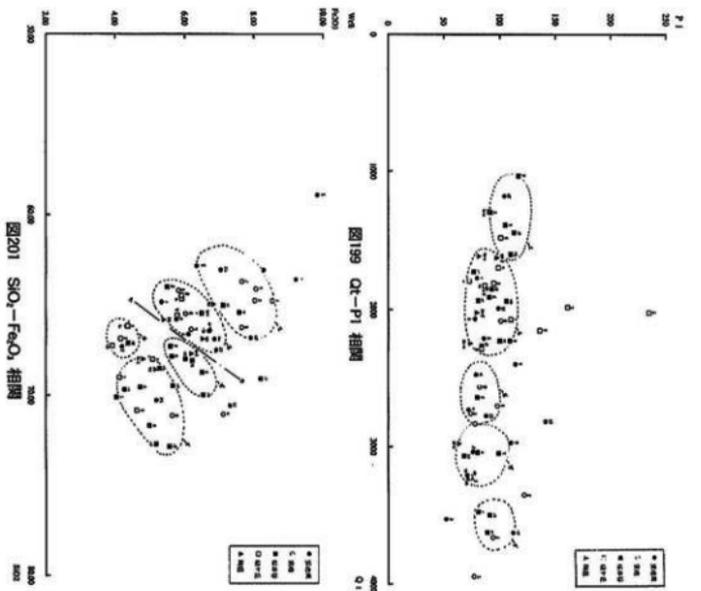
- 1) X線回折試験結果によれば、土器はAとBの2タイプに分類された。Bタイプは高温で焼成されたために、鉱物が分解して、ガラスに変質したものである。
- 2) 石英と斜長石の相関では石英の強度が2300より低い領域に桜井谷と緑ヶ丘の土器、高い領域に蛸池東と蛸池の土器が分布し、分かれる傾向が認められるが、各グループには幾つかの遺跡の土器が混在し、関連性が伺われる。
- 3) 化学分析結果によれば、蛸池東、蛸池、緑ヶ丘の土器は $Al_2O_3$ 、 $Fe_2O_3$ 、MgOの値が高い領域にあり、桜井谷の土器は $Al_2O_3$ 、 $Fe_2O_3$ 、MgOは値の低い領域に分布し、明

らかに相違が認められた。蛭池東の21、22、蛭池の4、6、緑ヶ丘の1、2、7の土器は $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{SiO}_2\text{-Fe}_2\text{O}_3$ の相関においては、桜井谷の土器の領域に分布し、関連性が伺われた。しかし、緑ヶ丘の土器は $\text{MgO}$ の値が高く、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ の値が低い領域で独自のグループを形成し、異質である。

試料 No.	タイプ/陶質 分類	組成分類 Na-Mg-Al-Si-Ca-Fe	粘土鉱物および遊離鉱物										器 種	時 期				
			Mont	Illit	Ch/Fe	Ca/Sr	K-16	Qtz	Py	Crst	Mullin	Pyrite			ガラス			
蛭池東-1	B	14 30										108	2770	80	134	165	蛭池群片	古墳時代前期
蛭池東-2	B	14 30										2004	80	144	147	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池東-3	B	14 30										2047	73	119	136	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池東-4	B	14 30										2447	73	160	112	蛭池群片 (河内)	古墳時代前期	
蛭池東-5	B	14 30										83	3520	82	309	303	蛭池群片	古墳時代前期
蛭池東-6	B	14 30										2065	73	157	168	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池東-7	B	14 30										2730	73	666	200	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池東-8	B	14 30										133	2649	170	130	63	蛭池群片	古墳時代前期
蛭池東-9	B	14 30										119	1300	114	181	120	蛭池群片	古墳時代前期
蛭池東-10	B	14 30										3618	112	121	63	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池-1	B	14 30										5833	78	419	100	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池-2	B	14 30										144	2841	77	637	172	蛭池群片	古墳時代前期
蛭池-3	B	14 30										84	1854	84	168	135	蛭池群片	古墳時代前期
蛭池-4	B	14 30										2000	101	314	181	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池-5	B	14 30										2543	133	219	149	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池-6	B	14 30										2750	74	160	147	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池-7	B	14 30										3022	74	160	147	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭池-8	B	14 30										100	2061	82	183	131	蛭池群片 (高台)	古墳時代
蛭池-9	B	14 30										101	2702	98	158	108	蛭池群片 (高台)	古墳時代
蛭池-10	B	14 30										150	2012	74	112	87	蛭池群片	古墳時代
蛭池東-21	B	14 30										1991	80	241	176	130	蛭池群片 (高台)	古墳時代前期
蛭池東-22	B	14 30										2715	88	171	172	130	蛭池群片 (梓井遺)	古墳時代前期
蛭池東-23	B	14 30										2810	141	183	206	173	蛭池群片	古墳時代前期
蛭池東-24	B	14 30										2321	72	262	176	161	蛭池群片 (ヘラ型)	古墳時代前期
蛭池東-25	A	5 30				80						1179	304	480	147	146	蛭池群片 (高台)	古墳時代前期
蛭池東-26	B	14 30										2000	71	287	136	134	蛭池群片	古墳時代前期
蛭井谷-1	B	14 30										103	2464	81	411	109	蛭池群片	古墳時代前期
蛭井谷-2	B	14 30										1386	92	888	201	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-3	B	14 30										2054	117	625	226	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-4	B	14 30										1908	81	309	243	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-5	B	14 30										9528	80	508	140	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-6	B	14 30										101	2514	88	251	232	蛭池群片	古墳時代前期
蛭井谷-7	B	14 30										2022	258	422	184	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-8	B	14 30										1287	226	564	179	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-9	B	14 30										1738	77	828	230	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-10	B	14 30										2615	88	114	77	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-11	B	14 30										1390	110	676	176	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-12	B	14 30										3488	81	922	187	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-13	B	14 30										1028	106	138	102	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-14	B	14 30										2260	84	103	111	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-15	B	14 30										1933	81	708	141	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-16	B	14 30										1443	113	419	1655	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-17	A	5 30					181					1850	93	512	186	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-18	B	14 30										2222	300	507	142	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭井谷-19	A	5 30					138					3063	88	178	141	蛭池群片	古墳時代前期	
蛭ヶ丘-1	B	14 30										2071	110	124	156	126	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-2	B	14 30										3000	238	187	130	109	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-3	B	14 30										1810	95	164	181	159	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-4	B	14 30										1793	73	396	131	130	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-5	B	14 30										1481	101	243	136	133	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-6	B	14 30										1896	98	190	130	111	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-7	B	14 30										1863	101	170	130	124	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-8	B	14 30										2282	84	173	136	99	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-9	B	14 30										2148	136	119	115	110	蛭池群片	古墳時代
蛭ヶ丘-10	B	14 30										1827	87	487	202	176	蛭池群片	古墳時代
阿比陶山071-1	B	14 30										1612	92	526	211	蛭池群片		
阿比陶山071-5	B	14 30										1294	91	454	287	蛭池群片		
阿比陶山071-5	B	14 30										1817	90	503	201	蛭池群片		
阿比陶山064-4	B	14 30										2511	74	445	300	蛭池群片		
阿比陶山064-5	B	14 30										2022	80	863	222	蛭池群片		
阿比陶山074-6	B	14 30										2977	64	250	233	蛭池群片	古墳時代前期	
阿比陶山073-7	B	14 30										1622	98	172	166	蛭池群片	古墳時代前期	

表4 胎土性状表





#### 4. 蛭池東遺跡出土炭化木の<sup>14</sup>C測定

京都産業大学理学部 山田 治

機関記号・測定番号	試料名	<sup>14</sup> C年代測定値
KSU-2281	蛭池東遺跡炭化木№1 住居19(3Aトレンチ住居1) 焼失家屋	1750±30 B.P. 年輪年代 A.D. 250±30
KSU-2282	蛭池東遺跡炭化木№2 住居13(7Aトレンチ住居2)	2470±50 B.P. 年輪年代 B.C. 760±50

表6 <sup>14</sup>C年代測定表

(註) 測定値の説明

<sup>14</sup>C年代測定値は、次のような国際的約束にもとづいて公表されています。

(a) B.P.はBefore Presentの略であり、A.D.1950年をPresentとしてそれ以前の年数を示す。なお、特別に正確さを必要とされる場合には、次の<sup>14</sup>C年代と年輪年代との比較表を参考にされたい。

(b) <sup>14</sup>Cの半減期は5568年を用いる。今までに知られている<sup>14</sup>Cの半減期のうち最も真の値に近いとされているものは5730±30年であるが、測定の精度が上がるとさらに修正される可能性があり、そのたびに半減期を変えて<sup>14</sup>C年代の数値を変更するのは煩雑であるから、<sup>14</sup>C年代測定においては今後もずっと5568年を使用するであろう。年輪年代の修正表も5568年で計算されているので、実際上でも5568年を使用しないと不都合が生ずる。

(c) 測定値には必ず測定機関の記号と測定番号をつけなければならない。測定機関記号、測定番号のない<sup>14</sup>C年代値は、牽引・確認のできない不確実なものであるから、使用してはならない。

(d) 誤差は1標準偏差を使用する。誤差は測定精度の目安であって、実験誤差が十分に小さい測定が行われた場合、その中に真の値がはいる確率を示す。誤差範囲内に真の値が含まれる確率を以下に示す。3標準偏差まで取ればほとんどの場合は真の値が含まれると考えてよい。

1標準偏差の中に真の値がはいる確率・・・68%

2標準偏差の中に真の値がはいる確率・・・95%

3標準偏差の中に真の値がはいる確率・・・99.7%

(e) 測定の標準はアメリカ国立標準局から発売されているNBS<sup>14</sup>C現代標準を使用する。世界共通の基準に基づいた<sup>14</sup>C年代測定値は世界中のあらゆる<sup>14</sup>C年代測定結果とただちに比較できる。

NBS Standard SRM-4990酢酸の<sup>14</sup>C濃度は、A.D.1964年において(0.2373±0.0012 Bq/gC)で、その95%値をA.D.1950年の<sup>14</sup>C値に用いるという約束である。

## 5. 宮の前・蛭池遺跡採集土壌の残存脂肪分析

帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

(株)ブコーシャ総合科学研究所 中野寛子・菅原利佳・長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと<sup>(1)</sup>、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子<sup>(2)</sup>、約5千年前のハーゼルナッツ種子<sup>(3)</sup>に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した<sup>(4)</sup>。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素数の多い飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のはコレステロール、植物性のはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて宮の前、蛭池遺跡から出土した土坑および土器の性格を解明しようとした。

### 1. 土壌試料

宮の前遺跡の6世紀末～7世紀初頭のものとして推定される3面1G長方形土坑内から土壌試料を採取した（P17参照）。遺跡内での土坑の配置状況および土坑内での試料採取地点を表7に示す。試料No.1は土坑内中位から、No.2は下位から、それぞれ採取した。

蛭池遺跡の古墳時代から奈良時代のものとして推定されている土坑や須恵器杯蓋、須恵器壺内の土壌試料を分析した。土坑、ピットの配置状況および須恵器杯蓋、須恵器壺出土地点や各土坑内での試料採取地点を表8に示す。試料No.1～No.15を土坑37から、No.16～No.19を土坑40から、No.20をP41内の須恵器杯蓋（土器15）内から、No.21～No.23をP53内の須恵器壺内から、それぞれ採取した（P123・P128参照）。

## 2. 残存脂肪の抽出

土壌試料68～372gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表7・8に示す。抽出率は0.0027～0.0213%、平均0.0074%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100%の範囲内のものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

## 3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してから、ヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサノール-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した<sup>(5)</sup>。

宮の前遺跡試料中の残存脂肪の脂肪酸組成を図203に示す。残存脂肪から9種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)の7種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

2試料中の脂肪酸組成パターンはほぼ同一で、試料中に動物性脂肪が含まれている場合に典型的な谷状のものであった。このうち炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合を見てみると、主要な脂肪酸はパルミチン酸で、次いでステアリン酸、オレイン酸の順に多く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来していると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計が試料No.1で約46%、No.2で約39%であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジ

ン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つの合計含有量は約4～10%であるから、2試料中での高級脂肪酸含有量は非常に多いといえる。高級脂肪酸含有量の多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分として含まれている場合とがある。

以上、宮の前遺跡の試料は動物性脂肪が含まれている場合に典型的な谷状の組成パターンを示し、高級脂肪酸も非常に多く含まれていることがわかった。

蛭池遺跡試料中の残存脂肪の脂肪酸組成を図204に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)の9種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中での脂肪酸組成パターンを見ると、若干異なったパターンを示すものもあるが、すべての試料がほぼ同一の組成パターンを示した。このうち炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、主要な脂肪酸は試料No.2を除きパルミチン酸で約23～42%分布していた。次いでステアリン酸かオレイン酸が多く分布していた。試料No.2では最も多く含まれる脂肪酸がステアリン酸で、次いでパルミチン酸、オレイン酸の順に多く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。また、ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計が試料No.14で約7%、試料No.1、No.2、No.4、No.8、No.11、No.12で約13～19%、他のすべての試料中で約21～47%であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つの合計含有量は約4～10%であるから、土坑37上層部試料No.14のみが通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みの含有量で、他のすべての試料中での高級脂肪酸含有量は多いといえる。特に、土坑37と40をみると、土坑内の下層部試料ほど高級脂肪酸含有量が多くなることがわかる。また、高級脂肪酸含有量の多い地点を見てみると、土坑37では中央から西方へかけての位置が多い。須恵器試料中ではすべて高級脂肪酸が約26～47%と大変多かった。高級脂肪酸含有量の多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分として含まれている場合とがある。

以上、蛭池遺跡の試料中に最も多く含まれている脂肪酸は土坑37中層部試料No.2を除き、パルミチン酸であることがわかった。また、アラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の

高級脂肪酸3つの合計含有量は土坑37上層部試料No.14を除き大変多く、土坑の下層に行くほど多いこともわかった。

#### 4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノン-エチルエーテン-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジノン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図205・206に示す。残存脂肪から20種類前後のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

宮の前遺跡試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは約6~7%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2~6%分布している。従って、試料中に含まれているコレステロール量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステールはすべての試料中に約7~8%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステールは30~40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、試料中のシトステールは少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンベステロール、スチグマステロールは、カンベステロールが約4~5%、スチグマステロールが約7~8%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンベステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、カンベステロール、スチグマステロールは通常の植物腐植土並みで、試料中に含まれている植物性ステロールはすべて通常の植物腐植土並みか、少なめであった。

微生物由来のエルゴステロールは1%前後分布していた。これは土壤微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料中に約2%分布していた。コプロスタノールは一般的な遺跡の植物腐植土中では分布していても1%くらいで、通常は殆ど検出されない。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、土壌基である場合には遺体の配置状況などが特定できる場合がある<sup>(6)</sup>。今回のコプロスタノール含有量は2%以下の微量であるため、それらの判定はできなかった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステールの分布比の指標値は土壌で0.6以上<sup>(7)</sup>、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる<sup>(8,9)</sup>。試料中のコレステロールとシトステールの分布比を表9に示す。表からわかるように試料中の分布比は約0.8で、コレステロール含有量の絶対量は少ないが、指標値は高かった。このことは試料の腐植化は進んでいるが、試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることを示唆している。

以上、宮の前遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、すべて通常の遺跡出土

土壌中の植物腐植土並みか少なめであったことがわかった。また、コレステロールとシトステロールの分布比は2試料ともに0.6以上で、試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることを示唆していた。しかし、脂肪酸分析の結果高級脂肪酸が非常に多く含まれていたり、コレステロールとシトステロールの分布比が0.6以上を示す割にはコレステロールの含有量そのものは少ないものであった。

釜池遺跡試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは土坑37中層部～下層部試料No.3、No.6、No.10、土坑40中層部～下層部試料No.18、No.19に約4～6%、他のすべての試料中に約7～12%分布していた。このうち土坑37上層部試料No.1、No.7、No.14には約11%分布しており、他の試料中よりも多かった。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2～6%分布している。従って、土坑37と40の中層部～下層部試料No.3、No.6、No.10、No.18、No.19に含まれているコレステロール量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並み、他の試料中ではそれよりも若干多めといえる。

植物由来のシトステロールはすべての試料中に約4～19%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、すべての試料中でシトステロールは少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、すべての試料中でカンペステロールが約1～8%、スチグマステロールが約1～10%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、カンペステロール、スチグマステロールは通常の植物腐植土並みで、試料中に含まれている植物性ステロールはすべて通常の植物腐植土並みか、少なめであった。

微生物由来のエルゴステロールは検出されない試料が多く、検出されても1%前後しか分布していなかった。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.1に約3%、他の検出された試料中に約1～2%分布していた。コプロスタノールは一般的な遺跡の植物腐植土中では分布していても1%くらいで、通常は殆ど検出されない。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、土壌基である場合には遺体の配置状況などが特定できる場合がある<sup>(9)</sup>。今回のコプロスタノール含有量は1%前後の微量であるため、それらの判定はできなかった。しかし、微量ではあるが、コプロスタノールが分布していた地点を見てみると、土坑37では中央から北方、東方へかけての位置が多い。先の脂肪酸分析の結果で土坑37では西方から中央部にかけて高級脂肪酸が多いことと、中央から北方、東方へかけてコプロスタノールが多いことを考え合わせると、この土坑内にヒト遺体が存在する可能性が高い。そのヒト遺体は西方に頭部が、北方もしくは東方一帯にかけて腹部が位置していたと推測される。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上<sup>(7)</sup>、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる<sup>(8,9)</sup>。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表10に示す。表からわかるように、土坑の分布比は試料No.9、No.

10、No.13、No.18で0.6以下を示したが、他のすべての試料中で0.6に近いか0.6以上であった。このことは試料No.9、No.10、No.13、No.18以外の採取地点には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることを示唆している。土器P53須恵器壺内試料の分布比は上層試料No.21で1.93、中層試料No.22で1.79、下層試料No.23で2.74と下層が最も高く、土器P41の須恵器杯蓋試料No.20のそれは0.38と低かった。従って、須恵器壺内には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることを示唆している。須恵器杯試料No.20は先の脂肪酸分析では高級脂肪酸含有量が多く、コレステロールとシトステロールの分布比が低めであることと一致しない。

以上、蜃池遺跡の試料中に含まれているコレステロールは土坑37と40の中層部～下層部試料No.3、No.6、No.10、No.18、No.19で通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みで、他の試料中では土器試料も含めてそれよりも若干多めであることがわかった。他のステロール類はすべて植物腐植土並みか少なめであった。また、コレステロールとシトステロールの分布比は土坑37の試料No.9、No.10、No.13、土坑40の試料No.18、須恵器杯蓋試料No.20以外の試料中で0.6に近いか0.6以上を示し、それらの試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることを示唆していた。

## 5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に同じ大阪府内の遺跡で、出土した密集型土坑群にヒト遺体を直接埋葬した場合と類似の脂肪が残存していると判定した大庭寺遺跡<sup>(90)</sup>、同じ状況の本町遺跡<sup>(91)</sup>、出土土坑にヒト遺体を直接埋葬した場合と類似の脂肪が残存していると判定した西大井遺跡<sup>(92)</sup>、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡<sup>(93)</sup>、出土土坑を土墳墓と判定した兵庫県寺田遺跡<sup>(94)</sup>、ヒトの体脂肪、出土土坑を再葬墓と判定した宮城県摺鉢遺跡<sup>(95)</sup>、ヒトの骨油、ヒトの胎盤、イノシシ、ニホンジカのような動物、モズ、ツグミのような野鳥試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸組成とも比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図207、208である。

図207からわかるように、宮の前遺跡の試料はそれらのみで相関行列距離0.05以内でA群を形成し、非常によく類似していた。西大井遺跡の試料は単独でB群を形成した。他の対照試料のうちヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料や動物試料はC、D、E群を形成し、ヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料はF群を形成した。これらの群のうちA群と特に相関行列距離的に近い所において非常に類似しているという群はなかったが、B群とは相関行列距離0.25以内の比較的近い所にあり、互いに類似しているといえる。

以上、宮の前遺跡の試料は特に相関行列距離的に近い所に類似している群がなかったが、相関行列距離0.25以内で西大井遺跡の試料中に残存している脂肪と類似していることがわかった。

図208からわかるように、蜃池遺跡土坑37の上層部と中層部試料No.1、No.2、No.4、No.

5、No.7、No.8、No.11、No.12、No.14は相関行列距離0.15以内でA群を形成し、類似していた。ヒトの胎盤試料は単独でB群を形成した。土坑37の中層部試料No.15、下層部試料No.3、No.13とP53内の須恵器壺内のすべての試料No.21～No.23はヒトや幼児の遺体を直接埋葬したことに関わる原川遺跡、本町遺跡、大庭寺遺跡、寺田遺跡の試料と共に相関行列距離0.1以内でC群を形成し、よく類似していた。土坑37の上層部と中層部試料No.6、No.9、No.10と土坑40のすべての試料No.16～No.19は相関行列距離0.1以内でD群を形成し、よく類似していた。西大井遺跡の試料は単独でE群、ヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料はF群、ヒトの体脂肪は単独でG群を形成した。このうちA～D群は相関行列距離0.2以内の所にあり、互いに類似していた。また、E群もA～D群とは相関行列距離0.25以内の所にあり、樹状図全体からすれば類似しているといえる。G群を形成したヒトの体脂肪は、通常はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料と類似した群を形成するが、今回はいずれの試料とも距離的に離れていた。これは試料が植物腐植土の影響を強く受けているためと考えられる。

予めクラスター分析を行った結果、P41内の須恵器杯蓋内（土器15）試料No.20は傾向を異にしていることがわかったので、単独でクラスター分析を行った。図208からわかるように、試料No.20は単独でA群を形成した。他の対照試料はB～G群を形成した。このA群はB群と若干類似している距離にあるが、A群の試料No.20には動物性脂肪がさほど多くないことから、類似の可能性は少ない。

以上、釜池遺跡のP41内の須恵器杯蓋内（土器15）試料No.20を除くすべての試料中に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料中に残存する脂肪と類似していることがわかった。試料No.20は類似する動植物種を特定することができなかった。

## 6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

宮の前遺跡土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を図209に示す。図からわかるように、2試料は第1象限の原点から離れた位置に分布していた。この分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来することを示唆している。

釜池遺跡土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を図210に示す。図からわかるように、すべての試料が第1象限と第2象限内に分布し、A～D群およびA群を形成した。この分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の脂肪全般に由来することを示唆している。

## 7. 総括

宮の前遺跡から出土した土坑の性格を判定するために、土坑内の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料は動物性脂肪が含まれている場合に典型的な谷状の組成パターンを示し、高級脂肪酸も非常に多く含まれていることがわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析からは、宮の前遺跡の試料は特に相関行列距離的に近い所に類似している試料がなかったが、西大井遺跡の試料とは相関行列距離で0.25以内の所にあり比較的類似していることがわかった。種特異性相関からは試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、試料中に含まれている各種ステロール類は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。しかし、コレステロールとシトステロールの分布比は2試料ともに0.6以上で、試料の腐植化が進んでいるが、試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることを示唆していた。また、哺乳動物の腸、糞便の分布を示すコプロスタノールも微量ながら検出された。

以上の成績から、宮の前遺跡の試料中に残存している脂肪はコレステロール含有量が少なくはあるが、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料に残存している脂肪と類似していることがわかった。高級脂肪酸含有量も多いため、試量採取位置付近に高等動物の頭部があった可能性も考えられる。しかし、今回は試料の採取が垂直方向に2点であり、かつ土坑外の対照試料もないために、はっきりとした遺体の位置関係まではわからなかった。

蜷池遺跡から出土した土坑および土器の性格を判定するために、土坑および土器内の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料中には土坑37中層部試料No.2を除いてパルミチン酸が主要な脂肪酸として含まれており、高級脂肪酸も土坑37上層部試料No.14を除き、大変多く含まれており、その量は土坑の下層に行くほど多いことがわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析からは、すべての試料に残存する脂肪がヒト遺体を直接埋葬したことに関わる試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。しかし、P41内の須置器杯蓋内(土器15)試料No.20は他の試料とは若干傾向を異にしていた。種特異性相関からは、すべての試料中の脂肪が高等動物の脂肪全般に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、試料中に含まれているコレステロールは土坑37と40の中層部～下層部試料No.3、No.6、No.10、No.18、No.19で通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みで、他の試料中ではそれよりも若干多めであることがわかった。他のステロール類はすべて植物腐植土並みか少なめであった。また、コレステロールとシトステロールの分布比は土坑37の試料No.9、No.10、No.13と土坑40の試料No.18以外の試料中で0.6に近い0.6以上を示し、それらの試料中には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していたことを示唆していた。

以上の成績から、蜷池遺跡から出土した土坑および土器内の土壌試料に残存している脂

肪は、土坑や須恵器壺試料ではヒト遺体を直接埋葬したことに関わる試料に残存している脂肪と類似していることがわかった。土坑37では、ヒト遺体は西方に頭部、北方もしくは東方にかけて腹部が位置していたと推測された。須恵器壺は壺の大きさから判断して幼児埋葬用のものである可能性も考えられる。また、須恵器杯蓋試料に残存している脂肪は他の試料とは若干傾向を異にしていることや、高等動物の脂肪が多少残存していることはわかったが、類似している動植物種を特定することはできなかった。

## 参考文献

- (1) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle 1979 「Food identification of samples from archaeological sites」 『Archaeo Physika』 10巻 pp260.
- (2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold 1981 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」 『Nature』 292巻 pp146.
- (3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle 1983 「Analyse frühgeschichtliche Gefäß  $\beta$ -inhalte」 『Naturwissenschaften』 70巻 pp33.
- (4) 中野益男 1984 「残存脂肪分析の現状」 『歴史公論』 第10巻 (6) pp124.
- (5) M. Nakano and W. Fischer 1977 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」 『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.』 358巻 pp1439.
- (6) 中野益男 1989 「残存脂肪酸による古代復元」 『講演収録集—新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』 第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編 pp114.
- (7) 中野益男・伊賀 啓・根岸 孝・安本教博・畑 宏明・矢吹俊男・佐原 真・田中 琢 1984 「古代遺跡に残存する脂質の分析」 『脂質生化学研究』 第26巻 pp40.
- (8) 中野益男 1986 「真鍋遺跡出土土器に残存する動物油脂」 『真鍋遺跡—農村基盤総合設備事業能都東地区真鍋工区に係わる発掘調査報告書』 能都町教育委員会・真鍋遺跡発掘調査団 pp401.
- (9) 中野益男・根岸 孝・長田正宏・福島道広・中野寛子 1987 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」 『ヘロカルウス遺跡』 北海道文化財研究所調査報告書第3集 pp191.
- (10) 中野寛子・明瀬雅子・長田正宏・中野益男 「大庭寺遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」 『未発表』 財大文化財センター
- (11) 中野益男・中野寛子・菅原利佳・長田正宏 「本町遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」 『未発表』 大阪府豊中市教育委員会
- (12) 中野寛子・明瀬雅子・長田正宏・中野益男 「西大井遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」 『未発表』 大阪府教育委員会
- (13) 中野益男・樋口 剛・福島道広・中野寛子・長田正宏 1988 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」 『原川遺跡Ⅰ—昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』 第17集 (静岡県埋蔵文化財調査研究所 pp79).
- (14) 中野益男・中野寛子・福島道広・長田正宏 「寺田遺跡土坑墳墓遺構に残存する脂肪の分析」 『未発表』 兵庫県芦屋市教育委員会
- (15) 中野益男・福島道広・中野寛子・長田正宏 「摺鉢遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」 『未発表』 宮城県教育委員会

試料№	採取地点	固重量(g)	全脂肪(mg)	抽出率(%)
1	土坑内 中位	1123.3	127.7	0.0114
2	土坑内 下位	1064.5	68.4	0.0064

表7 宮の前遺跡試料の残存脂肪抽出量

試料№	採取地点	固重量(g)	全脂肪(mg)	抽出率(%)
1	3 A 土坑37 1	241.1	12.9	0.0064
2	3 A 土坑37 2	204.1	13.0	0.0064
3	3 A 土坑37 3	164.6	10.0	0.0061
4	3 A 土坑37 4	211.1	4.9	0.0023
5	3 A 土坑37 5	169.4	7.9	0.0047
6	3 A 土坑37 6	180.4	19.4	0.0108
7	3 A 土坑37 7	108.5	3.3	0.0030
8	3 A 土坑37 8	167.1	7.0	0.0042
9	3 A 土坑37 9	300.3	25.7	0.0086
10	3 A 土坑37 10	181.5	18.6	0.0078
11	3 A 土坑37 11	188.5	5.1	0.0027
12	3 A 土坑37 12	272.2	13.2	0.0038
13	3 A 土坑37 13	155.7	23.8	0.0133
14	3 A 土坑37 14	166.3	10.1	0.0061
15	3 A 土坑37 15	180.0	7.3	0.0046
16	3 A 土坑40 1	177.2	8.5	0.0048
17	3 A 土坑40 2	241.5	17.3	0.0072
18	3 A 土坑40 3	162.2	21.5	0.0133
19	3 A 土坑40 4	248.4	23.1	0.0094
20	4 A P4 土坑15 遺跡群内 中	134.5	28.6	0.0213
21	4 A P4 遺跡群内 上	129.8	7.3	0.0056
22	4 A P4 遺跡群内 中	68.4	7.0	0.0102
23	4 A P4 遺跡群内 下	131.0	8.7	0.0066

表8 堀池遺跡試料の残存脂肪抽出量

試料№	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	6.52	8.17	0.80
2	6.19	7.07	0.88

表9 宮の前遺跡試料中の分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料№	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	11.14	11.46	0.97
2	9.46	17.12	0.55
3	6.01	11.94	0.50
4	8.90	8.15	1.12
5	8.42	13.78	0.61
6	5.90	10.46	0.56
7	11.31	13.48	0.84
8	8.61	9.57	0.90
9	7.28	18.95	0.38
10	3.86	16.51	0.23
11	8.38	12.11	0.69
12	9.23	10.82	0.85
13	6.79	18.56	0.37
14	11.95	9.12	1.31
15	7.61	9.72	0.78
16	7.61	9.72	0.78
17	9.17	8.13	1.13
18	4.97	15.88	0.31
19	5.64	4.18	1.35
20	6.79	17.71	0.38
21	7.92	4.10	1.93
22	9.46	5.28	1.79
23	9.78	3.56	2.74

表10 堀池遺跡試料中の分布するコレステロールとシトステロールの割合

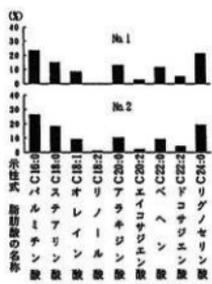


図203 宮の前遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

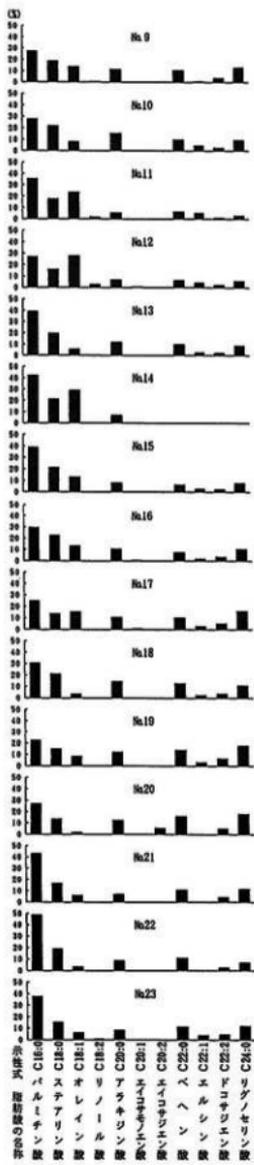
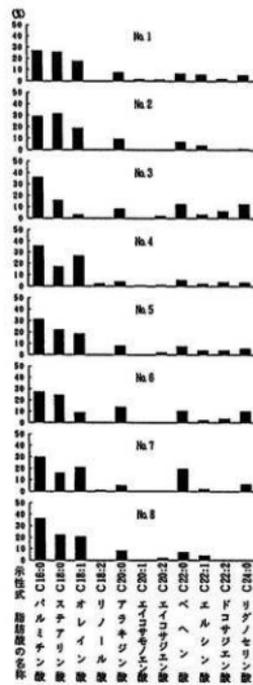


図204 墓池遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

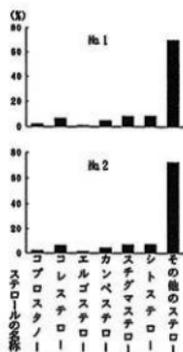


図205 宮の前遺跡試料中に残存する脂肪のステロール組成

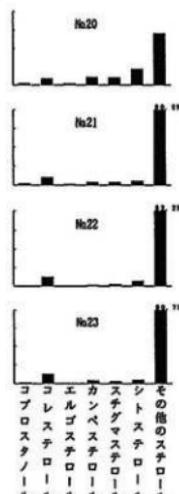
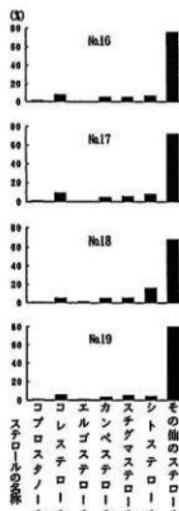
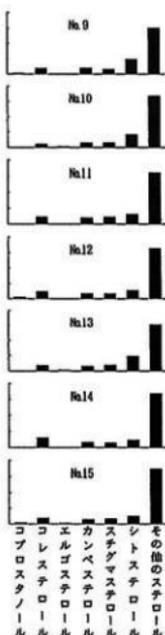
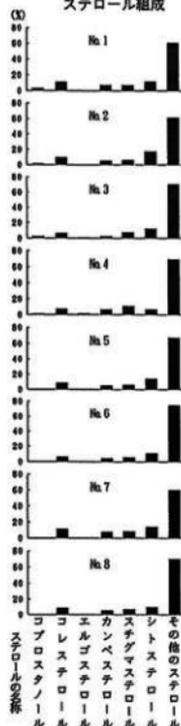


図206 産池遺跡試料中に残存する脂肪のステロール組成

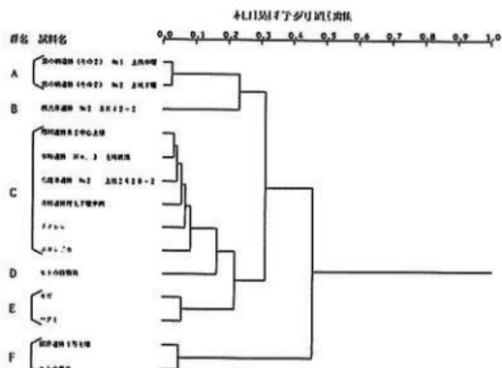
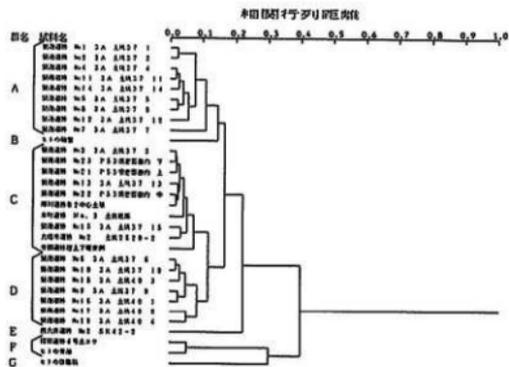


図207 宮の前遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造



本目群内テマリ群内群

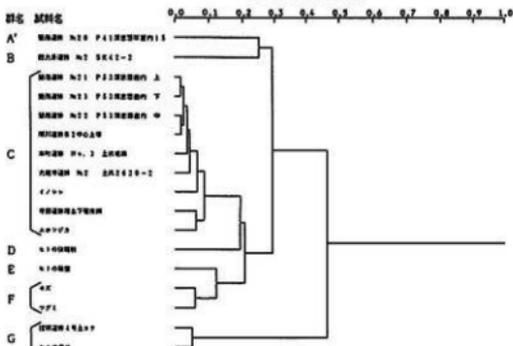


図208 壺池遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造

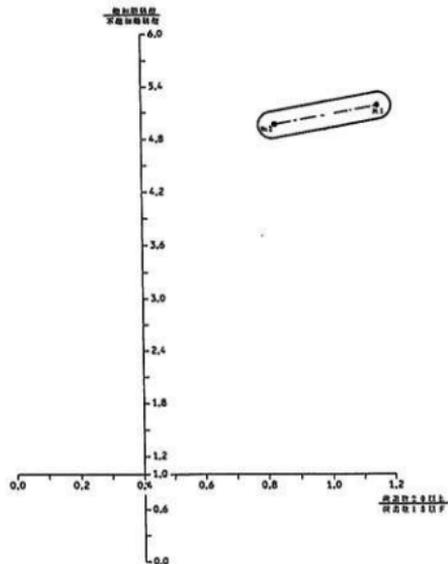


図209 宮の前遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

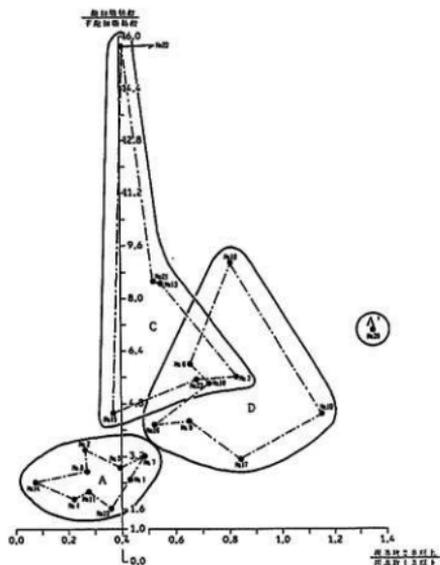


図210 婬池遺跡試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

## VIII まとめ

宮の前・蜷池東・蜷池・蜷池西遺跡の主な発掘調査の成果は表11のとおりである。ここでは、これら調査の成果と周辺遺跡との関連などを、年代順にまとめておきたい。また、周辺遺跡の範囲としては、今回調査をおこなった4遺跡が、千里川右岸の低位段丘縁辺に宮の前・蜷池東・蜷池遺跡が、低位段丘下の沖積地に蜷池西遺跡が立地することから、千里川流域の遺跡を中心にみていきたい。

旧石器時代の成果としては、蜷池遺跡で古墳時代後期～奈良時代の密集土坑埋土中からナイフ形石器・剝片が、蜷池西遺跡でG.L. -2～2.5mの青灰色シルト～粘土層から剝片が出土したことがあげられる。石材は、蜷池西遺跡出土剝片中1点がチャート製以外はサヌカイト製である。蜷池遺跡の密集土坑は低位段丘堆積層の黄色粘土層を基盤層として掘削されており、石器は黄色粘土層に含まれていた可能性が高い。一方、蜷池西遺跡の青灰色シルト～粘土層は低位段丘から二次的に堆積した層とみられる。周辺の既往の調査では、段丘上では宮の前遺跡、柴原遺跡、大塚古墳から、沖積地では蜷池西遺跡、箕輪遺跡でナイフ形石器が出土している。蜷池遺跡、蜷池西遺跡とも、二次的な堆積土中とはいえ旧石器の出土がみられたことから、今後とも、千里川右岸の低位段丘堆積層の調査は旧石器の存在が注意される。

旧石器時代  
ナイフ形石器  
チャート製  
剝片

縄文～弥生時代前期の成果は、今回の調査では得られなかった。周辺の縄文時代の遺跡は、千里川中・上流域の段丘上に野畑春日町遺跡、野畑遺跡、内田遺跡が、縄文晩期～弥生前期遺跡は、千里川に面する柴原遺跡と千里川下流左岸の山ノ上遺跡があるが、今回の調査では、遺構・遺物ともに検出されなかった。

弥生時代中期の成果は、宮の前遺跡で溝状土坑、土坑が検出され、Ⅳ様式の土器が出土した。宮の前遺跡の既往の調査では、今回の調査地西側で同時代の竪穴住居が検出されており、今回の調査地は集落の縁辺部と考えられる。このことは、同時期、疎林の存在が今回の調査で考えられることから裏付けられよう。蜷池遺跡では、密集土坑79基中3基から弥生時代中・後期土器が出土した。他の土坑はすべて古墳時代後期～奈良時代にぞくするため、出土した弥生土器は当初二次堆積の可能性が考えられたが、他の土坑同様土坑底面に遺物がはりつくように出土するため弥生時代土坑の可能性も残る。しかし、近畿地方で確認される密集土坑の多くが、弥生時代後期後半以降であることから、とくに弥生時代中期土器出土土坑については、検討を要する。周辺の遺跡では、千里川左岸の本町遺跡で弥生時代後期密集土坑が検出されている。弥生時代後期の周辺集落には新免遺跡があるが、密集土坑はその周辺で検出される傾向がある。

弥生時代中期  
集落の縁辺部  
密集土坑

弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構は、蜷池西遺跡で自然流路が検出されている。周辺では、調査地西側の阪神高速道路下で（豊中市教育委員会調査）同時期の溝が検出されている。自然流路や溝からは、磨滅した多くの土器片が出土しており、周辺に同時期の集落の存在が考えられるが、まだ明らかになっていない。

弥生時代後期末～古墳時代前期  
自然流路

古墳時代前期の遺構の可能性をもつものとして、低位段丘の最も縁辺で検出された蜷池

東遺跡住居3がある。同住居では、薄い器壁をもつ甕片、煎手文のスタンプ文をもつ土師器壺体部片、タキをもつ土師器壺が出土しており、薄い器壁をもつ甕片から同住居は古墳時代前期と考えられるものの、埴池東遺跡で検出した32棟の住居中同時期のものは住居3のみであり、また遺構も調査区端でその一部を検出したにすぎず、明確に同時期の住居と判断するにはいたらない。周辺遺跡をみると、埴池東遺跡から西へ約1km離れた、池田市豊島南遺跡で同時期の須賀をもつ竪穴住居が検出されている。豊中市内では、弥生時代後期～古墳時代前期土器の標準遺跡として著名な穂積遺跡で弥生時代後期末の住居が検出されているほか、上津島川床・新免・本町・曾根・服部・山ノ上・小曾根遺跡で弥生時代後期の住居が検出されている。また、これら低地の集落のほか、高地性集落として待兼山遺跡がある。このほか柴原・勝部・利倉・利倉西・利倉南・上津島・北条・島田・小曾根遺跡で弥生時代後期～古墳時代前期土器が出土している。弥生時代終末～古墳時代前期には、高地性、低地性ともに小規模な集落がひろがり、服部・小曾根遺跡ではややまとまった遺構が検出されている。埴池東遺跡住居3は1棟のみの検出であり、不明確なものであるが、同住居が検出された段丘縁辺は奈良時代以降江戸時代までの間に削平されたと考えられることから、他の同時代住居も削平されている可能性がある。

古墳時代中期	古墳時代中期には、埴池東遺跡で大形の掘立柱建物3棟が検出され、その廃絶後竪穴住居からなる集落がひろがる。
大形掘立柱建物	大形の掘立柱建物は、和歌山県和歌山市鳴滝遺跡、大阪市難波宮下層遺跡の、倉庫群をなす建物規模に比肩するものであり、鳴滝遺跡建物群の廃絶がTK73型式、難波宮下層遺跡建物群の廃絶がTK23型式の時期に比定されることから、その廃絶がTK208型式以前に比定される埴池東遺跡建物は時期的にもこれらとほぼ同様のものである。埴池東遺跡大形掘立柱建物は、その規模と総柱建物という点で倉庫としての機能が考えられる。また、建物が段丘縁辺に立地し、その脇に小開折谷があるという立地からも水運を利用した物資運搬が考えられ、これら建物を倉庫とする考えを補強する。この場合倉庫の造営主体は、猪名川流域をおさえた勢力が考えられるが、在地の勢力としては桜塚古墳群の被葬者がその候補者としてあげられる。このほか、造営主体を考えるにあたって注意されるのが、日本書紀 卷14(雄略12年)の、「冬十月癸酉朔壬午、天皇命木工調鷄御田、 <small>一本云、猪名部御田、蓋誤也。</small> 始起 <sup>ハコ</sup> 櫻閣 <sup>ハコ</sup> 。( <small>冬十月の癸酉の朔壬午に、天皇、木工調鷄御田<sup>ハコ</sup>一本に猪名部御田と云ふは、蓋し誤なり。に命せて、始めて櫻閣<sup>ハコ</sup>を起りたまふ。</small> )」である。考古資料と文献資料を関連付
TK208以前	
倉庫	
日本書紀	

遺跡名	所在地	規模	棟数	時期	備考
布留遺跡	奈良県天理市	5間×3間	2棟	古墳中期末	
難波宮下層遺跡	大阪府大阪市	5間×5間 10×9m	16棟	古墳中期	総柱
北新町遺跡	大阪府大東市	3間×3間 5.5×5.2m	2棟	古墳中期	
佐堂遺跡	大阪府東大阪市	3間×2間 4.8×3.8m		古墳中期	床東有
伽山遺跡	大阪府太子町	5間×3間		古墳後期～	庇有
山之内遺跡	大阪府大阪市	5間×5間		古墳後期	棟持柱有
鳴滝遺跡	和歌山県和歌山市	4間×4間 10×8m	7棟	古墳中期	総柱
城之越遺跡	三重県上野市	2間×2間	2棟	古墳中期～	四隅庇有

表11 大阪府周辺の大型掘立柱建物一覧

けるには、慎重を要するが、これからは、直接的な造営主体は在地勢力としながらも、実質的な造営主体は在地勢力をこえたより大きな勢力である可能性も考えられる。古墳時代大形掘立柱建物の周辺の類例をみると、上記2遺跡のほか、大阪府大東市北新町遺跡、東大阪市佐堂遺跡、太子町伽山遺跡、大阪市山之内遺跡、奈良県天理市布留遺跡、三重県上野市城之越遺跡検出の建物がある。北新町遺跡、佐堂遺跡の掘立柱建物が3×3間、一辺5m前後とやや小形ではあるが、こうした大形掘立柱建物は、大阪湾沿岸から大和川をさかのぼる地点、また紀の川流域など水運の便にめぐまれた地点に分布することがわかる。これら大形掘立柱建物例のうち、建物規模が近い鳴滝遺跡、難波宮下層遺跡と本遺跡を比べると、以下の点に気付く。

(1) 棟数は、蛸池東遺跡では3棟検出され、調査地外に建物がひろがった場合約10棟に復元される。一方、難波宮下層遺跡は16棟、鳴滝遺跡は7棟検出されている。

(2) 蛸池東遺跡では、掘立柱建物1・3が総柱建物であるのに対して掘立柱建物2は隅柱のみの建物であり、また、掘立柱建物1・3の棟持柱の位置が異なることから、鳴滝遺跡、難波宮下層遺跡建物にくらべ、規模・構造にばらつきがある。

(3) 蛸池東遺跡の建物軸は方位よりも地形にそって設定された可能性がたかく、方位軸を指向する難波宮下層遺跡と異なる。

(4) 建物の復元については、蛸池東遺跡建物は、難波宮下層遺跡建物と同様、入母屋屋根となる可能性が高い。鳴滝遺跡建物は、切妻屋根の可能性が考えられている。

蛸池東遺跡建物の造営主体が在地勢力かそれをこえる勢力であるかは推定の域をでないが、上記より鳴滝遺跡、難波宮下層遺跡の、とくに後者の造営主体をこえるものではなかった可能性が高い。いずれにしても、この時期、朝鮮半島から人・文物のおおきなながれがあるなかで、猪名川流域は畿内への入口として重要な位置をしめていたと考えられる。

蛸池東遺跡の古墳時代中期集落は、竪穴住居18棟からなりTK216~TK208型式に併行する。住居には竈が設置されるものがおおく、日本における出現期の竈として注目される。とくに住居13からは、竈に壺がかかった状態で出土し、竈の構造復元が可能であった。竈は、出現期の竈にみられる横煙道のもの(住居26)もあった。また、支脚周辺に壺片が2~3重に巡る出土状態を示す竈(住居1・6)では、竈廃棄行為の可能性が考えられた。その他注目すべき住居では、炭化材が多く残る焼失住居である住居19、炭化物と土器が多く出土し、人為的な焼失(放火?)後の土器の廃棄行為の可能性のある住居2・13がある。

周辺遺跡では、沖積地に立地する上津島遺跡、利倉西遺跡、島田遺跡から韓式系土器が出土しており、朝鮮半島から渡来した人々の沖積低地の開発が想定されている。竈という朝鮮半島から移入した新しい施設をもつ本集落もまた、渡来した人々とのかわり方が考えられる。本集落のほか、周辺の竈をもつ集落としては、時期はやや下るが、池田市宮の前遺跡があげられる。また、千里川中・上流にひろがる桜井谷窯跡群ではTK23型式以降の窯跡の存在がはっきりとされており、この地に渡来した人々がもたらした技術を基盤として須恵器窯が築かれた可能性が考えられる。

なお、蛸池東遺跡出土須恵器の胎土分析を、桜井谷窯跡群と陶邑出土試料を比較試料としておこなったが、両窯跡群とも大阪層群を母岩とするためか試料にちがいはあられず、

竪穴住居  
TK216~  
TK208型式  
出現期の竈

横煙道

竈廃棄行為  
の可能性

胎土分析

明確な産地同定はできなかった。

古墳時代後期  
竪穴住居・  
土坑  
密集土坑  
溝

古墳時代後期には、蛭池東遺跡において竪穴住居、土坑からなる集落が、蛭池遺跡において密集土坑とその端に位置する土器集中ピット（P41）が、蛭池西遺跡において溝と自然流路に取りつく溝が検出されている。蛭池東遺跡の集落域は、前段階の古墳時代中期集落に比べ検出された住居数は少ないものの、古墳時代中期集落がひろがっていた低位段丘上でもっとも高い部分で集中して検出された。この低位段丘の縁辺部である蛭池遺跡で密集土坑が検出されたことは、密集土坑を墓とするならば（脂肪酸分析によるとその可能性は高い。他に脂肪酸分析によって同様の土坑を墓の可能性が高いと判断されている他遺跡の例として、京都府三宅遺跡、大阪府大庭寺遺跡がある。）、低位段丘上で集落域と墓域が立地をわけて営まれた可能性が考えられる。また、蛭池西遺跡では水田遺構は検出されていないものの、溝と自然流路の存在から水田遺構が存在する可能性はたかく、沖積地が生産域として利用されたと考えられる。広い面積における調査ではないものの、今回の調査で古墳時代後期の居住・墓・生産域の概要が把握できたことは意義深い。

周辺遺跡では、この時期、桜井谷窯跡群における須恵器生産が盛んとなる。これにかかわる遺跡として新免遺跡、熊野田遺跡、内田遺跡、柴原遺跡、本町遺跡がある。これらの遺跡では焼け歪みのある須恵器や生焼けの須恵器が出土しており、須恵器の生産、選別、集配がおこなわれたと考えられている。とくに新免遺跡は、竪穴住居、掘立柱建物、古墳が検出されており、千里川流域の中心的な集落とみられている。この対岸に位置する蛭池東遺跡後期集落がどのような規模、性格の集落であるのか、今後の調査を期待したい。

蛭池東遺跡、蛭池遺跡の土坑から一部着したものを含む須恵器が出土しており、これの生産地を確認するために、豊中市教育委員会から提供いただいた桜井谷窯跡群出土須恵器試料とともに胎土分析をおこなった。この結果、蛭池東遺跡、蛭池遺跡出土須恵器の一部は、桜井谷窯跡群出土須恵器との関連性がうかがえるものの、明確な生産地の確認にはいたらなかった。しかし、桜井谷窯跡群出土須恵器試料を窯跡別にみると、神戸層群上に立地する窯跡と大阪層群上に立地する窯跡出土の須恵器は明らかに区別できることがわかった。

胎土分析

神戸層群・  
大阪層群

飛鳥時代  
土墳墓

飛鳥時代の遺構は、宮の前遺跡で土墳墓が検出されており、蛭池東遺跡土坑もこれと類似することから墓となる可能性がある。豊中市教育委員会が調査された蛭池東遺跡第7次調査では、本調査の8Aトレンチの西隣を調査され、同時代の竪穴住居が3棟検出されている。したがって、本土坑を墓とした場合、住居と墓は近接して営まれたことになる。この時期、対岸の千里川左岸には金寺山廃寺が建立されており、これに近接する本町遺跡では掘立柱建物が検出されている。ある程度の時期差を考慮に入れなければならないものの、古代寺院周辺では掘立柱建物が、これと離れた場所では竪穴住居が営まれている例として興味深い。

奈良時代  
掘立柱建物  
・溝

奈良時代の遺構は、蛭池東遺跡、蛭池遺跡で掘立柱建物が、蛭池遺跡の南門前池中で溝が検出された。蛭池東遺跡の掘立柱建物は、ほぼ方位にのる建物群のほか軸を異にする3群の建物があり、その変遷は不明である。蛭池遺跡の掘立柱建物は方位軸にのっている。

密集土坑

蛭池遺跡では、密集土坑が古墳時代後期から奈良時代まで継続して掘削されており、掘立

柱建物はその後建てられていることから、掘立柱建物は奈良時代後半の可能性が高い。掘立柱建物が方位軸をとることが、条里制の施行と関連すると考えるならば、低位段丘上における条里制の施行は奈良時代後半以降と考えられる。周辺の遺跡で同時代の水田遺構は明らかになっておらず、水田遺構から条里制の施行を考えることはできないが、蜷池遺跡の南門前池中で検出された段面V字形の溝は現在の水利に重なり、用水路となる可能性をもつものであることから、周辺で水田遺構が検出される可能性がある。蜷池遺跡周辺の条里制の施行時期については、沖積地と低位段丘上の遺構をあわせて考えていく必要がある。

蜷池遺跡では奈良時代遺物を多く含む古墳時代後期～奈良時代包含層が形成されており、居住域ともなう遺物と考えられる。南門前池内の北東～南西方向の谷をへだてた段丘上には蔵骨器が出土した南刀根山遺跡があり、段丘によって居住域と墓域がわかる可能性が考えられる。

平安時代の遺構は、蜷池東遺跡の掘立柱建物の一部がこの時期に属する可能性をもつものの、明確にこの時期に比定される遺構は検出されていない。

周辺の遺跡では、上津島南・曾根・本町・柴原・穂積・蜷池西・宮の前遺跡で奈良～平安時代の掘立柱建物が検出されている。なかでも上津島南・曾根・宮の前遺跡では多数の掘立柱建物の存在が明らかにされており、大阪平野を望む低位段丘上から、猪名川流域、西国街道がとおる千里丘陵北側の谷筋まで、集落の性格はいまひとつ明確ではないが、集落が存在したことはまちがいない。

中世の遺構は、鋤溝がみられる水田遺構が宮の前遺跡、蜷池東遺跡、蜷池遺跡で検出され、近世へと継続するものが多い。周辺の遺跡では、戦国時代に待兼山遺跡に刀根山城が築かれた可能性があり、江戸時代には麻田藩陣屋が蜷池遺跡に重なって設けられているが、おおきくはこれら施設の周辺には、沖積地から低位段丘上まで水田がひろがる景観が近世まで継続したと考えられる。

近世の遺構は、蜷池東遺跡の段丘縁辺で検出された溝がある。時期は不明であるが、西国街道から分岐し麻田藩陣屋へむかう能勢街道の側溝となる可能性がある。

#### 参考文献

- 池田市史編纂委員会 1971 『新版池田市史概説編』  
 大阪府文化財協会 1992 『難波宮址の研究』第9  
 大阪大学桜井宮跡群調査団 1991 『桜井宮跡2-23号竪溝』  
 岡田英男 1991 「棟持柱をもつ掘立柱建物の構造復原」『文化財学報』第9集 奈良大学文学部  
 小笠原好彦・阿部義平 1991 「家狭西館研究と課題」『季刊考古学』36号  
 朝京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992 『京都府遺跡調査報告書第17冊近畿自動車道敦賀線関係遺跡（8次区間）』  
 直木孝次郎・小笠原好彦編 『クラと古代王権』1991 ミネルヴァ書房  
 少路竪溝遺跡調査団 1982 『桜井竪溝群2-17竪溝府立少路高等学校建設』  
 積山 祥 1990 「古墳時代中期の大型倉庫群―難波のクラと紀伊のクラをめぐる一試論―」『大阪の歴史』30号  
 大東市北新町遺跡調査会 1991 『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』  
 田中清美 1990 「5世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』125号  
 西口陽一 1990 「畿内の群集土庫裏」『考古学研究』第37巻第1号  
 『日本古典文学大系 67 日本書紀上』1990 岩波書店  
 福永伸哉 1989 「古墳時代の共同墓地―密集型土庫群の評価について―」『待兼山論叢』23号  
 埋蔵文化財天理教調査団 1991 『布留遺跡周辺の発掘調査20年』  
 三重県埋蔵文化財センター 1992 「城之越遺跡」『みえ』7号  
 柳本照男 1983 「布留式土器に関する一試考―西摂平野東部の資料を中心にして―」『ヒストリア』101号  
 和歌山県教育委員会 1983 『鳴滝遺跡発掘調査概報』

	宮の前遺跡	蛭池東遺跡	蛭池遺跡	蛭池西遺跡	自然科学的分析	周辺の遺跡
旧石器			(古墳時代後期～奈良時代の土坑埋土よりナイフ形石器出土)	旧石器出土		宮の前遺跡 箕輪遺跡 柴原遺跡
縄文						野畑遺跡 野畑春日町遺跡 内田遺跡
弥生前期						柴原遺跡 山ノ上遺跡 勝部遺跡 小曾根遺跡
弥生中期	木の根痕 溝状土坑 土坑					宮の前遺跡 新免遺跡 勝部遺跡 小曾根遺跡 待兼山遺跡 新免遺跡 柴原遺跡 本町遺跡 穂積遺跡
弥生後期				自然流路 ↓		待兼山古墳 御神山古墳? 大石塚・小石塚古墳 大塚・御獅子塚・ 南天平塚古墳 桜井谷窯跡群
古墳前期		大形の掘立柱建物 竪穴住居			住居床面土壌の 植物珪酸体・花粉分析—ネザサ 節・イネ属	宮の前遺跡
古墳中期		掘立柱建物 竪穴住居 土坑	密集土坑 土器が集中するF41(墓域の端を示す指標か)	溝(灌漑施設・水田の存在を推定)	脂肪酸分析 高等動物脂肪由来 土坑墓の可能性 須恵器胎土分析	
古墳後期		掘立柱建物			脂肪酸分析 高等動物脂肪由来	本町遺跡 新免宮山古墳群 太鼓塚古墳群 金寺山麓寺 宮の前遺跡 内田遺跡 ↓南刀根山遺跡
奈良時代	土墳墓	土坑(墓?) ↓	掘立柱建物? 棟溝(南門前池)			
平安時代						蛭池西遺跡 曾根遺跡 上津島遺跡
中・近世	水田	水田 溝	水田	水田	花粉分析—マツ属・ソバ属	穂積遺跡 内田遺跡

表12 各遺跡の調査成果

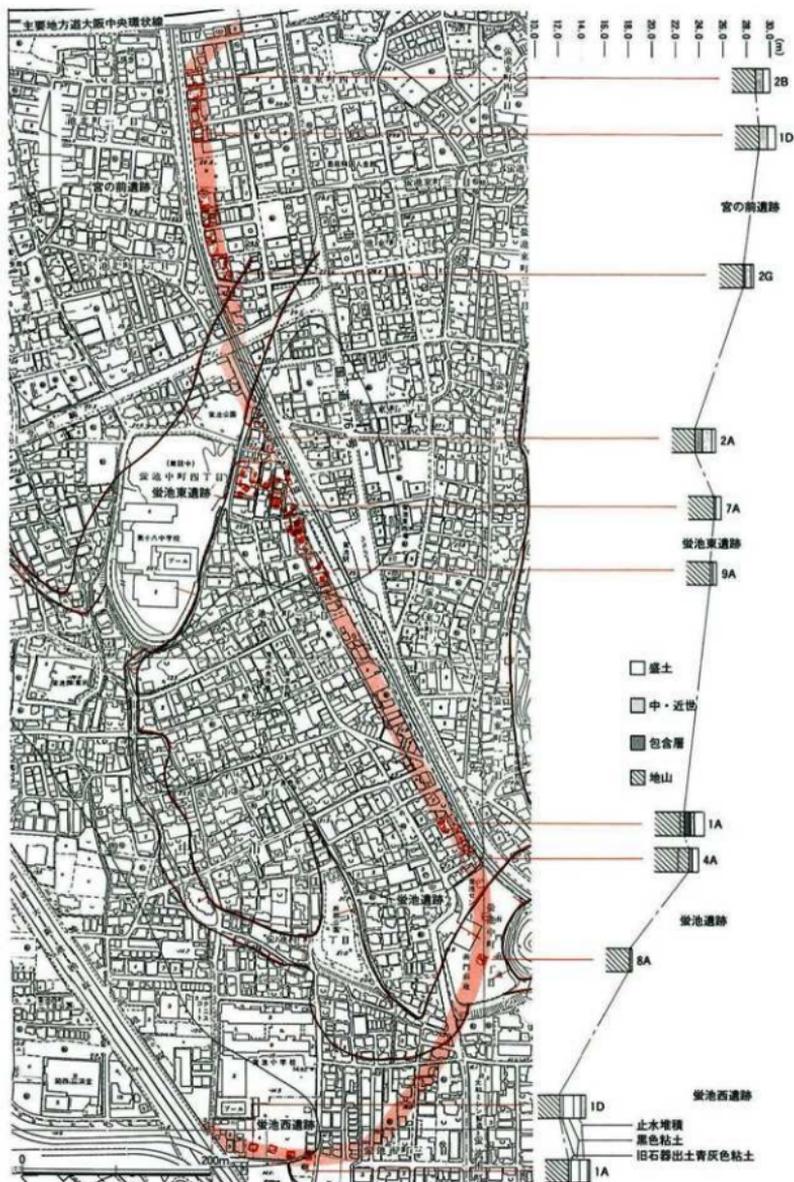


図211 調査全体図

